

ラーガ観想図像の資料的研究 II

清水 乞

ラーガ観想図像の資料的研究 II

清水 乞

## 第四章 觀想圖像 (rāga dhyāna) の内容

前述 (1) のように観想圖像の成立については不明である。Sāṅgītanāṅga の校訂者 P. L. Sharma が示唆するところから、Tantra 儀礼の影響を考へることはできるが、これを断定するに足りる資料は現在のところ見出せない。しかし上述の rāga 理論からすれば、内容的に、観想圖像は発展すべき種子は随處に見出すことはできる。現存する音楽論書で、年紀を持つ論書として、初めに、観想圖像を出す Sāṅgītopaniṣatsāroddhāra の音階音 (svara) に対して圖像を与えることは既に述べた。音階音の集合体である rāga の形式 (lakṣaṇa) の演奏 (lakṣya) を通して、人の心は彩り (rañjana), 更に音楽美 (rāga) を与え、その人の高調した美的体験 (rasa) を与える時、rāga の本質的形象 (svarūpa) を心象化する (dhyāna) は、理論的には、推測できる。

このように述べられれば心象を詩文に記し得る

の観像圖像詩文にある。rāga における観想圖像の重要性は16世紀には明確に主張されるに至る。Śrīkanṭha は Rasakaumudī において「優れた人たるは rāga の総体 (rāgasamūha) である観想圖像なくして, rāga と歌との区別, rāga は音楽論書に述べられたいる果報 (phala) と彼らには互に等しい」(Bharatakośa, p.542 右 rāgamūrtidhyānāvāśyaktā の項) と述べている。(2)

Śrīkanṭha には観想圖像に同する理論的考察はみられないが、17世紀初頭にはその理論的記述が現われる。Somanātha は Rāgavibodha (5.11 及び注辭) において, rāga の形態 (rūpa) と「音と本質とするもの」(nādātman) と「神よりなるもの」(devamaya) の二種類と述べている。

特別な、美しい音階音の varṇa (音楽音の上昇, 下降, 水平, 揺れの4種の進行) と具之, rāga (音楽美) と覚醒させる形態には二種あり, それは「音と本質とするもの」と「神よりなるもの」とである。この順で、

〔前者は〕無数の形態があり、〔後者は〕  
一つの形態がある。(5.11)

注解 (vṛtti)

「美しい音階音」とは、非常に美しく、心  
を彩る (rañjaka) ものである。音を本質とす  
る形態ではその音階音の特定の varṇa  
が表現され、特定の歌 (gāna) が歌われる場  
合、〔rāga へ〕「覚醒させる」、つまり、  
知る (ある) 形態 (rūpa) の音を本質とする、  
そのよじなも (tādṛśam) として存在する。  
心を彩る限定された歌の音階音の集合体に  
よって、種々の形態が表現されるので、〔  
音を本質とする〕rāga が理解される。

「また述べられる」は神格の例では (devatā-  
pakṣe)、「美しい音階音」とは〔神の〕声  
(kaṇṭhasvara) であり、「varṇa」とは黄金字の  
の〔身体の〕色である。神の身体をもち (dehadhārin)  
rāga の飾りなどは特殊なもので  
あるから、〔この rāga へ〕覚醒させる形態  
は神よりある、そのよじなも (tādṛśam) として存在

する。以上のことと明らかにするために、  
 rāga の二種にあって、「二種である」とい  
 う点。〔二種の〕「形態」を補うべきであ  
 る。二種 (dvēdhā) は二種 (dvi prakāra) 〔の意  
 味〕である。二種類にあって、「音は本質  
 とするものゝこと」とは「音は本質  
 とするものは音なるもの集合としての  
 音響 (dhvani) により成るものであり、神  
 によりなるものは身体によりなるもの  
 である。 (以下略) (3)

この引用文の内容は明瞭であるが、二二は、  
 rāga と「音」は両義に理解しなくてはなら  
 ない。形式 (lakṣaṇa) と具としての「音は本質と  
 する」と「神によりなる」と形式 (rūpa) としての rā-  
 ga は覚醒される rāga とは異なる。つまり形式  
 としての rāga は演奏 (lakṣya) と「音」行為に  
 して享受者は「心と彩る」機能と答禪し、同時  
 に享受者は rāga と覚醒させるのである。い  
 う二種の rāga にあって「音は本質と

する rāga は音の形式であり、「神よりなる」  
rāga は映像形式である。Śrīkanṭha はこの両形式  
 の一致を主張したのである。つまり音の形式  
 の中には映像形式と観念がうたう歌うことと歌手に  
 要請してゐるから、文字通り、表現活動 (lakṣya  
ya) である。享受者の立場からいへば、この  
 映像形式を心象化するとは「rāga を覚醒す  
 ること」に外ならない。換言すれば音楽美 (rāga  
ya を知ることは神を知ることにあり、音楽  
 を聞くことは観神 (dhyaṇa) の行為と見られる。  
 この観想の結果を詩文化した形式を Prajñānanda  
 師 dhyaṇa-mantra と呼んでゐることは意味深い。  
 したがって宗教的観念から観想図像を考察す  
 ることは、必ずしも、実情と一致しない。  
 これまで考察して来た結果から推測すれば、  
 観想図像の成主要因は (1) 地方音楽の抬頭に伴  
 う deśī-rāga の隆盛、(2) この結果として、gā-  
ndharva-gāna の衰退と deśī-gāna の流行、(3) 音楽  
 の内容表現 (lakṣya 演奏) の重視により、音楽  
 の美的作用として「心の彩り」(rañjana) だ

自覚され、rāgaとんじ美的觀念が確立し、「心の彩とリ」機能と具えたるrāgaの形式(lakṣaṇa)が理論化されたこと、以上の三氏が考えられよう。

本章では観想圖像と説く音楽論書と三期に分けて、観想圖像詩文を翻訳し、その内容の変遷を明かにしたい。

- 初期
- 1) Sudhākara : Saṅgītopaniṣatsāroddhāra (1350 A.D.)
  - 2) Kumbhakarna : Saṅgītarāja (ca. 1433-1468 A.D.)
  - 3) Nārada : Pañcamasārasaṅgīta (ca. 1440 A.D.)
  - 4) Nārada : Rāgasāgara (不明)
- 中期
- 1) Śubhāṅkara : Saṅgīta dāmodara (ca. 1525 A.D.)
  - 2) Kṣemakarna : Rāgamālā (1570 A.D.)
  - 3) P. Viṭṭhala : Rāgamālā (1576 A.D.)
  - 4) Śrīkaṅṭha : Rasakaumudī (ca. 1575 A.D.)
  - 5) Somanātha : Rāgavibodha (1609 A.D.)
- 後期
- 1) Dāmodara : Saṅgīta darpana (ca. 1625 A.D.)
  - 2) Puruṣottama : Saṅgītanārāyaṇa (ca. 1718-1768 A.D.)
  - 3) Nārāyaṇa : Saṅgītasaraṇi (不明)



4) N.Chakravartī : Rāgaratnākara (19<sup>c</sup> 初)

上記の文献の i) 5, 初 - 4), 中 - 2), 後 - 3)  
は未刊行である。この外、未刊行の文献として、  
Dakṣiṇī-rāgamālā, Jīvanāja Dīkṣita-rāgamālā がある  
(4)  
。

### 第一節 初期文献における観想図像

(I). Saṅgītopariśatsāroddhāra

本書は次の6章 (adhya) よりなり、音楽論  
書として、saṅgīta 構成要素に完全に具之てい  
る。

- ・ 第1章 : 歌の解説 (gītaprakāśa)。gīta と 声楽曲  
(prabandha) に主題とする。
- ・ 第2章 : 拍子の解説 (tālaprakāśa)。
- ・ 第3章 : rāga 名々の解説 (rāgādīprakāśa)。sve-  
ra, grāma, murchanā, śruti, tāna, rāga に主  
題とする。

- ・第4章：器樂の解説 (vādyaprakāśa)。
- ・第5章：舞踊の解説 (nṛtyaprakāśa)。
- ・第6章：舞踊技法の解説 (nṛtyapaddhatiprakāśa)。

第3章は觀想圖像を説く前に、旋律を構成する7 svaraの圖像を記し解説し、旋律の基本型である grāmaの機能、及びその grāmaから作られる21の旋律型 murchanāの名称を列挙し、すべての murchanāに vinaを持った女神の姿を与えている。tānaは6音階から5音階旋律型の總称である。本書には49種あるとされているが、すべて「種々の生物の顔と具と、身体は人間である」(3. 66a) というように、tānaを形像化している。śrutiはsvaraに属する微分音であるが、= = = = は形像化していない。このように旋律型があるのは旋法を形像化した真の本書の特色がみられる。この理論的帰結として、rāgaに對して ahyāna (心象作用) がみられることは理解に難くない。

以下、第3章92偈-111偈に説かれる、6 rāga = 36 bhāṣā (各 rāgaに6 bhāṣāが属する) の

観想圖像を知らし、その具体相を紹介する。

1. rāga の数と限定する理由

tāvantas-te tu rāgāḥ syur-yāvantyo jīvajātayaḥ |

ṣoḍaśasahasrasaṅkhyās-te rāgā gopīkr̥tā matā || 72 ||

生物と同じ数の rāga が存在する。16000 と数之  
る rāga の牧女は 5 は 5 の 7 作られた。(5)

buddhidaurbalyatas-te 'pi na jñāyante kathañcana |

ato 'lpabuddhijñānārtham te 'dhunā niyatāḥ kr̥tāḥ || 73 ||

知性の貧弱な者は、決して、rāga を理解しな  
い。それにて、知性と知識の区別を著すため、  
以下、rāga は限定された。

śrīrāga pramukhā rāgāḥ ṣaṭ śadbhāṣābhir-anvitāḥ |

pratyekam te ca vijñeyās-tāms-tu vaksye śalaksanān || 74 ||

śrīrāga と初めに 1 と、rāga は 6 種類、各々 6  
bhāṣā と具之ていふ。私は持相を具之て rāga に  
ついて述べよう。

## 2. 6 rāga の名称

śrīrāgo 'tha vasantaś-ca bhairavaḥ pañcamas-tathā |  
megharāgaś-ca vijñeyo saṣṭho nattanārāyaṇaḥ || 75 ||

śrīrāga, vasanta, bhairava, pañcama, megharāga,  
第 6 は nattanārāyaṇa の事, と理解せよ。

## 3. śrīrāga と bhāṣā

rūpavarṇādīkaṃ kiñcid-amīṣām pratipadyate |  
śrīrāgo 'tha gauravarṇaḥ so 'ṣṭahastāś-caturmukhaḥ ||  
pāśābjapustakāṅkuśabījapūmkabhṛt karaḥ |  
viṇā karadvaye 'sya syād-ekaś-ca varadaḥ karaḥ || 77 ||  
vikhṛtāto 'yam haṃsayāno brahmanmūrtir-iva-aparaḥ |

これに rāga の姿や色など、幾つかが述べられて  
いる。また、śrīrāga は〔身体は〕黄色で、四面  
八臂である。索、蓮花、書物、鉤、子満果、  
と手には持っている。他の二手は viṇā と持し、ま  
た一手は施願印である。彼は Haṃsa 鳥に乗し、  
更に姿は Brahma のまじりである。

etasya-anugabhāṣāṇām nāmāṇi syur-yathākramam || 78 ||

gaudī kolāhalāndhālī drāvidī mālavakaiśikī |

ṣaṣṭhī syād-devagāndhārī tāsām varṇyādi (varṇādī) varṇyte ||

śrīrāga に従い、bhāṣā の名前には、順次、〔次の通り〕とある。gaudī, kolāhalā, āndhālī, drāvidī, mālavakaiśikī, 第6は devagāndhārī とある。彼女の方の色字の説明がこれである。

gaudī bhāṣā pītavastrā gaurāṅgī gajavāhanā |

gaudī-bhāṣā は黄衣とすとい、身体は黄色で、象に乗るといふ。

kolāhalā ruktavastrā gaurā tu śukavāhanā || 80 ||

kolāhalā は赤衣とすとい、〔身体は〕黄色い、鸚鵡武鳥に乗るといふ。

dhāmrābhā kṛṣṇavasana-āndhālī śūkaravāhanā |

āndhālī は〔身体は〕煙色で、黒衣とすとい、豚に乗るといふ。

dravidī raktacīrā syād- hemābhā matsyavāhanā || 81 ||

dravidī は赤衣とてい、〔身体は〕黄金のよ  
うな〔色〕で、魚に乗るといふ。

mālavakaisīkī gaurā krauñcagā raktacīvarā |

mālavakaisīkī は〔身体は〕黄色で、クワン、  
鳥に乗る、赤衣とていふ。

raktābhā devagāndhārī pītacīrā-śvayāyini || 82 ||

devagāndhārī は〔身体は〕赤色で、黄衣とてい  
ふ、馬に乗るといふ。

śrīrāgānugatā bhāṣā vīṇāhastā śaḍ-apy-amūḥ |

śrīrāga = 従わぬ、かな b bhāṣā は vīṇā とてい  
ふ。

4. Vasanta-rāga と bhāṣā

rāgesya-atha vasantesya rūpavarnādi kīrtiyate || 83 ||

śaḍvadano daśakaro vasanto vidrumaprabhaḥ |

sutālasāṅkhaḥkhaṭvāṅga phalacakrābjabhṛt karaḥ || 84 ||

saviṇau ca kerau yesya varadābhayaḍau tathā |

vāhanam kokilā caitre vaiśākhe gīyate sa ca || 85 ||

さて、vasanta-rāga の 姿や色字の如述へられる。  
 vasanta は六面十臂で、珊瑚のような〔色〕で  
 ある。美しいフーラ（小型のシンバル）、螺  
 貝、カトガ、シカ杖、果実、輪、蓮花を手  
 にしている。その両手は vīṇā を持ち、また両  
 手は施願印と施無畏印である。kokila 鳥の乗物  
 である。彼は caitra 月と vaiśākha 月（共に春季）  
 に歌われる。

āndolā kaisikī ca-eva tathā prathamamañjarī |

gundagiri devasākhā rāmagrī ṣaṭ(ḍ)vasantajāḥ || 86 ||

atha-āsām lakṣma ca-āndolā dolārūḍhā suvarṇabhā |

śeṣū epi ca gaurāṅgyo dolāsthā nādapūritāḥ || 87 ||

āndolā, kaisikī, ~~prathamamañjarī~~, gundagiri, devasākhā,  
 rāmagrī の 6 [bhāṣā] は vasanta (rāga; 春) に生  
 れる春である。

さて、彼女への特徴は； āndolā は 3 3 3

に乗り，〔身体は〕黄金色である。他の眷属として，身体は黄金で，ぶらんこに乗り，音(nāda)に満ちている。

### 5. Bhairava-rāga k bhāṣā

bhairavaḥ śvetavarṇaḥ syād-ekavaktro 'ṣṭakastabhāk |  
vṛṣayānaḥ kṛttivāsaḥ kala(kāla)bhairavarūpabhṛt || 88 ||

sarpa trisūlakhaṭvāṅga japa mālābhir-anvitaḥ |

vīṇāpāśaphalābjāś-ca pāṇibhir-bhūṣito 'hij-ayam || 89 ||

bhairava は〔身体は〕白色で，一面八臂である。雄牛に乗り，皮衣を著し，śiva 神 (kālabhairava) の姿をしてゐる。彼は蛇，三叉鉞，カトグア，一ニカ杖，念珠を具之，また vīṇā, 索, 果実, 蓮花を具之に手に掛つて，飾られてゐる。

bhairavī gurjarī ca-eva bhāṣā velākulī tathā |

karnāṭī raktahamṣā ca bhāṣāḥ ṣaṭ(ḍ) bhairavānugāḥ || 90 ||

bhairavī, gurjarī, velākulī, karnāṭī, raktahamṣā, bhāṣā 〃 bhairava の従ふ 6 bhāṣā である。



nīlāmśukā raktavarṇā bhairavī śukavāhanā ।

bhairavī は青衣を著すと云、〔身体は〕赤く、鸚  
鵡に乗ると云。

gauravarṇā pītavastrā gurjarī meṣagaminī ॥ 91 ॥

gurjarī は〔身体は〕黄色で、黄衣を著すと云、  
羊に乗ると云。

śyāmāṅgī kṛṣṇavasana bhāṣā garuḍavāhinī ।

bhāṣā は〔身体は〕緑青色で、黒衣を著すと云、  
加ルヲ鳥に乗ると云。

velākulī raktacīrā gaurā śyād-viśvayāyinī ॥ 92 ॥

velākulī は赤衣を著すと云、〔身体は〕黄色で、  
雄牛に乗ると云。

karnāṭī hastigamanā nīlāṅgī raktacīvarā ।

karnāṭī は象に乗り、身体は青色で、赤衣を著  
すと云。

hamṣayānā pītavastrā raktahamṣā pravālabhā || 93 ||  
 raktahamṣā は ハ > ㄅ 鳥 に 乗 り , 黄 衣 エ 著 と 〃 ,  
 ( 身 体 は ) 若 葉 の よ う な ( 色 ) で あ る 。

6. pañcama-rāga = bhāṣā

pañcamasya ca rāgasya sambhāṣasya-atha lakṣaṇam |  
 pañcamah pañcavaktraḥ syād-dasāhasto gajendragah || 94 ||  
 vīṇā pāṣa phalāṅ kuśa khaṭvāṅgā bja (ṅavara) bhṛtkaraḥ |  
 tālā bhayādi yukpāṇiḥ śyāmalāṅgaś-ca kīrtiyate || 95 ||  
 bhāṣā と 伴 な い pañcama-rāga の 特 相 と ( 述 べ る ) 。  
 pañcama は 五 面 十 臂 で , 象 王 に 乗 っ て い る 。 手  
 に vīṇā , 索 , 果 実 , 鉤 , カ ト シ ョ ー ン か 杖 ,  
 蓮 花 ( 施 願 印 ) , タ ー ー ( 4 型 の シ ン べ ル ) ,  
 施 惡 畏 印 と 具 之 , ( 身 体 は ) 緑 青 色 で あ る ,  
 と い わ れ る 。

triguṇā stambhatīrthī syād-ābhīrī kakubhā tathā |  
 vairāḍī ca sāmērī paḍ bhāṣāḥ pañcaine matāḥ || 96 ||

triguṇā , stambhatīrthī , ābhīrī , kakubhā , vairāḍī ,  
sāmerī の 6 bhāṣā が pañcama の 6 の 1 と認めら  
れる。

triguṇā mahiṣayānā ca śyāmalā kṛṣṇacīvarā ।  
triguṇā は水牛に乗り、〔身体は〕緑青色で、  
黒衣をまとっている。

stambhatīrthī pītavestrā raktāṅgā śarpavāhanā ॥ 97 ॥  
stambhatīrthī は黄衣をまとい、身体は赤色で、  
蛇に乗り、こいている。

nīlāmbārā ca gaurā śyād-ābhīrī kekigāminī ।  
ābhīrī は〔身体は〕黄色で、青衣をまとい、孔  
雀に乗り、こいている。

kakubhā raktasīcayā raktāṅgī bakavāhanā ॥ 98 ॥  
kakubhā は赤衣をまとい、身体は赤色で、雀に  
乗り、こいている。

vairāḍī bhinnavarṇā ca kṛṣṇavastroṣṭrayāyini |

vairāḍī は〔身体は〕斑色（雑色）で、黒衣と  
まとい、駱駝に乗っている。

śvetavarṇā nilavastrā sāmerī syān-mṛgāsanaḥ || 99 ||

sāmerī は〔身体は〕白色で、青衣とまとい、  
鹿に乗っている。

## 7. Megha-rāga e bhāṣā

atha meghābhidho rāga ekavaktro 'ṣṭapāṇibhṛt |

meghavarṇaḥ kekigāmī pītāmbaraadharaḥ pi ca || 100 ||

śaṅkha cakragadāviṇā padmābhaya varāsi bhṛt |

karocayo yasya babhau tasya bhāṣā śat-apy-atha || 101 ||

さて、megha と 雨 ( ) rāga は一面八臂である。〔  
身体は〕雨雲のような色で、孔雀に乗る、黄  
衣とまとい、手には螺貝、輪、棍棒、  
viṇā、蓮花、施無畏印、施願印、刃を持っ  
ている。彼の bhāṣā は 6 人である。

baṅgālā madhurā ca-eva kāmodā ca-akṣasāṭikā ।

devagiri ca devālā tāsam lakṣaṇam-ucyate ॥ 102 ॥

[ 6 bhāṣā ] baṅgālā, madhurā, kāmodā, akṣa-  
sāṭikā, devālā の 名 だ 。 彼 女 の 特 相 を 述 べ  
て いる 。

baṅgālā pītavasānā gaurāṅgī khadgagāminī ।

baṅgālā は 黄 衣 を 着 ている、身 体 は 黄 色 で、犀 (   
khadga ) に 乗 っ ている 。

pītavastrā ca nīlāṅgī madhurā sūrasāsanā ॥ 103 ॥

madhurā は 黄 衣 を 着 ている、身 体 は 青 色 で、巨 鷲  
に 乗 っ ている 。

nīlāmbarā gauradehā kāmodā krauñcayāyinī ।

kāmodā は 青 衣 を 着 ている、身 体 は 黄 色 で、ク ー  
ン 鳥 に 乗 っ ている 。

gaurāṅgī pītavasānā haṁsagā ca-akṣasāṭikā ॥ 108 ॥

akṣasātikā は 身体は黄色で、黄衣をまとひ、ハ  
ンガ鳥に乗り、こゝる。

tārṅgāsana devagiri meghābhā raktacīvarā |  
devagiri は ハルガ鳥に乗り、(身体は) 靉雲の  
よう〔な色〕で、赤衣をまとひ、こゝる。

mayūravāhanā syāmā devālā nilacīvarā || 105 ||  
devālā は 孔雀に乗り、(身体は) 緑青色で、  
青衣をまとひ、こゝる。

#### 8. Nattanārāyaṇa-rāga e bhāṣā

nattanārāyaṇo rāgo nīlavarṇaś-caturbhujāḥ |  
śaṅkha cakragadāvīṇākaraḥ syād-garudāsanaḥ || 106 ||  
nattanārāyaṇa-rāga は (身体は) 青色で、四臂で  
ある。手に螺貝、輪、棍棒、vīṇā を持ち、ハ  
ルガ鳥に乗り、こゝる。

toṭikā moṭikā ca-eva nattā dumbī tathā-eva ca |

malhārī sindhumalhārī nāṭṭanārāyaṇāśrayāḥ || 107 ||

toṭikā , moṭikā , nāṭṭā , dūmbī , malhārī , sindhu-  
malhārī は nāṭṭanārāyaṇa に属する。

atha-āsāṃ lakṣaṇaṃ raktā toṭikā sambarāsanā |

す、彼等五の特相を〔述べる〕。

toṭikā は〔身体は〕赤色で、鹿に乗ってゐる。

moṭikā nīlavarasāṅ gaurā kukkuṭāvāhanā || 108 ||

moṭikā は青衣をまとひ、〔身体は〕黄色で、  
鷄に乗ってゐる。

nāṭṭā krauñcāsāṅ pītaśvarā meghadehabhā |

nāṭṭā はクラウンチ、鳥に乗り、黄衣をまとひ、  
身体は雨雲のよう〔な色〕である。

hemavarṇā raktacīrā dūmbī syān-naravāhinī || 109 ||

dūmbī は〔身体は〕黄金色で、赤衣をまとひ、  
人間に乗ってゐる。

nīlābhā raktavasānā malhāri ca kapotaḡā ।

malhāri は〔身体は〕青色で、赤衣を著て、鳩に乗っている。

sindhumalharikā gaurā pītācīrā gaḡāsānā ॥ 110 ॥

sindhumalhāri は〔身体は〕黄色で、黄衣を著て、象に乗っている。

vīṇāhastā nādarūpā bhāṣā ṣaṭtrimśadātmaakāḡ ।

bhāṣā は〔著て〕vīṇā を持ち、音(nāda)の具象であり、36より成る。

## [II] Saṅgitarāja

本書は文人王として高名であり、かの徹底してアッパル帝に抵抗した Rājasthān の Mewār 王 Kumbhakarna (Mahārāṇā Kumbhā r. 1433-1468 A.D.) の著書である。P.L. Sharma による刊本は声楽曲 (prabandha) をとって、器楽と舞踊の部分には収録されていない。音楽論の部分は gītaratna-



kośa と名づけられており、これだけで独立の音楽論書といえる。

gītaratnakōśa は svarollāsa, rāgollāsa, prakīrṇollāsa, prabandhollāsa の四部構成である。前述のように kumbhakarna は śārṅgadeva 説の rāga の分類を忠実に継承している。rāgollāsa は grāmādi, rāgopāṅga, bhāṣāṅga, kriyāṅga の四章より構成されている。章題が示すように、章別に各種 rāga の音楽的特徴 (lakṣaṇa), ālāpa (rāga の内容を表すために歌詞を伴わずに演奏される前奏) などが説かれている。rāgāṅga 以下の 4 aṅga-rāga は合計 147 種の rāga が説かれ、このうち 34 種の rāga には観想図像の詩文が付けられている。その内容は、殆んど、saṅgītopaniṣatsāroddhāra のそれと一致しているが、必ずしも、逐語的引用とはいえず、両者は共通の典拠によるものと推定される。

以下、34 種の rāga について、音楽的説明と共に観想図像の内容を紹介しよう。

a) rāgāṅga ṁ rāga

bhairava-rāga ( 2. 2. 35 - 38 )

① dhairvatagrahavirāmapeśalo bhinnasadjahṛdayābhinandanaḥ |  
gīyate śaradī viśrame gate vipralambhakarṇārasāśrayaḥ ||  
vāsara prathamayāmakāliko bhairavo 'paripatānabhairavaḥ |  
gīyate 'tra sagatāramandramo vaiṇikāḥ sa khalu bhairava-  
priyaḥ ||

② ekāśyāṣṭabhujāḥ śvetavarṇo vṛṣabhavāhanaḥ |  
kṛtīvāsāḥ sarpaśūlakhaṭvāṅga japamālikāḥ ||  
viṇāpāśa phalābjānī bibhrāṇo bhairava prabhaḥ |  
kaiścid-rāga vidāṁ varyaiḥ smaryate sūlirūpabhṛt ||

- ①
1. ㄉ 音 が 土 煞 音 (graha) と 終 止 音 (virāma) 。
  2. grāmarāga ṁ bhinnasadjā ṁ 本 質 と 受 け と 〃 。
  3. 秋 の 終 り に 歌 わ れ 。
  4. 離 別 (vipralambha) , 悲 の 情 趣 (karṇā-rasa) に 基 づ く 。
  5. 一 日 の 最 初 の yāma (  $\frac{1}{8}$  の 時 間 ) ( に 歌 じ ) 。
  6. ㄉ 音 が 高 音 (tāra) と ㄊ 音 が 低 音 (mandra) 。

7. = 3 rāga E 好 乙 神 13 Bhairava .

- ② 観想 图像 13 Saṅgītopaniṣatsāroddhāra ( 下 sus と 略す ) と 同い . 但し 「 rāga 13 精通 ( といふ人 ) の 一部 13 三叉鉞 E 持つ 者 ( śiva 神 ) の 姿 の bhairava-rāga E 想念 する 」 ( 396 ) と 附言 13 する .

śrīrāga ( 2. 2. 43 - 45 )

- ① śadjagrāme śadjikājātijātam śadjanyāsāmsāgraham tāramadhyam |

pālpaṃ mandrasthānagaṃ kecid-enam prāhuḥ prājñā audavaṃ rāgavijñāḥ ||

vire geyam prāvṛṣi śrīśatustyaī śrīrāgākhyam pūrvam-  
eke vadanti ||

- ② kecid-enam gauravarṇam-aṣṭabāhuṃ caturmukham |

padmapāsāṅkusavarī(karam) bijapūrakapustakam ||

bibhrāṇam paṇiṣatkēna viṇāsaktakaradvayam |

brahmāṇam-iva haṃsena gacchantam jagadur-budhāḥ ||

- ① 1. śadja-grāma o śadji-jāti 5 11 生 れる .

2. サ音が終止音，主音，去聲音。
3. ヌ音は高音，ハ音は少使用音 (alpa) で，  
低音位 (mandrasthāna)。
4. 雨期に，勇猛の情趣で，Śrīśa (Viṣṇu) 神を  
満足させるために歌う。
5. 7音音階。その論看は5は5音音階で  
あるという。

② 観想図像は sus と同じ。「kecit」の語は観  
想図像に因して，諸説が存在してゐるこ  
とを暗示している。

kolāhala ( 2. 2. 49 - 50 )

① kolāhalaḥ - takkabhavas - tadāṅgam sāmśagraho madhyama-  
mandrasthānaḥ |

niṣādatāraḥ sakalaiḥ svaraiś-ce tārair-yutaḥ sudja-  
gagānaramyaḥ ||

varṣasu geyaḥ svanidānavac-ce nirūpyate vartanikāśya  
samyak ||

② śukayānā raktavastrā gauravarṇā-iti kascana ||

- ① 1. grāma-rāga の ṭakka-rāga より生れ，その rā-gāṅga 。
2. ㄗ 音が主音，出発音。
3. ㄨ 音の低音と欠く。
4. 二音は高音，すべこの高音と具之，ㄗ 音に与る美しい曲 (gāna) とする。
5. 雨季に歌う。

② 観想図像は sus と同じ。

megha-rāga ( 2. 2. 51 - 52 )

① ṭakkajātaḥ padjagānena ranyo dhāṃśanyāśas-tāradhādiḥ  
satāraḥ |

mandrasthāne na-ujjhito megharāgo varṣākāle gānavidbhiḥ  
prayojyaḥ ||

② megho 'ṣṭabhujai kāśyaḥ pītavāsā mayūragatḥ |

śaikhacakra gadāvīṇā padmābhaya varāsi bhṛt ||

iṣyate kaiścid-eva-ayam na tu trimuni sammataḥ ||

① 1. ṭakka-rāga より生れる。

2. ㄗ 音の曲として美しい。

3. ㄨ 音が主音と終止音。
4. 高音の ㄨ 音を初音とし、ㄨ 音は高音。  
低音位においてても除かれない。
5. 兩季に使用する。

② 観想図像は sus と同じ。一部の人たちの説  
をみると、3 ッ = 説ではない (na tu trimunisam-  
matah)。

dvitīyākāmōda (2. 2. 56 - 57)

① śādja śādjī sambhavaḥ saṅgākāmsānyāsaḥ-ṭakkāṅgam  
sāmānyasvaro 'yam |  
kāmōdo 'yam mandragāndhāraramya jātyutthātvaḥ grāma-  
rāgatvam-asya ||

② kāmōdā khyam krauñcagāmi gauram nīlāmbaram smṛtam ||

- ① 1. śādja-grāma → śādjī-jāti かゝ生れゝ。
2. ㄨ 音が去聲音、主音、終止音。
3. grāma-rāga → ṭakka-rāga → rāgāṅga。
4. 音階音は共通 (同じ音域)。
5. 低音の ㄨ 音により美しい。jāti かゝ生

① 尺 反, grāma-rāga → 性質 と 具 之 て いる。

② 観想図像は sus → kamodā と同じ。

raktahamṣa ( 2. 2. 59 )

① gāndhārapañcamasya-aṅgam ṣaḍje dhāṃśagrahāntakaḥ |  
raktahamṣo gatāś-ca ṛṣabheṇa vivarjitakaḥ ||

② haṃśayānaḥ pītavastro vidrumaprabha iṣyate ||

① 1. grāmarāga → gāndhārapañcama → rāgāṅga と,

ṣaḍja-grāma → 形式。

2. カ音の主音, 出発音, 終止音。

3. カ音は高音。

4. リ音と欠く ( 6 音階音 ) 。

② 観想図像は sus と同じ。但し, 身体の色は  
珊瑚色 ( sus は「右葉のよう色」 ) 。

nattanārāyaṇa ( 2. 2. 61 - 62 )

① rāgam nattanārāyaṇam kakubhato jātam taḍḍhaṅgam punaḥ |  
varṣākālaniyoginam sakaruṇam gāndhāratārānvitam |  
mandrasthānagapañcamam samatayā saptasvarair-añcitam ||

śeḍjagrāmasugānapeśalaravam dhāṃśagrahāntam viduh ॥

② nilavarṇas-caturbāhur-nārāyaṇa iva-aparaḥ ।

śaikhacakragadāvīṇākaro garuḍavāhanaḥ ॥

manjate kaiscid-eva-ayam-amataṅgamatasthitaḥ ॥

① 1. grāma-rāga → kakubha-rāga → rāgāṅga

2. 兩季に使用可る。

3. 悲しむ (karuṇa) に伴ふ。

4. か音の高音を具えてゐる。

5. 八音は低音位にある。

6. 7音音階

7. śeḍja-grāma による淡い音の美しい曲。

8. か音が主音, 出発音, 終止音。

② 観想図像は sus と同じ。Matanga 説に よる

「く々の説」としてゐる呉が注目される。

vasantarāga ( 2. 2. 77 - 79 )

① sāmśanyāśagrahah pūrṇo mandraṇiḥ sakampitah ।

bhūyishcharini so daine pascime prahare budhaiḥ ।

hindo lāṅgam vasanto 'yam vasante giyate śucau ।



② vidrumābham dasabhujam śaḍāśyam kukilāgatim ॥  
 tālakhaṭvāṅgacakrābjaphalaśaṅkhāmś-ca śaṭkaraiḥ ।  
 bibhrāṇam viṇayā saktakaradvandvam varābhaye ॥  
 dadhatam pāṇiyugmena kecit prāhur-atadvidāḥ ॥

- ① 1. ㄴ音が主音，終止音，出発音。  
 2. 低音のニ音は震わされる (kampita; e"")  
 3 - ト )  
 3. 7音音階 (pūrṇa)  
 4. ㄴ, =, ㄴ音が多使用音。  
 5. 一日の最後の時間 (一日の  $\frac{1}{8}$  の時間)  
 に歌う。  
 6. grāma-rāga → hindola-rāga → rāgāṅga  
 7. 明るく春季に歌われる。

② 観想図像は sus と同じ。 kecit prāhur-atadvidāḥ  
 (これに精通してゐる人たゞは之をた) の  
 句は批難でゐるのか。真意は不詳。

gurjarī ( 2. 2. 82 - 83 )

① aṅgam pañcamasāḍavasya riḍhabhūyisṭhā grahāmśarṣabhā ।

nyāse madhyamaśalā śābhatas-tārā sudā tādītā |  
 mandrasthānagamadhyamā śucirase pūrṇasvarā gurjarī  
 śadja-grāmam-upetya gānakūśalair-geyā hariprītaye ||

② meṣugā pītavastrā ca gaurāṅgī kaiścid-īyate. ||

- ① 1. 8 uparāga = 属 7 の pañcamaśūḍḍava-rāga → rāgā-  
 ṅga。
2. 1) 音 と 7) 音 の 多 使 用 音 。
3. 1) 音 の 出 発 音 = 主 音。 7) 音 の 終 止 音 。
4. 1) 音 の 3 高 音 で、 1) 音 は 装 飾 音 (tādītā =  
 āhata gamaka 形 の よう に 震 わ せ る) 。
5. 穏 々 の 全 情 趣 (śucirasa) に 使 用 可 る 。
6. 7 音 音 階、
7. śadja-grāma の 形 式 で、 Hari (Viṣṇu) 神 と  
 比 喩 せ る 。

② 観 想 図 像 は sus と 同 じ 。

deśākhya ( 2. 2. 86 - 88 )

① deśākhya gaḡrahāṁśāntā gāndhārasphuritā viriḡh |  
 gāndhārapañcamasya-aṅgam śrīṅgāre gīyate janaiḡh ||

karuṇe'pi ca gāyanti niṁdrā ca samaśvarā |  
 pañcamena-ujjhītā ca-iyam na ruṇḍah(?) kaiścid-ucyate ||  
 rādjena-api vihīna-iyam gīyate kvacid-eva hi |  
 samaśvarā ca sampūrṇā veṅupravīṅyaśāli bhikḥ ||

② gauravarṇā pitavastrā mahāmeṣam-upāśritā ||

- ① 1. か音が去聲音，主音，終止音。か音は震わされる。
2. grāma-rāga → gāndhārapañcamā-rāga → rāgāṅga,
3. 一般に恋情の情趣において歌われる。
4. 一部の説として：悲の情趣において歌われ、二音は低音で、等しい音階音を具え、ハ音とク。 (以下不明)
5. 場合によってはサ音を除いて歌われるが、7音音階で、等しい音域 (管楽器奏音の場合)
- ② [身体は] 黄色で、黄衣をまとひ、大きな羊に乗ってゐる。susに在し。

baṅgāla ( 2. 2. 106 - 107 )

- ① baṅgālah śāḍavasya-aṅgam grahāṃ śānyāsamadhyamaḥ ।  
 sapābhyāṃ kampaṭo geyah sarvarttuṣu vicakṣaṇaiḥ ॥  
 praharṣe viniyoktavyo rase śṛigāranāmani ।
- ② pītavāsā gauravarṇā laṅkṛtaḥ śudjavāhanaḥ ॥

- ① 1. grāma-rāga の śāḍava-rāga の rāgāṅga .  
 2. ㄨ 音が 出 発 音 , 主 音 , 終 止 音 。  
 3. ㄨ 音 と ハ 音 は 震 わ さ れ る 。  
 4. ㄨ へ て の 季 節 に 対 し て 歌 わ れ る 。  
 5. 笑 い , 恋 情 の 情 趣 に 用 い る 。

- ② 観 想 図 像 は sus と 同 い 。 「 ㄨ 音 に 乗 る こ っ ち 」 の śadja e śhadga と 読 む 。

pañcama ( 2. 2. 110 - 111 )

- ① śuddhapañcakavya-aṅgam grahāṃ śānyāsapañcamaḥ ।  
 na rāgāṅgam-ayam kecid-rāgāṅgam-iti kaścana ॥
- ② pañcavaktro daśabhujō śyāmo 'nekapavāhanaḥ ।  
 vīṇāpāsābjamālāhikalābhyavarākūśān ॥  
 khaṭvāṅgam-āpi bibhrāṇaḥ pāṇibhiḥ kaiścid-īṣyate ॥

- ① 1. grāma-rāga ṁ śuddhapañcama-rāga ṁ rāgāṅga.  
 2. ハ音が出発音, 主音, 終止音。  
 3. ある人はハは rāgāṅga にハ合"と主張し,  
 少数の人は rāgāṅga にハ合"と"い"う。
- ② 観想図像は持物「蛇, 蓮花」に加之する。ka-  
 lā ṁ tālā と読む。sus. は 8 持物に之する。女。  
 面・晴, 乗物は sus. と同じ。

karnāṭī ( 2. 2. 113-114 )

- ① dhāntā śadjagrahanyāsā tārṅgā mandramadhyamā |  
 samaśeṣasvarā pūrṇā karnāṭī karṇaraktadā ||  
 imāṁ bhāṣāṁ samācaṣṭa mataṅgādividāṁ gaṇah |  
 rāgāṅgam-ikha niḥśaṅko grāmarāgānusārataḥ ||
- ② kṛṣṇavastrā nīlavarnā gajendraravavāhanā ||

- ① 1. ガ音が終止音, ナ音が出発音と終止音  
 (?主音)。  
 2. ガ音が高音で, ナ音が低音。  
 3. 他の音階音は等しく, ナ音音階。  
 4. 悲しみや愛慕の情を之する。

5. Mataṅga 等 の  $\times \times$  IS bhāṣā とすは  $\times$ , Nihā-  
ika (Śāringadeva) IS grāma-rāga と稱すは rā-  
gāṅga とする。とす。

② 産想圖像 IS 「黒衣」 と陰さ, sus と同じ。

(b) upāṅga ṅ rāga.

saindhavī ( 2. 2. 127-128 )

① grāme śaḍje saḡrahāntā dhakampṛā kimut śaḍje ka-  
mpilā mandramadhya |

śrīḡāre syāt saindhavī bhūrikujadgāndhārā-uktā drā-  
vidīvallabhena ||

② raktavastrā ca hemābhā mīnavāhanam-āśritā ||

① 1. śaḍja-grāma ṅ 音階型式に,  $\times$  音が本音  
音と終上音。

2.  $\times$  音と震わせる。一説には  $\times$  音と震わ  
せる。

3.  $\times$  音は低音。

4. 恋情の情趣に用いる。

5. ドラガ、タの字音によると、カ音は多  
使用音。

② 観想図像は sus の dravidī と同じ、

stambhatīrthī ( 2. 2. 144 )

① bhūñchy-eva varjitā pena mādikā stambhatīrthikā ।

② raktāñgī sarpagamanā pitavastrā smṛtā budhaiḥ ॥

① 1. ハ音とス<。 ( bhūñchi の語は不詳 )

2. ヲ音が出発音

② 観想図像は sus と同じ。

(c) bhāṣāṅga の rāga .

velāvalī ( 2. 3. 18 ; 20 )

① yāṁ bhāṣā kakubho janīṣṭa rucirāṁ sā bhogavarddhany-atho

tasya āṅgam-iyam nīpena gaditā velāvalīnāmataḥ ।

sampūrṇā yamṛdur-dhatārakalitā dhāṁśagrahāntā hari-

prītyai kampitadhā niyoganiyatā syād-vipralambhe rase ॥

② vṛṣagā gauravarṇā ca raktavastra-iti kecana ॥

- ① 1. kakubha (bhāṣājanaka) かゝ生れ = bhogavaraddha-  
nī-bhāṣā の bhāṣāṅga 。
2. 7 音音階。
3. か音の中音 (mṛdu), 7 音の高音 (主音, 出発音, 終止音)。
4. Hari 神と長 = ぼせるため, 7 音と震わせろ。
5. 離別の恋情の情趣に用いる。

② 観想図像は sus の velākūṭi と同じ。

madhurī ( 2. 3. 23 - 24 )

- ① bhāṣā yā kakubhodbhavā madhukarī khyātā tad-anīyaṃ  
matā  
dhāṃśāntagrahaṇā mamandramadhurā tārasthaśadjanvitā |  
sampūrṇā gamakānvitā śuci samāveśe ṃbhir-gīyate  
sā jñeyā madhurī madhūktivisaran-mādhuryadhuryoktitaḥ
- ② pītavestrā ca nīlāṅgī śubhrasārasavāhanā 〃

- ① 1. kakubha かゝ生れ = madhukarī-bhāṣā の bhāṣā-  
ṅga 。



2. ४<sup>th</sup> 音の主音, 終止音, 出発音。
3. २<sup>nd</sup> 音の低音, ४<sup>th</sup> 音の高音。
4. ७<sup>th</sup> 音音階で, 裝飾音 (gamaka) を具える。
5. 王座への淨罪に入る時に (śucisamāveśe) 歌う。
6. 甘味を語調 (ukti) を持つて, 甘美さを導く語調がある。

② 観想図像は sus と同じ,

nattā ( 2. 3. 36 - 37 ; 39 )

① hindole piñjarī yā prathamata uditā bhāṣikāṅgam tadīyam  
nattā samsāgrahāntā mṛdutaraniravā sādīsāmyāptaśobhā |  
dīptasrhānā pradīptapratiravapadhagā tārasvarādhyā  
geyā daine parārdhe pracuragamakabhāg yuddhavire 'adbhu-  
te ca ||

kaścid vimadhyamām-etām-āha sākāsanīsthurāḥ |

na tathā drśyate loke na tad-ādrīyate tataḥ ||

② krauñcāsana pītavastrā meghaśyāmalārūpadhṛk ||

① 1. hindola (bhāṣā-janaka) の piñjarī-bhāṣā の bhāṣā-

nigā .

2. ナ音が主音，出発音，終止音。
3. 高音の音階音が多い。
4. 一日の午前中に歌われる。
5. 装飾音 (gamaka) が多い。
6. 戦争における勇猛さ，王の驚きの情趣に用いられる。
7. 頑固で乱暴な者はマ音を欠くといふが世に認められていない故，これを採らない。

② 観想図像は sus と同じ。

gaudī ( 2. 3. 46 - 50 )

- ① yā mataṅgena gaditā gaudī mālavakaisīke |  
 tā-m-īhā-ācaṣṭa bhāṣāṅgam rājā rāgarahasjavit ||  
 kaścit-ācaṣṭa tā-m-eva-upāṅgasāṅgam-upeyuṣim |  
 triṣaḍjām mandratārasṭhaṣaḍjām sapṭamabhūyasim ||  
 hindolarāgāśrayanāt vasentopāṅgatām gatām |  
 kecidgamakasam yukṭapañcamāntām-īhā-abhyadhufi ||  
 rase vīre śucau kāle priyasambhāṣaṇe tathā |

śrīngāre 'syā api prāha viniyogam narādhipaḥ ॥

bhāṣānirūpaṇe ca-asyā ālāpo 'pi pradarśitaḥ ।

② pītavastrā ca gaurāṅgī gajendravāhanā ॥

- ① 1. Mātāṅga は Mālavakaiśīka (grāma-rāga) に属する  
[bhāṣā ㄷ ㄱ ㄴ] < ㄷ ㄴ ㄱ, = ㄱ は bhāṣāṅga  
ㄷ ㄱ ㄴ。
2. 一説では = ㄱ ∈ upāṅga < ㄷ ㄴ。
3. ㄷ 音が ㄱ 音, ㄴ 音, 終止音 (tripadjā) ㄷ,  
低音と高音位に属する。
4. = 音 (saptama) が多使用音。
5. hindola (bhāṣā-janaka) に基づく故, upāṅga の  
性質に属する。
6. 一説では, 裝飾音 ㄱ ㄴ, ㄷ 音が終止  
音。
7. 勇猛の情趣, 淨罪 (śuci), 恋人との会話  
に用いる。また恋情の情趣にも用いる。
8. ālāpa は bhāṣā-rāga の説明において述べた。

② 観想図像は sus と同じ。

codā ( 2. 3. 53; 55 )

① madhyamāṃśa viratiṃ pradīptasā kamprapañcamagutā ca mandragāṃ ।

śuddhaśāḍavabhavāṃ samasvarāṃ toḍikāṃ śucirasā ghanāgame ॥

② raktāṅgī raktavastrā ca raktāṃśuvaravāhanā ॥

① 1. マ音は主音と終止音。

2. ヲ音は多使用音 (pradīpta)。

3. ハ音は震わされ、低音。

4. śuddhaśāḍava (grāma-rāga) より生れ、音階音は等しい。

5. 穏やかな情趣を具え、雨雲の到来時に用いられる。

② 観想画像：身体は赤色で、赤衣をまとひ、

之派に赤布 (raktāṃśu) を乗せている。

andhālī ( 2. 3. 56 - 57 )

① śuddhapañcamajā bhāṣā dākṣiṇātyā purā-uditā ।

tadīyam-aṅgam-andhālī tāradhā gavivarjitā ॥

pañcamāṃśagrahanyāsā bhūyiṣṭharṣabhapañcamā ।

dinādau gīyate kāle śucau śucirasojjalā ॥

dhūmravarṇā kṛṣṇevastrā śūkaram samupāśritā ॥

- ① 1. 南方の人は śuddhapañcana (grāma-rāja) であり、  
 生れた bhāṣā-rāja → bhāṣāṅga であり、  
 音が高音で、か音 E 欠く (e " ) 。
2. ハ音が主音、出発音、終止音。
3. ㄐ音が多使用音。
4. 早朝、淨罪時に歌われ、穏やかな情趣  
 に燃えたりする。

- ② 観想図像は sus. (āndhārī) と同じ。

ābhīrī ( 2. 3. 58 - 60 )

- ① pañcame kathitā bhāṣā ābhīrikā-apī purā mayā ।  
 tām-eva-atra vijānīyād-bhāṣāṅgatvena rāgavit ॥  
 kaścit-kakubhasambhūtām-ābhīrīm-aṅgatām gatām ।  
 tridhām tārapadhām bhūriniripām pūrṇamādikām ॥  
 ābhīrīvallabhām geyām raṇamūrdhani sañjagau ।  
 ākāpas-tatra tatra-apī darsitaḥ pūrvam-eva hi ॥

- ② nīlavāstrā ca gaurāṅgī mayūravāraṇāḥ ॥

- ① 1. 先には *ābhīrī* は *pañcama* (*bhāṣā-janaka*) の *bhāṣā-rāga* であるといわれるが、*ニニ* は通説に従って *bhāṣāṅga* とする。
2. 一説には、*kakubha* (*bhāṣā-janaka*) の *ニニ* は *bhāṣāṅga* とする。
3. *ハ* 音は出発音、主音、終止音 (*tridha*) で、高音である。*ハ* 音も高音。
4. *ニ*, *リ*, *ハ* の各音は多使用音。( *pūrṇa-mādikam* は不詳 )
5. 戦の陣頭で歌われた。
6. *ālāpa* は、先には述べた。
- ② 観想図像は *sus* と同じ。

*devālā* ( 2. 3. 62 )

- ① *lokavartmany-avarṭitvād-devālā na prakīrtitā* |
- ② *mayūravāhanā syāmā nīlavāstrā-itī kecana* ||

- ① 1. 実際は演奏されて「*ニニ*」故、説理「*ニニ*」。

② 観想図像は SUS と同じ。

kaiśikī ( 2. 3. 63 )

① yā pañcame mataṅgena bhāṣā kaiśikikā-uditā |  
sa-eva bhāṣāṅgam-ity-āha kālajīd-rāgarājivit ||

② dolārūdhā sugaurāṅgī gītāgānaratā sadā ||

① 1. Mataṅga 説は 17 pañcama (bhāṣājanaka) の bhāṣā  
にあるが、bhāṣāṅga である。

② 観想図像は SUS と同じ。但し、「常に歌唱  
に熱中してゐる」とする。

bhairavī ( 2. 3. 72 )

① upāṅgabhaṅitā ca tatra bhairavī prataniṣyate |

② nīlāṃśukā raktavarṇā śukavāhanam-āśritā ||

① 1. upāṅga とはこれであるが、bhāṣāṅga に入  
る。

② 観想図像は SUS と同じ。

ḍombakrī ( 2. 3. 73 - 74 ; 76 )

① yā bhinnasādje travaṇā tadāṅgaṃ ḍombakriyā bhūpatinā-  
upadiṣṭā ।

sāṃśagrahā dhairvataviśramā ca vivarjitā ca rṣabha-  
pañcamabhyām ॥

hemāntakāle prathamē dinārdāhe praḡyate yā karuṇe  
rase ca ।

sādjasvarasthānakṛtāvasānām tām-eva ratnākarakṛj-jagāda

② hemavarṇā raktavastrā narayānam-upāśritā ॥

① 1. binnasādja (bhāṣājanaka) ṅ travaṇā-bhāṣā ṅ bhā-  
ḡāṅga 。

2. ṅ 音が主音と去聲音, ḡ 音が終止音。

3. ṅ 音とハ音と欠音。

4. 冬季の一日の午前に歌われる。

5. 悲の情趣に使用する。

6. Saṅgītaratnākaraの著者 ( Śārṅgadeva) は ṅ 音  
の位置を休止とする。

② 観想図像は sus と同じ。



sāverī ( 2. 3. 85 ; 87 )

- ① yuktā ragantī kakubhasya bhāṣā sāverikāṅgam kṛhitā tadīyā |  
dhāṁśā gatārā mṛdugālpasādī vīpañcamā nigrahanā nimokṣā ||  
hāṣye ca śrīṅārārese niyojyā saratpraveśe ridhabhūyasī ca ||
- ② śvetavarṇā nīlavastrā mṛgavāhanam-āśritā ||

- ① 1. 演奏家は疑問と  $\bar{c} \rightarrow \bar{c}$  , kakubha の bhā-  
pāṅga とする。  
2. ㄱ 音が主音, = 音が去聲音と終止音。  
3. ㄴ 音は高音, ㄷ 音は弱く, ㄹ 使用音。  
ハ 音と欠く。  
4. 笑いと恋情の情趣に用いる。  
5. 秋の入りには用いる。  
6. リ音とㄱ音が多使用音。
- ② 観想図像は sus (sāmerī) と同じ。

ādikāmodā ( 2. 3. 88 ; 90 )

- ① bāṅgālī bhinnasudje prathamata uditā yā tad-aṅgam matā-iyam  
kāmodāḍī-iti pūrvā guruvacanakṛtau dhāṁśāvasānā |  
pūrṇā gāndhāratārā svarasamaninadā mandramā kāla uktā

hemante vāsarādye dala iha khalu bībhatsasāñjñe rase ca ॥

② krauñcayānā gauradehā nilāambaravibhūṣitā ॥

- ① 1. bhinnasādya ṅ bhāṣā と ṅ ā bāṅgāli ṅ bhāṣāṅga  
と, かゝる kāmōdādī と 呼ばれた。
2. ṅ 音が主音と終止音。
3. 7 音音階と, か音は高音, ṅ 音は低音,  
音階音は等 ( 11 音とある ( 変音と含  
む ) ) 。
4. 冬季の一月の予前中に歌われる。
5. 嫉妬の情趣に用いる。

② 観想図像は sus (kāmōdā) と同じ。

prathamamañjarī ( 2. 3. 92 - 93 ; 95 )

① bhogavarddhanikā bhāṣā kakubhe yā purā-uditā ।

tad-aṅgam-eṣā pāṃśāntagrahā prathamamañjarī ॥

gamandrā ridhatārā ca bhūrigāndhānamadhyamā ।

sampūrṇā śaradī prāyag śrīngāre gīyate budhaiḥ ॥

lakṣyeṣu lakṣyate tajjñair-madhyamāṃśādi kutracit ॥

② dolāsthā gauravarṇā ca śrutimaṇḍalavādinī ॥

- ① 1. kakubha → bhāṣā とある bhogavarddhanī → bhāṣā-  
nige。
2. ハ音が主音，終止音，虫窓音。
3. カ音は低音で，リ音とタ音は高音。
4. カ音とマ音は多使用音。7音音階。
5. 通常，秋に歌われる。
6. 恋情の情趣で歌われる。
7. 演奏のあり場合には，マ音を主音とする  
に可なりとある。

② 観想図像は sus と同じ，但し「śrutimāṇḍala  
(微分音表示図) を説いている」とある。

malhārī (2. 3. 98 - 99 ; 101)

- ① vibhāṣāndhālikā yā tu malhārī tatsamudbhavaḥ |  
pañcamāṃśagrahanyā mamandrā gasvarojjhītā ||  
geyā mukhyarase kale varṣāsu suravallabhā |  
śārṅgadevas-tv-imām-āha-upāṅgatve 'tisamīpataḥ ||
- ② nīlābhā raktavasanaḥ kapotaḥ vāhanam śritā ||

- ① 1. [ śuddhapañcama (bhāṣā-janaka) の ] vibhāṣā と  
 なる āndhālī の bhāṣāṅga.
2. ハ音が主音, 出発音, 終止音。
3. マ音は低音。
4. ガ音を欠く。
5. 恋情の情趣に用いる。
6. 雨季に歌われる。
7. への rāga は 好む神は インドラ (suravallabha)。
8. Śārṅgadeva は upāṅga に非常に近いと云う。
- ② 観想図像は sus と同じ。

karnāṭī ( 2. 3. 108 - 109 )

- ① gāndhāratārā mṛdumā dhavatāṃśu grahāntīmā |  
 samaśeṣasvarā pūrṇā karnāṭī varṇitā bhaye ||
- ② nīlāṅgī kṣṇavasānā gajendravaravāhanā ||

- ① 1. ガ音は高音, マ音は弱い。
2. マ音が主音, 出発音, 終止音。
3. 他の音階音は等しく, 7音音階。
4. 恐怖に用いられる。

- ② 観想图像は sus と同じ，但し衣服の色は「黒」である。

rāmakṛti ( 2. 3. 114 - 115 )

- ① kolāhalā takkabhā-atra bhāṣā pūrva-udita rāmakṛts-tad-aṅgaḥ  
sāntā grahāṁśīkṛtamadhyamā ca vivarjitā pañcamānisvanena ॥
- ② dolārudhā ca gaurāṅgū vīnādāṇḍavibhūṣitā ॥

- ① 1. takka (bhāṣā-janaka) とり 生れ (= kolāhalā (bhāṣā) の bhāṣāṅga) の bhāṣāṅga。  
2. ツ音が終止音，マ音が去聲音と主音。  
3. ハ音と欠く。

- ② 観想图像は sus と同じ，但し「vīṅgū の柄は飾り」と可。 sus は rāmaṅgū

(d) kriyāṅga の rāga.

gaudakṛti ( 2. 4. 6 ; 8 )

- ① gaudakriyā saqrāhanāṁśāmoṁṣā nidhojjhitā pañcamamandri-  
tā ca ।

madhyadīptā mapabhūribhāvā vire 'dbhute ca-eva rase.  
pradiṣṭā ॥

② gaurāṅgī vīṇayā saktā dolārūdhā hy-upaśrītā ॥

- ① 1. ㄐ 音が虫卷音, 主音, 終止音  
2. リ音とㄐ音と欠く。  
3. ハ音は低音, マ音は輝やく (高音?),  
両音は, 共に, 多使用音。  
4. 亭狂と驚きの情趣に用いる。

② 観想図像は sus と同じ。但し「vīṇā」に熱中  
している」とする。sus は guṇḍagiri。

devakṛtī ( 2. 4. 9 ; 11 )

① samasvarā dhagrahaṇā nimandrā nyāsāṃśuśadjā viripā  
matārā ।

devakriyā vīrarase pradiṣṭā tarhā-adbhute kṛṣṇamahī-  
dhavanena ॥

② meghābhā raktavasānā ca garudopari saṃsthītā ॥

- ① 1. 音階音は等しく, ㄐ音が虫卷音, ㄐ音

ハ主音と終止音。

2. リ音とハ音と久。
3. ニ音は低音で、マ音は高音。
4. 勇猛と驚きの情趣に用いる。

② 観想図像は sus と同じ。sus は devagiri

### [Ⅲ] Pañcamasārasamhitā

本書は Garu Bipin Singh の編集による刊本である。この刊本にはハカルカッタのアジア協会所蔵の写本 (no. G. 5040) の第三章: Rāganirṇaya (ラ一ガの説明) の章がテ-グ- + -ガリ- 文字によって、掲載されている。本書は以下の四章 (章題なし) により構成されている。

- ・ 第一章: saṅgīta (歌, 器楽, 舞蹈) の成之と伝道に關する伝説。天界では Rambhā が Saṅgītasamhitā と著わし, 地底界では Huhu (カ-ル-ガ-の石前) が Tamburu-samhitā と著わし, 地上界では Bharata が Bharata-samhitā と著わし

た。 Bharata たは各段の *samhitā* を広めるた  
めた, Bhadra といふ名の舞踊家 (*nata*) と創  
り, 三界に音楽を広めさせた。

- 。 第2章: 歌手, 打楽器奏者, 役者 (*nāyaka*, *nāyika*), 演技 (*abhinaya*), 舞踊, 楽器, 太鼓 (*mṛdaṅga*), 神の字音 (*varṇa*) などと主題とする。歌 (*gīta*) と最高のもので「歌に従ふものは楽器であり, 楽器に従ふものはラヤ (*laya* テンポ) であり, 主人公 (役者) に動きはこれらすべてに従ふ」と述べている。

- 。 第3章: *rāga* の組織と観想図像と主題とする。

- 。 第4章: *tāla* (拍子) の成立とその種類と主題とする。特に Gauda 地方の18種の *tāla* の解説がある。

これらの章のうち, 第3章は67偈より成る。

*rāga* の組織は6 *rāga* と36 *rāginī* の42種の組織である。 *rāga* と *rāginī* と歌うべき季節と時刻 (



(6)

96-19) に述べて、次に各 rāga に所属する rāgiṇī に述べて (20-25)、最後に観想図像に述べている。しかし rāga, rāgiṇī の音楽的説明 (lakṣaṇa) は述べていない。刊本の観想図像の内容はアジア協会所蔵本と一致しない例が多い。したがって、両者と併記する。但し、類似例の場合は相違点のみを指摘するに止める。

## 1. mālava-rāga と rāgiṇī

mālava (3. 26)

arha rāga dhyānam -

nitambinīcumbitavaktrapadmāḥ śukadyutiḥ kuṇḍalavān  
pramattah |

saṅgītāsālam pravīṣan pradoṣe mālādhare mālavarāgarājaḥ ||

rāga の王 mālava は蓮花のようなくちには美しい腰と、その女性が口づけし、(身体は) 鵝鳥(色)の光を具え、耳飾りをつけて、愛欲にたかまり、夕方、音楽堂に入ってきてゆく。彼は花輪をつけている。

カウカマタ、アジア協会蔵本（以下 CAS と略す）は c-pāda : saṅgītaśāstrānurataḥ（音楽論書に熱中している）とす。d-pāda : mālavarāga etaḥ, 王は去ることなし。

dhānuṣī (3. 27)

nīlotpalam karṇayuge vahantī śyāmā sukeśī kṛśama-  
dhyamabhāgī |

iṣat sahāsāmbujavaktraramyā sā dhānuṣī padmasu-  
cārunetrā ||

dhānuṣī は両耳に青蓮花を挿し、（身体は）緑青色。髪は美しく、細腰（腹部は細い）で、美しい蓮花の面影は、少し笑っている。

mālasī (3. 28)

kare vahātāmbuja yugmaramyā itas-tatas-cāru vilokayanti |

kanthe sphuraṇ mauktikaratnakārā sā mālasī samkathitā vicitrā ||

mālasī は手に美しい = 木の揺れる蓮花を挿し、

もたりを見まわしている。首に輝く真珠の  
首飾りをかけ、美しい。

rāmakirī (3. 29)

prataptacāmīkaracāruvarnā karṇāvataṃsam kamalam vahantī  
pauṣyam dhanuḥ puṣpasarāṅ dadhānā candrānā rāmakirī pradiṣṭā ||  
rāmakirī は [身体は] 輝く黄金のよう美しい  
色で、蓮花の耳飾りをかけている。花のう  
と花の元と持ち、顔は月のようである。

sindhudā (3. 30)

sadīndranī ladyutir-ambujākṣī pravādayanti kavī lasayantram |  
vicitraratnābharanā sukeṣī sa sindhudā kāntasamīpaseṃsthā ||  
sindhudā は [身体は] 淨らかなサッパイヤの光  
を具え、眼は蓮花のよう。練習している詩  
人に話しかけている。美しい宝石を飾り、髪  
は美しく、恋人の側にいる。

CAS. b-pāda: kapilāsayantram は不明。

asuvārī ( 3. 31 )

javāprasūnadyutir-induvaktrā sukam ca padmam karajor-dadhānā |  
kṣaumāmśukācchādina gātrayaṣṭir-mahāvīdagadhā kathitā-asuvārī ||

asuvārī は ( 身体に ) javā ( 三つは ) の花の  
ような光を具え、顔は月のように。両手に嬰鳥武鳥  
と蓮花を捧げてゐる。細い身体に絹衣をま  
い、非常に美しい。

cas. は rāgini の名前と asvārī とする。

a. b. pāda:

javāprasūnadyutivastavesā sunīlapadmam karajor-dadhānā |

javā の花の光を具え且衣服をまいて、両手に  
美しい蓮花を捧げてゐる。

bhairavī ( 3. 32 )

śaroverasthā ophaṭikasya maṇḍape sarchait śaṅkeram-arcajantī |

tālaprayogapratibaddhagīṭhī gaurītanu bhairavikā satī-iyam ||

湖にある水晶の祠堂に於いて、tāla と歌を合  
せて、蓮花を Śaṅkara ( śiva ) 神に供養してゐる。  
bhairavī は身体は黄色い、貞女である。

CAS. (3. 28.)

candraprabhācārumṅgiva netrā vidyādhārī nṛtyakalām vahanti |

pikasvarā-ativamanoharanti sā bhairavī-iyam śriyam-ātano tu ||

bhairavī は (身体は) 月より [ 白色 ] の、眼は鹿のよじに美しい。知識があり、舞うといふ。声はカッコーのよじ、非常に美しい。彼女に幸福と子とを授けよ。

2. Mallāra-rāga = rāgiṇī

mallāra (3. 33.)

vidvān kusīlo 'tivilhārasīlah kāntapriyo dharmikāsīlayuktaḥ |

kāmāturaḥ piṅgalanetrayugmaḥ mallārarāgaḥ kusumapriyās-ca ||

mallāra は知恵あり、行い正しく、非常に信心深く (馬鹿には、娯樂において節度あり)、法に適つて善行を可ふ。愛欲に拘りて自制し (kāma-atura), 両眼は赤色で、花を好む。

CAS. (3. 29.)

vihārasīlo 'pi ca nīladeho gabhīravākyaḥ paramo vidagdhaḥ |

kāmāturaḥ piṅgalanetrayugmo mallā<sup>ra</sup>rāgaḥ kuśalam karoti ||

信心深く、身体は青色で、言葉は深遠で、最高  
の賢者のある。意欲に対して自制し、両眼  
は赤い。 mallarāga は幸福にして下さる。

velāvālī ( 3. 34 )

saṅketitoṭphullakātā nikaṅje kṛtasthitiḥ kāntasumāgamāḥ |

velāvālī campakamālayamaulivicitraveśābharaṇā niruktā ||

velāvālī は恋人に今 ; ために、約束して蔓草の  
花咲く茂れに、留まっている。 campaka の花輪  
の冠、美しい衣服を飾っている。

caś (c.d.pāda)

velāvālī yugmamālyamaulikāntā vicitrābharaṇānuruktā ||

velāvālī は一対の美しい花輪の冠をつけて、種  
の飾りをつけている。

pūrāvī ( 3. 35 )

rahaḥ svakāntakriyumāṇapatrāvālīm rahanti kacakumbhayugme |

dūrvādalaśyāmatana sukāmā purātanaikḥ sāvūrāvī niruktā ||

秘かに、自分の恋人が絡んでいる葉の輪を両  
の乳房にかけている。 pūrāvī は身体は dūrvā 草

の花弁のような緑青色で、愛欲にたかまつて  
いる、と古人はうほいつてゐる。

kānaḍā ( 3. 36 )

aśokavṛkṣasya tale niṣaṅṅā viyoginī vāspakanañcitākṣī |  
nirbhūṣitāṅgī jaṭilakaveṇī sā kānaḍā hemalā-iva tanvī ||

kānaḍā は [ 恋くと ] 別れて、aśoka 樹の根元に  
坐り、眼に涙をため、身体には飾りもなく、  
髪は一つに束ね、hemala 草のようにか弱い。

mādhavī ( 3. 37 )

saṁgrathya saṁgrathya gale dadhānā prasūnamālāṁ dayitasya  
bālā |

gaurī svakāntājanacumbitāsya sū sundarī mādhavikā nikañje ||

花車輪を首に繰返し巻きつけてゐる。mādhavī は  
恋人にとつては幼い娘で、( 身体は ) 黄色。  
美しい彼女は <sup>茂みで、</sup>自分の恋人に迫られて、口づけ  
られてゐる。

CAS ( 3. 38 )

taditprabhāḥolavīsūlanetrā vaktrañ-ca rāmā pramadā svakāntam |

cucumbamānā priyavādinī ca sāmādhavī mādhavikā nikañje ||

大きな眼は燈火のさうに輝き、動く、madhu 族  
の女 mādhavī は美しい婦人<sup>たみこ</sup>で、自分の恋人に口  
を付して、優しく語るといふ。

koḍā (3. 38)

satkacchapīm vādajataḥ svabharṭus-tālān samabhyasyate sammukhenā |

sadā-eva tālāvahitā ca bulā koḍā karālastanayugmaramyā ||

koḍā は夫が情素(こ)の kacchapī (弦楽器) を奏し  
てゐる間、向き合つて、tālā (小型三拍子)  
を打つ。常に拍子(tālā)に注意してゐる。彼  
女は若く、両乳房は高く、美しい。

caś. (3. 34)

praṇartitā lāsyakalāvīlāsā pavitradehā kuṭīlekṣaṇyā ca |

kāntasya vāme varakāminī sāmā koḍā vihāre'pi sutistṭhati-iva ||

koḍā は〔身体を〕動かす世、lāsyā の舞蹈を楽し  
んでゐる。身体は清らかな、表情を浮かべて  
ゐる。右にカミ寺院にゐるようには、天の左側



に [ 113 ], 美しい女性である。

kedārikā ( 3. 39 )

snātvā samuttīrṇavati sudehā keśāgrāniśyanditavāribinduḥ |

nispīḍayanti stimitāṃśukāntam kedārikā vyaktapayodharaśrīḥ ||

水浴を終り，水から上って [ 113 ]。kedārikā は身体は美しく，髪の前から水滴を [ 113 ]，濡れた衣服の前を [ 113 ] 通り，美しい乳房を露に [ 113 ]。

CAS. ( 3. 35 )

snānāvaruddhāṃśukahīnadehā keśād-viniśyanditavāribinduḥ |

snigdhā manchārī gajendragāminī kedārikā vyaktapayodharaśrīḥ ||

kedārikā は水浴から上り，身体に衣服を [ 113 ]

着，[ 同前 ]，[ 身体に ] 塗油し，心を奪う

ばかり美しく，象王のよき歩みで，[ 同前 ]。

3. śrī-rāga e rāgiṇī

śrī-rāga ( 3. 40 )

līlāvihāreṇa vanāntareṣu cīvan prasūnāni vadhūśahāyaḥ |

vilāsavesāditavyaktamūrtiḥ śrīrāga eṣa prathitaḥ pṛthivyām ||

śrīrāga は、戯れに、森のはずれで、妻と共に、花を集めてゐる。遊戯の場には姿と現わした彼は、地上で、よく知られてゐる。

cas (c-pāda)

vilāsavesā dyutidivgamūrtiḥ : 遊戯の衣服をまと

い、光り輝く、神々しい姿。

gāndhārī (3. 41)

sandhyākāle veśmani prāṇabandhoḥ skandhe viṇāni vādayantīm  
dadhānām |

dhīrā dhīrā dhātucitrāṅkitāṅgī śrī gāndhārī gaṇahamālyāni  
dhatte ||

gāndhārī は、夜明けには、部屋で、最愛の夫の肩

に viṇā を遣はして、弾いてゐる。彼女が dhīrā,

adhīrā (の > へ > の) 女性に、<sup>(7)</sup> 身体には dhātucitra

(?) を > け、香輪 (gaṇahamālyā) を持たせてゐる。

CA 8 (3. 37)

saṅgītanṛtyānuraatā dinānte kāntasya skandhe praṇīdhāya  
pāṇim |

vīṇāṃ dadhānā ca vicitrāṅgī gāndhārikā gandhavinodini ca ||  
gāndhārī は歌と踊りに熱中し、深夜に、恋人の  
肩に腕を置き、vīṇā を持つている。身体は美  
しく、香を楽しんでいる。

subhagā (3. 42)

rasapadarthavivecanakautukam vidadhātī nijakovidā-  
samśadī |

sukavitā mṛtabhāvāna tatparā bhagavati subhagā samudrītā ||  
subhagā は、自分たちの賢者の集りにあつて、  
rasa (情趣) の語意を検討しようとする、  
甘露のようを素晴しい詩の性質を想い、それ  
に没入している。

CA 8. (a-pāda) : nānā rasapadārthān ; c-pāda : kavīcābhā-  
vavambhogā , 観想の内容は同じである。

gaurī ( 3. 43 )

puṣpodyāne sūradham mālikalāpaiḥ kṛīḍanti-iyam kokilakākalībhiḥ |  
(8)  
vāmā śyāmā (?) sadḡuṇagrāmasīmā gaurī (gabhīrā) gauraveṇa-upa-  
diṣṭā ||

gaurī は、花園で、花輪の束、低くて甘んカッ  
コ - の声と戯れをいふ。美しく、多くの美兵  
と具え、(計り知れな)い、(身体は)緑青  
色である。

CAS. ( 3. 38 )

prasannavaktrā śivabhāvinī nā pragūyanti cāpi pīkaprabhāṣā |  
gaurī  
śyāmā rasajñā kīla divyarūpā<sup>y</sup>gabhirā vāhinā-upadiṣṭā ||

gaurī は晴れやかな顔であり、幸福と具え(い  
ふ)は、śiva 神を信じて)、歌いつつ、カッコ  
ーと話しをいふ。(身体は)緑青色で、情趣  
に精通し、姿は神々しく、計り知れない。

kaumārikā ( 3. 44 )

aṭṭālikāyām sphuṭakaumudībhiḥ prakāśitāyām rajantīvihāreḥ |  
dyutāḡa kāntena samam vasantī kaumālikā kāmakalām vahantī ||

kaumārikā は夜に樂しむ、明の月光に照らされ  
 され在宮殿に、遊ぶために、夫と共にいる。  
 彼女は力一の枝 (= Rati 女神) に長けてい  
 る。

CAS (d-pāda) : gaurīpadambhoruham-arcayā (蓮花の  
 上) を、白の足に護る。veloyārī に参照。

veloyārī (3. 45)

gaurī padāmboruhām-arcayanti sā gahvare śrīmatī ratna-  
 nāsodī ।

nānādravyapānayanair-bhaktibhāvair-veloyārī kathayate

bālikā-iyam ॥

veloyārī は宝山の吉祥なる森の中に、蓮花の上  
 に足を置く (神に礼拝) している。種々の  
 供物と信愛の念をもつ。彼女は若い女性に  
 なる。

CAS (3. 41)

veṇīdharā kañcukikām vahanti lāvaṅgāśīlā varagātra gaurī ।

vinedinī ratnakalāpahārā velogūrī pītanico (adhāriṇī) ॥

髪と弁髪に結い、胴衣と→けていゝ。心根を  
よ美しい女性で、素晴らしい細い身体である。  
遊むに長けていゝが、宝石細工は嫌う (vinedinī  
ratnaka(lā)pahārā?)。黄色のウエーブルと→けてい  
ゝ。

vairāgī (3. 46)

ullāsuyantī dhammilam rahasthā prāṇabanahunā |

mālatīkusumasragbhīḥ vairāgī rāgiṇī smṛtā ॥

vairāgī は花を飾った頭髪 (dhammila) と揺かせて、  
最愛の夫と共に、秘密の場所にいる。シラス  
ミシの花輪と→けていゝ。

C45 (3. 42)

manasvini mānaratā prabhāvinī nivāsuyutā sthiraḍṣṭī snigdha |

vairāgiṇī rāgayutā pradīṣṭā vidagdharūpaiḥ kīla devirūpā ॥

vairāgiṇī は賢い女性で、尊敬心を支えうそと命  
く、偉業があり、落ちついた眼指しは美しく、  
愛欲を具えていゝ。彼女が諸々の美しい姿と

具之 ( いる故, 女神 → 5 ) である。

#### 4 Vasanta-rāga e rāgiṇī

vasanta ( 3. 47 )

cūtāṃkureṇa-eva kṛtāvataṃso vighūrṇamānārūṇanetrāpadmaḥ |

pītāmbaraḥ kāñcanacārudeho vasantarāgo yuvati priyaś-ca ||

vasanta-rāga は マンゴ - の葉で作った耳飾りである。

行, びらく = 乗って (vighūrṇamāna)。蓮花の

5 ) の眼は赤く, 黄衣を穿て, 身体は黄金

の5 ) に美しく, 若い女性に愛される。

tudī ( 3. 48 )

sunṛtyamānā-api suśīlaguktā muktālatākalpitaḥāra-

yaṣṭih |

cūtāṃkuraṃ pēṇiyuḡe vahanti javāruṅāṅgī kathitā sā

tudī ||

tudī は上手に踊っている。行は正しく, 細い

(身体に) 真珠の胸飾りである, マンゴ - の葉

と両手に持っている。身体はシタバ (javā)

の よ ) = 赤い。

CAS: c-pāda ; karṇayuge (両耳に), d-pāda ; natāṅgī  
(身体を曲けている)。

pañcamī ( 3. 49 )

saṅgītagaṅṭhīṇa gariṣṭhabhāgān samāśrita gāyanasampradāyāḥ |

khavā kvāṇanūprapādayugmā sū pañcamī pañcamavedavidyā ||

pañcamī は歌手の正しく流流に通じているので、  
歌の会では、最も重要な部分を担当。(身体  
は)小さく、両足に音を出している足環をつけて  
いる。彼女は第五番目のウ = - 7 に通じて  
いる。

CAS ( 3. 45 )

saṅgītaavidyāsu viśāradā ca vihārabhāvā varakāminī - iyam |

pradīptabhāṣā surasā suhāṅgā śrīpañcamī pañcamavedavidyāḥ |

聖なる pañcamī は音楽の知識に精通し、娯楽を  
好む(さるいは、信心深い)素晴らしい女性であ  
る。輝かしい bhāṣā で、優れた情趣を具え、身



体は漆喰 (sadhā) [ ぬきご ] に白く , 以下同前。

lalitā ( 3. 50 )

upasi keśasusamyamam-ātmano vidadhātī śayantīthitavatī-asaul

vikulitālakavāllivṛtānanā kalitā kalitā budhaiḥ ॥

lalitā は , 夜明けには , 寢床から起きて , 自分の  
頭髪を整えている。顔には揺れ動く , 蔓草の  
ように赤髪がかかっている。

C+S. : b-d-pādas ; ... ratibhāvadhīrā | candrānanā lohita-

netrapadmā sampūjitā sālalitā varastrīḥ ॥ ( 愛情の強

く , 顔は月のごとく , 蓮花のごとく赤眼は赤い。

lalitā は尊敬される , 素晴らしい女性である。

pathamañjarī ( 3. 51 )

sakṭīkalāpaiḥ parihāsalīleḥ kvacit samasyām paripūrayanti |

patram māṣīm utkalamam vahanti māñjūktisilā pathamañjarī-

iyam ॥

pathamañjarī は , ある時には , 大笑いして樂しむ ,

多くの友達と , 詩文の欠けた語句 ( samasyā )

エ満天してゐる。彼女もインフ入れと美しい  
 へンエ持ち、上手に美しい言葉を使ふ。

gurjarī ( 3. 52 )

karnōtpalā lambimadhubratanām suśṛṇvati mañjuḷakūjitāni |

kāntāntikam guntumānaḥ pradepīe sū gurjarī veśakalāñcitāngī ||

gurjarī は耳に響いた蓮花に夢をわさる蜂の快い  
 音に耳を傾けてゐる。又方、恋人のこころを  
 行こうと、身体に美しい衣服を飾つてゐる。

CAS. : d-pāda ; nṛtyakalāñcitāngī

vibhāṣā ( 3 53 )

adhyāpayanti nijasīṅgyavṛndam saṅgītaśāstrāṇi vivecanābhiḥ |

mancharahāra latābhirāmā samā(?) samastapāṣākaśalā vibhāṣā ||

vibhāṣā は諸々の議論により、自分の弟子たち  
 に、音楽論書を教へてゐる。美しい蔓草の花  
 は胸飾を付け、すべての言葉に通じてゐる。

5. Hindola-rāga ɔ rāgiṇī

hindola ( 3. 54 )

līlāvīlāsena patat pṛthivyām-utthāpitas-tat kṣaṇam-āliṅṇdaiḥ |

ullāsayan gītarasair-vidagdhan hindolarāgaḥ kathito rasajñaiḥ ||

遊を戯れ、hindola は地面に倒れ、直すに、  
多くの女反逆に助け起こされ、諸々の歌の美  
しさ (rasa) により、女はそれを忘る。

mayūrikā ( 3. 55 )

mayūrakekāśraṇoḍhasantī mayūrikām vikṣya mudam vahanī |

mayūrakarṇābharanam dadhānā mayūrikā vā kathitā guṇajñaiḥ ||

mayūrikā は孔雀の鳴き声を聞いて楽しむ、孔雀  
を見て歎息している。耳に孔雀の耳飾りを  
つけている。

cas. i a-pāda; mayūrakekāśraṇoḍhasantī (孔雀の  
鳴き声を求める美しい女性)。c-pāda; mayūra-  
ṇdaiḥ samanṛtyamānā (孔雀の群と踊っている)。

dṛpikā ( 3. 56 )

pradoṣakale gṛhadehalīṣu pradīpahustāruna gātravastrā |

śmanta-sindūra-virājamānā suraktamālayā kila dipikā-iyam ||

aīpikā は、夜明けには、家の戸口で燈火と手に持  
ち、赤衣をまとひ、真赤な花輪と共に、髪  
分け目に紅を飾っている。

deśakārī ( 3. 57 )

sārdham saṅgībhīr-vijane vasantī vicitra-vakṣoṇakha-kṣatāni |

nirīkṣumānā maṇidarpaṇeṣu sā deśakārī kathitā guṇajñaiḥ ||

deśakārī は女友達と共に、人気の多い淋しい  
所にいる。胸に種々の佩飾をつけ、宝石作り  
の鏡をよこしている。

pāhidā ( 3. 58 )

bhartur-dadhānā caraṇāravindam niśedhayanti paradeśayānam |

prakāmadāmpatyasukhena mugdhā sā pāhidā saṅgīkathitā kavīndraiḥ ||

pāhidā は夫の蓮花のような足をとり、強い夫  
婦の幸福のため、他国への旅を止めようとする。

彼女が幼い妻である。

CAS. : c-pāda ; priyānurāgād-atikātarākapī (愛する  
人への思慕の念のため、眼は困惑しきって、)

varādī ( 3. 59 )

karṇe dadhānā surapuspayugmaṃ suvratavakṣojāmanoharāṅgī |  
smerānanā bhāvavilōkanetrā gaurāṅgayastih kathitā varādī ||

varādī は耳に二本の神樹の花を付けている。  
乳房はまろやかで、身体は美しい。顔は微笑  
し、眼は落ちつきがない。身体は細く、黄色  
い。

CAS. ( 3. 55 )

vicchedamānāśrukulakulākapī sū nīlacīrām dharanī lūthanti |  
priyānurāgam satatam smaranti kṛṣṇāṅgayuṣṭih kathitā varādī ||

varādī は語りを棄てて、眼に涙を流し、青衣を  
まとって、み悶えてゐる。常に、愛する人と思  
慕して、回想してゐる。細い身体は黒色であ  
る。

mārahaṭī ( 3. 60 )

utpannamātre prathamāparādhe mānaṃ punaḥ kṛttumanaś-cireṇa |

ṛtu svabhāvā niyatam rudantī sā mārakaṭī hathakeliruṣṭā ||

mārakaṭī は [ 愛人の ] 初めての不貞があった  
 ために、妬み、怒り、永い間、本心は素直な  
 には、常に泣いてゐる。彼女は烈しい愛の虚恨  
 と嫉妬)。

### 6. karnāṭa-rāga ṭ rāgiṇī

karnāṭa ( 3. 61 )

kṛpāṇapāṇiś-turagārūḍho mayūrakantḥopama kantḥakāntiḥ |

sphūracchito ṣṇīśadharaḥ prayāti karnāṭarāgo hariṇam vihanṭum ||

karnāṭa は手に剣を持ち、馬に乗ってゐる。彼  
 の美しい首は孔雀の首に似た [ 色 ] である。  
 純白の髻と具えてゐる。彼は鹿を狩るために  
 進んでゐる [ 鹿狩りに行くところである ] 。

nāṭī ( 3. 62 )

ciraṃ naṭanti śubharaiṅgamadhye sampṛoñcayanti nikhilam śramāmbhaḥ |

sugītatāleṣu kṛtāvadhānā nāṭī susāṭī paridhāmaśīlā ||

nāḥi ha, eiai u, mishi no butai de nori, shiwa ni  
 hite kotte iru. suzushii uta no hachi ni chuui shi  
 ru. yononaka wa ushi no iro ni tsuki, fuzou ni jushu shi  
 te iru.

CAS. : b-pāda; vicitraratnābharanā suveśā (種々の宝  
 石の飾りをつけて、美しい衣服をつけている。)

bhūpālikā ( 3. 63 )

svanāyakam puspalatādhirūḍham samunmukhī tam samudīkṣamāṇā |  
 prayācamānā kusumāni śaśvad bhūpālikā sā kathitā sudhībhikḥ ||  
 bhūpālikā は花咲く蔓草に坐してゐる夫を待ち、  
 彼の方を見つめてゐる。そして、繰り返して、  
 花にたずねてゐる。

CAS. ( 3. 59 )

sunāyake puspaganam vimucyam suveśamānā varakāminī sā |  
 advāsītā premapalāmadāksī bhūpālikā sā kathitā kavībhikḥ ||  
 立派な夫が捨てた花束を美しく身につけてい  
 る。彼女は素晴らしい妻の如く、〔夫と〕離れ、

眼は愛の涙で曇っている。

rāmakerī ( 3. 64 )

adhyāpayanti śukasārasārīḥ śrīrāma-iti suveśalakṣmīḥ |  
vāmastanārdham skhalitāṃśukaśrīḥ śrīramakeliḥ kathitā  
vidagdhaiḥ ||

rāmakeḷī は立派な野鳥やサリ-鳥に「聖なる  
ラ-マよ」を敬愛している。衣服は非常に美  
しく、左胸の半分は衣服を脱いでいる。

cas. ( 3. 60 )

śrīrāmarāma-iti satatam jāpanti pūjāratā puṣpacayaiḥ suvāsā |  
ānandarūpā karuṇāndradehā śrīrāmakeḷiḥ kathitā vidagdhaiḥ ||

rāmakeḷī は、常に、「聖なるラ-マよ、ラ-マ  
よ」を唱えながら、花束で、供養に専念して  
いる。美しい衣服をまとい、歓びし、身体は  
悲心には覆われている。

gadā ( 3. 65 )

viśeṣavaidagdhyaṇavati samastakalāvīlāsena vimohayanti |



brhannitambā paripuṣṭadehā gadā pralambastanabhārabhavyā ॥

gadā は特別な技芸的才能があり、すべての技芸を楽しみ、熱中している。腰は大きく、身体は太く、重く垂れ下り胸は美しい。

CAS. : c-pāda ; kṛśamadyabhāgā (細腰である。)

(9)

kāmoda-rāgiṇī ( 3. 66 )

bhartrā samam pathi susambhāṣyanti payovihāreṇa saroruhāni  
vicinvanti saurabhamodamānā kāmodarāgiṇy-uditā munīndraikḥ ॥

kāmoda-rāgiṇī は夫と共に歩く時、上手に話す。水遊びをせよ、蓮花を集め、[その]香りを楽しむのである。

CAS. : a-pāda ; priyena sāratham sarasi prakāmaḥ ( 恋  
人と共に、池の中で、夫と共に、 )

kalyāṇī ( 3. 67 )

vyādhitā natana parīśrameṇa balālīlūbhikḥ sadasi kṛtādarā  
natānām |

*kalyāṇī kalayati hastahāvahelam prasthānonmukharitakin̄kiṇī kalāpam* ॥

*kalyāṇī* は踊り疲れて、身体を震わせている。  
踊子の集りでは、諸々の若者の遊戯として、  
喝采をえる。彼女は手の表現や花草を、歩  
くと音を出す鈴飾り (*kin̄kiṇī*) を足につけてい  
る。

CAS. ( 3. 63 )

*sā tāṇḍave nṛtyaviśeṣasīlā lāvanyaśīlā vanitā fanuśrī* ।

*nūprakeyūra kin̄kiṇī gaṇā kalyāṇikā-iyam parivādayanti* ॥

*kalyāṇī* は *tāṇḍava* の踊り ( 烈しい踊り ) が特に  
優れている。身体は美しく、足環、腕輪、鈴  
飾りを多くつけている。

#### [IV] Rājāsāgara

本書は未刊行であり、写本の状態にある (   
 the Government Oriental Mss. Library of Madras, no. 13014, 13015 ) 。  
筆者は未見であるが、O. C. Ganguly に於ける <sup>(10)</sup>  
本書は Nārada と Daṭṭila の対話の形式であり、

観想図像は *rāga-dhyāna-vidhānam* → 章で説かれてい  
 るとのことである。彼は本書の *rāga* 組織とし  
 て、32 *rāga* ( 8 *rāga* + 24 *rāginī* ) のリストを紹  
 介し、<sup>(11)</sup> これを初期に属するものとしている。  
 更に、彼はこれを証明するためには *bhairava-rāga*  
 など 9 種の観想図像のテキストに英訳をつけて  
 紹介し、後世のものとの比較に供している。  
 しかし、この中には彼のリストにはない *toḍī* =  
*madhumāvatī* が入っている。

一方、M. R. Kavi は *Bharatakośa* に本書より 88 種  
 の観想図像を掲載している。本書の写本を見  
 ていないので確実なことは言えないが、前述  
 した *Saṅgītanārāyaṇa* 等後世の音楽論書が引く南  
 インド説の 32 *rāga* 組織は 8 *rāga* の 4 の名前を  
 掲げているに過ぎないが、<sup>(12)</sup> その名前は O. C. Ga-  
*ngolky* のリストと完全に一致している。しか  
 して、本書は多数の *rāga* と *rāginī* から 32 種を  
 取り出して、32 *rāga* 組織を構成したと憶測せ  
 ざるを得ない。

O. C. Gangolky のリストとは別に *Saṅgītamakaranda*

の 32 rāga 組織のリストが知られてゐるが、この両者は 8 rāga の名前は一致するが rāginī の名前は一致しない例が多く、同一 rāga に属する rāginī と一致する例は、わかるゝ程に少ない。

更に、Sāṅgītamakaranda の 10 種と C. C. Gangōly の 2 種は Bharatakośa の 88 種の観想図像に該当するものは見当らない。写本を調査せずには Bharatakośa 所載のリストに依る不備は免れないが、C. C. Gangōly のリストを基準として、Rāgasāgara の観想図像を紹介するに依る。

### 1. Bhairava-rāga = rāginī

bhairava (13)

śruti-svaramahodadhim sakalatālamānāmr̥tam

śivārcitamano haraṃ bhasitalepitāṅgaṃ sudā |

jaṭāmakuṭābhāsuram̐ śiśuśaśiprabhāmaulikam

kapālabharam̐ bhaje natānakausālam̐ bhairavam̐ ||

śruti (微分音) と svara (音階音) の大海である

り、すべての tāḍa (拍子) のように不死であり、  
 吉祥で、礼拝され、美しく、常に、身体  
 に灰を塗り、頭髮は冠のように結い、新月の  
 光に輝く冠をつけ、骨髄と掛り、舞踊に巧み  
 な bheirava に私は帰依します。

devakriyā

padmāsane smṛtītasundarāṅgī padmānā puspitaḡucchahārāṁī

patyus-sadā dhyāyati sannidhāne devakriyāṁ tām manasā smarāṁī ||

蓮花の座に坐り、美しい身体で、顔は蓮花の  
 よう。満開の花束の胸飾と掛り、常に夫の近  
 くで、瞑想している。私は彼女と心に想う。

kurañjarī

gaurāṅgī candravadanāṁ sakhīṁ prati subhāṣinīm |

caladāyatane trāṁ tām kurañjīm sam smarāmy-aham ||

身体は黄色く、顔は月のようで、女友達に上  
 手に語り、長くて、動く眼を持つ kurañjī に私は  
 想う。

## 2. Bhūpāla-rāga &amp; rāginī

(14)  
bhūpāla

siṃhāsanaṃ-adhivasitaṃ cāmaralasitaṃ kuraṅganayanābhyāṃ |

parivārabalasaṃmetāṃ manasi dhyāyāmi santataṃ bhūpālam ||

獅子座に坐り、松子の風を了樂しめ、鹿の  
さうな眼を具え、徳看と徳をこゝろに bhūpāla と、  
常に、私は心に念じる。

Vilāharī (15)

pīthasthitāyā nijaṅgikāyāḥ saṃpedeśe jalāpatradhāriṇīm |

citrāmbarāṃ nīnagatāṅgareṭhāṃ velāhurīm me manusā smarāmi ||

古座に坐りてゐる、自分の女主人の近くで、  
水瓶を持ち、美しい衣服をまひ、身体が最深  
き velāharī と私は心に想う。

malaharī

śaradambudaniśhadehāṃ suratarumūle nivāsitaṃ suḍḍhāṃ |

śivapūjāparatantrīm śaradaravindāṃ malaharīm dhyāye ||

身体は秋雲のさうに（白く）、神樹の下に坐

り、清淨で、Siva神の供養に専念してゐる、  
白蓮を手にした malaharī に私は念じます。

subhāṇḍī

śirograviniyastasvarṇakumbhām savye ca haste gajapuspā-  
mālām ।

dvitiyāhastena sakhīm grhītām sadā bhaje 'ham manasā

subhāṇḍīm ॥

頭上には金の壺をのこ、右手で夏花の花環を持  
つ、左手で又蓮の手にとってゐる subhāṇḍī に  
私は心から帰依します。

### 3. Śrī-rāga と rāgini

ŚRĪ (16)

vīrāsanam śimhamukhāgrahastam māṇikhyakoṭīvibhāsitam sadā ।

pārōadvayasthābjamukhīkadambam śrīragadevam bhajatām tanoh me ॥

帝座の姿勢をこり、獅子の顔に手をぶら、  
常に、幾万のルビーにより輝き、両脇に蓮花  
を、前に Kadamba を具えた śrī-rāga に私は全身を

心持はくすす。

mandālī

sevāntikā surabhidāma vi loka keśām sīmantinīkarasamarpitacāruviṇām  
kūrmāsane nivasitām surasākhimūle mandālikām manasi me satatam  
smarāmi ॥

mandālī は髪に、sevāntikā (花の名?) の芳香する花  
環を>け、侍女から美しいvīṇāを渡され、  
神樹の下で、亀座に坐してゐるmandālīを、常  
に、私は心に想う。

sāhulī

navaśakropalanīlam pravimalavasanam pravālamani bhūṣām ।  
śivapūjāparatantrīm-aviralamanasām ca sāhulīm dhyaṇe ॥

sāhulī は新しいインドウ石のようには青い[身体]  
で、淨らかな衣服をまとい、珊瑚を飾り、śiva  
神の供養に専念し、気持を集中してゐるsāhulī  
を私は想う。

bhallaṭī



hastāgranīhitavīṇām kusumasamukha bhūsitābhyudayām ।

harimaṇḍisamanīlāngī mama manasi vicintayāmi bhallātīm ॥

bhallātī は 手 に vīṇā を 持 ち , 花 束 を 飾 り , 吉 祥  
で , hari 石 の 子 に 身 体 は 青 い 。 私 は 心 に 彼  
女 を 想 じ 。

>

4. paṭamañjarī-rāga e rāginī

>

(17)

paṭamañjarī = paṭamañjarī

drākṣā ketāgāravivāsa bhāsuram mānikhyakeyurakirītaśobhitam ।

nārīyugenāśritapārśvayugmam dhyāyāmi rāgam paṭamañjarī sadā

drākṣā (蔓草) 森の棲家におんで輝き, 心は  
腕輪と冠をとり, 左右に侍女を侍らせ  
る paṭamañjarī を, 常に, 私を想じ。

deśī (18)

rucirāgaranivāsām (kusumamālāñcītakarām sugaurāṅgīm ।

rucirāambarāvṛtām tām dhyāyāmi yuvatīkarasaṅgīm ॥

美しい家は住み, 花輪を手にし, 身体は黄色  
く, 美しい衣服をまとひ, 娘の手をくさる deśī  
を私を想じ。

mukhārī

sakhīdraye hastayugam ca dattvā prasarpayanti madalalāsena |  
mandāramālāñcitanthabhāgām dhyāyet-mukhārī satatam  
mano me ||

愛 (mada) を求むて、女友達の〔両手〕に、両手と  
託しつゝ、〔両手に〕延ばし、首に珊瑚の首  
飾りをしては mukhārī と稱はるゝに想ふ。

lalitā (19)

viṇāpustakapāṇim mañjurakeśim priyena jalpayantim |  
arunāravindanayanīm lalitām saṅgītamātrikām dhyāye ||  
viṇā と本を手にし、髪麗しく、恋人と語り  
、眼は赤蓮花の如く、音楽の母たる lalitā  
と稱はるゝに想ふ。

5. Vasanta-rāga と rāgini

vasanta (20)

śṛṅgāravanasamīpe nartantam yuvatijana kadambaiś-ca |  
śukapikāśārīyuktam dhyāye me manasī santatavasantam ||

爰の情趣漂う森の近くで、昔看たごとく、野鳥、  
カウユウ、ヒアヒア鳥々天に、踊る永遠なる  
vasanta と私は心に想う。

rāmakriyā (21)

vīrāsane vasantīm tām śarakodaṇḍadhāriṇīm ।

jambūphalanībhaṁ devīm dhyāye rāmakriyām sadā ॥

勇猛坐の娑勞とてり、弓と天と持ち、ジャーン  
パー果(ほろりんこ)のような(身体の)色  
rāmakriyā 女神と、常に、私は想う。

valāli

vivādakusumabhūṣām samvṛtālim sadālim madhuramṛdula-  
vākhyais-toṣayantīm valantīm ।

valabhidupalanīlām bhārgave dhyānakolām mama manasi  
sadā tām cintaye śrīvarālim ॥

vivāda の花と飾り、群がり、飛ぶかゝり美しい  
蜂と、甘く優しい言葉と、満足させ、(身体  
は)インドラ石のようには青く、śiva と想って  
落ちつかぬ、聖なる valāli と、常に、私は心

に 想 じ。

gauḷī

śukapañjarāgrahastām vikaṭāsanaśāsthitām suvarṇāṅgīm |

makutaśānkṛtāśīrasam prakaṭītapuruṣām gauḷikām dhyāye ||

鸚鵡武鳥の籠を手にし、広い座に坐り、身体は黄金色に、頭には冠を飾り、女性に生れたら gauḷī と私は想じ。

6. Mālava-rāga e rāgini

(22)

mālava

sundarīyugakucāñcītaśastam kuṇḍalollasitacārukapolam |

gāḍhacumbitanītambinivaktram bhāvayāmi hr̥dī mālavarāgam ||

手は美しい女性の両の乳房に差し延べ、美しい頬に耳飾りが揺れ、腰帯かな女性に口をつける mālava と私は心に念じる。

(23)

guṇḍakriyā

śrīcandanodyānavilāśabhāsurām pitāmbarāśānkṛtāśānni-

tambinīm ।

vīṇāpravāḷāñcītavāmabhāgām gundākrīyām tām manasi smarāmi ॥  
 白檀の圈に遊ぶ、輝き、美しい豊の女腰に黄  
 衣を飾り、vīṇāの柄端を左側に当ててこのgu-  
 ndākrīyāを私に心に想う。

gurjarī (24).

śvetakavacāvṛtāṅgīm kandukahastām sakhījanena kṛelayantīm ।  
 śambaradimbhakalolām mānasadeśe ca gurjarīm hi bhaje ॥  
 身体に白の胴衣を付け、鞆を手にして、女友  
 達と遊ぶように、小鹿を焦らすgurjarīを私に、  
 心に祈る、帰依します。

pālī

cikura vijitamattālīm kāntiparābhūtaprāvṛḍadhara pālīm ।  
 suddhasvarālīm hṛdi pālīm dhyāyāmi mūrtisamavarṇakālīm ॥  
 髪は狂之の黒髪を凌ぐ(ばかり)黒く、美し  
 ると失念してprāvṛḍa(?)と耳朶を付け、正常な  
 音階音の友達であり、身体はkāli女神のよう  
 に「黒い」色であるpālīを私に想う。

## 7. Baṅgāla-rāga ḥ rāgiṇī

baṅgāla (25)

indranīlabhāsamānakākapakṣadhāriṇam candrasekharāṅgh-

riyugmapūjanam janārcitam ।

khadgakeṭadhāriṇam jayāsumārunam ca baṅgālarāga-  
śekharam hr̥di smarāmi santatam ॥

工 × 三 二 十の光に似て鳥の羽根に似て、śiva 神  
の両足に授養し、人々を礼拝し、剣と箱に持  
ち、〔身体は〕 jayāsumā (?) の 5 句に似て、rāga  
の主 baṅgāla に、常は、私は念じます。

kalyāṇī

kvanadvīṇā hastām kanakakusumāvṛtagalām haridrāmudrā-

ñkānanārucirajalajām dhṛtavarām ।

śukaśārīhaṁsīmukhasukharasantoṣitagalām sukalyānām

dhyaṅye mama manasi nityam kratumatim ॥

vīṇā に手は 1 と奏し、首は黄金花に巻き、身  
体は、う = んに、帛に似て、顔は月の 5 句に

美しく、素晴しく、喉はふしやべりな鸚鵡、  
 śārī, haṁsī 鳥に満足させ、力ある、美しい  
 kalyāṇā へ、常に、私に心に思う。

āhirī

kusumaśayane śāyan viṇāraso llāsītānanām sphatikacaṣuke  
 madhvādhārām nimīlitalocanām |

varayuvatihastāgrāñcad-bālacālanabhāsītām mama hr̥di  
 sadā dhyāye saubhāgyarūpadhanā-āhirīm ||

花を撒いた床に身をたわり、viṇāの味わい(情趣)に顔を輝かせ、水晶の杯に酒を盛り、眼を閉じ、侍女の方には手を延ばし、君におしやべりを話しこゝる、姿美しい āhirī へ、常に、私に心に思う。

sāverī

kusumārkaḍhamilkām candrakipīñchāvataṁsitaprkvō ḥām |  
 sāverīm dhyāyāmi prakṛitavīṇādhārām sitavasānām ||

髪に花を飾り、腕には孔雀の羽根をとり、viṇā へ手にして奏せ、白衣をまて) sāverī へ私に

想 ) 。

8. Nāṭa-rāga e rāgiṇī

nāṭa

ghanāśvarohiṇam kṛpāṇa khetadhāraṇam dhanuś-śrāgrahastam-

adbhutapratāpam-ugraśekharam |

yudhipracāriṇam kabandhasamvṛtam dayāparam sadā bhajāmi

nāṭarāgam candramauliśekharam ||

荒馬に乗り、劍と楯を持ち、腕に弓と矢をか  
かえ、驚くべき体力を具え、無双の強者で、  
戦場を駆けめぐり、月を冠と戴く nāṭa-rāga に、  
常に、私は帰依します。

ghanṭāravā

lambālakām dīrghakacām śubhāṅgīm vyatyastapādābja yuga-

pradarśinīm |

sakhīyugena pratibhāṣayantīm dhyaṃyāmi ghanṭāravīkāṃ ||

豊かに、長い髪を垂らし、身体は淨いかに、  
蓮花のさうな両足を組み、二人の女友達と語



→ 〇〇〇, 美し〇〇 gaṅṭāravā 〇私に想う。

kāmbhojī

karatalavāmagandabhāgāṃ caranatalena buvam sadā likhantīm

aviralam-avilāsaḡānalolām manasi dhyāyāmi santatam kāmbhojīm

手掌を左の頬に当て、足掌で地面に線を描き、  
断えず、遊むと歌に氣を〇か〇 kāmbhojī 〇、常  
に私に心に想う。

śaṅkarābharāṇa

vīṅāñcītakarām candanāgamūlanivāsiniṃ

śaṅkarābharāṇam dhyāye sarpāvṛtaśarīriṇam

手は vīṅā 〇持し、candanāga 樹の下に坐り、身  
体には蛇が巻き〇〇〇〇〇 śaṅkarābharāṇa 〇私  
に想う。

\* megharañjanī (i. bhairava 〇 rāḡiṇī, no. 2)

vidyullatāṅgīm vibudhendrapūjāsandhānahastārpitapuspamālām

nīlāambarādāmbarasannitambinīm bhajāmi nityam ghanamegharañjanīm

蔓草の〇〇〇に細い身体は曙光〔〇〇〇色で〕、

インドの神の伎養に備えるために、手に花環  
 と持し、青衣をまとひ、誇り高き善女 *ghanamegha-*  
*nanjani* に、常に私は帰依し得す。

以上、初期（14世紀後半 - 15世紀前半）に  
 属する4文獻の觀想圖像を紹介した。 *Saṅgītopa-*  
*śāstraśārodhāra* と *Saṅgītarāja* の觀想圖像は、内容  
 的には、全く変らず、書名は不明ながら、同  
 一の典籍に属することは確認することができた。  
 それにも拘わらず、觀想圖像の数が相違する  
 のは何故か。考えられることは、両者の *rāga*  
 組織の相違である。前者は多種多様な *rāga* か  
 ら42種を選り、 *rāgamālā* として編集してある  
 が、後者は、著者が知る限りの *rāga* についての  
 音楽的性質と、 *Śārṅgadeva* 以来の分類に従っ  
 て、網羅的に説明することは主眼を置き、必  
 ずしも *rāgamālā* を編む意図はみられない。  
 したがって、後者の觀想圖像は、むしろ、附  
 録といふ印象が強い。しかし前者には各 *rā-*  
*ga* の音楽的性質に関する説明がない故、後者

に「 $\therefore$ 」 $\therefore$  = 此に補之は" rāga の形式と内容を知  
るに可能とす。

Pañcamasārasamhitā と Rāgasāgara は著者と同一で、  
共に Nārada が関わり、 $\therefore$  である故、観想図像の性  
質が等しいことは当然と云える。

前者と比較すると、前者が静的な神像表  
現形式を採用しているのに対し、後者は極めて劇  
的であり、明らには戯曲論や詩論の知識を背  
景にした表現が多くみられる。Pañcamasārasamhitā  
は客観的に情景描写を行っているが、Rāgasāgara は  
dhyaī, cint, smṛ, bhā などの心象作用を表わす動詞  
を使用し、極めて、主観的であり、観想図像  
が rāga に宿る神格（人格の普遍的側面）を勧  
請（āvāhana）する機能と本質と同一であると  
暗示している。これは tantra 文脈における dhyaṇa  
に通じるものがある。<sup>(26)</sup>

以上を要するに、初期に属する観想図像の  
内容から云えば、音楽に近する観照の態度は  
二称であるが、 $\therefore$  とは指摘される。つまり前者  
の宗教的態度と後者の鑑賞的態度である。

しかし、前二者の宗教的態度に於て觀想圖像は後世に影響を及ぼす、後二者の娯樂的鑑賞態度が後世に継承され、觀想圖像もその手引き用として例がみられる。そこで、インド古典音樂が多様化する中期に属する文献に於て、rāgaの觀想圖像を紹介しなくてはならぬ。

## 第二章 中期文献における觀想圖像

### (I) Saṅgīta dāmodara

本書はすくなく三本の写本に基づいて、G. Śāstrī と G. Mukhopādhyāya に於て編集された校訂本が刊行されている<sup>(27)</sup>。その構成については刊本の解説に詳説されている他、参考文献に於いても概説されている<sup>(28)</sup>。本書は5章(stavaka)より構成され、音樂、舞蹈、演劇に關する多くの項目を扱っている。音樂的項目は章別にまとめられて説かれてはならず、他の音樂論書と

趣と異にしている。

- ・第1章は演劇の基本的項目である感情表現 (bhāva, anubhāva, vibhāva) が主題である。
  - ・第2章は感情表現と担う主役 (nāyaka, nāyikā), 女主人公 (nāyikā) の友人 (sakhi) の叙述の役には根源的音 (nāda) と声楽 (gīta) が説かれる。
  - ・第3章はすべて音楽的項目 (svara, gamaka, gāna, murchanā, varga, tāna, grāma, rāga, tāla) が説かれ、観想画像の記述が rāga の主題となっており。但し音楽的性質には言及していない。
  - ・第4章は演劇的項目が中心であるが、音楽的項目として śruti (微分音) が、この章の最初に説かれている。
  - ・第5章は音楽の実践面 (lakṣya) が中心であり、歌唱上の欠点、歌の四部分 (sthāyī, sañcārī, āharī, kapālinī) が説かれ、最後は Śringāra などの9種の情趣 (rasa) と説いている。
- 以上の構成は saṅgīta としての要件を網羅している。本書の全体を精読していないが、この

構成から判断する限り、本書は演劇 (nāṭya) の具体的な側面と美学的理論に基づいて論述した論書であって、音楽と舞踊はその構成要素として附言するところの意図がみられる。したがって、その観想図像は劇的であり、情景描写の表現が濃厚である。

なお、著書の Subhāṅkara について一言しておくべきで、彼は Bengal 出身の Mittila の王<sup>(29)</sup>とされ、また Assam との関係づけられている。王については Bengal 説が有力である。他方彼は Śricaitanya の信者で、熱心なヴェーシエス教徒 (vaiṣṇava) であるという指摘がある。これは実は本書の Bengal, Orissa, Assam 地方に流布し、vaiṣṇava の音楽論書に、しばしば引用され、重要視されていることを裏づけている。

本書は通常の rāga 組織を探っている。著書は当時行われていた 36 rāga 組織<sup>(30)</sup> (6 rāga + 30 rāgiṇī) と紹介しているにも拘わらず、異説として (apare) 36 種の rāga, rāgiṇī の名前を羅列する

説に従って、その観想図像を説いていき。以下、この順序によって、本書の観想図像を紹介する。

1. mālavā

Pañcamaśārasaṃhitā (3. 26) と同じ。

2. mallāra

śaikāvadātam palitam dadhānaḥ prakambakarnaḥ kumudenduvārṇaḥ |

kaupīnavāsāḥ khavihāracārī mallārarāgaḥ śuciśāntamūrtiḥ ||

mallāra は螺貝のように白い栗髪を具え、耳は垂れ、〔身体は〕睡蓮のような色である。腰衣をつけて、天界を遊心まわり、洋うかで、穏やかな姿である。

3. nāṭa

turaṅgama skandhanibaddharāgaḥ svaṇaprabhaḥ śuṇṭaśaṅgātrāḥ |

saṅgrāma bhūmau vicaran dhṛtāsir-nāṭo'yaṃ-uktah kila

kāśyapena ||

nāṭa は馬の脊に血をこけ、黄金のまじりて身体は血に染まり、劍を持て、戦場を駆け巡る。 (Matanga の "j) kāśyapa の説か)

4. karṇāṭa

krpāṇapānir-gajadantakhaṇḍam-ekam vahan dakṣiṇakarṇapūre |  
samotūyamānah suracāraṇaughaiḥ karṇāṭarāgath śikhikanṭhanīlah ||

karṇāṭa は手に劍を持て、一片の象牙を右耳にこけてゐる。多くの賢者や吟遊詩人が讃えてゐる。彼は孔雀の首のまじりて青色を有する。

5. mālavapañcama

vilāsini cāmara cālanena labdhānilo'lanīkr̥tahemapīṭhah |  
gandharvarāt kāñcanakantir-ādhyah śrīmān-ayam mālava-  
pañcamākhyah ||

侍女が扇ぐ柵子の風を受け、飾られた黄金の台座(に坐してゐる)。mālavapañcama は gandharva の王であり、黄金のまじりに美しく、吉祥を有する。



## 6. todī

unnidrapaṅkeruhacārapetrā kurāṅgeśāvam kalamānikurena |

sambhāvayanti vipinopakāṅthe todī-iyam-indīvaradāmarāmyā ||

todī は、眼は満開の蓮花のさしに美しく、米の若芽で、子鹿を誘ってゐる。森の近くで。彼女が美しい青蓮の花輪をつけてゐる。

## 7. varādī

vinodayanti dayitāṅ-ca gaurī sukaṅkaṅhā cāmaracālanena |

karṇe dadhānā surapuṣpagucchaṃ varāṅgā-iyam varādī ||

varādī は（身体は）黄色で、美しい腕環をつけて、松子と振って、恋人と打ってゐる。耳には神樹の花房をつけて、素晴らしい女性である。

## 8. gāndhāra

jatāṃ dadhānaḥ kṛtabhūtibhūṣaṇaḥ kāṣāyavāsās-tanudeha-

yaṣṭiḥ |

sayogapattāḥ kṛtanetramudro gāndhārarāgaḥ kaṭitas-tapasvī ||

gāndhāra は束髪を結い、灰を飾りとし（灰を身体に塗り）、褐色（袈裟色）の衣服をつけてゐる。

ユ - の の 尺 の の 布 (?) ( に 坐 ) ] , netramudra ( 瞑目 ? ) と して , 身体 の 細い 吾行者 と なる 。

9. hindola

nitambini mandatarāṅgitāsu dolāsu khelāsukham-ādadhānaḥ |

kharvaḥ kapotadyutikarpureśrīr-hindolarāgaḥ kathito munīndrah ||

美しい 女 の 群 の 尺 動 の す び う ん 二 の 中 で , 動き と 楽しん で い る 。 身体 は 縮 = まり , 鳩 の さ い な 斑 色 で , 美しい 。

10 kakubha (kakubhā)

pītaṃ vasānā vasanaṃ sukeśī vane rudantī pikanādadānā |

vilolayanti kakubho' tibhītā mūrtiḥ pradīṣṭā kakubhas-tathā-iyam ||

kakubha は 黄衣 と して い , 髪 は 美しい 。 森 の 中 で , カッコウ の 鳴き 声 に 心 に 痛め , ( 可 尺 ) と して 見まわし , 恐れおののいて いる 。

11. kodava

krōḍe dadhānaḥ sutaṇaṃ tadāsyē patrāvalīm cāruvinirmimānaḥ |

vidyādheraḥ servakalābhilāṣī sa kodavā khyah kathito 'yam-anyaḥ ||

kodava は美しい女を膝に乗せ、彼女の顔に葉  
〔模様の〕線と、美しく、描いてゐる。彼は  
知識があり、すべての技芸を好む。〔他説〕

## 12. dhanāsī

durvādalaśyāmatanur-manojñā kāntam likhentī phalake  
vidagdha |

balā galal locanavāri bindunisyaṇḍadhautastanadhṛg dhanāsī ||

dhanāsī は durvā 草の花弁のまじりに、身体は緑青  
色で、美しく、画板に恋人を描いてゐる。賢  
い娘は流れ落ちる涙の帯で胸を洗われてゐる。

## 13. mālasikā

nīlāravindasya dalāni balā vidhārayanti tanudehayaṣṭikā |

mālūravṛkṣasya tale niṣaṅṅā śoṇā mṛdur-mālasikā pradīṣṭā ||

mālasikā は青蓮の花弁を帯でゐる。身体は細  
く、mālūra 樹の下に生つてゐる。身体は赤く、  
穏やかならぬ。

## 14. gaurī

śuci haricandanapañkajai ratisahitam manmatham purah kṛtvā |

gaurī tanur-vratavidhinā gaurī paripujayanti- eṣā ||

gaurī は淨らかな黄色白檀の塗香を以て、Rati  
女神と共にいる Manmatha 神と礼拝して、制戒の  
作法通りには、保養してゐる。彼女の身体は黄  
色である。

15. rādī

ārāma madhyagātā kumārikā śāradendumukhalakṣmīḥ |

rādī dādimabijam dadati kirānane gaurī ||

rādī は秋月のまじな美しき顔の娘で、庭園に  
行き、鸚鵡はさくらの種を食してゐる。其の身  
体は黄色である。

16. kāmōda

akṣumālāṃ kare dhṛtvā vasāṅga-tāravīm tvacam |

jagan jahnuṣṭā tīre kāmōdah perikīrtitah ||

kāmōda は念珠を手にし、tāravī 樹の反夜を以  
て、ガンジス河の岸辺に誦唱してゐる。

## 17. mādhavādi

viapaṣṭa kṛṣṇājinamadhya vartī kāntaḥ pavitraḥ sthaviro 'tisuddhaḥ |

kurvan kathām tumburunāradābhyām śrīmādhavādiḥ kathito munīndraiḥ ||

淨いかなる鹿皮に坐り、美しく、神聖で、精神  
堅固で、極めて清浄である、聖なる mādhavādi は  
Tumburu と Nārada の二人を話してゐる。

## 18. rājñī

udāranepathyamanojñāmūrtir- gaurocanācāruśarīrayastīḥ |

vidhārayanti madhurāṅgahārān rājñī-ijam aṅgikṛtālāsya lakṣmīḥ ||

美しい身体に最良の飾りをつけて、細い身体に  
gaurocana (黄色の塗膏) を塗り、穏やかな aṅga-  
hāra の舞勢をとって、rājñī は Lāsya の踊りをして  
舞ってゐる。

## 19. vasanta

śikhaṇḍivarhoccaya baddha cūḍaḥ puṣpān pikam cūtalatānkureṇa |

bhraman mudā vāmam-anaṅgamūrtir- mataṅgamattaḥ sa vasantaḥ ||

vasanta は髮髻に多くの孔雀の羽根をつけて、花  
を持って、マニゴーの若芽でカッコーを鳴らして

ていふ。飲長し、姿は愛の神のまじりに美しく、  
情欲にかうれた象のまじり。

20. *deśāga* (*deśākhyā*)

*āspṛṣṭānāvīṣkṛtā lomaharṣo niguddhaviśālabāhulī* |

*prāṃśukḥ praçaṇḍadyutihemagauro deśāgarāgaḥ sa hi mallarājaḥ* ||

*deśāga* は腕をたき、逆毛立ち、太い腕はレ  
スリシカのためには組み合っている。背は高く、  
狂猛しく、(身体は)黄金のまじりを黄色でら  
す。彼は、まじりに、レスラ一の王である。

21. *baṅgāla*

*manoḥṛāmauñjīguṇa gumphitāṅgas-tvacam dadhāna dharanīruhasya* |

*caṇḍaḥ kumāraḥ kamaniyamūrtir-baṅgālarāgaḥ śuciśāmagānaḥ* ||

*baṅgāla* は美しい *mauñjī* の帯を身体に結ぶ、*dha-*  
*ranīruha* の木皮をまじっている。狂猛しい童子  
で、姿は愛らしい。彼は清淨なサマシンの歌  
にうたふ。

22. *paṭhaman̄jarī*

vīyoginī kāntavitīrṇapuṣpām srajaṃ vahanti vapusātimugdhā |

advāsaya mānā priyayā ca sakhyā vicchūsarāṅgī pathamañjarī-iyam ||

pathamañjarī は「恋人と」別れて、彼に残した花環を持ってゐる。美しい幼い女性で、親しい女友達に元氣づけられてゐる。身体は青白い。

### 23. velāvalī

sainketadīkṣām dayitasya dattvā vitanvanti maṇḍanam-ṅgayasthē |

muhurī smaranti smaram-īṣṭādevam velāvalī nīlavarojakāntih ||

velāvalī は恋人に密会の場を準備して、細い身体に飾りをつけてかう、1は1は守護神を念じてゐる。彼女は青蓮のまじりに美しい。

### 24. gonḍakirī

ratotsukā kāntapathapratīkṣām-ālocayanti mṛdupuṣpatalpe |

itas-tataḥ preṣītadrṣṭidūti śyāmāṅgikā gonḍakirī pradīptā ||

gonḍakirī は愛を希って、柔らかな花を散らした寝床で、恋人の「来り」道を見つめつつ、あふふ、落すかぬ、恋の件を女のみ

を眼指しにしている。彼女（の身体は）緑青色である。

## 25. dakṣiṇa-gujjarī

śyāmā sukeśī malayadrumanām mṛdūllesatpallavatalpayātā |  
śruteḥ svarāṇām dadhāti vibhāgam tantrī mukham dakṣiṇagujjarī-  
iyam ||

dakṣiṇa-gujjarī は（身体は）緑青色で、髪は美しく、白檀の柔らかな若葉（を敷いた）寢床にいて、śruti（微分音）から svara（音階音）を調律して、弦に顔に向けている。

## 26. bhāṣā

svacchandasaṃmānītapuṣpacāpaḥ priyādharasvādasukhena  
hr̥ṣṭaḥ |  
paryānikamadhyaṅga (? madhye) kṛtopaveśe bhāṣaḥ sa nidrot-  
thitahemagaṇaḥ ||

bhāṣā は自分が選んだお気に入りの花のう（を）持ち、恋人との學問の口づけに満足し、寢床に生きている。黄金のよう（な）黄色の身体は



眠りから起きるといふことである。

27. *ṭaṅkuśā*

*gandharvarājatanayā viracitakuśumeṣuveśāramanīyā |*

*candanaśubhrasārīrā gacchantī ṭaṅkuśā dayitam ||*

*ṭaṅkuśā* は *gandharva* の五女である。愛の神 (*kuśumeṣu*) のように美しいの衣服をまとひ、身体は白檀のようには白く、彼女が恋人の心をとらへ問ふといふ。

28. *khambhāvati*

*vāso vasānā śaradabhrasubhram viriñci vedīparikarmadaksā |*

*kundāvadātā caturānanasya khambhāvati lebdhasamṛddhasvā ||*

*khambhāvati* は秋雲のようには白く、衣服をまとひ、*Brahmā* 神の祭壇を注意して飾る、といふ。*kunda* のようには〔身体は〕白く、*Brahmā* 神への奉仕と、完全には、いふ。

29. *madhukirī*

*ātāmrāmaulinetrā campakagaurī kṛtasuratārambhā |*

mukhamadhu labdhān bhramarān madhukirikā vārayaty-eṣā ||

madhukarikā は素晴らしい眼はやや赤く、〔身体は〕  
campaka のように黄色く、愛の戯れを始め  
る。蜜のような口を求めず蜂を松のうけ  
る。

### 30. śālaka

vīṇāvīno da pratipannapāṇīr-grnvan kathām nāradasamprayo gāt |

śyāmo yuvā viprakulaprasūtaḥ sa śālako nāṭyamuni prāṇī tad |

śālaka は Nara の技法に熟して、vīṇā と手には  
執って、物語を弾いてゐる。〔身体は〕緑青色  
で、若々しく、バラエシの生れである。〔Bha-  
rata 説〕

### 31. devakirī

bhramanti nandane śyāmā puṣpapracaya tatparā |

khyātā devakirī hy-eṣā karārpitasakṭikarā ||

devakirī は Nandana 園 (イコノウチの園) と彷徨  
して、花を摘むのは夢中である。彼女は女  
友達の手を握っている。

## 32. rāmakirī

avarṇaprabhā bhāsvrabhūṣāṇā ca nīlam niclam vapuṣā vahanātī |

kānte padopāntam-adhīśrite'pi mānonnatā rāmakirī pragītā ||

rāmakirī は [ 身体は ] 黄金のふくなく色] の、  
輝く飾りをつけて、青色の胴衣を身体につけて  
いる。彼女は恋人の足元に膝まついた時こそ  
え、高慢である(機嫌を直さな)。)

## 33. himakirī

kaṅkelipallavam pāṇau vibhrāṇā sverṇakaṅkaṇā |

cumbantī dayitam rāgād gaurī himakirī śrutā ||

himakirī は 手には kaṅkeli 樹の枝をかざし、黄金の  
腕輪をつけている。愛欲のため、恋人に口づ  
けてしている。(身体は] 黄色である。

## 34. lalita

praphullasaptacchadamālyadhārī yuvātigauro'lasalocanaśrīḥ |

vinīkṣaran vāsagrāhāt prabhāte vilāsiveśo lalitah pradīstah ||

lalita は満開の saptacchada の花輪をつけて、若々

く、(身体は]黄色である。美しい眼は元  
来なく、夜明けには、美しい衣服を付けて、家  
を出てゆく。

## 35. bhairavī

Pañcamasārasaṃhitā (3.32) と同じ。

d-pād; gaurī kṛśāṅgī kila bhairavīyam (実は、bhairavī  
は身体は細く、黄色である)。

## 36. moṭakirī

avacitya kusumarāsim racayanti puṣpadāmakamanīyam |

nandanavanopakaṅthe suratāmanā moṭakirī syāt ||

moṭakirī は、Nandana の森の近くで、多くの花  
を集めて、愛する人の花輪を編んでいる。彼女は  
は愛を求めてくる。

## (II) Koemakarṇa - Rāgamālā

本書は看作年代が明らかなで、Śaka 暦 1492 (1570 A.D.) に著された。それ、その工口、  
(31)

13 iti śrīmahēśapāṭhakātmakaśrīkṣemakarnapāṭhajā (?yā)  
 śavabhūpatiśukhārthaviracitā rāgamālā samāptāḥ < 5 > ,  
 Mahēśapāṭha の息子 と する Kṣemakarnapāṭha の Yātava  
 王 の 幸福 の ため に 本書 を 著 した こと が 知ら せ  
 れ る 。 V. N. Bhatkhande に よ る と , 本書 は 1911 に 刊  
 行 さ れ て い る よ う で あ る が , G. O. S. に 入 れ る べ  
 く 刊 行 の 予 告 が 二 度 に わ た っ て 出 され ば 一 度  
 拘 わ ら ず , 現 在 の と 同 じ 実 現 一 本 だ け だ 。 し  
 た が 一 度 , 本書 の 観 想 図 像 は 写 本 に 基 づ いて  
 紹 介 せ ら れ っ て いる 。

本書 の 写 本 は The India Office Library (London) と The  
 Bodleian Library (Oxford) , The Library of Mahārāja (Bika-  
 ner) , The Library of the Asiatic Society of Bengal (Calcutta)  
 所 蔵 の 4 本 が 知 ら れ て いる 。 二 人 の 手 入 手 入 手  
 の 写 本 を 入 手 し て いる の で , 二 本 一 本 一 本  
 1 又 の 写 本 に よ っ て いる , 写 本 と London の 写 本  
 と し , Oxford の 2 種 の 写 本 を 参 考 に した 。 Ox-  
 ford 写 本 は 2 種 又 は 書 写 年 紀 が 年 々 , 僅 1-10  
 の 意 圖 的 に 有 略 さ れ て いる が , London 写 本 の  
 脱 落 1 本 である 偈 (11c-d - 12a ; 81c-d - 82a) と

これにより、て補充することができる。

本書は115偈より構成されている。以下偈数により、その内容を示す。

- 1-2 偈は Rāgamālā 著作の動機と rāgamālā の起源について述べている。
- 3-6 偈は 6 rāga の名称、特に śrīrāga には妻 (vadhū) と息子 (ātmaja) の各々一人ずつをそれぞれに説いている。
- 11 偈は Gaṇeśa と Sarasvatī に対する恭敬文。
- 12-91 偈は観想図像。
- 98-109 偈は rāga の疑似音。
- 110-115 偈は結語

本書の rāga 組織は 6 rāga (bhairava, mālavakauśikā, hindola, dīpaka, śrī, meṅka) に対して、基本的には、5人の妻と8人の息子と並べている。この組織の起源は明らかではないが、O.C. Ganguly によれば、rāga に妻と息子と並べているのは北インドの rāga 組織である。これは主要な rāga と父 (janaka) とし、派生 rāga と子供 (janya)

とする南インドの rāga 組織と基本的には同じ

(32)  
であるが、北インド成文とちがよい。

以下、rāga のブル - プに從って、本書の観  
想圖像を紹介するが、本書は写本であるので、  
その全貌を紹介する方が適当であると考えら  
れ、紙葉の最初から始めることにする。

[fol. 1-b] || śrīganeśāya namaḥ ||

manajadanujadevair - vaditam vāmadevam; dhṛtaśaśadho -  
ramaḥ kṛemakarnaḥ praṇamya |

apahatapuradaityam sundarām rāgamālām racayati  
sukhasidhayaḥ jākṛāṭṭarabhūpater - saḥ || 1 || (33)

聖 (ganeś) に帰命す

人間と悪魔と神を敬礼し、月と飾り、冠と戴  
き、都の魔神を除く。F. Vāmadeva (śiva 神)  
に kṛemakarna は敬礼して、jākṛāṭṭava 王の幸  
福のために、彼は美し。Rāgamālā と看す可。

kailāśasthitaśambhunā nigaditā rāgaḥ purā pratyumām -  
ānandena tu sarvalokapatinā ye te nibaddhā mayā |

kāntābhiḥ samajarttabhis-tu tanajaiḥ sārddham vicāryya  
 kramāt-teṣāṃ sthāvara janmo dbhavaravair-uktāni janmāṅ-  
 api ॥ 2 ॥

かゝる、可なりこの世界の主であり、Kailāsa 山  
 に住む Śambhu (Śiva 神) が、喜 = んで、Umā  
 妃に語り、rāga と私に編んだ。真実 = 満ちた  
 妻 = 5、息子 = 5 と共に、順次、動・不動の  
 ものから生れた喜 = 5 と、rāga の起源を述  
 べられた。

### 6 種の rāga

rāgādau bhairavākhyas-tadanunigadito mālakauśi ker-du-  
 itīyo hindolo dīpakaḥ śrī'pi badhair-ambudākhyah kramāt  
 ekakadyāṣṭaputrāḥ sulalitānayaḥ pañcabhāryā prasi-  
 ddhāḥ sve sve kāle sad-ete nijakulasahitāḥ sampadāni  
 ve diśantu ॥ 3 ॥

最初の rāga は bhairava, 次いで「わたる」は第  
 2 の mālakauśi である。順次、hindola, dīpaka, śrī,  
 ambuda (megha) である、と賢者 = 5 は (「j」)。  
 各々の 5 息子は非常に快活な息子である。5



人の妻が定まるといふ。各々の時間には自分の  
家族と共にいふ。これらのは [rāga] は、われ  
われは、幸福を与えたまへ。

特 = śrī-rāga の妻と息子にまつて

śrī-rāgasya vadhūr-vakṣye śaḍ-aham nava ca-ātmanāḥ |  
viśeṣāt sarvarāgebhyah (fol. 2-a) pūrvagrānthānusārataḥ || 4 ||

すなわち rāga と違つて、śrī-rāga は 6 妻と 9  
息子がいる、と知らはいう。往右の文献に従つ  
て。

rāga の 1) 2) (rāgasūcana) (34)

baṅgālī kīla bhairavī nigaditā velāvalī puṅyaki<sup>snehā</sup> pañca kimāṅsu-  
bimbacandanā rāgū mahāsūribhikṣu |

baṅgālo 'py-atha pañcamah khalu madhur-harṣas-caturthas-tato  
deśākho kalito 'stābhairavasūtā velāvaro mādhaveḥ || 5 ||

gundāgiriḥ prathama-iti pañca sadṛśo gāndhāriṇī śrīhathī āndhrālī  
tv-atha malakauśīkavadhūr-āhur-dhanaśrī budhāḥ |

mārur-nāma punar-dvitiyatanayo mevādako varabalo miṣṭāṅgo

'py-atha candra-kāṅśaya līdananda dvaya (?) khokharah || 6 ||

tairāṅgī parato 'pi devagirikā vāsantikā sindhūri tv-ābhiri punar-eva  
pancaramañāḥ samtaḥ purā samjaguḥ |

aṣṭau maṅgalacandrabimbatanayo śubhrāṅgānandako hindol[fol. 2-b] śasya  
vibhāsavarddhanavasantākyo vinodaḥ sutān || 7 ||

kāmodī paṭamañjarī-iti parateṣ-ṭodī tato gurjjarī kācheli varabuddha-  
yo 'pi manuḥ gāyanti pañcāṅgānāḥ |

apy- aṣṭau kamalādvayo 'tha kusumo rāmaḥ sutān-kuntalaḥ kāli-  
ṅgo lāhulo 'pi campaka ito hemālakō dīpake || 8 ||

vairāṭī girijapriyeṇa kathitaḥ karṇāṭī sāverike gaurī rāmagiri  
śud-eva vanitā gaurī parā saindhavi |

putrāḥ saindhava mālavādvapahato (?) gaudas-ca gāmbhīrakaḥ

śrīrāge guṇasāgaro 'tha vigadaḥ kalyāṇakumbhāṅgadāḥ || 9 ||

mallārāpy-etha śorathī ca suhavi āsāvari kavīkaṇṭī kāntāḥ

pañcapurā purāṇavibudhā etā śasāṃśus-tathā |

kānara

putrās-tasya na [fol. 3-a] ṭo 'tha<sup>v</sup>itas śārāṅgekedarau guṇḍo guṇḍa-

mallārako jalabhṛto jālandharaḥ śaṅkaraḥ || 10 || iti rāgasūcanam ||

rāge 1. bhairava

妻 baṅgālī , bhairavī , velāveli , puṅyākī , snehā .

見子 baṅgāla , pañcama , madhu , harṣa , deśākha ,

lalita , velāvare , mādhave , (5)

- rāga 2. mālakauśika  
 妻 guṇḍagiri, gāndhāriṇī, śrihathī, āndhāli, dhanaśrī,  
 息子 māru, mevāḍaka, varabala, miṣṭāṅga, candrāṃśa,  
 ali, nanda, khokhara. (6)
- rāga 3. hindola  
 妻 tailaṅgi, devagirikā, vasantikā, sindhūrī, ābhiri,  
 息子 maṅgala, candrabimba, śubhrāṅga, ānandaka, vibhāsa,  
 varddhana, vasanta, vinoda. (7)
- rāga 4. dīpaka  
 妻 kāmodī, paṣamañjarī, ṭodī, gurjjarī, kāchelī.  
 息子 kamala, kusuma, rāma, kuntala, kāliṅga,  
 lāhula, campaka, hemālaka. (8)
- rāga 5. śrīrāga  
 妻 vairāṭī, kannāṭī, sāverikā, gaurī, rāmagiri,  
 saindhavī.  
 息子 saindhava, mālava, gaṇḍa, gambhīraka, guṇasāgara,  
 viḡaḍa, kalyāṇa, kumbha, aṅgaḍa. (9)
- rāga 6. megha  
 妻 mallārā, śrathī, suhavi, āsāvari, kaṇikani,  
 息子 nata, kānara, sūraiṅga, kedāra, guṇḍa, gu-

ṇḍamallāraka, jālandhara, śaikara. (10)

観想図像 (rāgadhyaṇa)

Ganeśa に 対 す る 恭 敬 <sup>(35)</sup>

atha rāgasvarūpavarṇanam || tatrāḍau geneśavarṇanam ||

vaikunṭhe brahmaphargāmarasurapatibhiḥ pūjitām pādapadmam

gasya-āḍau daityavargān praharati paraśukḥ sentatam tivradhāraḥ |

vande'ham tam geneśam viśadapatādharaṁ haṁṣagām sarvasuklā-

m viṇākarāgnām karadhṛtakamalām śāradām karmasiddhayaibḥ || 11 ||

こゝから、rāga の 自 相 の 説 明。最 初 に Ganeśa の 説 明。

vaikunṭha と して 天 界 に、Brahmā, śiva, Indra 神 の 足 の 蓮 花 の よう に 足 に 敬 礼 し、彼 の 怒 り ( 一 斧 (paraśu = geneśa) を、常 に、魔 の 軍 隊 を 打 ち 破 る、そ の Ganeśa と 白 衣 と 共 に、hema 鳥 に 飛 り、全 身 が 白 色 と、手 に viṇā と 持 ち、蓮 花 を 手 に し た Sarasvatī (śāradā) に 対 し、工 事 の 完 成 の 為 に、私 は 敬 礼 し ます。

1. bhairava の 妻 と 息 子

bhairava

ganapati sarasvatyai śubhrāṅga śubhravāsāḥ śirasi śaśidharaḥ  
 śṛṅgavādyaś-ca hārī śambhor-vaktrābja jāto dhṛtagala bhai-  
 ravo raktanetraḥ ।

datte sūlam kapālam jalajamaṇimaye kuṇḍale karṇayugme tārām  
 jūṭajātāṅgām śaradī suraganair-gīyate prāter-esaḥ ॥ 12 ॥

(36)

bhairava nāgaḥ ॥

bhairava は身衣は白色の、白衣をまとひ、頭には  
 月をとり、角笛を持ち、śiva 神の蓮花のよう  
 な口から生じた（首飾り）を首にかけ、眼は  
 赤い。三叉鉞、髑髏を持ち、両耳に蓮花と宝  
 石の耳飾りをとり、第三の目を具え、束髪に  
 頭を結わく。彼は Gaṇapati と Sarasvatī のため  
 に、秋の夜明けには、神々により歌われる。

baṅgālī

baṅgāly-ābhāti yasyās-tv-alikapāṭalake śitarasmir-nitāntam

bhartruh santapti hantā malaya jaracitāḥ sarvadehapralepāḥ ।

gaurāṅgā śukravāsas-tarunatanumadā (fol. 3-b) lasyamatte bha-

gavatya yasmākam sā sudehā yauvanahṛdayānandakarṭtā kaṭā-  
kṣāḥ || 13 || baṅgālī rāgiṇī ||

baṅgālī は彼女の額覆に冷光が、盛んに、輝き、  
夫の熱を除く。白檀と身体のすべこに塗って  
いる。身体は白色で、白衣とまとい、若々し  
い身体は愛欲のために疲れきり、ぐっぴりと  
している。汝はさう、女神の美しい身体と流  
し眼は若者の心に歡喜を与える。

bhairavī

svarṇābhā somavaktrā himakaravulam vastram-eṣā dadhanti ka-  
nthe rainaikakāram dviradavaraśrojatamuktā phalānām |  
sindūram bhālamadhye prahasitavadanā hastayoḥ kaṅkane dve  
urtyanti gīyamānām caranakamalar-āpuram bhairavī-īṭṭham ||

(37)

14 || bhairavī rāgiṇī ||

bhairavī は(身体は)黄金のような色で、顔は  
月のよう。月光のようには白い衣服とまとう。  
首に、立派な象の頭から生じた真珠の一条の  
首飾りと宝石と飾り、額に紅をつけ、顔は微  
笑いている。両手は腕輪をつけ、蓮花のよう

各両足に足環を掛け、歌われてゐる間、踊つてゐる。

velāvalī (38)

netre kajjalarañjite 'tilakalite nāsāgramuktāphalam bhāle bhāti  
 sukūnkumasya tilakam gaurāṅgacitrāambarā |  
 venī campakaketakī sukusmaikḥ sārddham kare vīṭikā nānāsu-  
 rabhagandhitākilavapur-velāvalī yosītāḥ || 15 || velāvalī rāgiṇī ||  
 velāvalī は非常に美しい西眼を墨膏で染め、鼻には真珠を掛け、額には美しい kankuma の額飾を輝く。弁髪は、美しい花と共に、campaka = ketakī を掛け、手にははきんまを持ち、全身に檀木の香を薫じてゐる。

punṣyaktī (39)

stana tatakṛtarāgā (fol. 4-a) kankumaiḥ pītavastrevividhaku-  
 sumagātām kañcukīm-ādadhāti |  
 bhayacakitamrgākṣī sarvaśrīṅgārayuktā punṣyaktī punṣya-  
 dātrī || 16 || punṣyā rāgiṇī ||

punṣyaktī は kankuma の胸を赤く染め、黄衣をまと

「、種々の花と胸衣につけてゐる。眼は恐れおののく鹿のよう。全身に恋情と仄々、腹は鹿王と凌ぐほど「細い」。彼女は福德と与える。

snehā (40)

vimalakanakakāntiḥ svarnatāṭaikakarnā jalajakumudavikāśā-  
nandaśītā suvaktrā ।

padakaragalamauḡyābhāsanā ratnehemmā suraganaramauḡyā  
snehakī pītavastrā ॥17॥ snehā rāgiṇī ॥

snehā は琥珀の黄金のよう、美しく、黄金の tā-  
taiika (大型の耳飾り) と耳につけ、美しい顔  
は睡蓮の向花と喜ぶ月のよう。足、手、首、  
頭に宝石や黄金と飾り、黄衣と帯をつけて、  
神々により愛される。

(41)  
baṅgāla (以下息子)

antaravāsī japatī vimalām-akṣamālakām-amoghām dhatte sū-  
tram parhātī nitarām vedam-atyantavidvān ।

śuklam vestram kanekasadrśaḥ pānapātram kārāgre baṅgālo



'yam vadati vacanam nṛtyagītāvasaktaḥ || 18 || baṅgāla rāgaḥ ||  
 baṅgāla は 瞑想 し、念誦 し、常に、veda を 読唱  
 し、利益 を 与へる (amogha) 淨土 の 念珠 を 持し、  
 非常に、賢い。白衣 を 着て、(身体は) 黄  
 金 の 土 金 (色) に あり、飲水器 を 手に し、  
 話 を する。彼は 舞蹈 と 歌 に 熱中 する。

pañcama

śyāmaṃ tāmbūlahestam karavat (fol. 4-6) kumudam venuvādyam  
 satālam candrārka-asya bhāle pikamṛduvacanam - akṣapeñka-  
 ih praliptam |

devendrādīśayuktam śirasi sumukutaṃ pitavastram prabhāte  
 gāyanti svargaloke danajasurāgaṇāḥ pañcamam ca-atra santah

|| 19 || pañcama rāgaḥ ||

pañcama は (身体は) 緑青色で、手に きんぎょ、蓮  
 花、tāla (小型のシンバル) と 共に 笛 を 持し、  
 顔に 月 と 太陽 を (飾り)、カウコーのよう  
 の 優い口調 である。 (眼に) 眼膏 を 塗る  
 事。Indra と śiva 神 と 伴ふ、頭に 冠 を 戴き、  
 黄衣 を 着る。天界 に おいて、神々の pañcama

と歌の讃えこゝる。

(43)  
madhu

atyāntarūpī madhurasvarajñō guṇānvitah sambhṛtasarva vidyāḥ |  
raktāmbarāveṣṭitagaauradehaḥ khyāto madhur-lokahitāya sad-  
bhīḥ || 20 || madhurāgaḥ ||

madhu は非常に美しく、世美な音 (svara) に精通  
してゐて、美德を具えてゐる。所々仰る知識  
を具へ、赤衣を穿てゐ、身体は黄色に染る、  
と賢者にしては、世間 (人々) の利益のために、  
語つてゐる。

(44)  
harṣa

ānandavaktraḥ karatālapadmo nilambaro mauktikakāṇṭhemālāḥ |  
vegād-āsav-eti ca vakti vākyaṁ gaurāś-ca kila bālerūpaḥ ||  
21 || harṣa rāgaḥ ||

harṣa は顔は喜ぶに似てゐ、手掌に蓮花を持し、  
青衣を穿てゐ、真珠の首飾りを付けてゐる。  
彼は、治癒に、動き、語り、身体は若々しく、  
黄色に染る。

deśākha

prthulataraśarīro mallavidyām sudekṣiṇaḥ paramabalavarīṣṭo

bāhudanḍapracanḍaḥ ।

atīśayadhṛḍhakakṣo mūrdhacūdāvihīnaḥ pracarantu nṛpaśālām-

esa deśākha rāgaḥ [fol. 5-a] ॥ 22 ॥ deśākha rāgaḥ ॥

deśākha は身体は人一倍大きく、レスリニングの知識に通じ、非常に力があり、棍棒のような腕は強力で、肩は頑丈で、頭に髪髻はない。

deśākha rāga は王の部屋を動きまわった。

lalita

datte lalāte tilakam ca pitam śubhrāmbaraś-campakapūṣpa-  
mālāḥ ।

tambūlakaḥṣṭo'py-atigauradeho vilāsaveśo lalitaḥ prabhūte

॥ 23 ॥ lalita rāgaḥ ॥

lalita は額に黄色の額飾をつけて、白衣をまいて、campaka の花輪を掛けている。手にさんまを持て、身体は、非常に、黄色く、美しく着飾っている。

(45)  
velāvala

āliptam yasya vaksah pramadāsubhavam kunkumodbhūtarāgair-  
āste maulau kirīṭam maṅganaracitam kundale karnagos-  
tah  
(sah) |

gaurāṅgam śuklavāsah kamalakaratale tālatāryadvivādyam  
dhṛm dhṛm dhī dhī-iti yasmān-murajo bhavaravaḥ pātu velāvako  
'yam || 24 || velāvale rāgaḥ ||

歡喜の佳趣たるその胸に kunkuma の紅を塗り、  
頭には多くの寶石より成る冠を戴き、両耳には耳  
飾りをしてゐる。] 身体は黄色に、白衣  
を穿てゐ、蓮花のような手掌に tāla (杵型の  
シンバル) と tāṛga (太鼓) を持つ "dhṛm dhṛm dhī  
dhī" と太鼓の音を奏してゐる]。velāvale \*  
汝を護りたまへ。

mādhava (46)

dhṛtavivādhāsuvastrah kundaḥi venuvādyo jītaratipatirūpaḥ  
kaṅṭhamaukteyamālāḥ |

asurasuraṅpānām-eṣa cetō nivāsi bhavatu tava sukhārtham

mādhavo bālarūpaḥ ॥ 25 ॥ mādhava rāgaḥ ॥ iti bhairavārā [fok.  
5-b] gāparivāraḥ ॥

種々の美しい衣服をまとう、耳飾りをかけ、  
笛を持ち、愛の神 (ratipati = kama 神) に凌ぐ程  
美しく、首に真珠の首飾りをかけ、非神、神、  
王にその心に宿る。若々しい姿の mādhava の故  
の安樂のためにあれかし。以上 bhairava の眷族。

## 2. Mālakauśika の妻と息子

(47)  
mālakauśika

śyāmāṅgaḥ pitavāso madhuripugalajo vaṁśavādyaś-tribaṅgī  
kaṅṭhe rakṭakamālā viracitatilakaḥ kuṅkumair-bhāṭamadhye |  
rāgo'yaṁ mālakauśiḥ pracarantu śiśire kaṅṭhadēśe janānāṁ  
prāyaḥ sūryodayāntaḥ svaranicaya-vidān tuṣṭaye bhūpati-  
nām ॥ 26 ॥ mālakauśika rāgaḥ ॥

身体は緑青色で、黄衣をまとう、Kṛṣṇa (madhuripu)  
の喉から生いた笛を持ち、三曲の姿勢をとり、  
首に一条の宝石の首飾りをかけ、額の中央に  
kuṅkuma の美しい額飾りをかけこく。二の

mālakauśīkarāga は、常に、王たすを満足させる  
 ため、常に、太陽が昇る時、多くの音 (svara)  
 に精通してゐる人々 (歌手) の喉に徘徊せよ。

(48)

gūṇḍagrī

chāyāyām kadālīvanasya vesantī kāmēngasaikocinī gaurī mu-  
 ktakacāmarālagamanī raktāmbair-āvṛtā |

tanvī sarvagunograpāṇḍitavadhūḥ pīnātitiṅgastantī gūṇḍagrī  
 karapadmapatrasahitā proktā mahāryaiḥ purāḥ || 27 ||

gūṇḍagrī rāgiṇī ||

gūṇḍagrī は kadālī 樹の森の木蔭に住み、愛の神  
 (kāma) の身振り (iṅga) にふりまわされてゐる。(  
 身体は) 黄色く、(髪は) 流し髪で、白鳥の  
 ような歩きで、赤衣をまとつてゐる。身体は  
 細く、可憐な美徳を具え、高貴な賢女であ  
 る。胸は豊かで高く、手に蓮葉を持つてゐる。

(49)

gāndhāriṇī

hāroraḥsthaleśdhāriṇī sitapaṭair-yuktāyatākṣī bhṛśam divyā-  
 bhūṣaṇabhūsitātitaruṇī tāmbūlakestā (fol. 6-a) yakā |

śyāmā sandhyākañcuki malajair-ālepītā sundarīdhūte sambhṛ-

tanūpurā mṛduvaco gāndhāriṇī rāgiṇī ॥ 28 ॥ gāndhāriṇī rāgiṇī ॥

gāndhāriṇī は胸に胸飾 (hāra) をつけ、白衣をまと  
い、眼は長く、神々しい装飾をつけている。  
非常に若々しく、手にきんぎょを持っている。  
(身体は緑青色で、胸衣をつけ、白檀を塗  
り、足環をはめ、言葉は優しい、美しい妻也。

(50)

śrīhaṭī

vīṇāhātakañcane dadhātī padmākṣapadmānanā vāstreṃ kai-  
ravapatrakomalasamam śāstre param paṇḍitā ।

mālaśrīsaṅghīsamjuktā tribhuvane gitāryapumsām priyā  
bhūpālī sahītā priyāya karuṇām-ākurvati śrīhaṭī ॥

29 ॥ śrīhaṭī rāgiṇī ॥

śrīhaṭī は vīṇā を持ち、黄金の腕輪をはめ、眼  
と顔は蓮花のよう。白蓮の花弁のようには柔ら  
かな衣服をまとっている。彼女は論書に精通  
している。mālaśrīの友であり、三界にわたって  
歌われ、貴人たちに愛される。bhūpālīと共に  
いて、愛しい人のために悲しんでいる。

(51)

āndhrālī

hastopāṅgayutā vaneṣu ramatī saṅge vakhīm drāvidīm nānā-

puspasugandhigandhitatanur-dhūmrāmsūkam vibhratī |

vāyor-rūpadharā samīrajavanā kṣāmodarī śobhanā rambhorāj-

jītaḍāminī ruciradayy-āndhrīyakī bhāminī || 30 || āndhrālī rā-

giṇī ||

āndhrālī は、森の中で、親しく手を執り、dravida  
の女友達と喜ばせている。種々の花の香りを  
身体に薫じ、煙色の衣服をまいてある。  
彼女は風神 (vāyu) の姿を具え、風のように速  
い。腰は細く、美しく、まろく滑らかな腿に  
腰帯を垂らしてある。喜ぶと与え、美しい。

dhanāśrī

dūrvāpa (fol. 6-b) trāsamānamecakaruciḥ snigdhālakāli-

vṛtā kemalāṣāmbaradhārīnī parīpatan-netrāmbudhā roditā |

jaitāśrī sahītā hitasahacārī śrībhīmapālāsīmī yasyāḥ

sāṃptadāḍimā karatale dhangā dhanāśrī budhaiḥ || 31 ||

danāśrī rāgiṇī ||



danāśrī は〔身体は〕 dārvā 草の葉のまじりに黒く、滑らかな長い髪に覆われ、斑色の衣服をまとひ、流しを流して、悲しんでいる。彼女との反逆は jai-taśrī を連れ去り、聖 bhīmapalāśinī とする。手にはさくろを持つてゐる。賢者たちには、彼女が貞節な女性である、と〔いふ〕。

(52)  
māru (以下息子)

kuntāgudhaḥ kuṅkumacandanābhyām lipto 'tigauro dhṛtakā-  
marūpaḥ ।

raktāmbaro hāsyasametavaktro māru kirīṭi gadito manīndrai-  
ḥ ॥ 32 ॥ māru rāgaḥ ॥

māru は槍を手にし、kuṅkuma と白檀を〔身体に〕塗り、黄色で、愛の神 (kāma) のまじりである。赤衣をまとひ、顔は微笑し、冠を付けてゐる。

mevāda

kamalasādrśanetraḥ sarvakirmīravastro vipulabalasametah  
sambhṛtāṅgarūpaḥ ।

karaḷaladhṛtakhadgaḥ praudhatāruṇyayuktaḥ kusumamuku-

ṣamūrddhā 'py-asti mevāda idr̥k || 33 || mevāda rāga ||

mevāda は眼は蓮花のよう。手はてん玉の衣服をまとい、強くて若々しく、愛の神 (anāṅga) のようである。手は剣を持ち、全く若々しく、頭には花の冠をつけている。

(53)  
varvala

puṣpaiś-campaka sambharair-vi [fol. 7-a] racitaṃ mālāṃ gaḷe

'py-ādadhāt khyāto manmatharūpadhr̥k dhṛtakaro-pāṅgo

vicitrāmbaraḥ |

liptaḥ kuṅkumakardamaik̄ surabhibhir-hemodbhave kuṇḍale

tāraṅgaṃ pramadāpramodajanakam̄ rāgo budhair-varvalaḥ ||

34 || varvala rāgaḥ ||

varvala は campaka の花で作った首飾りに首に掛けた、愛の神 (manmatha) のような姿である。身体各部に光 (kara) を具え、美しい衣服をまとい、香の kuṅkuma 膏を〔身体に〕塗り、黄金の耳飾りにつけている。彼は若々しく、婦人の喜みの源である。

miṣṭāṅga

miṣṭāṅgarāgo vasanam vicitram puṣpāni maubau mukutam  
vibhrati |

mālām ca muktāracitām sugaurahī kṛīḍaty-ayam campaka-  
vāṭīkāyām || 35 || miṣṭāṅga rāgaḥ ||

miṣṭāṅga は美しい衣服を著て、頭には花の冠  
を戴いている。真珠の首飾りをかけ、〔身体  
は〕美しい黄色である。campaka 樹の園に遊ん  
でいる。

candrakāṁśā

haste 'ravindam kusmāni kuntam hāraṁ; gale serpalatādalāni |  
datte vaco vakti sudhām-ayam ca karūrakundo pamacandrakāṁśaḥ ||

36 || candrakāṁśā rāgaḥ ||

candrakāṁśā は手に蓮花、花、戦を持ち、首には  
首飾りを serpa 蔓草の葉を掛けている。美酒（  
sudhā（のよ）に甘）言葉と語り、〔身体は〕  
karpūra（樟腦）や kanda（ジャスミン）のよ  
うに〔白〕。

bhramara = ali

rambhavane campakavṛkṣayukte vinodarūpī sukharamyamānāḥ |  
 puṣpavakī hemakirīṭamūrdhho vicitravestro bhramaro 'sti rā-  
 gāḥ (fol. 7-b) || 37 || bhramara rāgāḥ ||

bhramara は campaka 樹のあるバツバツの森で、樂し  
 みながら、遊んでゐる (vinodarūpin)。花鬘を  
 け、頭には冠を戴き、美しい衣服をまと、こ  
 ゝる。

nandana

raktāmbaraḥ kandukadandapāṇir-gaurāḥ kumāro kalitapra-  
 vīṇaḥ |

muktāśrajaṃ kuṇḍalakarātnayukte dadhāty-ajam nandana-  
 nāma rāgāḥ || 38 || nandana rāgāḥ ||

nandana は赤衣をまとい、手には鞞と棒を持つて  
 いる。〔身体は〕黄色で、遊ぶ上手な童子で  
 ある。真珠の首飾りと宝石の耳飾りを付けて  
 いる。

khokhara

khokharas-ca ghane vadye ghunikāre paṭahasya ca |

sukham vilāsaveso 'pi gāyan kridati nṛtyati || 39 || khokha-

ra rāgaḥ || iti mālakausīkarāgaḥ parivāraḥ ||

khokhara は雲の調へ (vadya 雷鳴) と太鼓の打音 (ghunikara) の中へ、遊の装いとて、樂しく、歌い、遊ぶ、踊つてゐる。以上 mālakausika の眷属。

### 3. Hindola の妻と息子

(54)

hindola

dhātur-nābhau prajāto 'tilakitavasano gauradeho nitāntam

guñjāram bhṛṅgarājī racayati raciram yasya kodandavāne |

maulau datte kiritam maṅiganaracitam jānavartī vasante

hindolarāgarājo jayantu sa sukham sarvadā sajjanānām ||

40 || hindolarāgaḥ ||

hindola は Brahmā (dhātu) の膝から生れた。非常に華麗な衣服をまとひ、室に、身体は黄色い。彼の弓の〔花の〕矢は〔集り〕、〕蜂の群が、高い旋輪のような音をだしてゐる。彼は頭に

多くの宝石とすりほめた冠を戴いてゐる。春の番人といふ rāga の玉 hindola は、常に、善人たちに安樂と生世しめよ。

tailingi

yoḥidbhikṣā saka somaśubhravasanaśyāmā viśālekṣaṇā bhīḥau-

[fol. 8-a] pṛthī jītakokilā mṛduravā tāṭakakarṇottamā |

muktahārevirājitamānaḥṛdayā puṣpāvalimastakā tailingi

varacāmerodbhevamarut samvījitā rajate || 41 || tailingi rāginī ||

tailingi は世にさと一緒にゐる。月のよゝに白い衣服をまとひ、〔身体は〕緑青色。眼は大きく、口唇は bimba のよゝに〔赤い〕。kokila 鳥を凌ぐ、穏やかな声を持ち、最上の耳飾り〔をつけてゐる〕。胸には真珠の輝き、頭上には花鬘〔をつけて〕、立派な松子の風は扇がれてゐる。

devagiri (55)

muktāhārasuratnabhūṣavati divyāmbarā nūtanā paśyanti

sakalam mahāmṛdutanur-dṛṣṭvā jagaddivyayā

pīnotuṅgakucānvitā divīśadām prāyo manchariṇī sadbhir-devagiri

viśākanayanā ca-ittham sadā varṇyate || 42 || devagiri rāgiṇī ||

devagiri は真珠の首飾りと美しい宝石の飾りをつけて、神々しい (divya) 衣服をまとっている。若い娼婦で、すべと、身体は立派で、穏やかである。〔不明〕。眼は大きく、豊かで高い胸と具えている。多分、天界の人々にとっても、彼女は心をと奪うばかり美しいであろう。

vasantī (56)

mālākaṅkanakundalāḥ kanakajair-ābhūṣitā prāyaśaḥ sam-

pādādimabījādanatarucibhiḥ samsparddhamānā bhṛṣam |

iśuddhāśyamukhī kaṭhorakucakā raktāmbaram vibhrati vasanti

varakolalocanavalalokānanā varṇate || 43 || va [fol. 8-b]

vasantī rāgiṇī ||

一般的に、vasantī は黄金の首飾り、腕輪、耳飾りをつけている。歯の輝きは光沢あるさくらの種子と競っている。顔は微笑し、胸は豊かで、赤衣をまとっている。眼を左右に動かして、頬も動かしている。

(57)  
sindhūrī

karpūraikālavāṅgaikḥ samanumadhurām vitīkākā bhakṣyamānā citram  
vastram dadhatī vipulakucataṭe hāramuktāmayam ca ।

bhūrēkhācāpadharī śīsumṛṅganayanī tivraṇetrāntabāṇā sindhūrī ka-  
nṭhamālakā kanakakusumajā sarvaśrīgārapūṇā ॥ 44 ॥ sindhūrī rāginī ॥

sindhūrī は karpūra, elā, lavāṅga と 混 ぜ た き ん 子 (vitīkā)  
と 唾 こん じ ゃ る。美 し い 衣 服 と 共 と い い、乳 房 は  
大 き く、真 珠 の 胸 飾 と 一 同 と い い。眉 線 は 弓  
の よう で、眼 は 小 鹿 の よう。鋭 い 目 尻 は 矢 の  
よう と い える。kanaka の 花 鬘 と 首 に か け、恋 情  
に 満 ち て い る。

(58)  
ābhīrī

śyāmānekaśarpasapakāñcukivati śrīgārasurvānvitā muktābhā-  
ṣaṇanāsikāgraputā hārāṅkitoraḥsthalā ।

pānau darpaṇadhārīṇī ca paṭhati citrālaye krīdatī ābhīrī

padanūprasvarayutā kṣaumāmbārā rājate ॥ 45 ॥ ābhīrī rāginī ॥

ābhīrī は (身体 は) 緑 青 色。種 々 の 花 と 胴 衣 に  
飾 り、専 ん と 恋 情 と 具 え て い る。鼻 翼 は 真 珠



を飾り、胸には胸飾を垂らすといふ。手には鏡  
 を持ち、独言をいひ、画室で遊んでいふ。足  
 には音を出す足環をつけ、リネンの衣服を  
 まとていふ。

maṅgala (以下息子)

muktāsracchavicāruśobhitagalah kandarpadehopamas-tālāra-  
 gaśhīranirbharaḥkaro'pṇ-om kārayuktānanaḥ |

ānan [fol. 9-6] dāsyakirīṭamastakadharaś-citrāmbaraḥ sarvato  
 lake sarvajanānurāgaṇako rāgādhipo maṅgalaḥ || 46 || maṅ-  
 ga rāgaḥ ||

maṅgala は首に美い肌色の輝く首飾りをつけ、  
 身体は愛の神 (kandarpa) のまじり。非常に深遠な  
 音を出す tāla (小型のシンバル) を手にして  
 いふ。顔は歓喜を具え、頭には冠をつけ、美し  
 い衣服をまとていふ。すなわち、世間におい  
 て、人々の愛着の源となる rāga を五くする。

candrabimba

ṭatekādharah pañkaja patravastro rājivanetro dhṛtapadmapāñih |

nānāprasūnodbhavakāñṭhamālī rāgas-tv-ayam tistati candrabimbah ॥ 47 ॥

candrabimbah ↓

candrabimka は斧 ㇿ 持 ㇿ , 蓮葉 の 衣服 ㇿ 持 ㇿ ㇿ ,  
眼 は 青 蓮 ㇿ ㇿ . 手 に 蓮花 ㇿ 持 ㇿ , ㇿ ㇿ . 袴  
ㇿ ㇿ 花 の 首飾 ㇿ ㇿ 掛 ㇿ ㇿ .

śubhrāṅga

tākāmalam vāriyam-ādadhānah śetāmbarah kuṅkumaraṅgāṅgaḥ |

nityam mahadahāsyamayāsyayuktah śubhrāṅgaḥ saha kāmīnībhyām ||

48 ॥ śubh āṅgaḥ ॥

śubhrāṅga は 洋 子 の 髪 tā(a ( 小 型 シ ン ボ ル ) と 螺  
(59)  
貝 ㇿ 持 ㇿ , 白 衣 ㇿ 持 ㇿ ㇿ , 身 体 ㇿ kuṅkuma で 染  
め ㇿ ㇿ . 愛 人 に ㇿ ㇿ 一 緒 に , 常 に , 顔 は 笑  
み ㇿ 笑 ㇿ ㇿ .

ānanda (60)

tāmbūlarāgārūnadantapanīkṭih śubhrāṅkarāś-ca candanalipitagaurah |

tātivanaschah karapīṭhavādyc(?)'py-ānandarāgo bahurūpaveṣṭi ॥ 49 ॥

ānanda rāgaḥ ॥

ānanda は 蓮 ㇿ きんま で 赤 く 染 め , 白 衣 ㇿ 持 ㇿ

い、黄色い身体に白檀を塗っている。fālī の  
森にいて、手には pīthavādya (?) を持つ、多様な姿  
をとる。

vibhāsa (61)

viśālanetro mṛdugauradehakā kalmāṣavāstras-tilakā (fol. 9-b)  
śya bhāle |

adhyāpamānah sukam-eva haste svachandagāmī ca vibhāsarāgah |

|| 50 || vibhāsa rāgah ||

vibhāsa は眼は大きく、身体は細く、黄色く、  
斑色の衣服をまとい、額に額飾をつけている。  
手には〔乗せた〕鸚鵡武鳥に〔言葉に〕教えている。  
自由に動く。

vardhana

śuklāmbarakā krīdatī pādapani (?) chāyāsu bhadrān-vitayauradehakā |

ābhūṣitah kaikura-kundalādyaī rāgah suhrdbhyām saha vardha-

no 'pi || 51 || vardhana rāgah ||

vardhana は白衣をまとい、pādapani 樹(?)の本蔭  
で遊んでいる、身体は黄色く、剣をつけてい

る。腕輪，耳飾りなどゝ飾り，二人の友と一緒に  
 踊っている。

(62)  
 vasanta

ārāme krīḍyamāno navadala-kusumāmoda-lubdhāli-vṛnde śakrādya-  
 gīyamānaḥ śrajam-apī muktaṁ śṛṅgavādyam dadhānaḥ ।

tāmbūlā-syo'pi sārddham ratipatisādṛśo raktavastrāś-ca gauro  
 yo śidbhiḥ sarva-vādyāra-vara-bhasa-mahaddhā-syagukto vasantaḥ ॥

52 ॥ vasanta nāgaḥ ॥

vasanta は新しき花卉の香りを求める蜂の群が  
 (飛ぶか) 森で遊ぶ，首飾りと冠を付け，  
 角笛を持ってゐる。Śakra 神たちも〔彼を讃え  
 て〕歌ってゐる。口はきんまぐらに噛み，赤  
 衣をまとひ，〔身体は〕黄色に，愛の神のま  
 じらふ。またと共には，すべての楽器の太  
 きな音のまじりに，顔は大笑してゐる。

(63)  
 vinoda

tāmbūlakas-to'py-alikā-rddhacandraḥ śubhrāmbareḥ kaika-  
 ṇa-kunḍalāni ।

āvibhramāno mukutaṃ ca gaurah sammodate mitraḡuto vinodaḡ

[fol. 10-a] || 53 || vinoda-rāgaḡ || iti hindolarāgaḡ parivāraḡ ||

vinoda は手にきんぎょを持ち、額に半月を〔飾り〕、  
白衣をまいて、腕輪や耳飾りを付けている。  
冠を戴き、〔身体は〕黄色で、友達と一緒に  
楽しんでゐる。以上 hindola の眷属。

#### 4. Dīpa の妻と息子

dīpa (64)

bhānoḡ netrābhijāto dhavalagajavarārūḡha sutrāmarūpo rakḡtāḡgo

bhūrinetro dhṡtamukutaśiraś-citravastro'tilaramyaḡ |

kanḡḡhe mukḡtaikamālāḡ karadhṡtakulīśo manmathānanda-

kartrā madhyāhne ca-esa bhūyan-nikhilajanamude dīpaḡo grī-

smakāle || 54 || dīpa-rāgaḡ ||

dīpa は太陽の眼から生れ、立派な象に乗る Indra  
(sutrāma) のようである。身体は赤色で、多  
くの眼を具え、冠を戴き、美しい衣服をまいて、  
非常に愛らしい。首に一条の首飾りを掛け、  
手に戟を持ち、愛の神に誓いと与える。夏の

真昼は、すべての人々の歡のの中に在れ。

kāmodī (65)

ābhūṣaṇam hemamañipravekaṁ hārānvitā pañipadesu datte |  
citrāmbarā kañjekarā ca mālāṁ kāmōdī-yaṁ ratissannibhā ca  
|| 55 || kāmōdī rāgiṇī ||

kāmōdī は黄金や宝石をとりはめたり飾りて手足  
につけ、首飾りて掛けている。美しい衣服を  
まとい、手に蓮花と花環を持ち、愛の女神 ( *radi* ) のようである。

patamañjarī (66)

pramuktakeśī śaśīśubhravestrā viñaikeavādyā mṛdugauradehā |  
kaṣṭūrikāyās-tilakam lalāṭe nigadyate 'yaṁ patamañjarī-iti  
[fol. 10-b] || 56 || patamañjarī rāgiṇī ||

patamañjarī は頭は流し髪で、月のようには白い衣  
服をまとい、一竿の *viñā* を持ち、身体は細く、  
黄色で、額には麝香の額飾をつけている。

kaṣṭū (67)

vīṇam vāmakarāgrakena dadhāti tālaṁ tathā dakṣiṇe mukhājātā-  
kalāṭamadhyaatilakā netrālaye kajjalam ।

lepam candanakardamena racitam vicitrāmbaram nūprau tā-  
mbūlam varamohinī sumanasām todī pramuktālakā ॥ 57 ॥

todī rāginī ॥

todī は左手に vīṇā と、右手に tāla と持っており  
る。額の中央に真珠の額飾をつけ、眼窩に墨  
膏を〔塗っており〕。白檀膏を〔身体に〕塗  
り、美しい衣服をまとい、足環をつけ、頭は  
流し髪にして、きんまを〔啗らへる〕。彼  
女は善き心を持って人々を慰惑する。

gurjjarī (68)

bimboṣṭho karahastidantavalayā svarṇāvataṁ saśruti rakṭā-  
mbarakañcukī kucaṭāṭe muktāmayaśraṅgharā ।

saurāṣṭrī kila dakṣiṇī drāviḍī sakhyā mahā (sumā-) rājita  
khyāto hanto caturvidhā ca suradā (sukhakarī) divyāmbarā

gurjjarī ॥ 58 ॥ gurjjarī rāginī ॥

gurjjarī は口唇は bimba のように〔赤く〕、手は象  
牙の腕輪をはめ、耳は黄金の耳飾りをつけ、

赤衣をまとひ、赤色の胴衣をとり、乳帯に真珠の首飾りを垂らしてゐる。 Saurāstrī, dakṣiṇī, drāvidī の友達と一緒にゐる。彼女が神々しい衣服をまとひ、四種の樂しさを手にする。

(69)  
kācheli

nāsāgre svarṇapuspam prabhavati ruciram kajjalopetanetre vakṣo  
kāram kāragre suvalayani (fol. 11-a) cāyam kuṅkumāliptadehaḥ |  
maukṭeyam bhālamadhya varam-āpi tilakam sarvataḥ śoṇava-  
stram kāchely-avīhvāṅgyā madanamadabhanair-evam-ākṣaḥ sva-  
rajñāḥ || 59 || kācheli rāgiṇī ||

kācheli は鼻に美しい黄金の花をとり、眼に墨膏を塗り、胸に首飾りを掛ける、手は腕輪を重ね、身体に白檀を塗ってゐる。額の中央にはほ立派な額飾りをとり、真紅の衣服をまとひ、愛の神 (madana) の強い愛のため、身体はくっつきとてゐる。

(70)  
kamala (以下息子)

adhyāsamāno dhṛtayugmakāñjo lubdhālivṛnde kamalāsane ca |



muktāvālī kaṅkanādhṛk-kirītī muktā [śuklā] mbaro'ayam kamala

'sti rāgaḥ || 60 || kamala rāgaḥ ||

kamala は二本の蓮花を持ち、〔蓮花を〕おの  
来る蜂の群がる蓮花座に坐っている。真珠の  
首飾りと腕輪をとり、真珠のように〔白い〕  
衣服をまとっている。

kusuma

raktāambaradhara gaurāḥ kamalāsanaśthitaḥ |

kusumaḥ padmapānīś-ca mitrayuktāḥ kirīṭavān || 61 || kusuma-  
rāgaḥ ||

kusuma は赤衣をまとい、〔身体は〕黄色で、  
蓮花座に坐っている。手に蓮花を持ち、冠を  
戴き、友達と一緒にいる。

rāma

rāmāgrabhāgaḥ sakhīpṛsthābhāgas-tūṇīdharāś-cāpadhara vṛavīti |

chāyāśritaḥ padmaviśālanetro vācaḥ svakāntam prati rāmarāgaḥ ||

62 || rāma rāgaḥ ||

Rāma は前方に、友は後方にいる。Rāma は矢筒

をもち、弓を構っている。大きな眼は蓮花のよう。木陰にいて、自分の愛する女 (Sita) に語りかけている。

kuntala

śrutidharo venudharaḥ satālah pītāmbarāś-cañc alapuspamālāḥ |  
padmānanaś-cāmaravījyamā [fol. 11-b] no gauraḥ śuciḥ kuntala  
nāma rāgaḥ || 63 || kuntala rāgaḥ ||

kuntala は学識 (śruti, 徴分音) を具え、笛を構え、tāla を構っている。黄衣をまとい、左右に動く花鬘を掛けている。顔は蓮花のようで、松子にまろて扇がれている。(身体は)黄色で、洋うかである。

kalinga<sup>(71)</sup>

tāmbūlavaktro dhṛtakhadgahastaś-citrāmbaraḥ kinkumalīptabhā-  
raḥ |

kṛpāṇīkopetakāṭis-ca gauraḥ sarvāpriyo'apy-asti kalingarāgaḥ ||

64 || kalinga rāgaḥ ||

kalinga は口にはきんまを(噛み)、手には剣を構

方, 美しい衣服をまとひ, 額に *kuikuma* を塗り,  
腰に小刀を帯ひ, (身体は) 黄色である。彼  
はすべての人に愛される。

*lākula* (72)

*nāgavallīdalam haste kaṅṭhe karṇe kare dadhat |*

*bhūṣaṇam svaṇṇajam gauṛo lākulaḥ śvetavastradhṛk || 65 ||*

*lākula rāgaḥ ||*

*lākula* は手に *なぐま* (*nāgavallī*) の葉を挿し, 首,  
耳, 手に黄金の飾りをかけ, (身体は) 黄色  
で, 白衣をまとっている。

*campaka* (73)

*padmapāṇis-ca padmākṣaḥ padmaraktraḥ kirīṭavān |*

*śvetapitāmbarī vrkṣachāyārantā hi campakaḥ || 66 || campaka*

*rāgaḥ |*

*campaka* は, 手は蓮花のよう, 眼は蓮花のよう,  
顔は蓮花のよう, 冠をつけ, 白衣をまとひ,  
木陰を好む。

hemāla (74)

kathayati mṛduvāṇī sarvadā kokilavān-madhuraphaṇilatāyāḥ pa-  
kvaṣarnāṇi bhukte |

dhavalavasanadhāri dādimībījadanto kasati sakhisameto kanto

hemālarāgaḥ || 67 || hemā (fol. 12-a) la rāgaḥ || iti dipakarāga pari-  
vārah ||

hemāla は、常に、kokila 鳥のよゝに優しき言葉と  
語る。其のきんま (phaṇilatā) の熟した葉を噛ん  
でゐる。白衣をまとい、歯はさくろの種子の  
よゝ。微笑して、反逆と一緒にゐる。以上、  
dīpaka の眷属。

5. Śrīrāga の妻と息子

Śrīrāga (75)

nābhau jātaḥ pṛthivyām lalitāmṛdutanuḥ śubhravāstrāś-ca

gaurō rājante pāṇipadme bhūtarataralā rājāyāḥ paṭpadānām |

asya śrīrāganāmaḥ spatikamanimayī bhāti kanthe. ca mālā

grīṣme gāyanti ca-enam punar-āpi śīsire vāsraṅte mahāntaḥ

|| 68 || śrīrāgaḥ ||

śrī は大地（地神）の胎から生れた。身体は華やかなで、細く、白衣をまとい、黄色い。蓮花のような手に多くのルビーが輝いている。首に水晶の首飾りが輝く。 śatpada (6 部 - 6 rāga と指すか) の王である故、 śrī-rāga といい名前では、賢者たちは、夏と冬の一日の終りに歌う。

vairāṭī

kurvantī bhavane vinodam-anisam sakhyā samam svechayū mañ-  
jre padayōṣ-ca kaṅkanayugmam hastachaye vibhratī |  
vātam cāmarasambhavam ca bhajati citrāmbarā kovidā vairāṭī  
bahubhāṣanānvitataneḥ sāyam budhair-gīyate || 69 || vai-  
rāṭī rāgiṇī ||

vairāṭī は、上之す、女友達と心ゆくまで遊んでいふ。両足に足環、両手に腕輪をつけている。松子の風を楽しみ、美しい衣服をまとい、身体に多くの飾りをつけている。賢者は夕方に（彼女を）歌う。

Karnāṭikā

nṛtyantya-alam kuṅkumaliptadehā śyāmā sadā-eva-unmadagh-  
rṇamā [nā] | (fol. 12-b)

brahmī guṇaugheghanadīrgha keśī karṇātikā padmadalābhametrā ||  
70 || karṇātikā rāgiṇī ||

karṇātikā は、常に、狂ったように重力きつと、  
烈しく踊っている。〔身体に〕kuṅkuma を塗り、  
〔身体は〕緑青色である。バラモニア女性と  
しての美德を具え、豊かに長い髪を流し、眼  
は蓮花のようである。

sāverī (76)

kastūrītilakam lalāṭapaṭale rāji ca patraṃ kare citrābhāmba-  
radhāriṇī kacatate pītām tathā kañcakim |

śyāmā rañjita danta dantavasanā (-vāsasā) muktāśraṅ vibhra-  
tī sāverī madapūrṇakumbhigamanī geyā divānte sadā ||

71 || sāverī rāgiṇī ||

sāverī は額に麝香の額飾を描き、手は葉を〔持  
つ〕、美しい衣服をまとひ、胸には黄色の胸衣  
をつけている。〔身体は〕緑青色で、歯と口  
唇を赤く染め、真珠の首飾りを掛けている。

情欲に満ちた象のまじりに歩む。〔彼女には〕常に、日暮れに、歌われる。

gaudī (77)

śyāmā gauravapur-viśālanayanā sindhūrayukṭāhkā hastanya-  
stasarorukā praṇayitṛī sarvāṅgataḥ sundarī ।

sarvābhūṣanayuktācitravasanaḥ śūgdhakeśī varā dvedhoktā tra-  
valī-tato trapuravī gaudī tv-anekā śmṛtā ॥ 72 ॥ gaudī rāgini ॥

gaudī は身体は美しく、黄色い。眼は大きく、  
額に鉛丹を塗り、手は蓮花を持ち、全身が美  
しい妻である。もう印の飾りをつけて美しい  
衣服をまとい、滑らかな髪はすばらしい。彼  
女は travali と trapuravī の二種であるといわれ  
る、多数である。

rāmagirī (78)

dhatte śyāmala kuṅcukī ca galake muktāvalīm-anīśukam (śol. 13-a)  
śonābhaṅṅ varakaṅkaṅāni karayoḥ pādadvajor-nāpurau ।

candrāśyā madavihvalā sakaruṅā bhāṣāṃ bhṛṣāṃ bhāṣatī ca-

eṣā rāmagirī dināntasamaye rāmeṣa gītā purā ॥ 73 ॥ rāmagirī

rāginī ॥

rāmagiri は緑青色の胴衣を>け、首に真珠の首飾りを掛け、赤衣をまとひ、両手には立派な腕輪をつけ、両足には足環をはめてゐる。顔は月のようで、情欲にかられ、悲しみ、繰り返し、話してゐる。彼女ほ、かつて、Rāma にふり、日暮れ時に、歌われけ。

saindhavī (79)

kumbhākāranucā gajendragamaṇī bālā vīnodānīlā vakso lohita-  
kañcukī ca mudatī kore pravīṇā param |

sāraṅgāñjītapadmapatranayanī yuddhe mahāmohinī godhānāṃ

valayāṃ pāṇiyugule samutbhratī saindhavī ॥ sandhavī rāginī ॥

saindhavī は胸は水瓶のよじな型で、歩みは象のよう。若々しく、遊に興じてゐる。胸に赤色の胴衣を>け、楽しんでゐる。彼女ほ、全く、koka 鳥(カウユ-)(の鳴き声か)上手である。蓮弁のよじな眼は斑色(sāraṅga)に染め、戦場で兵士たちを迷わせる。彼女ほ両手には腕輪をつけてゐる。



sindhu (以下息子)

āsvārūḍhaḥ pravīro dhṛtadhṛḍhakavaco roṣitaḥ khadgadhārī durgā-  
devyekabhakto viśadapaṭadharo lohitaḥso balyān |

sindhurāgo pravīrān praharati smare kopitān bhūpatinām-etā-  
dṛḷ lokamadhye pradīśa [fol. 13-b] tu satatam maṅgalam sūjanānām ||

75 || sindhu rāgaḥ ||

sindhu は勇士である。馬に乗り、鎧で身を堅め、  
激怒し、剣を持ってゐる。彼は専ら Durgā 女神  
を信じ、白衣をまとひ、眼は赤く、勇ましく。  
彼は、戦場において、悪人の怒れる敵の  
勇士を打破る。このように、善人による幸  
運を、常に、この世に示したまへ。

mālava (80)

padmānanaḥ padmadalāyatākṣo mālādharah padmadharātapatrī  
(-dharacchatrī) |

bhūpāgate cāmaravijyamānās-citrāmbaro mālavanāmarāgeḥ ||

76 || mālava rāgaḥ ||

mālava は顔は蓮花のようであり、長い眼は蓮弁の

よう。花鬘<sup>髪</sup>をつけ、蓮花をつけた傘蓋を具えている(1)。彼は王子のようには振舞い、松子によって扇がれ、美しい衣服をまとっている。

gauḍa (81)

bhāle tiṣṭhati candanasya tilakam karnadvayoḥ kundale tāmbūlam  
vadanasya subhavasanam mālā ca vakṣosthale |

karnāto 'py-atha rukma ('tha-anurudhyur-) mālavyuto deśa-  
valo drāviḍo gauḍo devayutakḥ svarajñatarunaḥ śrīviṣṇu-  
pūjārataḥ || 77 || gauḍa nāgaḥ ||

gauḍa は 額 に 白檀 の 額飾 を つけ、両耳 に 耳飾り  
を つけ、口 に きんま を [噛み]、淨衣 を まとい、  
胸 に 花鬘 を [掛けて いる]、彼は svara (音階音)  
に 精通 (大若者) で、viṣṇu 神への 供養 に 専念し  
ている。

gambhīra

padmadharaḥ daudidharaś-ca tālimālā 'sti muktāracitā ca  
kanṭhe |

kriḍānvito gāyati gauradeho gambhīra nāgo maharāvarūḍhaḥ ||

78 || gambhīra rāgaḥ ||

gambhīra は蓮花を持ち, daṇḍi (?) を持ち, 首に真珠を飾り、右 tāli の花鬘を掛けてゐる。身体は黄色で、遊に興じ、歌い、makara に乗ってゐる。

guṇasāgara (82)

padmāyudhaḥ kuṇḍalakarṇe dhārī śuklāmbaraḥ sragvī guṇa-pravīnaḥ |

ratnākare khelati viprarūpaḥ sārddham suhr̥ [fol. 14-a] dbhir-guṇasāgaro hi || 79 || guṇasāgara rāgaḥ ||

guṇasāgara は蓮花の持物を持ち, 耳に耳飾りをつけて, 白衣をまとい, 花鬘を掛けた, 美德をよく識ってゐる。彼はバラエツの姿をしていて, 海で友達と遊んでゐる。

viḡaḍa

gauraḥ śvetapaṭānvitaḥ karatale tāmbūlakakaikaṇī kāmābhaḥ  
sakhībhiḥ samam surabhibhir-gandhair-yutaḥ sundaraḥ |

koṇe [koṇa-] kāmukakāmakelikutuko prāyaḥ kovido rāgo'yaṁ

savihāgadena viḡaḍaḥ sāyaṁ kāle gīyate || 80 || viḡaḍa rāgaḥ ||

vigada は (身体は) 黄色で, 白衣をまとい, 手掌に きんま (を) 持ち, 腕輪を 2 けている。愛の神のように美しく, 友達と一緒にいる。(身体は) 香を薫じている。kche (? カチー) 愛人との戯れを希っている。普通, 賢者は = の rāga を vihāgāda として, 日暮れ時に, 歌う。

kalyāṇa (83)

muktāratnasvarṇavajraracite śimhāsane susthitaś-chatram śobhati mastake pariṇanaiḥ sanvījyate cāmaraiḥ |

tāmbūlam vadane sugandhitavapuh kante suralāvalī kalyāno viśadāmsukakā kamaladrk kalyāṇado bhūbhujām || 81 ||

kalyāṇa rāgaḥ ||

kalyāṇa は真珠, 黄金, 金剛で造られた獅子座に坐している。頭上には傘蓋が輝く。松子を持ち、侍者たちが彼を扇いでいる。口には きんま (を) 噛み, 身体は香りよく, 首に suralāvalī (Craigā 女神の首飾り?) を掛ける, 白衣をまとい, 蓮花を持ちしている。彼は王たちに祝福 (kalyāṇa) を与える。

kumbha (84)

dhavalavasanadhāri gauradehaḥ kirīṭī kanakakalaśayuktāś-  
cāmarair-viṣyamānaḥ |

malayajadalaśāpīṭāpūṣpāpīṭāksatāvyaḥ (?) ghaḥ saha  
vararamaṇībhir-gīyate kumbharāgaḥ || 82 || kumbha rāgaḥ ||

kumba は白衣をまとひ、身体は黄色で、冠に戴  
き、黄金の水瓶を置き、松子にまゝに扇られ  
てゐる。白檀の花と dūrva の花、pīṭāksatāvya (?)  
をとり、鈴の帯 (gha) をとりたる婦人にしてまゝ  
で歌われる。

angada

viśāprasūnalocanaḥ śitāvarohikundalī bhujāṅgavallipatra-  
dhr̥tasuvarṇakāṅkenānvitaḥ |

bravīti mitra [fol. 14-b] saṃyuto nirantaram vacaḥ priyam  
jagāda nāmato 'gīdam purā-enam-īśvaraḥ prabhuh ||

83 || angada rāgaḥ || iti śrīrāga-parivāraḥ ||

angada は眼は蓮花のまゝで、細い菩提樹の耳  
飾りをして、菴草 (bhujāṅgavalli) の葉をとりて

黄金の腕輪を付けている。友達を連れて、  
 之を、愛人と話している。かゝる *iśvara* は彼を  
*agida* といふ名前と呼んだ。以上 *śrīrāga* の眷属。

6. *Megha-rāga* の妻と息子

*megha* <sup>(85)</sup>

*jāto yuhye pracetur-dadhā-dasitatanuś-cañcalābham ca vāśeḥ*  
*khadgam sampāsamābham nivasati gagane nimnagānātharūpaḥ |*  
*śaṅkam jūtam jatānam śikhikulahṛdayāmbhojāharṣāya bhānāḥ*  
*prāvṛṭkāle nisānte sukhadasuratarur-gīyate megharāgaḥ ||*

84 || *megha rāgaḥ* ||

*megha* は御眷 (*pracetur*) の秘処に生れ、身体は黒く、輝く衣服をまとひ、光白剣を持ち、空中に住み、河神のような姿である。螺貝を持ち、頭髮は束髪に結っている。彼は孔雀たうに、蓮花のような心の歓びを与えるための光であり、安樂を与える神樹である。雨季の日暮れに、歌われる。

mallārā (86)

śyāmā candanacarcitastanataṭā nāṣāgramuktāphalam mu-  
ktāhāravatī vicitravasānā tāmbūlaraktādhārā |

ūrdhvaṃ cañcalayā samam jalamuco garjanti varṣanty-alam

mallārā śikhino rudanti nikaṭe nṛtyanti kāmānvitāḥ || 85 ||

mallārā rāgiṇī ||

mallārā は〔身体は〕緑青色で、白檀を胸に塗  
り、鼻に真珠をつけ、〔首に〕真珠の首飾り  
を掛け、美しい衣服をまとひ、きんまの広め  
に口唇は赤く〔染つてゐる〕。頭上には、稲  
妻が走り、雲は雷鳴し、大雨を降らす。近く  
で、孔雀が鳴き、踊つてゐる。彼女は愛欲に  
燃えてゐる。

śoraṭhī (87)

dantā (fol. 15-a) bhājitadāmini kanakajair-abhūṣitā bhūṣanair-gu-  
rāṅgī valayūni bāhulatayor-citrāmbārādhāriṇī |

veṇī śobhati mauktikasya tilakam raktā tathā kañcukī bhā-  
ṣanti madhurākṣaraiḥ priyatamā rāgeṣv-īyam śoraṭhī || 86 || śo-  
raṭhī rāgiṇī ||

sarathī は象牙の首飾りをつけ、黄金の飾りを付けている。〔身体は〕黄色で、蔓草のような両腕に腕輪をつけ、美しい衣服をまとっている。〔頭は〕弁髪に結い、〔顔に〕真珠の額飾をつけ、赤い胴衣をつけ、優しい言葉を語っている。彼女が rāga かついで最も愛うしい。

suhavī (88)

syāmā kajjalayuktakolanayanā venīlatābhūṣitā pīnorodhrta-  
kañcukī karapade sataḥ kaikaṇe nūprau |  
vijyā cāmaravāyūnā vidhumukhī pītāmbarā mauktikaṃ nāsāgre  
suhavī-ity-anena vidhinā samvarṇyate kovidaik ॥ 87 ॥ suhavī  
rāgiṇī ॥

suhavī は〔身体は〕緑青色で、墨膏を塗った眼を動かしている。蔓草のような弁髪を結い、豊かな胸に胴衣をつけ、両手、両足に腕輪と足環をつけている。松子の風に扇かれ、顔は月のように、黄衣をまとい、鼻に真珠をつけている。



āsāvarī (89)

śyāmāṅgī mukuram kareṇa dadhati karam gale mauktikam tāṭa-  
kēnvitakarṇekaṅkanakarā divyāmbaraiḥ samyutā |

rambhāyā ghanakānane [fol. 15-b] su ramatē tv-adhyāyanti śu-  
kam-āsāvary-api kinnarair-api surair-gītā nisānte divi || 88 ||

āsāvarī rāgiṇī ||

āsāvarī は身体は緑青色の，手に鏡を持ち，首  
に真珠の首飾りを掛け，耳に大型の耳飾り（  
tāṭaika）をつけて，手に腕輪をつけて，神々しい  
衣服をまとっている。椰子の深い森の中で遊  
ぶ → ，鸚鵡に〔言葉を〕教えている。彼女  
は kinnara や神々によって，夜明けには，歌われる。

kauṅkaṇī (90)

gaurī kauṅkumacarcitastanatanus-citrāṃśukam karburām-  
ādhatte hr̥di kaṅcukīm ca valayam haste pade nūpure |

ghrāṇe śobhitamauktikam ca jalayām gale vibhratī tāmbūlam  
pariyāyate atha hasatī sāyam janaiḥ kauṅkaṇī || 89 || kauṅka-

ṇī rāgiṇī

kauṅkaṇī II (身体は) 黄色の，胸と身体に kauṅkuma

を塗り、美しい衣服をまとい、胸に斑色の胴衣をつけ、手に腕輪、足に足環をつけている。鼻には美しい真珠をつけ、首に蓮花の鬘を掛け、まんまをく噛み、微笑してゐる。彼女は、日暮れに、人々により、歌われる。

nata (以下息子)

kamalāsadrśsanetro divyavāstram dadhānāḥ karadhīrtaścaḍḍo'py-āsūvā-  
gāmī surūpaḥ |

upahitahṛdi hāro rājate bhūṣanādhyo harir-iva suravṛnde rāga-  
vṛnde nato hi || 90 || nata rāgaḥ ||

nata は眼は蓮花のようで、神々しい衣服をまとい、手に立派な剣をもち、馬に乗り、美しい鬘である。胸に首飾りを垂らし、多くの飾りをつけている。それかもし Hari 神の神々の群の中にいるように、彼は rāga の群の中にある。

kānara

vajradīpti samānasundararado rathānūite kaṅkane bāhvor-mau-

ktikahārahṛdayaḥ śtaḥ karnayor kundaḥ |

nanāpuspusuvāsavāsītavapuh pītāṃś [tol. 16-a] kair-āṛṭtaḥ sai-

gīte 'tivicakṣaṇo diviṣadāṃ sammohanatḥ kānaraḥ || 91 || kānara-

rāgaḥ ||

kānara は 齒は金剛石の光のように美しく、腕  
に寶石の腕輪をつけ、胸に真珠の首飾りをく  
垂らし、両耳に耳飾りがある。身体に種々の  
花の香りを薫じ、黄衣をまとっている。彼は  
音楽に精通していて、天界の人々を陶醉させ  
る。

sāraṅga (91)

śyāma bāhucatuṣṭayena sahitaḥ pītāmbaras-tārksyagatḥ sūra-  
ṅgaṃ vidadhātī bāṇasahitaṃ śūṅkaṃ ca cakram gaḍāṃ |

vāmāṅge ramaṇīyutaḥ priyatamaḥ śriviṣṇuvat sarvadā sāraṅga  
maghavānvitaiḥ suragṛhe samstuyamāno 'maraiḥ || 92 || sāraṅga-

rāgaḥ ||

sāraṅga は〔身体は〕緑青色で、四手を具え、  
黄衣をまとい、カルガ鳥に乗っている。矢を  
→か之に弓、螺貝、輪、棍棒を持っている。

左側に最愛の妻を伴い、Viṣṇu神のようには、常に、神殿において、Indra神と共に、神々が彼を讃えている。

kedāra

daṇḍam dakṣiṇapāṇinā-arjanapatam vāmena sūlam tathā vibhadrakṛtaviśaprasūnanayanah śikṣyaik samam vartate |

yogābhyāsarato 'tha cetasi nija sancintyamānah śivam kedārah

kusumeṣu darpadalane vīro dṛḍhas-tv-āsane || 93 || kedāra rāgaḥ |

kedāra は右手に白布を、左手に杖を持ち、左手に戦を執っている。眼は赤蓮花のようで、弟子と共に一緒にいる。ヨ一の修行に専念し、自心には、śiva神を念じ、花の中に、箕素座に、雄々しく、不動で（坐っている）。

gūṇḍa

datte bhāllakacarmanī ca tumutotphālam samāvibhrate sannāham [fol. 16-b] hrdaye dalāni śirasā raktāni jambutaroh |

bhāle bhāsmam kirātakarmanipuṇo dāvyām samam saṅgibhik sambhor-bhaktiparāyanas-trijagatām gūṇḍo nisithe priyayat || 94 ||

gunda nāgaḥ ॥

gunda は熊皮をまとい、槍を持ち、胸に鎧をつけ、頭には jambū 樹の赤い葉をつけている。顔に灰を〔塗る〕、kirāta 族の行為に精通している。森の中で、仲間たちと共に、もう śiva 神に信愛を捧げている。彼は、真夜中には、三界の者たちに愛される。

gundamalāra

śyāmaḥ śaṅkhaḥ nālikāṅkitagalaḥ puṣṭaḥ priyā samyuto rambhāpatranibaddhavalakāśira[sā] vīndyācale'vasthitaḥ |

pāśādyaiḥ śikhino nīhanti vipine kodanḍavāṇam dharaḥ śāstrair-gundamalāraḥ pānibhujām pakṣaiḥ priyai rājateḥ ॥

gundamalāra は〔身体は〕緑青色で、首に螺貝の首飾りを掛け、椰子の葉で編んだ木皮 (valka) を頭に付け、愛人と共に vīndya 山に住んでいる。弓と矢を持ち、森の中で、罫をこいで孔雀を捕えている。彼は、手に武器を持った徒者と愛人たちと一緒に、いる。

jālandhara (92)

yośiddhiḥ saha dhenubhir-rujajanaḥ vamsam priyam vādayan  
dhatte śyāmapapukḥ sitāmbāradharaḥ śailam gurum helayā |

[fol. 17-a] ūrdhvaṃ prāyasa eva varṣati ghaṇe jālandhara

rāgarāḥ kañṭhāksaḥ kamalānana harir-iva-aṅgulyagrabhāgena

vai || 96 || jālandhara rāgaḥ ||

jālandhara は婦人や牛，同族の人々と共に，楽しく，笛を吹いてゐる。身体は緑青色で，白衣をまとってゐる。雲中に雨が降る時は，あたかも Hari 神のように，軽々と，重い岩山を指先で，上方に〔支える〕。眼は蓮花のようであり，顔も蓮花のようである。

śaṅkara

dhr̥tajalaruhasastro vibhrate divyavastram jalajavipulanetro ka-  
statāmbūladhārī |

malayajapariliptaḥ kaikaṇe dhr̥kkirīṭi pramathasuragaṇeśaiḥ śa-

ṅkaras-stūyamānaḥ || 97 || śaṅkara rāgaḥ || iti megharāga pativārah ||

śaṅkara は蓮花の持物を持ち，神々しい衣服をまとふ。大きな眼は蓮花のよう。手にきんま

を手にしている。(身体に)白檀を塗り、腕輪をほめ、冠をつけている。Pramatha や Gaṇeśa 神など彼を讃えている。以上 megharāga の眷属。

rāga の 疑似音調

omkaram vacasā nijena surabhīpakṣasvarair-bhairavam bhṛṅgo gāyati  
mālakauśikam-ajā hindolarāgam pīkaḥ |

saptārcis-tv-atha dipakam punar-ibhaḥ śrīrāgam-ambhodharam keṭī  
kukuṭako vasantam-ahinā tv-ābhiriṇī gīyate || 98 ||

香あり羽根の音 (svara) によって、蜂が、本具の言語として om 字を具えた bhairava を歌う。幹が mālakauśika を、カマコ - の hindola を (歌う)。火 (七音者) の dipa を、木象の śrīrāga を、孔雀の megha (ambhodhara) を、鳥の vasanta を、蛇の ābhiriṇī を歌う。

vārākaḥ punar-eva guṇḍagirikām [fol. 17-b] gaudim tathā gardabhaḥ  
sindhūm gāyati ghoṭako 'navaratam cakridrṣtam bhairavī |

bhūyo bhūrī 'pi māsayāsthāsamaya-ity (?) āsāvarīm cātakam koṭī  
guṇḍamalāram-eva viḡadam bhekhaḥ samā bhāṣate || 99 ||

野猎の gundagiri 是, 驢馬の gaudī 是, 馬 (ghoṭaka) の  
sindhu (saindhava) 是, 断之牛をく車を引く牛の bhair-  
rari 是歌)。 (不明) cātaka 鳥の āsāvarī 是, kokī (カ  
ウコ) の gundamalāra 是, 蛙の vigada 是話す。

mallāraṃ paribhāṣate hi satatam yantram hayāris-tathā vairāṭim ca  
dhānaśrīyaṃ ca śāsakam sāverikāṃ kukurāḥ ।

ākhus-ca-agaḍam-ekalocanakhago rāmaṃ ca kumbhāmbhasodharā

kumbham-ato bruvanti jaladā jālandharam garjjitaiḥ ॥ 100 ॥

マシム (yantra) の, 常は, mallāra 是, 象の vairāṭi  
是, 鬼の dhānaśrī 是, 犬の sāverī 是話す。鼠の agada  
是, 一目鳥 (! ekalocanakhaga) の rāma 是, 水瓶の  
流れる水が kumbha 是, 雷鳴を伴う雲の jālandhara  
是話す。

prāyaḥ śansati gurjjarī mṛgavadhūr-velāvalam hārīto haṃso vai  
lalitam ca sārāsegaṇo bhrūte 'nisam sorathim ।

kuntalam citragalah kalānkalaravaḥ kāliṅgarāgaḥ fathā kirah

khokhararāgam-eva lāhulam [fol. 18-a] hemadrijo mūsakah ॥ 101 ॥

通常, 雄鹿の gurjjarī 是讚之, 鳩の velāvala 是,



kamsa 馬の *lalita* 是, 鷲の *sorathi* 是, 常 = 是, 語 3。  
 citragala (?) の *kuntala* 是, 雜踏の音が *kālinga* 是,  
 鷲或鳥の *khokhara* 是, スノ - ム山ノ鼠の *lālula* 是 ( 語 3 )。

*chuchudary-avi (?) candrabimbam-atho dolo vibhāṣam kramair-maujjā-*  
*rī paṭamañjarī ca naditā mārur ca vṛkṣāśugah |*

*udgātām (?) ca vilodamānadahitah kvāno vadet sāgarām nirnārah*  
*pramadena rāmagirikām gādham pīkah pañcamam || 102 ||*

麝香鼠の *candrabimba* 是, 軋 是 3; 3 = の *vibhāṣa*  
 是, 猫の *paṭamañjarī* 是, 木の鼠の *māru* 是 語 3。  
 牛乳の攪拌の (*guṇa* -) *sāgara* 是, *nirnāra (?)* の, 熱狂  
 的 是, *rāmagirī* 是, カノ - ム 是, 盛 是 =, *pañcama*  
 是 語 3。

*kedāram hūnacakram-eva nitarām ketus-tathā varvalam he-*  
*mālam ninado bhavīti rabhasā vahnyambuyogodbhavaḥ |*

*mevādām khala khālvadhāvanaravo haṛṣam pravāhāmbunah śrīkhaṇḍa-*  
*śya śilānigarṣaṇa vidhir brūyāt sadā campakam || 103 ||*

kūna 人の 輪の *kedāra* 是, 旗の盛 是 = *varvala* 是,

火と水が接した時に生じる音が hemāla と熱烈しく  
 語る。石臼をこする音が mevāda を、流れる水  
 の harṣa を、白檀を砕く〔音か〕 campaka と語る。

gāyeyuś-calanūprāṇi kusumam tape ghr̥te saḥkkulī deśākham  
 saradhākulam madhum-atho kañje sthito mādhamam ।

bhr̥ṅgo māśākamardanam ca śilayā baṅgālarāgam punaḥ kho-  
 ddī [fol. 18-b] no bhramaram br̥avīti madhupas-tv-ānandakam  
 gosutaḥ ॥ 104 ॥

揺れる足環の kusuma を、心夕 - と熱烈した時の  
 saḥkkulī (?) の deśākha を、蜂の群の madhu を、蓮花  
 に止ってゐる蜂の mādhamam を、石で豆を砕く〔  
 音〕の baṅgāla を、空中を飛ぶ蜂の bhramara を、  
 子牛の ānanda と歌う。

chudraḥ pāthasi durduraś-ca kamalam miśṭhāṅgakam śarṅkarāpāke  
 vakti hi candrakāmsam-ataḥ pāke haridrā tathā ।

dugdham cotkalitam kṛśānuśikhyā śubhrāṅgarāgam vaded-dhārā-  
 bhraśya ca varddhanam khapatatī dhenus-tathā maṅgalam ॥ 105 ॥

水中の chudra(?) 蛙の kamala を、砂糖を煮る時の

〔音〕 candrakāṃsa ㄟ 話す。炎で沸かす牛乳  
の śubhrāṅga ㄟ, 驟雨が降る時の〔音〕 varddhana  
ㄟ, 牛の maṅgala ㄟ 話す。

nandaṃ roditi jātakas- ca gavadam [gaudam] brūte niśam kesarah  
pāko 'nasya ca mālavam khalu vinodam ratnakāvedhanaḥ |  
gāmbhīram makaro 'vadhūtam-anilaiḥ karṇātikām-amśukam sārāṅ-  
gam svanito mahān-nīpatitah śailād-adho vāriṇaḥ || 106 ||

赤子の nanda を出し、夜中に、雌獅子の gauda ㄟ,  
食物を煮る〔音〕の mālava ㄟ, 宝石に孔を穿  
ける〔音〕の vinoda ㄟ 話す。マカウ鳥の gambhira  
ㄟ, 風をほろんだ布の karṇāṭī ㄟ, 岩から落ち  
る滝の大きな音の sārāṅga ㄟ (話す)。

punṅākī sthāravārivegaminade piṅḍāpiśān-niḥsvane baṅgālī khalu  
dhātugharṣaṇarave ca-aste nataḥ sarvadā |  
andhreyi-iva (āndhrālī-iva) śṛṅgālahūtībhavane (fol. 19-a) kāṃsyā-  
rave kānāras-tailaṅgī punar-eva santatatayā śabde ca śāṅgāyasaḥ  
|| 107 ||

流水の音は punṅākī, 土塊をすり碎く音は baṅgālī,

鉛石を砕く音に *naṭa* は、常には、在る。山犬の  
吼える場所には *āndhrāṭi*、金属の音には *kānara*、石や  
鉄の音には *tailāṅgī* は、常には、〔在る〕。

*kāmodī karakaṅkaṇodbhavarave snehā vapurmardane koṅkaṅy* ( *kaṅkaṅy* )-*asti* *ki kācakarmaṇi nade sindhūrapākārave* |  
*sindhūrī tv-atha vastradhāvanaśilāsvane sadā śaṅkaro vasantī*  
*vanakukūṭīkalarave tōḍīm-ulūko vadet* || 108 ||

手の腕輪から生じる音には *kāmodī* は、身体をこす  
る時は *sneha* は、さらす仕事の時音には *kaṅkaṅī* は、  
鉛丹を熱する時の音に *sindhūrī* は在る。常には、  
洗濯石の音には *śaṅkara* は、野生の鶏の低い声の  
中には *vasantī* は〔存在する〕。ふくろが *tōḍī*  
を語る。

*kalyāṇam kila kālikā-atha suhaviṁ sammarjane yaḥ svano*  
*gundam gāyati bhṛśam rājavihagaḥ kachelikāṁ kacapaḥ* |  
*gandhārīm-atha khañjanaḥ kanakajam sūtram tathā śrīkathīm-*  
*ajye devagiri vādanti payasas-tapte galadbindavaḥ* || 109 ||

鷲が *kalyāṇa* を、掃除の時音に *suhavī* を、*rāja-*

(93)  
 vihaga (王鳥) が gunda を, 亀が kacheli を歌う。  
 鶺鴒 (khañjana) が gandhāri を, 金の糸が śrīhathī を  
 歌う。またギーを熱した時に 1 たり落ちる  
 ミルクの雲が devagiri を話す。

### 結語

yuktām gāyati yo naro 'navaratam rāge 'nyadīyam vadhūm-anyas-  
 min khalu ca-anyadīyatānyam kāle 'py-anukte tathā |  
 prāgo gāti [fol. 19-b] bhayānakam sanirayam sarve dinānte  
 śubhāḥ khyātāḥ putravadhūkulena sahitā rāgās-tu kaiścid-  
 budhaiḥ || 110 ||

人間が, 断之ず, rāga において, 他人の妻を,  
 また特別な他の時に, 他人の息子を歌い, 普  
 通, 悲しみ, 恐怖に至る故に, 息子や妻たり  
 と共に, 美しい rāga が, 或る賢者たりたりによ  
 て, 説かれた。<sup>(94)</sup>

brahmā yena vimokito madhuripuḥ śakraḥ śivavallabho ga-  
 ndharvāsura yakṣarākṣasasurā vidyādharaḥ kinnaraḥ |

siddhāḥ pañcajanā vikaṅgamapasūraṅgā mrgā jātakam trailokyam

nikhilam karotu satatam rāgaḥ sa vo maṅgalam ॥ 111 ॥

それによつて, Brahmā, Viṣṇu, Indra, Śiva, Gandharva, Asura, Yakṣa, Rākṣasa, Sura, Vidyādharā, Kinnara, Siddha, 人間, 鳥, 動物, 蛇, 鹿が陶酔する, その rāga は三界のすべての生物に幸運をなしたまへ。

### 王と作者の系譜

pravīreṇa sumudritam parikhayā samvesthitam durgam [10-] ke

so'yam-acīkaran-nijabhujair durgam harīyāhvalam |

tasya-adho nagarī vibhāti vipulā srotasvatī sannidhau tatra-

abhūt prabalāḥ purā kṣitibhujām śastā nṛpaḥ sūravā ॥ 112 ॥

勇者はより印をつけられ, 堰をめぐり世に城塞

を, 自身の腕により, この世に作らしめた。

この城塞は <sup>(95)</sup> Harīya といい名である。城塞の下

に, 大河を具えた都府があり, その近くは強

固な町があった。王たちのうち, sūravā が最

も勝れたといふ。

tasyām-asti narendravanditapadas-tasyātmajo virajit (tat-) sūnah  
 kha (fol. 20-a) lu jā(yā)ṭavendranrpatih sūro dhr̥ḍhah sāgare |  
 prāyo hasthirangaghoṭakabhuvō dārum duijebhyaḥ kṣamaḥ kurvan  
 rājyamarātibhīti (ra)khitām prthvīm-imām pālāte || 113 ||

この町に、彼の息子で、大王が足に礼拝した  
 Virajit がいた。その息子が、実は、Jā(yā)-ṭava  
 大王である。彼は勇者であり、大海において  
 不動であった。バラモンたちのために、正し  
 く、象や黄金の馬の寄進をなして、彼は、  
 領内に恐怖なく、この地を護った。

tadbhūpasya purohitena sudhiyā śrīkṣemakarṇena vai vaṃśottamam  
 śrīmahesāpāthasutena-eṣā navinādhunā |

śake bāhunavābhdicandrasakite pakṣe samāsīkṛtā śukle śrava-  
 ṇamāsi pakṣatikuje śrīrāgamālā śubhā || 114 ||

この王の宮廷僧であり、賢者であり、最上の  
 家系として、śrīmahesāpāthaの息子のśrīkṣemakarṇa  
 によつて、この最新として、輝く Rāgamālā は  
 śaka 曆 1492年 (1570 A.D.) śrāvāṇa 月の白分の kuja  
 星の日に完成された。

## 祈願文

yāvat-tiṣṭhati rāmarāvaṅkathā yāvad-raviścandramāḥ yāvan-me-  
rumahīpayodhayamunāgaṅgādharo jāhnavī ।

sarvaṃ vyāpya samudramudritamahicakraṃ manorañjanī (10-)ke tā-  
vad-iyam hi tiṣṭhaturān śrīkṣemakarnodī (fol.20-6) tā ॥ 15 ॥

すなわち大海に印づけられた地輪を得て、Rāma-  
Rāvaṇaの物語が存在し、太陽と月が存在し、  
-ル山の泉、Yamunā河、大海、Gaṅgā河が存在  
する限り、この世に、心を彩るŚrīkṣemakarnaの  
述へた[Rāgamālā]が存在せんことを。

## 奥書

iti śrīmaheśapāṭhakātmakaśrīkṣemakarna pāṭhaka jā[cyā]  
ṭava bhūpati sukhārthaviracitā rāgamālā samāptāḥ ॥ śubham-  
astu ॥

以上、Maheśapāṭhaの息子 Śrīkṣemakarna pāṭha の Jā[cyā]  
ṭava 王の安樂のためには著わした Rāgamālā は終



る。幸あれ。

【Ⅲ】 Pundarikavittihala - Rāgamālā .

本書は N. G. Rātāñjanakara & G. G. Barve 両氏の編集  
(96)  
による Devanāgarī 文字による刊本があり, V. N.  
Bhatkhande, H. A. Popley といふ今世紀初頭の東  
(97)  
西のインド音楽研究者が本書に言及していて,  
早く知られたといふ音楽論書の一つである。  
しかし, 刊本には序文や目次を欠き, 使用  
の写本についての説明がないうちで, 本書に關  
する情報は乏しい。

本書の成立は 1576 A.D. であることが学界の通  
説であるが, 刊本に於いて, 写本 (Bikaner 515,  
Poona 646/1899-1915) に於いても確認することは  
(98)  
できないが, Poona (1026/1884-87) 写本の奥書によ  
って, 本書の成立年代を確認することはでき  
(99)  
る。

本書は 212 偈より構成されている。刊本に  
は偈番号がないが, 写本 Poona (1026/1884-87) (A本

と呼ぶ] は第 1 偈より始まり, Poona (646/1899-1915) [B 本と呼ぶ] は第 44 偈より始まり第 254 偈に終る故, 二者を比較して偈の番号を確定するに出来る。以下, この偈番号に従って, 本書の内容を紹介する。

- ・ 1 - 2 偈は恭敬文と著作目的。
- ・ 3 - 122 偈は *nāda*, *śruti*, *svara*, 等と音楽音 (3-26); *grāma*, *murchanā*, *tāna* 等と音楽型式 (27-41); *prastār*, *kūtatāna*, *naṣṭa*, *uddiṣṭa*, *varṇa*, *alanikāra*, *gamaka*, *sthāyā*, *ālapiti*, *sthāpana* 等と演奏上の項目 (42-122)。
- ・ 123 - 132a 偈は *rāga* の定義 (123), *rāga* の種類 (124-128), 6 *puṣpa-rāga* とその起源 (129-132a)。
- ・ 132b - 144 偈は *rāga* の組織
- ・ 145 - 211 偈は観想図像。
- ・ [212] 偈は結語。

刊本と写本 B は偈数と内容は一致しているが, 写本 A は音乐的項目の省略が多い。しかし三者共に観想図像に関しては完全である。

Kṛemakarna の Rāgamālā が 6 puruṣa-rāga に対して 5 妻と 8 息子を並べてゐるのに対して、本書の rāga 組織は 6 puruṣa-rāga に対して 5 妻と 5 息子を並べて、基本的には、同じ型の rāga 組織である。

両書は同時代の成立であつて、Mughal 王朝 Akbar 帝 (r. 1556-1605 A.D.) の治世である。Akbar 帝が音楽に勝れ、専門の音楽家を凌ぐ知識を持ち、多くの rāga を創つたことは Abūl-Fazl が *Ā-in-i-Akbar* (1595-6 A.D. 成立) に述べているところである。<sup>(100)</sup> Abūl-Fazl は当時の音楽論について述べている。この叙述の中で、rāga の組織に関して興味あることが言及されているので、この点に限って触れておきたい。

Abūl-Fazl は rāga 組織について、6 rāga と 36 rāgini の 42 rāga 組織を表示している。6 rāga は通例の śrī-rāga, vesanta, bhairava, pañcama, megha, nāṭanārāyana であるが、各々の rāga の rāgini は異なる。更に彼は 6 rāga と 30 rāgini の 36 rāga 組織に言及し、6 rāga の 4 を挙げてゐる。その名前は Saigītaderpaṇa と伝える Hanuman の rāga 組織の

6 rāga と一致する。更に他の 36 rāga 組織として、6 rāga が śuddha-bhairava, hindola, deśakāra, śrī-rāga, śuddha-nāṭa, nattanārāyana の組織を紹介している。この 6 rāga を持つ 36 rāga 組織は、筆者の知る限りでは文献上見られず。しかしこの 6 rāga は本書の 6 rāga と一致する。したがって、あえて憶測すれば、本書の rāga 組織はこの 36 rāga 組織に各々 5 息子の rāga 30 を加えたものといえる。現在のところ、息子の rāga を加える rāga 組織の成立については不詳であるが、Akbar 帝の時代に流行したものと考えられる。

以下、本書の観想図像を紹介するのであるが、123 偈の rāga の定義から始めることにしたい。

### rāga の定義

yo 'sau dhvaniśeṣas-tu svaravarṇavibhūṣitaḥ |

rañjako janacittānām sa rāgaḥ kathito budhaiḥ || 123 ||

svara の varṇa に 5 と飾られた特別な音 (dhvani 音

響) が人々の心を彩るもの, それが rāga である, と賢者たちは述べている。

### rāga の分類

svarānām kramabhedāc-ca nānāgamakabhedataḥ ।

śāḍavaudava bhedāc-ca sampūrṇā (d-iti) bhedataḥ ॥ 124 ॥

grahāṃ śaṅyāsa bhedāc-ca nānādeśajanodbhavāḥ ।

anantā rāgabhedāḥ syu rūḍhadeśasvarābhidhāḥ ॥ 125 ॥

svara (音階音) の順序, 種々の gamaka (修飾音), śāḍava (6音音階), audava (5音音階), sampūrṇa (7音音階) の分類により, graha (出発音) と śaṅyāsa (主音) と nyāsa (終止音) の分類により, 種々の地の人々から生れ, 無数の rāga の分類はあり, 誕生した土地や svara の名前がある。

śuddhaśālagasamkīrṇā iti rāgas-tridhā punaḥ ।

na-nyopajvinaḥ śuddhā kevalā rañjanātmakāḥ ॥ 126 ॥

chāyāntareṇa raktā ye rāgāḥ śālagasañjñakāḥ ।

mūlachāyāntarād-raktā rāgāḥ saṅkīrṇakāḥ iti ॥ 127 ॥

anantatvāt-tu rāgānām pratyekam vaktum-akṣamaḥ ।

keṣāṃcin-matam-āśritya kati rāgān-vadāmy-aham || 128 ||

すなわち、rāga は śuddha, sālaga, saṃkirṇa の三種である。śuddha は他に依る = となく、全く、人の心を彩る = と (rañjana) に本質とし、sālaga とはい、rāga は他の影 (chāyā) により、音楽の喜 (rakta) (色具えるもの) と、saṃkirṇa は根本的なものと、他の影により、音楽の喜 (色具えるもの) と (いわれらる)。rāga は無数である故、その各々に對して説明することは不可能である。私は幾人かの人々の意見に基づいて、いくつかの rāga について述べる。

### 6 rāga とその起源

śuddhabhairavahindolau deśikāras-tataḥ param |

śrīrāgaḥ śuddhanāṭās-ca natṭanārāyaṇas-ca sat || 129 ||

rāgā evaṃ mayā-ākhyātās-taddhetuḥ kathyate 'dhunā |

sadyojāto dbhavaḥ śuddhabhairavo vāmadevataḥ || 130 ||

hindolo deśikārākhyas-tv-anaghāt-tatpuruṣataḥ |

śrīrāgaḥ śuddhanāṭākhyo 'pi-īśānavadenodbhavaḥ || 131 ||

natṭanārāyaṇa rāgo giriḥ mukhajas-tataḥ |

( rāga 12 ] śuddhabhairava ८ hindola , 12 12 deśikāra ( deśakāra ) , śrīrāga , śuddhanāṭa , nattanārāyaṇa の 6 である。

以上の通り , 私 は rāga を 述 へ た 。 以下 の 起 源 ( 原 因 ) に つ い て 私 は 述 へ る 。

śuddhabhairava は sadyojāta ( śiva ) より 生 れ , hindola は vama deva より 生 れ , deśikāra は anagha ( ? aghora ) より 生 れ , śrīrāga は tatpuruṣa より 生 れ , śuddhanāṭa は īśāna の 12 より 生 れ , nattanārāyaṇa は giriajā ( Pārvatī ) の 12 より 生 れ た 。

### rāga の 組 織

- eteṣāṃ vanitāḥ putrāḥ pañca pañca kramāt brūve ॥ 132 ॥  
dhannāsi bhairavi ca-eva saindhavi māravī tathā ।  
āsāvari-iti pañca-etaḥ śuddhabhairava subhavaḥ ॥ 133 ॥  
bhairavaḥ śuddhalalitah pañcamah parajas-tathā ।  
baṅgālas-ca-iti pañca-ete śuddhabhairava sūnavah ॥ 134 ॥
- bhūpālī ca varāṭī ca toḍī prathamamañjarī ।  
turuṣkatodīkā ca-iti hindolasya hi nārikāḥ ॥ 135 ॥  
vasantah śuddhabaṅgālah śyāmah sāmantakas-tathā ।

- kāmodas-ca-iti pañca-ete hindolasya sutā amī ॥ 136 ॥
- rāmakrī bahulī deśī jayataḥ śrīś-ca gurjarī ।  
deśikārasya pañca-etā vikhyātāś-ca varāṅganāḥ ॥ 137 ॥  
lalitāś-ca vibhāsaś-ca sārāṅgas-trivaṅsas-tathā ।  
kalyāṇa iti pañca-ete deśikārasya sūnavah ॥ 138 ॥
- gaudī pādī guṇakarī nādarāmakriyā tathā ।  
guṇḍakrī-iti pañca-etāḥ śrīrāge hi samāśritāḥ ॥ 139 ॥  
ṭakkaś-ca devagāṅdhāro mālavah śuddhagaṇḍakāḥ ।  
karnāṭabaṅgāla iti śrīrāgasya tanūdbhavāḥ ॥ 140 ॥
- mālavah śrīś-ca deśāksī devakrī madhumādhavī ।  
āherī ca-iti vikhyātāḥ śuddhanāṭavarastriyaḥ ॥ 141 ॥  
jijāvantaś-ca sālāṅgo nāṭah karnāṭakas-tataḥ ।  
chāyānāṭo hamirādir-nāṭo nāṭasya sūnavah ॥ 142 ॥
- velāvalī ca kāmbojī sāvelī suhavi tathā ।  
saurāṣṭrī ca-iti pañca-etā nāṭtanārāyaṇastriyaḥ ॥ 143 ॥  
malhāragoṇḍakedārāḥ śaṅkarābharanas-tataḥ ।  
vihāgadaś-ca-iti sutā nāṭtanārāyaṇasya ca ॥ 144 ॥
- rāga । śuddhabhairava .  
#  
♀ dhannāśī, bhairavī, saṁdhavī, maravī, āsāvārī .  
♂, 子 bhairava, śuddhalalita, pañcama, paraja, baṅgāla.



- rāga 2. hindola  
 妻  
 bhūpālī , varāṭī , todī , prathamamañjarī , turuṣka-  
 todī .  
 息子  
 vasanta , śuddhabaiṅgāla , śyāma , sāmantaka , kā-  
 moda .
- rāga 3. deśikāra  
 妻  
 rāmakrī , bahulī , deśī , jayatśrī , gurjarī .  
 息子  
 lalita , vibhāsa , sārāṅga , trivāṇa , kalyāṇa .
- rāga 4. śrīrāga  
 妻  
 gaudī , pādī , guṇakarī , nādarāmakrī , guṇdakrī  
 息子  
 ṭakka , devaḡāndhāra , mālava , śuddhagaṇḍaka ,  
 karnāṭabaiṅgāla .
- rāga 5. śuddhanāṭa  
 妻  
 mālavaśrī , deśāksī , devakrī , madhumādhavī , āherī .  
 息子  
 jijāvanta , sālaṅga , karnāṭanāṭa , hemīranāṭa , chāyānāṭa .
- rāga 6. naṭṭanārāyana  
 妻  
 velāvalī , kāmbojī , sāverī , suhavi , saurāṣṭrī .  
 息子  
 malhāra , goṇḍa , kedāra , śaṅkarābharāṇa , vihā-  
 gada .

観想図像<sup>(101)</sup>

1. śuddhabhairava の妻と息子

śuddhabhairava

atha-esaṃ lakṣaṇam vakṣye mūrtiyābharanapūrvakam ।

candranetrādikāṃ sañjñāṃ jñāyatām lokateḥ sudhīḥ ॥ 145 ॥

さて、姿や飾りに基つて、= 此は rāga の持相  
を私は述べよう。(śuddhabhairava を) candranetra  
との名前では、世間的には、賢者は理解して  
ゐる。

sadyojāto dbhavo 'yam prathamagatiganiḥ satriko 'rikḥ kapa-  
rdī datte sūlakapālam sitataravasano bhasmadehas-  
trinetrāḥ ।

kanthe śriṅge ca nīlam śravaṇayugalato mudrike candra-  
jūto haimante 'pi prabhāte vilasati vṛṣbho bhairavaḥ śud-  
dhapūrvāḥ ॥ 146 ॥ iti śuddhabhairavaḥ । ॥

śuddhabhairava は sadyojāta (śiva 神) より生れた。  
カ音と = 音が変音 (1 gati; 1 śruti 高まる) で  
あり、サ音は trika (去聲音, 主音, 終止音の

三種類の音) である。リ音と欠く。彼は束髪を  
 結い、<sup>(102)</sup> 戟と髑髏を持ち、白衣をまとひ、身体  
 に灰を塗り、三眼である。喉の毒素は青い。<sup>(103)</sup>  
 両耳のしるしは耳飾り (mudrika) (か無れ)、髻に月  
 と飾る。牛である彼は冬の夜明けに現われ  
 る。以上 *śuddhabhairava* 1。

*dhannāsī*

*sarvāṅge bhūṣaṅgādhyā dhaniriga vidhugā setrikāś-tāri-*  
*dhābhyām dūrvāśyāmā vicitrāambararacitatanur-dādimi-*  
*puṣpahastā* 1

*netrāntarbhāṣayuktā dhavalasahacarī pūrvajairākanāmnaḥ*  
*paśyantī gītavartmoṣasi bahudhanadā dhanyadhannāsikā*  
*sā* 11 147 11 *iti dhannāsī 2* 11

*dhannāsī* (*dhanyadhannāsī*) は身体の手へては飾り  
 をつけている。ダ音、ニ音、リ音、カ音は 1 *śru*  
 上り (*vidhuga*; 月 = 1)。サ音が *trika* であり、高  
 音位のア音が 2 つある (?) (*tāridhābhyām*)。〔身  
 体は〕 *dūrvā* 草のような緑青色で、美しい衣  
 服を身体にまとっている。手にはさくろや花を

持ち、目尻に流を流し、白牛を連れこゝる。  
 彼女は pūrvajairāka より、早朝、gīta の演奏法  
 を學んでゐる。彼女は富を与へる女である。  
 以上 dhannāsī 2。

## bhairavī

dhannāsī melajātā svarasakalayutā ca-ādimadhyāntaṣaḍjā  
 tanvaṅgī candravaktrā kanakasamatanuḥ śvetavastram dadhānā |  
 bhāle sindūrabindur-vikāsitavadanā sarvaśṛṅgārakādhyā nr-  
 tyantī gīyamānā draviḍajānaratā bhairavī sā prabhāte ||  
 iti bhairavī 3 ||

bhairavī は dhannāsī-mela より生れ、すべこの svara  
 五是之、サ音の初、中、終（去聲音、主音、  
 終止音）である。身体は細く、顔は月のよう。  
 身体は黄金と同じような色をして、白衣をっ  
 けてゐる。顔に鉛丹の具（額飾）をつけて、顔  
 は笑ひ、恋情の情趣に満ち、夜明けには、踊り、  
 歌つてゐる。彼女は draviḍa 人に好まれる。以  
 上 bhairavī 3。

saindhavī

bhairavyā melājātā svarasakalaratā satrikā candravaktrā  
tanvaṅgī padmanetrā vipulasujaghanā mattamātaṅgayānī |  
mandam mandam vadanti bahuvīdhagamakāḥ saindhavī rakta-  
vastrā yuddhe godheśvarānām vimalatarayāsah prārtha-  
yanti sadā sā || 149 || iti saindhavī 5 ||

saindhavī は bharavī mela より生じ、すべての svara  
を好む。その音の trika である。顔は月のようで、  
身体は細く、眼は蓮花のよう。美しい腰は大き  
きく、狂象 (mattamātaṅga) に乗っていると。 "mandam  
mandam" と、多杯を gamaka (修飾音) に与えて、  
歌っていると。赤衣をまとひ、戦場で、將軍た  
ちの争いの辱敬の的である。以上 saindhavī 4.

māravī (104)

candrāsya dīrghakeśī tv-analagatinigā satrikāś-tāridhābh-  
yām hemābhā dīrgharūpā bahuvīdhakusumair-bhūṣita sni-  
gdhanetrā |

mevāḍasya-agrajātā mṛgaśīśunayānī raktavastrām dadhānā  
ca-iśad-dhāsya stuvanti yudhi nṛpatigaṅgān māravī sa

sadā-eva || 150 || iti māravī 5 ||

māravī は顔は月のようであり、髪は長い。二音と  
 か音は 3 śruti を得 (anala = 火 = 3) , 七音は trika  
 で、高音位のカ音が 2 つある(?) (前出)。 (   
 身体は黄金のようなく色) で、背丈は高く、  
 多くの花を飾っている。眼は美しく、<sup>(105)</sup> mevāda  
 の頭から生れ、子鹿のような瞳で、赤衣をま  
 といて、少し笑っている。彼女は常に、戦場で、  
 王たちの軍を讃えている。以上 māravī 5 。

āsāvari

gāndhāro'tra-agnigah syāt-prathamagatiganir-mādimadhyāntapū-  
 rnā tenvaṅgī śyāma-varnā kardhṛtamukulā sarvaśṛṅgārayuktā |  
 rambhāyāḥ kānaneṣu priyavimalayaśo'dhyāpayantī sukeśī  
 gandharvair stūyamānā priyaresakarunā śśvad-āsāvari  
 sā || 151 || iti āsāvari 6 ||

āsāvari は、か音は 3 śruti (agni = 3) とあり(?)、か  
 音と二音は変音である。七音は初・中・終音  
 で、7 音音階。

身体は細く、緑青色で、手には壺を研ぎ、す

べて恋情の情趣を具えてゐる。rambhā (バ + ナ)  
の森で、愛人に対する浄土の尊敬を得せし  
めつつ、gandharva たちにより讃えられてゐる。  
彼女は髪は美しく、常に、愛の情趣のため  
悲しんでゐる。

bhairava (以下息子)

bhasmāṅgaḥ kaṅṭhaśringī śravaṇayugalataḥ śaṅkhamudre  
dadhānaḥ pādatrāṇe pravāle phaṇipatisujaṭābaddhamauli  
pramattaḥ ।

ujjālasyaṅupāyī paṭutara vacanaḥ kinnarīvādyamānaḥ pārṇo  
dhādyanta madhyas-tv-analavidhuganir-bhairavaḥ pūrveyāme ॥

152 ॥ iti bhairavaḥ 7 ॥

bhairava は身体に灰を塗り、首に毒を具えてゐる。  
両耳に螺貝の耳飾りをつけ、両足に草葉を履き、  
頭には蛇を飾り、爪立派な束髪を結ってゐる。  
酒に酔つてゐて、吐き、ぐっぐりとしてゐる。  
語り上手で、kinnarī (樂器の一種) を弾いてゐる。

7 音階で、ガ音が初・中・終音である。

カ音は 3 śruti , = 音は 1 śruti である。夜明け  
に〔歌われし〕。又上 bhairava 7。

*śuddhalalita*

*sāṃśadyantah pravīṇah śucitara lalito mālavī melajāto*  
*bhāle dhatte sabindum kanakasamanibham śubhravestram*  
*dadhānah |*

*gaurāṅgaś-campamallī kusumabharaśirāḥ pañcakāḅṅgo vilāsi*  
*kāmī tāmbūlahastah pratidinam-upasi prārthakeḥ kaṇḍitānām*

|| 153 || *iti śuddhalalitah 8 ||*

*śuddhalalita* は、カ音の主音、出発音、終止音  
である。賢く、淨いので美しい。mālavī-mela か  
ら生れた。顔に黄金色の額飾 (bindu) をつけ、  
白衣を穿てい、身体は黄色く、頭は campā や ma-  
llī (ジ、スミン) の花をつけ、眼は蓮花のよ  
うである。彼女は快活で、愛らしく、手にき  
んぎょを持ってゐる。毎日、夜明けに、恋人に  
(106)  
背向した女たち (kaṇḍitā) を魅める。以上 *śuddha-*  
*lalita 8* 。



pañcama

śyāmaṃ tāmbūlakāṣṭhaṃ karadhṛtakumudaṃ māravimelajātaṃ  
 patriṃ cārisureśaṃ pikamṛduvacanaṃ venukam pītavastram |  
 liptāṅgaṃ yakṣapaṅkaiḥ śirasi sumukutaṃ bālacandrārkaḥālam  
 gāyanti-ika-atra nāke sekalasuravarāḥ pañcamam suprabhāte ||

154 || iti pañcamah 9 ||

pañcama は (身体は) 緑青色で、手にさんまを  
 持ち、紅蓮花を持つている。māravimela より生  
 れた。猿師の神(?)であり、言葉はカッユウの  
 ように優しく、笛のよう。黄衣をまとい、身  
 体は yakṣa 青を塗り、頭は立派な冠を戴き、額  
 に新月を飾っている。天界で、すべての神々  
 が pañcama を、夜明けには、歌う。以上 pañcama 9.

paraja

setriḥ sampūrṇako'sau dviividhugatiganis-tālakāṣṭhaḥ subhāryaḥ  
 praṭṭhe painākapānir-bahuridharacitair-bhūṣanaiḥ śobhamānaḥ |  
 gauro dīrghasvarūpī mṛduvacana paraḥ sarvalokopakāri  
 nityaṃ yācyah sadā-aher-niśi ca parajo bhāti caagrre nṛpā-  
 nām || 155 || iti parajah 10 ||

paraja はサ音が trika で、7音音階で、カ音が 2  
 śruti, = 音が 1 śruti 高い。背後に tāla (小型  
 のシンバル) を手にした侍者がいる。彼は手  
 に三叉戟を持ち、種々多様な飾りを付けてい  
 る。背丈が高く、黄色で、優しい言葉を奏ら  
 せ、世のすべての者に利益をもたらす。常  
 に、請われて、柳屋の夜毎に (śadā-aher-nisī) 五  
 力士の前に見られる。以上 paraja 10。

baṅgāla

anīyo gaś-ca svarau stas-trinayamagatigau setrikādhyāś-ca  
 pūrṇo vāme pānau sumālam śāsīdharamaṇibhām śbhravestram  
 dadhānah |

baṅgālah pānapātram viśadakanakajam saṅyastāgrabhāge  
 vidvān-saṅgītavedaṁ pathati ca nitatām gadgadaiḥ kampa-  
 bhedaiḥ || 156 || iti baṅgālah || iti bhairavaḥ perivārāḥ ||

baṅgāla は、カ音が終止音で (?), 2 のカ音は 3  
 śruti と 2 (nāyana = 眼 = 2) śruti 高い。サ音が trika  
 で、7音音階である。左手に月のような宝石の  
 立派な輪 (mālā) を持ち、白衣をまとっている。

右手に純金のコウゴを持つ。彼は知恵があり、常に、吃り、震える〔声〕で、音楽の聖典を誦唱する。以上 *baṅgāla* ॥。以上 *bhairava* の眷属！

## 2. *Hindola* の妻と息子

*hindola*

*asmin-rāge bhavetām prathamagatiganī satrika-atra-aripo'sau  
gaurāṅgaḥ pītavāsā ghanakusumavane kṛḍako dolayāne ।  
hindolaḥ strīśahāyaḥ kṛṭakamukuta mukṭāmahākundalādhyāḥ  
prātaḥ kāle śasante vicarati caturō vāmadevābhijātāḥ ॥*

157 ॥ *iti hindolaḥ । ॥*

この *rāga* にあつては、カ音とニ音は変音であり、サ音は *trika* であり、またリ音とハ音とをく〔5音音階〕。

*vāmadeva* より生れた *hindola* は、身体は黄色で、黄衣をまとい、花盛りの森の中で、おらんこに乗って遊んでゐる。女性を連れ、腕輪、冠、真珠の立派な耳飾りを付けてゐる。彼は春の夜明けに活動する。

bhūpālī

jāto malhāramele nigapari (?) rahitā mādimadhyāntarūpā  
nāsāgre svarṇapūṣpam kamalanayanayoh kajjalam kaṇṭha-  
mālām ।

maukteyam bhālamadhye varataratilakam kaikane hastamūle  
raktam vastram dadhānā tv-anavaratamedā yāti bhūpālīkā  
sā ॥ 158 ॥ iti bhūpālī 2 ॥

bhūpālī は malhāra-mela の 5 生れ 氏。 = 音 と か 音  
を (?) 欠き, 2 音 の 初, 中, 終止 音 と の う 型  
式 に ある。

彼女は鼻に黄金の花をつけ, 両眼は蓮花の  
ように, 墨膏をつけ, 真珠の首飾りを掛け,  
額の中央には, 美しい額飾をつけ, 手首に腕  
輪をはめてゐる。赤衣をまとひ, 断えず酔っ  
てゐる。以上 bhūpālī 。

varālī

svāgare svecchayā yā mṛdutaravacenaikḥ krīditā bāliju-  
ñjais-citram vastram dadhānā kusumasukavarī cāmarair-

vijyamānā ।

nānāśṛṅgārayuktā madanasahacārī komalāṅgī sugaulī  
 sāyam pūrṇā triśadjā hy-analagatigani rājate sāvārlī ॥  
 159 ॥ iti varāli 3 ॥

varāli は、思ひまゝ、白毫こ、穏やかな言葉  
 (を話す) 多くの娘達と遊んでゐる。美しい  
 衣服をまゝに、美しい髪に花を飾り、松子に  
 よつて扇をたたく。種々の恋情を具えてゐ  
 て、愛の神 (madana) を友としてゐる。身体は  
 優雅で、美しい黄色である。

7 音階階である、サ音 (śadja) が去聲音、立  
 音、終止音で、カ音とニ音は 3 śruti である。  
 彼女は夕方に輝く。以上 varāli 3。

toḍikā

savye heste sudandī tv-aparakaratale tālayugman dadhānā  
 liptāṅgā candanādyaiḥ suśabaravasanā sarvabhūṣābhīyuktā ।  
 praudhā tāmbūlavaktrā vikasitanayanā mohinī muktacūrṇā  
 pūrṇā mādyantamadyā prathamagatigani s-toḍikā pratar-  
 eva ॥ 160 ॥ iti toḍikā 4 ॥

todikā は左手に立派な棒，右手に一対の tāla を持つている。身体に白檀などを塗り，美しい斑色の衣服をまとい，あらゆる飾りをつけている。彼女は成熟した女性 (praudhā) であり，口はさんまを噛み，眼は微笑し，魅惑的で，粉を撒いている(?)。

7 音音階で，2 音が初・終・中音であり，2 音と 3 音は変音である。彼女は夜明けにく歌われる。以上 todikā 4。

prathamamañjarī

jātā gaudasya mele dhariparirahitā vā-ādimadhyāntapayā  
gaurāṅgī pītastra mṛgamadatīlakam bhālamadhye da-  
dhānā |

haste vīnaikavādyā serasamadhuravāk muktakeśī ku-  
rañjī prītālanikārayuktā prathamapūrvā mañjarī sā-eva ||

161 || itī prathamamañjarī 5 ||

prathamamañjarī は，gauda-mela において生れた。7 音と 3 音を欠き，10 音が初・中・終止音である。

身体は黄色で、顔の中央に麝香の額飾をつけ、手には一竿の *vīṇā* を持っている。言葉は美しく、穏やかで、髪は流し髪で、激情するところなく、常に、愛らしく飾っている。以上 *prathamamañjarī* 5。

(107)  
(*turuṣka*) *toḍī*

*chāyānāṭasya mele prakāṣitaśutanur-mādimadhyānta pūrṇā*  
*gaurāṅgī mūrdhni veṇiṃ kanakamañimayaṃ karna puṣpam*  
*dadhāmā* |

*prauḍhā-īśadraktanetrā yavanaśuvanitāvastrādikāḍhyā*  
*drākṣām pītvā prabhāte vilāsati caturā yavanī toḍikā sā* ||

162 || *itī toḍī* 6 ||

*toḍī* は *chāyānāṭa-mela* において、美しい身体を現わす。7音の初、中、終止音で、7音音階である。

身体は黄色く、頭は弁髪に編み、黄金や宝石の耳飾りをつけている。成熟した女性であり、眼は少し赤く、*Yavana* (外国人、主としてギリシヤ人、イスラム教徒) の立派な女性

の衣服などをまとっている。美しい Yavana の  
女性である彼女は酒を飲み、夜明けに、遊ぶ。  
以上 todī 6。

vasanta (以下息子)

jāto hindola mele svarasakalayutah satrikaś-ca prabhāte  
tv-ārāme kṛdamāno navadalakusumāmoda lubdhāli vṛndah |  
tāmbūlāsyo 'tigauro ratipatisadrśo raktavastrāś-ca sā-  
rddham yośidbhiḥ servavādyā ravarabhāsamahaddhāsyayukto  
vasantah || 163 || iti vasantah 7 ||

vasanta は hindola-mela において生れた。すべ  
の音階音を具え（7音音階）、サ音が trika で  
ある。夜明けに、庭園で遊んでいる。多くの  
蜂が新しい花の香りを求めている。口はきん  
まを噛み、（身体は）非常に黄色く、愛の神  
と同じの赤衣をまとひ、女達と一緒にいる。  
彼はあちやちや楽器の烈しい音のような大声で  
笑っている。以上 vasanta 7。

Suddhabaṅgāla



jātaḥ karnāṭamele svarasakalarataḥ satrikaḥ pūrṇakāyaḥ  
 śubhrāṅgaḥ pītavāsā maṅgana racite kuṇḍale karnayoḥ stah |  
 āste maulau kirīṭam karatakemakalah kuṅkumālpīptadehahaḥ  
 prātar-yācyah pramatto yuvajanasahitah śuddhabaṅgālak'o'sau  
 || 164 || iti śuddhabaṅgālah 8 ||

śuddhabaṅgāla は karnāṭa-mela に おいて 生れた。す  
 べての音階音を好み、サ音が trika で、身体は  
 完全である（7音音階型式）。

身体は白く、黄衣をまとい、両耳に多くの  
 寶石をちりばめた耳飾りをかけ、頭には冠を戴  
 き、手に蓮花を持ち、身体に kuṅkuma を塗って  
 いる。彼は若者を伴をい、酔ってゐる。夜明  
 けには、請われて、〔現われる〕。以上 śuddhabaṅgālah.

śyāma

kākalyā ca-antareṇa prakāṣavaratanuḥ satrikaḥ pūrṇarūpaḥ  
 śyāmāṅgaḥ pītavāsā madhuratararavaḥ kampabhedair-  
 vicitraih |

kaṅṭh ratnaikamālo viracitatilakah kuṅkumair-bhālemadhye  
 rāgaḥ śyāmābhīdhānas-tv-anavaratanadaḥ kāmīnīnām

vinode ॥ 165 ॥ iti śyāmaḥ 9 ॥

śyāma は kākali や antara の音 (共に śruti と高め  $\bar{r}$  =, か音) に よつて, 立派な身体 (型式) を現わす。サ音が trika で, 完全な姿 (7音音階) を具えてゐる。

身体は緑青色で, 黄衣をまとい, 美しい音の震之 (kampa bheda;  $\bar{g}$   $\bar{r}$   $\bar{u}$   $\bar{t}$   $\bar{t}$   $\bar{r}$   $\bar{e}$   $\bar{o}$ ) に より, より優しい音 (rava) を具えてゐる。首に一条の宝石の首飾りを掛け, 額の中央に kuṅkuma の額飾りを飾つてゐる。彼は愛人たつとの樂しみにあつて, 素晴らしい子孫を与へる。以上 śyāma 9。

sāmanta

karṇātākhyasya mele prakatavaratanuḥ pūrṇarūpas-trisadjaḥ  
padmāṅghriḥ padmanetraḥ śravaṇayugalataḥ kuṇḍale dve  
dadhānaḥ ।

vibhran-maulau kirīṭam bahukusumamayam kaṅṭhamālīm  
suvastram prātaḥ kāle cakāsti prabala gamakavān praudha-  
sāmantarāgaḥ ॥ 166 ॥ iti sāmantarāgaḥ 10 ॥

sāmanta-rāga は karnāṭī-mela において、立派な身体を現わす。7音音階で、サ音 (śadja) が trika である。

手は蓮花のよう、眼は蓮花のようで、両耳に耳飾りをつけている。頭は冠を戴き、多くの花で造った首飾りを掛け、美しい衣服をまとっている。彼は強い gamaka (修飾音) を具え、成熟した男で、夜明けに、光輝く。以上、sāmantarāga 10。

### kāmōda

kāmōdah kāmārūpī dhṛtamukuta-karah śvetavastram dadhānah  
 kastūrībindubhālah kusumamukutah kanthamālādīkādhyaḥ |  
 vaktrā<sup>sa</sup> dvyāṅgyavākyaṃ yavajanasahito vetrāhastah pratāpī  
 sampūrṇah satriko' sau vidhugatigarikaś-ca-aparāhne ca kāsṭi ||

167 || iti kāmōdah || 4 iti hindolaparivārah 2

kāmōda は姿美しく、冠を手には持ち、白衣をまとっている。額には麝香の額飾 (bindu 集) をつけ、花の冠を戴き、首飾りを掛けている。彼は dvy-āṅgya (?) の言葉で話し、若者を連れ、杖を手

に、威厳がある。

彼は 7 音階で、サ音が trika で、カ音とニ音は 1 śruti 高い。午後に現われる。以上 kāmōda 10. 以上 hindola の眷属。

### 3. Desikāra の妻と息子

desikāra

jāto 'ghorākhyavaktrāt triḡatiganigamāḥ satripūrṇa-atra rāḡe  
raktāṅgaḥ padmanetraḥ sitagajagamano bāsvarojaḥ sya mitram |  
kaṅthe muktaikamālo dhṛtamukutaśīrāś-citravāsāḥ sakhaḡo  
madhyāhne yodhasaṅghe sulalitaśīśire desikāraś-ca kāśti ||

168 || iti desikāraḥ | ||

desikāra は aghora の口から生れる。カ音とニ音は 3 śruti である。サ音が trika で、ニの rāḡa で、7 音階である。

身体は赤色で、眼は蓮花のよう。白象のようを歩みで、bāsvaroja (?) の友である。首に一条の真珠の首飾りと掛け、頭には冠を戴き、美しい衣服をまとひ、剣を持つてゐる。彼は非

常に楽しい (快晴の) 冬の昼に, 戦争に現われ  
た。以上 desikāra 1。

rāmakrī

pūrṇendvāsyā sumuktāmanītaralagalā nīlavāstram dadhānā  
kūrpāsam raktavarṇam karacaṇayuge kaikaṇe nūpuraṁ ca |  
rāmakrī cañcalākāṭī vimalataragiram ca-āraṭantī vidagdha  
śṛṅgārādhyā trisadḥā tv-analagatigantī rājate sarvadā-eva ||

169 || iti rāmakrī 2 ||

rāmakrī は顔は満月のよう。首に真珠の首飾り  
を掛け, 青衣をまとっている。赤色の胴衣 (  
kūrmāsa) をつけ, 手は腕輪, 足は足環をつけ,  
眼を動かかし, 淨らかな歌 (gir) を歌っている。  
彼女は美しく, 恋情は満ち, 声音が trika で,  
か音と = 音は 3 śruti である。彼女は常に輝い  
ている。以上 rāmakrī 2。

bahulī

rāmakrī melahṛṣṭā nigaperirahitā va-api mādyantamadyā  
tanvaṅgī śyāmavarṇā viluṭhita kabarī savyahaste sudandī |

tāmbūlāsya pragalbhā maraḥaṭhavanitā vastrabhūṣādhikādhyā  
 nāsāyām pīnamuktā bahumatī bahulī śobhate pūrvayāme || 170 ||  
 iti bahulī 3 ||

bahulī は rāmukrī-mela より 上り 上り ( 生れ ) , 二  
 音 と か 音 を 欠き , 三 音 の 初・終・中 音 である。  
 身体は細く, 緑青色。頭髪を靡かせ, 左手  
 に 立派な棒を持ち, 口にはさんまを噛んでいる。  
 彼女は成熟した maraḥaṭha の女性で, 衣服や飾り  
 と 豊かにつけ, 鼻には大きな真珠を飾っている。  
 彼女は知識仲たかで, 早朝に輝く ( 歌われる ) 。  
 以上 bahulī 3 。

deśī

dhammile mallimālam śravaṇayugalataḥ kuṇḍale kaṅṭhamālām  
 kūrpāsam śubhravastram caraṇakarayuge nūprau kaikaṇe ca  
 āhaṅgasya prapautrī mṛdusukaratale pallavam saṃdadhānā  
 gāndhārāntyā-indugau stas-trisamayarirapā sarvadā yāti  
 deśī || 171 || iti deśī 4 ||

deśī は 頭髪 ( dhammila 型 の 髪 ) に ジャスミンの  
 花輪をつけ, 耳には耳飾りを垂らし, 首飾りを

掛け、胴衣をつけ、白衣をまとい、こいる。両  
手足に腕輪と足環を（はめてこいる）。彼女は  
āhaṅga の孫娘で、柔らかな手掌に若木を持っ  
てこいる。

か音が終止音で、2か音は1 śruti 高い(?)  
り音が三種の時（初・中・終）であり、ハ音  
を欠く。彼女は、常に、動いてこいる（何時で  
も歌われる）。以上 deśī 4。

### jayataśrī

nāsāgre śrīlavaṅgam jalajasuṭīlakasī kundale śrotrayor-dve  
colim kausumbhavastram śīśuvidhutilakam ca-añjanam netrayoś-ca |  
haastadvandve sukācapravalayanicayam mūrdhni veṇiṁ dadhānā  
deśīmele ruciññā ca sakalajayataśrīś-trisā ca-aparāhne || 172 ||

iti jayataśrī 5 ||

jayataśrī は鼻に丁子 (lavaṅga) をつけ、巻髪は月く  
を飾り、両耳に耳飾りをつけ、胴衣をつけ、  
赤衣をまとい、新月の額飾りをつけ、両眼に墨  
膏を塗ってこいる。両手は美しいクリスタルの  
腕輪を持ち、頭は弁髪に結ってこいる。

彼は *deśi-mela* に於いて *ruciñā* (?)、サ音が初・中・  
終止音 (*trisa*) であり、午後には〔歌われる〕。  
以上 *jayataśrī* 5。

### *gurjjarī*

*saṁdhatte hastamule kari rada valayāny-āṅghri mañjī rayugmam*  
*nāsāgre hemapuspam kanakasamanibham kañcukim raktavastram |*  
*bimboṣṭhī raktavarṇā dvivasuraracitā muktakachāyāsā vā*  
*rāmakrī melena saukhyā trisamayarir-asau gurjjarī-iyam*  
*prabhāte || 173 || iti gurjjarī 6 ||*

*gurjjarī* は腕に象牙の腕輪をつけ、足に一對の  
足環をほめ、鼻に黄金の花をつけ、黄金の  
うす胴衣をつけ、赤衣をまとっている。口唇  
は *bimba* のように赤い。 *dvivasura* (?) を飾り、或は  
*muktakachāyās* (?) を飾っている。

彼女は *rāmakrī-mela* により喜ぶをえて (生れ  
て)、リ音が三種の時 (初・中・終止音) であ  
り、夜明けには〔歌われる〕。以上 *gurjjarī* 6。

*lalita* (以下息子)



deśīmele prajātaḥ svarasakalayuto dhatrikaś-cañcalākṣo  
haste padmam dadhānaḥ śucivasanarataḥ śliṣṭaśṛṅgāra-  
sarvaḥ ।

mugdhastrī śyāmalākṣo hasati sakapaṭam pūrṇatāmbūla-  
vaktraḥ kāmī kāmāvatāraḥ kuṭīlasulalīto bhāti dhṛṣṭaḥ  
prabhāte ॥ 174 ॥ iti lalitaḥ 7 ॥

lalita は deśī mela に おいて 生れた。すゝての音階音を具え（7音音階），その音が trika である。

彼は眼を動かさず，手に蓮花を持ち，淨衣（白衣）を好み，すゝて恋情を抱いてゐる。眼は無垢な娘のように黒（śyāmalā）く，微笑を装ってゐる。口には，一杯，きんぎょをふくんでゐる。彼は愛欲を具え，愛の神（kāma）の化身であり，他の女と遊ぶ，非常に快活で，堂々としてゐて，夜明けに輝く〔歌われる〕。以上 lalita 7。

vibhāsa

gaurāṅgaḥ pañcakṣī susāmbharavasano bhālakāśmīrabindu-  
r-māliśragbhūṣyakantḥās-caturavaragīram kīram-edhy-  
āpapeyan-yah ।

mele tātasya jātas-tv-adhikaprathamamah satriko'pi śatho  
'sau svecchāgāmī prabhāte vadati ca dayitām śrīvibhāsā-  
khyarāgaḥ ॥ 175 ॥ iti vibhāsah 8 ॥

vibhāsa は ( 身体 は ) 黄色で、眼は蓮花のよう、  
美しい斑色の衣服をまとひ、額にサフランの  
額飾をつけ、首には花輪を掛け、優しい言葉  
を、鸚鵡に教えてゐる。

彼は tāta-mela において生れた。マ音の śruti  
高く、サ音が trika である。偽騎者 ( śatha ) であ  
り、自由に行動し、夜明けには、恋人に話す。  
以上 vibhāsa 8。

sāraṅga (108)

śyāmāṅgaḥ pītavāsāḥ prabala taragadā śaikhacakrābja-  
hasto bāṇaiḥ sārīgena pūrṇasphuradiśudhikaṭis-tārkyā-  
go bhūṣanādhyah 1

gāndhāro vedagaḥ syur-gaṇagatimanidhāḥ pakṣago paś-triṣa-  
djaḥ sampūrṇas-ca-aparahne pracarati dhīrasāraṅgarāgaḥ ॥

176 ॥ iti sāraṅgaḥ 9 ॥

sāraṅga は、身体は緑青色で、黄衣をまとひ、

手に強力な棍棒，螺貝，輪，蓮手を持ち，腰には，弓と一箱に，矢が入った輝く矢筒をさげ，カニや鳥に乗り，多くの飾りを付けてゐる。

ガ音は 4 śruti，マ音，ニ音，タ音は gaṇa gati (?) である。パ音は 2 śruti で，サ音は trika である。彼は美しく，威厳があり，7音階で，午後に活動する。以上 sārāṅga 9。

ravana

deśī-sammela-jātas-trividhasamapasah pūrṇarūpo'tigaurah  
 kanthe maukeyamālo dhṛtamukuteśirāś-citravāsāś-ca ramaḥ |  
 puṣpaśrīkandukaste yuvajanasahito manmathānandakartā  
 śrīgārī paṅgavīthyām sa tarunaravanah śobhate sāyam-e ah ||

177 || iti ravanaḥ 10 ||

ravana は deśī-mela より生れた。パ音とサ音は三通り同じである(?) (両音いずれも去聲音，主音，終止音になる?)。7音音階である。

(身体は)非常に黄色く，首に真珠の首飾りを掛け，頭に冠を戴き，愛らしい。手には

花と美しい球を持ち、若者と一緒になると、愛の歓喜を与える。恋情を具え、高貴の通路に、夕方、彼は輝く。以上 *ravana* 10。

*kalyāṇa*

*satriḥ pūrṇo dvinetrāgniyamarigamanī rājavṛndaiḥ sameto*  
*gauras-tāmbūlavaktraḥ sitavaravasanah kantharatnaikamālah*  
*kañjākṣah chatramūrdhobhayacarayuto ratnasimhāsanaṣṭhah*  
*kalyāṇo yammanādyah parjanasahito rājate 'sau dinānte*  
 || 178 || *iti kalyāṇah* || || *iti deśikāraparivārah* 3 ||

*kalyāṇa* は *カ* 音が *trika* で、7 音音階にある。リ音と *カ* 音、*マ* 音と *ニ* 音の対は 2 *śruti* と 3 *śruti* である(?)。

彼は多くの王と伴ない、(身体は)黄色で、口にきんまを噛み、素晴らしい白夜をまとい、首に宝石の一連の首飾りを掛けている。眼は蓮花のようで、頭上には傘蓋を(懸け)、二人の侍者と連れ、宝石の獅子座に坐っている。

彼は *yamāna* (?) を初め、すべての人と連れ、一日の終りに、輝く。以上 *kalyāṇa* 11。以上、

deśikāra の巻 属 3 。

4. śrīrāga の 妻 と 息 子

śrīrāga

śrīṅgārī sundaras-tatpuruṣavadanajāḥ kaṅṭhanakṣatramālah  
 śrīrāgah śvetavāsāḥ prathamagatigatā dhairato rir-gaṇī syuh ।  
 ārohe dhairato gas-tv-avagamadhagajah satripūrṇo'tra gauro  
 grīṣme sāyam sunṛtye vilasati sarasam hastlagnālipadmah ॥

179 ॥ iti śrīrāgah । ॥

śrīrāga は 恋 情 を 具 之 , 美 し く , tatpuruṣa の 口 か  
 ら 生 れ 出 。 首 に nakṣatra ( 宿 星 ? ) の 首 飾 り を 掛  
 け , 白 衣 を ま け じ 。

ガ 音 , リ 音 , カ 音 , = 音 は 変 音 で あ る 。 ( 音 階 の ) 上 昇 す る 場 合 に は , ( 不 明 ) 。 サ 音  
 は trika で , 7 音 音 階 で あ る 。

( 身 体 は ) 黄 色 で あ る 。 手 に 一 連 の 蓮 花 を  
 持 っ て , 夏 の 冬 方 , 愛 し く , 踊 り を 樂 し む 。

gaudī

rāmakrīmelajātā dhaga parirahitā satrikā śoḍaśādhya (?) śaḍjādhya)  
 citraṃ vastraṃ dadhānā karadhṛtakamalākarna netrā sukeśī |  
 caitrī sudrā nipūrvī varayavanapurī karpātī bhikṣa sārddham  
 samkrīdanti dinānte caturarātikalā gauradehā tu gaudī ||

180 || iti gaudī 2 ||

gaudī は rāmakrī-mela より 生れ 出。 夕 音 と か 音 と  
 欠く。 夕 音 が trika と、 多 使用 音 と あり (?)。

美しき 衣服 を まと、 手 に 蓮 花 を 持 ち、 眼  
 と 耳 等 と ( あり け と あり )、 髪 は 美 し く、 ( 不  
 明 )。 素 晴 しき 若 さ に 満 ち、 粗 末 な 衣服 を ま  
 と った 物 乞 と 一 緒 に あり。

彼女 は ( 身体 は ) 黄 色 と、 髪 枝 に 勝 れ、 夕  
 方 ( 一 日 の 終 り ) に 遊 ぶ と あり。 以上 gaudī 2。

pādī

gaudīmele sulagnā prathamaguṇeratis-tyaktaḡā paikajākṣī  
 bhartuh santāpahantī smitavidhuvadanā gītanṛtyābhīśaktā |  
 gaurāṅgī suklavastrā taruṇāteramadonmattamātaṅgayānī  
 śṛṅgārādhya hi pādī yuvajanaḡṛdayānandinī vāserānte ||

181 || iti pādī 3 ||

pādi は gaudī-mela に依存し、(不明)。カ音とク  
 <。

眼は蓮花のようで、夫の苦しみを除く。月  
 のように顔は微笑し、踊りと歌に熱中して  
 いる。(身体は)黄色く、白衣をまとひ、若  
 くに酔つてゐる。狂象に乗り、恋情に溢れ、若  
 者の心は歡喜を与える。彼女は、夕方は、  
 [歌われる]。以上 pādī 3。

guṇakarī

gurjaryē melajātā sphuritatarasapā pādīmadhyāntapūrṇā  
 vakṣohārā-āyatākṣī sitakaravasana raktakūrpāsikā yā |  
 nānāśṛṅgārabhūṣyā mṛdumadhuvacanā śyāmāṅgī sutanvī  
 bhartuḥ saiketakam sadvimalaguṇakarī kāmīnī yāti sāyam ||

182 || iti guṇakarī 4 ||

guṇakarī は gurjarī-mela より生れた。カ音とハ音  
 が震える(ケイブート)。ハ音が初、中、  
 終止音で、7音音階である。

胸に飾りとつけ、眼は長く、月のように  
 白く衣服をまとひ、赤色の胴衣をつけて

る。種々の悲情を飾りとし、言葉は穏やかで優しい。身体は緑青色で、細い。彼女は貞節にして無垢で、愛らしい。夕方、夫が指示した密会の場所へ行く。以上 *gunakari* 4。

### *nādarāmakrī*

*sampūrṇā satrikā yā guṇavidhuganigā kinnarīvādyakastā  
syāmāngī dīrghanetrā gurujalajaganaiḥ kanthamālādibhūṣyā |  
madhye sadraktavastrā varagajagamanī svernakūrpāsayuktā  
vaktum sāyam prayāti priyacaritaganaṃ nādarāmakriyā sā ||*

183 || *iti nādarāmakrī* 5 ||

*nādarāmakrī* は 7 音音階で、カ音は 3 *sruti*、ニ音は 1 *sruti* である。

*kinnarī* と手に持っている。身体は緑青色で、大きな多くの蓮花と共に、首飾りなどを飾っている。腹部は真紅の衣服をつけ、巨象のような歩みである。黄金の胴衣をつけている。彼女は、夕方、話すために恋人たち (*priyacaritagana*) のところへ行く。以上 *nādarāmakrī* 5。



gundakrī

gurjaryā melayuktā ridhaparirakītā satrikā nīlavastrā gaurī

muktālakāyā navaṅgaracitā kāmasaiketasamsthā |

nīpacchāyopaviṣṭā vimalakaratale padmapatram dadhānā

gundakī bhāminī sā priyatama padavīm prekṣayanti prabhāte ||

184 || iti gundakrī 6 ||

gundakrī は gurjarī の mela を具え、リ音とガ音とを  
き、サ音が trika である。

青衣をまとい、(身体は)黄色く、若木を  
あしらった、大きな真珠をつけ、愛の密会の  
場所にいる。nīpa の木蔭にいて、淨らかな手  
掌に蓮葉を持っている。彼女は情熱的で、夜  
明けに、恋人(が来る)道を見つけている。  
以上 gundakrī 6。

ṭakka (以下息子)

nṛtyāsekteḥ sahisnur-nayanagatiganiḥ sādīmadhyāntapūrṇo

vakṣohāram suratnam sukātakamukutam citrevestram dadhānaḥ |

gaurah kāmī suṭakko madanamadabharaś-candanāliptadehaḥ

puṣpānām kanduhasto vicarati caturah kāmādūtaḥ sadā

'sau || 185 || iti takkaḥ 7 ||

takka は踊りに熱中し、忍耐強し。カ音とニ音は 2 śruti 高く、サ音が初、中、終止音で、7音音階である。

立派な宝石の飾りを胸につけ、美しい腕輪と冠をつけ、美しい衣服をまとっている。く身体は丁黄色で、愛らしく、愛に酔いしれ、身体に白檀を塗っている。手には花の球を持ってしている。彼は賢明な愛の仲介者であり、常に活動する。以上 takka 7。

devagāndhāra

gāndhāro devapūrvas-tr-analagatiganih satrikaḥ pūrnarūpo  
nairantaryam cakāsti prathamagatiridho ratnasimhāsanaasthaḥ |  
indrādyañ otūyamāno rasapati rasikaś-candanāliptadekaḥ  
śubhram vastram dadhānaḥ karadhṛtakumudaḥ sarvabhūṣābhi-  
yuktā || 186 || iti devagāndhāraḥ 8 ||

devagāndhāra はカ音とニ音が 3 śruti 高く、サ音が trika であり、7音音階の型式である。リ音とサ音は変音である（1 śruti 高し。前土）。

彼は、断えず、輝き、寶石の獅子座に坐つて  
 いる。 Indra 神などが彼を讃えてゐる。彼は *rasa-*  
*pati* のような芸術美の理解者 (*rasika*) であり、身  
 体に白檀を塗つてゐる。白衣をまとい、蓮花  
 を持ち、あらゆる飾りを付けてゐる。以上、  
*devagāndhāra* 8。

*mālava*

*gaudīmele sujāto ripaparirahito vādimadhyāntapūrṇo*

*vīraḥ śrīṅgāranisṭho varaśukaruciḥā mūlalīkasya mitram |*

*padmāsyaḥ padmanetraḥ sitataravasanah kanṭhamālādibhūṣah |*

*sāyam kāle sabhāyām prakāṣati caturō mālavo rāgarājah ||*  
 187 || *iti mālavaḥ 9 ||*

*mālava* 11 *gaudī-mela* は 6 ける子供である。リ音  
 とハ音を欠き、*vā(?)* 音が初・中・終止音で、  
 7 音音階である。

彼は勇猛で、恋情の情趣に在り、[身体は]  
 鷓鴣武鳥のようなくさである、*mūlalīka* の友であ  
 る。顔は蓮花のよう、眼も蓮花のよう。白  
 衣をまとい、首飾りを身に飾つてゐる。彼は  
*rāga* の王であり、美しく、夕方、集合堂に現

木 水 三 。 \* 上 mālava 9 。

śuddhagaṇḍa

gṇḍakrīmelajāto rasapatī sahito nyādimadhyāntako 'paḥ  
 kauśumbhī kesarānām vimalajalakāṇaiś-citritam śvetavāsāḥ |  
 kāśmīrasya-ūrdhva-puṇḍrah śurabhitasutanuh kaṇṭhakañjāka-  
 mālah tām̄būlāsoyo dinānte hari bhajanaparah śobhate śuddha-  
 gaṇḍah || 189 || iti śuddhagaṇḍah 10 ||

śuddhagaṇḍa 17 gṇḍa-mela 5 1) 生れ, rasapatī を伴う  
 "(?) , = 音の初、中、終止音の、10音に  
 分る。

(身体は) 赤色で, kesara の 淨いかな水(?)  
 のような種子を飾り, 白衣をまとっている。  
 サフランの心やまの印を〔額に〕つけ, 身  
 体は芳香あり, 首に蓮子の首飾りを掛けている。  
 口にきんばを噛み, 聖い hari 神を讃え,  
 夕方 (dinānte) に, 輝く, \* 上 śuddhagaṇḍa 10 。

karṇāṭabhaṅgāla

baṅgālāntas-ca karṇāṭa iti rīrahito gādimadhyāntako yo

gaudī sammelabhūtaḥ kamalakeratake puṣpayastim dadhānaḥ |  
 gaurāṅgaḥ śuklavāsanāḥ kṛtakamukutaḥ puṣpakeyūrādhyah |  
 kauśumbho śṇīśadhārī pariḥānasaḥito yāti pūrvāhnakāle ||

189 || iti karṇāṭabaṅgālah || || iti śrīrāgaparivārāḥ 4 ||

karṇāṭabaṅgāla はり音と欠き、か音が初・中・  
 終止音である。gaudī-mela から生れた。

蓮花のような手掌に花の茎を持つてゐる。  
 身体は黄色く、白衣をまとい、腕輪、冠、花  
 の臂釧など多くの飾りをつけてゐる。髻には  
 kauśumbha (紅花) をつけ、侍者を伴つてゐ  
 る。彼は午前中に動く。以上 karṇāṭabaṅgāla ||。  
 以上 śrīrāga の眷属 4。

##### 5. sūddhanāta の妻と息子

sūddhanāta

iśānāsyābhijātas-trigatiganiridhaḥ satripūrṇaḥ sadhīro  
 raktāṅgaḥ kañjanetraḥ sitataravasanāḥ kaṇṭhamālādīkādhyaḥ |  
 pāṇau khadgaḥ pratāpī smitavacanaparaḥ śnigdhaḡambhīra-  
 nādaḥ sandhyāyām rājamārge śaradi hayegatī rājate

suddhanāṭak ॥ 190 ॥ iti suddhanāṭak 1 ॥

suddhanāṭa は Īśāna の 12 より 生れた。カ音, ニ音, リ音, タ音 は 3 śruti であり, サ音が trika と, 7 音音階 である。

彼は威厳を具え, 身体は赤く, 眼は蓮花のよう。白衣をまとひ, 首飾りなどは多く飾っている。手に剣を持ち, 熱気は溢れている。常に微笑しつゝ話すことと旨とし, 美しく, 深遠な音を具えている。象のような歩みである。彼は, 秋の明け方, 王道に輝く, 以上 suddhanāṭa 1。

mālavasrī

jātā śrīrāgamele navagiri racitā sādīmadhyāntakāyā

śrīkhaṇḍāpaṅkacolī kuumasuvasanam saṃdadhānā mṛgākṣī 1

prauḍhā-īśadvyaṅgyavākyaikṣī priyam-upahasatī mālavasrī su-

tanvī cakrichepāvakarṣaiś-capalakaratālād-dhāsyantī sā

sadā-eva ॥ 191 ॥ iti mālavasrī 2 ॥

mālavasrī は śrīrāga-mela の 12 より 生れた。新しい言葉で書かれている。サ音が初・中・終止音

の身体(型式)である。胴衣は白檀膏を(塗  
 られてゐる)。美しい衣服に花を飾り、眼は  
 鹿のよう。彼女は女盛りであり、暗示的な言  
 葉で、恋人を嘲笑してゐる。彼女は身体美し  
 く、手掌を振って、旋回する蜂を払い、笑っ  
 てゐる。彼女は、常に、(歌われる)。以上  
 mālavasrī 2。

desākṣī

gāndhārādyañtamadhyā guṇagatiriniḡā dhairvatadvir-gatir-yā  
 tāmbūlāsya-anjanākṣī kanakamanimayair-bhūṣanair-būṣitā-

niḡī 1

nārāyaṇyaṅgalagnā kusumasukaberi kañcukī citravestrā

desākṣī rājakanyā pratidinam-uṣasi prekṣate mallayuddham||

192 || iti desākṣī 3 ||

desākṣī は か 音 が 初・終・中音 であり、り 音 二  
 音、か 音 は 3 śruti で、二> の 音 は 1 śrut で  
 ある。

彼女は口はきんまを嚙み、眼は墨膏をつけて  
 いる。黄金や宝石製の飾りを身体につけて

いる。nārāyaṇī の身体に寄りかかり、美しい髪に花を飾り、胸衣を掛け、美しい衣服を身につけてゐる。彼女は玉女で、毎朝、レスリニガの試合を見る。以上 deśākṛī 3。

devakrī

gaurī śrīkomalāṅgī kejamukulakucā citrakūrpāsavastrā

sarvāṅge bhūṣaṇādhyā mṛdutaravacanā śākapūrvā pragalbhā

velāvalī-ekamelā-adhikavidhugatimā satrikā vā pakīnā

devakrī devakanyā bahucaturatārā rājate 'hno 'ntayāme ॥

193 ॥ iti devakrī 4 ॥

devakrī は〔身体は〕黄色で、śrī のまじりに美しい。乳房は蓮花の蕾のまじり。美しい胸衣や衣服を身につけ、身体全体に飾りが溢れてゐる。śaka 族の基づく(2)非常に穏やかな言葉〔を話した〕、堂々とゐる。

velāvalī-mela は唯一の mela としてゐる。マ音は śruti 高く、サ音は trika で、ハ音を欠いてゐる。彼女は非常に美しい神の娘で、一日の終りに、輝く。以上 devakrī 4。



madhumādhavī

mugdā gaurī vicitrāambararacitatanuḥ sarvaśṛṅgārayuktā  
 mādyantīśāridhā vā dvigatigataridhā vahnigatyantgā ca |  
 bhūrekhā cāpadhatrī mṛgaśisunayanā tivraneetrāntabāṇā  
 bhartur-gehe sakhībhiḥ sahavaramadhumadhavy-ṣaḥ sampra-  
 yāti || 194 || iti madhumādhavī 5 ||

madhumādhavī は生娘で、身体は黄色く、美しい衣服をまとっている。すべて恋情を具えている。

マ音が初、終止音で、リ音があるのはガ音のīśā (主音) である。リ音とガ音は 2 śruti であり、最後のガ音は 3 śruti である。

彼女は弓のような眉線と具え、眼は小鹿のよう。鋭い眼尻は矢のよう。彼女は曙の光 (ṣaḥ) であり (夜明けに歌われる)、女友達と一緒に、恋人の家に行く。以上 madhumādhavī 5。

ābhīrī

candradvis-trir-gatāḥ syur-garinaya iha tu snigdha-

netrā pragalbhā śyāmā-ābhīrī trisaḍjā mṛduvacana parā  
mūrdhni veniṃ dadhānā ।

mṛdvaṅgī nīlavāstrā mṛdugalavilasaḍvidrumāliś-ca karṇe  
tāṭaṅkāḍhyā hi sāyam rasapatīnīnadai rāsadaṅḍa ramantī ॥

195 ॥ ity ābhīrī 6 ॥

ābhīrī は、カ音、リ音、ニ音は、各々、1、2、  
3 śruti である。サ音が trika。

眼は美しく、堂々としてゐる。〔身体は〕  
緑青色で、専ら言葉は穏やかである。頭は弁  
髪に結つてゐる。身体は優雅で、青衣を掛け、  
しなやかな首に、美しい珊瑚の首飾りを掛け、  
耳に大型の耳飾りを付けてゐる。彼女が rasapati  
の音を奏でる笛を、夕方には、楽しんでゐる。  
以上 ābhīrī 6。

(109)  
jijāvanta (以下息子)

śrīrāgasya-eva melād-riḍhavidhugatikah sādīmadhyāntako  
'sau śyāmāṅgaḥ pītavāsā viracitatīlakah kuṅkumair-bhāla-  
madhye ।

kaṅthe ratnaikamālo lalītasumuralīvādyamānās-tribhaṅgī

śṛṅgārī bhāti sāyam kusumāsarahitah śrījijāvantarāgaḥ ॥

196 ॥ iti jijāvantaḥ 7 ॥

jijāvanta は śrīrāga-mela より [ 生れた ]。リ音とタ音は (śruti とリリ), サ音が初・中・終止音とある。

[ 身体は ] 緑青色で, 黄衣をまとい, 額の中央に, kuṅkuma (サフラン) で, 額飾を描いてゐる。首に宝石の首飾りを掛け, 身体に三曲の姿勢にして, 樂し "muralī (笛) を吹いてゐる。恋情を具え, 花の矢を持てゐる。彼は, タ方, 若く。以上 jijāvanta 7。

sālaṅganāṭa

gauras-tāruṅgapūrṇah karadhṛtakulīśah sambhṛtānaṅgarūpah  
kaṅthe maukteyamālah parijanasahitah sarvakirmīravastrah |  
śṛṅgārādhyah sukāmī mṛduvacanaparah sadjamedhyādikāntah  
prītah kedāramele dīkapativiratau bhāti sālaṅganēṭah ॥ 197 ॥

iti sālaṅganāṭah 8 ॥

sālaṅganāṭa は [ 身体は ] 黄色で, 若さに満ちてゐる。手には戟を持ち, 愛の神 (anāṅga) のよう

姿にあり。首に真珠の首飾りを掛け、侍者と  
 伴ない、すべと斑色の衣服をまとっている。  
 恋情の溢れ、非常に愛情強く、専ら穏やかな  
 言葉に語る。

サ音の中・初・終止音で、kedāra-melaに於け  
 る息子 (prīta) にある。彼は日暮れに輝く。以  
 上、sālaṅganāṭa 8。

karnāṭa

śrīṅārī pītavastrāḥ ketakamukutaśasimhāsana cchatrayukto

gaurāṅgaḥ śrīkuseṇī suhr̥dabhimadakaḥ pūrvavāgeśvarī-īṣṭaḥ |

tris-trir-ḍyekaśthitā syuḥ svararidhaganeyāḥ kekikanthābhako

'sau nyādyantāṃśo 'ridho vā vilasati divasānte 'pi karnāṭarāgaḥ ||

198 ↓ iti karnāṭaḥ 9 ||

karnāṭa は恋情を具之、黄衣をまとい、腕輪、  
 冠をつけ、獅子座に坐り、傘蓋を具えている。  
 身体は黄色である。彼は śrīkuseṇī (?) の親友で  
 あり、pūrvavāgeśa の愛人である (?)。喉は孔雀  
 の上なき色]。

二音の初・終・主音 (amśa) にあり、リ音と

ヲ音を欠く。彼は一日の終り時に遊ぶ。以上  
karnāṭa 9。

(110)  
chāyānāṭa

karnāṭasya pramelaprakṛitā sutanus-tv-ādimadhyāntasadjah  
kaṇṭhe hārah saratnaḥ sitavasana ruciḥ pāṭalosnīśadhārī |  
gaurāṅgo raktanetreḥ saḥacarabāhubhir-vīraśrīṅgāravān-yaḥ  
chāyānāṭa dinānte prahasati pathikām puṣpasatkandukastak ||  
199 || iti chāyānāṭah 10 ||

chāyānāṭa は karnāṭa-mela から美しい身体を現わ  
した。その音が初、中、終止音である。

首に寶石がった首飾りを掛け、美しい白  
衣とすく、髪髻に pāṭala の花を飾る。白  
身体は黄色で、眼は赤く、多くの従者を連れ、  
扇と恋情を具えてゐる。彼は手に花の球  
(kanduka) を持ち、一日の終り時に、旅人に笑  
いかける。以上 chāyānāṭa 10。

hamīranāṭa

sampūrṇo dvir-gatī ris-tv-analagatī nigah sa grahanyāsakāmsah

śṛṅgārī yauvanādhyah smita paravedanaḥ kandusaddaṇḍahastah  
 gauras-tāmbūlavaktraḥ kusumaśarsuhrd raktavastrah pratāpī  
 cetah śimantiniṅām-anusarati kamīradināto hi sāyam ॥ 200 ॥  
 iti kamīranātah ॥ ॥ iti śuddhanātaparivārāḥ 5 ॥

hamīranāta は 7 音階で，リ音は 2 śruti，ニ音  
 とカ音は 3 śruti，サ音は 玄鏡音，終止音，主  
 音である。

彼は恋情を具え，若さに溢れ，顔は微笑し，  
 手に球 (kandu[ka]) と棒を持ってゐる。(身体は)  
 黄色く，口はきんぎょを噛み，胸は花の矢を当  
 て，赤衣をまとい，威厳を具えてゐる。彼は，  
 夕方，女たちの心に徒う。以上 hamīranāta ॥。以  
 上 śuddhanāta の眷属 5。

## 6. nattanārāyana の妻と息子

nattanārāyana

mugdhastrī saigato dvir-gati riḡadhanayah pūrṇa sādyaṅtamadhyo  
 rudrāṅī vaktrajātah śikhinakulanatī nartako bhūṣaṅādhyah ।  
 śyāmāṅgaḥ pītavastrah karadhṛtacapalākāntikhadgo dayāvān

prāvṛṭkāle nṛnām sam prakatayati sadā nattanārāyaṇaḥ 'yam ॥

201 ॥ iti nattanārāyaṇaḥ 1 ॥

nattanārāyaṇa は幼い女性と一稽にゐる。リ音、  
カ音、ダ音、ニ音は 2 śruti であり、7 音音階  
で、ナ音が初・終・中音である。

彼は rudrānī (pārvatī) のほかの生れ、孔雀族  
の踊りの踊り子であり、多くの飾りを付けて  
ゐる。身体は緑青色で、黄衣をまとひ、手  
には光る美しい剣を持ち、慈心を具えてゐる。  
彼は常に、雨季に、人々の幸福を示す。以上  
nattanārāyaṇa 1 .

velāvalī

dhittāṃ dhittāṃ dhittāṃ tām-iti mṛdukaramurajaṃ vadyamānā sutanvī

śṛṅgārāḍhyā sugaurī kamalavasana-kirmīrakūrpāsāyuktā |

praudhā velāvalīyā (?) sahinijamadhūmadhavy-abāsasvarāsthā

dhādyantāmsā-aridhā vā saraparadasutā satkurāyī saḥāyā ॥

202 ॥ iti velāvalī 2 ॥

velāvalī は " dhitta dhitta dhitta " と、軽い [音で]

ある muraja (太鼓) を打つてゐる。(身体は)

細く、恋情に満ち、黄色く、蓮花の衣服、斑色の胴衣とつけている。彼女は女盛りである。

madhumādhavi (śuddhanāṭā の妻) の友達である。

7 音音階で、カ音が初・終・主音である。或いは、リ音とカ音を欠く。saraparada(?) の娘で、satkurāyī(?) の友である。以上 velāvalī 2。

### kāambojī

kāambojī mohinīyā dvigatigeniridhā satrikāḍhyānimā vā

gaurī tāmbūlavaktrā kusumajavasanaṃ kañcukī ca-ādhānā |

kastūrībindubhālā kanakamanimayair-bhūṣanair-bhūṣitāṅgī

karṇādyāṅghriḥ sekhibhyām-uṣasi vilasati kinnarivādyakastā ||

203 || iti kāambojī 3 ||

kāambojī は mohinī の娘である。カ音、ニ音、リ音、カ音が 2 śruti である。カ音が trika で、多使用音 (ādhyā) である。或はニ音とカ音を欠く。

{ 身体は } 黄色で、口はきんまを噛み、花の衣服とまこい、胴衣をつけている。額には麝香の額飾をつけて、黄金や宝石で造った飾りや身体に飾り、耳にははじめて指には { 飾 } である。



手は kinnarī を持し、二人の友達と共に、夜明けには、遊ぶ。以上 kāmbojī 3。

sāverī

dhādyantāmsā . sapā yā nayanagunagatis-ca-atra dhāntyau rigau stah

kastūrībindubhālā mṛgāsīsunayanā candravaktrā sutanvī ।

sāverī kārakanthā susābaravasanā pītakūrpāsayuktā dvyastā-

ḍhyā śyāmavarṇā varagajagamanā sasmilā sāyam-eti ॥204॥

iti sāverī 4 ॥

sāverī は 夕音が初・終・主音である。サ音とハ音が、各々、2 śruti と 3 śruti である、この場合、リ音とカ音の両音が夕音の終止音である。(111)  
る(?)。

額には麝香の額飾を付けて、眼は小鹿のようであり、頬は月のようである。身体は非常に細い。首には首飾りを付けて、美しい śabara の衣服をまとひ、黄色の胴衣を付けている。16才(の若さには)溢れ、(身体は)緑青色。立派な象のようには歩み、微笑している。彼女は、夕方には、行動する。以上 sāverī 4。

suhavī

tanvī śyāmā mṛgākṣī varakamalamukhī pitavastram dadhānā  
 prauḍhā sanmūrdhni venīṃ dvījavaraḡamanā kañcukī karburā ca  
 vaktreṣad dhāsyayuktā dāśarasaracitā cāmarair-vījyamānā  
 sāverīmelayuktā hy-ugāsi tu suhavī satrikā pūrṇarūpā || 205 ||

iti suhavī 5 ||

suhavī は身体は細く、緑青色で、眼は鹿のよう。  
 顔は支流を蓮花のようで、黄衣をまき、こ  
 る。彼女には女盜りで、頭には弁髪を結い、ハ  
 ーのようには堂々たる歩き方である。肘には  
 扇がはたいてある。斑色の胴衣を掛け、  
 顔は少し笑い、10種の rasa (情趣) を具えて  
 いる。

彼女は sāverī-mela を具え、サ音が trika であり、  
 7音音階の型式である。夜明けには、〔歌われ  
 る〕。以上 suhavī 5。

saurāṣṭrī

sāverīmelayuktā svarasakalayutā satrikā svairiṇīyā

citram vastram dadhānā kathinakucatate kañcukī mecakim ca |  
 gaurāṅgī pañcakajāksī kimakaravadanā dādimībījadantā sāyam  
 śṛṅgārapūrṇā madanasahacarī yāti saurāṣṭrikā sā || 206 || iti  
 saurāṣṭrī 6 ||

saurāṣṭrī は sāverī mela と 具之, すべし の 音階音と  
 具之 と 二 ( 7 音階音 ) 。 十音 trika。  
 彼女は元々美しい女である。美しい衣服をま  
 とい, 両乳房は kathina (料理用の工器) のよう  
 である。黒色の胴衣をまけ, (身体は) 黄色  
 く, 眼は蓮花のよう, 頬は月のよう。髪は  
 びくくの種子のよう。彼女は恋情に満ち, 愛  
 の神 (madana) の妻である。夕方, 動く。以上,  
 saurāṣṭrī 6 。

malhāra (下息子)

sāverī melajātaḥ saparirahito dha grahanyāsāmśah  
 śyāmah pītāmbaro yo madanaparijitah kanthādikādhyah |  
 vidyunmeghātigarjair-uditaśikhariṇā n-nartayan-kīrṇapakṣān  
 dhārāmījanmamitro'py-ṣasi malaharo bhāti malhārarāgaḥ ||  
 207 || iti malhārah 7 ||

malhāra は sāverīmela より生れた。カ音とハ音と  
 欠く。ダ音が出発音，終止音，主音である。

〔身体は〕緑青色で，黄衣をまとひ，愛の  
 神に支配されている。首飾りなど〔の飾り〕  
 と多く飾っている。高い山頂の，稻妻が走る  
 雲の雷鳴によつて，飛ぶ立つた鳥を踊らせて  
 いる。彼は dhārāmī くの友であり，不淨 (mala)  
 を除く人であり，夜明けに，輝く。以上 malhāra  
 7。

### gauda-rāga

samsthō malhāramele svarasakalayuto dhāivatām śāgrahāntaḥ  
 syāmāṅgaḥ śaiktamuktāvaliracitaḡalo bhasmabhālah kirātaḥ |  
 rambhāpatram ca maulau dharati katitate barkinām barkajalam  
 bhaktaḥ śambho prabhāte sukaraśaradhanū rājate gaudarāgaḥ ||

208 || iti gaudarāgaḥ 8 ||

gauda-rāga は malhāra-mela に在り，すべくの音階  
 音を具えている（7音音階である）。ダ音が  
 主音，出発音，終止音である。

身体は緑青色で，首に螺貝や真珠の飾りを

掛け、額に灰を塗っている。彼は kirāta である。冠にバナナの葉をつけ、腰に孔雀の尾羽根をつけている。彼は śiva 神の信者であり、手に弓と矢を持つ。彼は夜明けに輝く。以上 gauda-rāga 8。

### Kedāra

savye daṇḍam trisūlam tv-aparakaratale śubhravastram dadhā-  
no bhasmāṅgo raktanetro vimalasujatilo dvīpicarmopaviṣṭaḥ |  
nāsāgre tyaktadr̥ṣṭir-giriśajapamāno veṣṭitaḥ śiṣyavargaiḥ  
kedāro vāripoṣṭī trividhani suhavi melajāto niṣīthe || 209 ||  
iti kedārah 9 ||

Kedāra は左手に棍棒、右手に弓と矢を持つ、白衣をまとうている。身体は灰色で、眼は赤く、頭は無垢で美しい束髪を結び、虎皮をつけている。目指しを鼻先に向け、śiva 神の誦唱をなしつつ、弟子たちを囲まれている。

彼は水と恵む者である(2)。suhavi-mela より生れた。= 音は 3 種であり、真夜に [歌われる]。以上 kedāra 9。

śaṅkarābharāṇa

gaurō raktāmbaro 'sau gurujalajavarasreṇikaṅṭhaḥ surūpī  
 śrīṅgārī yakṣapaṅkair-viracitasutanur-bhasmaikamudraḥ |  
 nṛtyārambhapriyo mudritasugamakavān śaṅkarābhūṣanākhyā  
 prātaḥ sādyaṅtamadhyāḥ pracarati madhumādhavy-aśeṣasvara-  
 sthaḥ || 210 || iti śaṅkarābharāṇaḥ 10 ||

śaṅkarābharāṇa は、〔身体は〕黄色く、赤衣をま  
 とひ、首に大きな螺貝 (jalaja) の支流を輪を掛  
 けてゐる。姿は美しく、恋情を具え、身体に  
 yakṣa 膏を塗り、足の印をつけてゐる。踊りを  
 こゝに好む、mudrita は美しい歩みである。彼は śa-  
 ṅkarābhūṣana と呼ばれてゐる。

サ音の初・終・中音である、madhumādhavy のサ  
 へて、音階音に依つてゐる。彼は、夜明けには、  
 活動する。以上 śaṅkarābharāṇa 10。

vihāgāda

gaurāḥ śvetavastraḥ surabhitasutanur-hastatāmbūladhārī  
 kāmī puṣpesudhanvā virahitajanamanovekaḥ satrikādhyaḥ |

campājātī suyūthī viracitamukutāḥ kaṅṭhamadhye sumālah  
sāyam kedārame janir-upavilasate go vihādir-gadaḥ syāt ॥

2 ॥ ॥ iti vihāgadah ॥ ॥ nattanārāyaṇaparivārāḥ 6 ॥

vihāgada は〔身体は〕黄色で、白衣をまとひ、  
美しい身体は芳香を具え、手にきんぎょを持っ  
てゐる。情熱的であり、花の矢と弓を持ち、  
恋人と別れた人の心を刺す。サ音か trika で、  
多使用音である。冠は campa 産のジャスミンを  
飾り、首には美しい首飾りを掛けてゐる。

彼は kedāra-mela に生れた。夕方に楽しむ。  
以上 vihāgada ॥ 以上 nattanārāyaṇa の眷属 6。

### 結 語

anantarāgāḥ santy-anye nānādeśajanāśrithāḥ |  
eteṣām-uparāgāḥ syur-ūhyanto te ca tadvidaiḥ ॥  
iti rāgalakṣmāṇi ॥

種々の地方の他の無数の rāga があり、またそ  
の uparāga (派生 rāga) があり、と rāga に精通し  
てゐる人々により考へられてゐる。以上 rāga

の特相。

[IV] Rasakaumudī

本書は A.N. Jani の編集による刊本 (G.O.S. 134, Baroda 1963) があるが、現在のところ、筆者は未見である。しかし Bharatakośa (p.542 右) や v. N. Bhatkhande が引用している通り<sup>(112)</sup>、本書の著者 Śrikantha は特に rāga の観想図像の重要性を主張し、音楽家である故、彼の観想図像を除外することはできない。幸い、その観想図像と rāga の音楽形式の詩文が Bharatakośa に掲載されているので、このテキストに依って、彼の観想図像を紹介したい。

本書は 2 部 (khaṇḍa) 構成で、10 章よりなる。第 1 部の 4 章が音楽論に当てられ、観想図像は第 2 章において述べられている。第 5 章は舞踊論を主題としている。第 2 部の主題は情趣論 (第 6 - 7 章)、悲情を喚起する女性の装飾 (第 8 章)、季節による踊子の装飾 (第



9章), 王の生活(第10章)を主題としてい  
る。(113)

Śrīkanṭhaは南インドの出身であるが<sup>(114)</sup>, 本書を  
著わした頃は, 著者自身が語っているように,  
GujaratのDvāravatī (Dvāraka)に近しいNavanagaraの  
Jāmaśrī ŚatruLaśalya王に仕えていた。<sup>(115)</sup> P. Viṭṭhalaは  
南インドKarnāṭaの出身であるのに, 北インド  
のrāga組織に基づいて観想図像を述べたのに  
対して, 彼は南インドのrāga組織であるmelakar-  
tṛ-melarāgaの組織によってrāgaを分類して  
いる。この分類は伝統的なbhāṣā-janaka-janyaのrāga  
組織と同じく, 親子関係を基調としている英  
で, 男女(夫婦)関係を基調とする北インド  
のrāga組織と異なる。KṛemakarnaやP. Viṭṭhalaのrāga  
組織にみられる「息子のrāga」は南インドの  
melarāgaと概念的には同一である。

melakartṛ-melarāgaのrāga組織は, Bharatakośaの  
引くテキストによると, 次の通りである。た  
だし, 脱落がみられるので, 各々rāgaの説明  
より, その部分は補充した。

1. mukhāri (melakarṭṭ)
2. mālavagaṅḁa (melakarṭṭ)  
mālavagaṅḁa , saurāṣṭrī , gurjarī , malhārī ,  
bahulī , pādī , pañcama , bhairava , baṅgāla ,  
lalita , gaudī .
3. śrīrāga (melakarṭṭ)  
śrī , mālavaśrī , dhanyāsī , bhairavī , devagāndhāra.
4. (śuddha)nattā (melakarṭṭ)
5. karnāṭagaṅḁa (melakarṭṭ)  
karnāṭabaṅgāla , sāmantā , todī , vasanta , bhūpāla ,  
ghaṅṭāraṇa .
6. kedāra (melakarṭṭ)  
velāvalī , nattanārāyana , śaṅkarābharaṇa .
7. malhāra (melakarṭṭ)  
gaṅḁakāmodī
8. deśākṣī (melakarṭṭ)
9. kalyāṅḁī (melakarṭṭ)  
kāmoda , hammīra
10. sārāṅga (melakarṭṭ).

mukhārī

1. yatra śuddhās-svarāo-sapta bhavedur-cittarañjakāḥ |  
sa syān-mukhārikāmelaḥ sajātiyā bhavanty-ateḥ ||  
sanyāsāmsāgrah pūrṇā mukhārī gīyate sadā |  
katicidgamakair-yuktā keśtasādhīyā subuddhibhiḥ ||
2. śikhaṇḍadharmillamiladvipañcīm prapañcayanti caladaṅgu-  
lībhiḥ |  
caturbhujā carucakoraṇetrā mukhārikā candramukhī vibhāt ||

- (1) mukhārī とは、に五彩を純粹な 7 音階音を具  
えてゐる。これが mukhārī-mela とあり、サ音  
音階 (sa-jāti) に属する。サ音が終止音、主  
音、去聲音で、7 音音階で、常時、歌われ  
る。いくつかの修飾音を具え、演奏し難い。
- (2) mukhārī は dhamilla 型の琴に孔雀の羽根を付け、  
指を動かして vidāñcī (琴) を弾いてゐる。  
四臂を具え、美しい cakora 鳥のような眼を  
してあり、顔は月のようである。

mālavagauḍa ; mālavagauḷa

1. śuddhās-sarimapāḥ śuddho dhah patādisamadhyamaḥ |  
 melo mālavagaulasya rāgasya-api tathā bhavet ||  
 rāgas-syān-mālava gaudaḥ niṣādatrayamaṇḍitaḥ |  
 ripakīnaḥ kvacit-sāyam rajanī tasya mūrchanā ||
2. uttūṅgavakṣoruhanaṁnakāntaḥ kāntāsamālīṅgitegauragātraḥ |  
 hemaspuratkundalamāṇḍitāsya virājate mālavagaularāgaḥ ||

- (1) サ音, リ音, マ音, ハ音は純粋, ヲ音も純  
 粋であり, pata-サ音と pata マ音<sup>(116)</sup>がある。こ  
 の mela は mālavagaula の rāga と同じである。rāga  
 は mālavagauda であり, = 音 (niṣāda) の 3 音 (出  
 発音, 主音, 終止音) によって節を組んでい  
 る。場合にはよってば, リ音とハ音を欠き,  
 mūrchanā は rajanī である。夕方には, [歌われる]。
- (2) mālavagauda は突き出た胸の重みに身体をかが  
 めた恋人を伴って, 身体は黄色く, 恋人に  
 抱かれていゝる。黄金のように輝く耳飾りが  
 彼の顔を飾っている。

saurāṣṭrī

1. pūrṇā saurāṣṭrakā padjatrāyena samupāśritā |

gāyakair-gīyate sāyam kvacit patrayabhūṣitā ||

2. uttunḡapīnastanabolakārā karnotpalālidhvanidattacittā |

priyāntikam yāti vilolabāhukḥ saurāṣṭrikā kuṅkumalīptagallā ||

- (1) saurāṣṭrī は 7 音音階で、サ音が 3 音である。  
歌手達により、夕方に、歌われる。或る場  
合には、ハ音の 3 音により飾られている。  
(2) 突き出た乳房に首飾りが揺れ、耳につけた  
蓮花に、蜂の音とてて群がる。彼女は頬  
に kuṅkuma を塗っており、愛人のとこへ行  
く。

gurjarī

1. grahāmsanyāsarikḥ pūrnā prātar-geyā tu gurjarī |

bahulī miśritā nityam śadjatīnā kvacid bhavet ||

2. indīvaraśyāmatanus-sukeśī pātīrapatrāvalicārutalpā |

śrutisvaravyūhavibhāgaramyā tantrīmukhān-mañjulagurjarī-iyam ||

- (1) gurjarī は 1) 音が出発音、主音、終止音であ  
り、7 音音階である。夜明けには、歌われる。  
常に bahulī-rāga と混合している。時にはサ音  
と欠く。

- (2) 美しい gurjarī は、〔身体は〕青蓮花のような  
 緑青色で、髪は美しく、白檀の葉を撒いた  
 美しい寝床 (talpa) にいる。一連の śruti  
 で śvara を調律し、弦の方は顔に向けている。

malhārī

1. patrayena yutā prātar-malhārī rivivarjitā |  
 varṣasv-*api* viśeṣena prayeyā sukhadāyini ||
  2. mṛṇālatanvī pikakanṭhanādinī gānacchalena smarati priyam svakam |  
 vipaṅcīkāmañjulapāṇīr-uttamā malhārikā yauvanabhārasannatā ||
- (1) malhārī はパ音の 3 音を具え、リ音を欠く。雨季の夜明けに、特に、歌われる。彼女は安楽を享ける。
- (2) 身体は蓮糸のようには細く、カウコ - の鳴声と真似て歌い、自分の恋人を想っている。美しい手には vipaṅcī (琴) を持ち、若さに溢れている。彼女は最も勝れた女性である。

bahulī

1. madhyamāṃśagrahanyāsā ridhakīnā ḥavā na pā |

prageyā bahulī prājñais-sandhyāyām-iti nirṇayāḥ ॥

2. dūrvādalaśyāmala bhavyagātrā sayyātalasthāpitanavyapatrā |  
prasūnamālāparibaddhakeśī vilāsini-iyam bahulī vibhāti ॥

(1) bahu は マ 音が主音，去聲音，終止音で，リ  
音と ヲ 音を欠く，或は ハ 音を欠く。夜明け  
に，歌われる。

(2) 身体は dūrvā の花弁のような緑青色で，寝床  
に新しい木の葉を敷き，髪に花輪を結んで  
け，快活である。

pāḍī ; pāḍī .

1. śaḍjagrakāṃsā sanyāsā gariktā pāḍikā matā |

gānājñair-gīyate sāyam katicid gamakānvitā ॥

2. pāḍī lalāṭoditacandrarekhāpraphullarājīvasamatrinetrā |

bhāgīrathīpūtajatākālāpā cakāsti muktāphalacāruharā ॥

(1) pāḍī は ヲ 音が去聲音，主音，終止音であり，  
カ 音を欠く。夕方に，歌われる。いくつか修飾音  
を具えている。

(2) 額に月を黒髪をくけ，瑞圃の青蓮花のよう  
な三眼を具え，カンジス河の水で浄められ

の髪飾りとつけ、真珠の美しい首飾りと掛けて  
 いる。

pañcama

1. pañcamāṃśagrahanyāsa rājate rāgapañcamah |  
 ririkto gīyate prātas-satrayena-athavā yutah |  
 ucyate kenacit pūrṇah śṛṅgārarasadīpakah ||
2. raktāmbujākṣī' ruṇacārucīrah yuvā suveśo ratirāṅgayuktah |  
 pratyūśakāle vijayī nitantam sa pañcamākhyah kalakanṭha-  
 bhāṣī ||

1. pañcama は 5 音が主音、出発音、終止音で、  
 7 音と欠く。夜明けに歌われる。或は 7 音  
 が 3 音とある。或る人は pañcama は 7 音音階  
 である、恋情の情趣が輝いているという。
2. 眼は赤蓮花のよう、美しい赤衣をまと、  
 若々しく、美しく着飾り、愛欲に染まっ  
 ている。彼は美しい声で語り、夜明け時の征  
 服者である。

bhairava



1. yadiyāmsāgrakanyāsāṅ-sādī eva nigadyate |  
ripāsto bhairavo rāgaḥ prabhāte sa praṅīyate ||
2. gaṅgādharaś-candrakalo ttamāṅgo bhujāṅgavyūhavibhūṣitāṅgaḥ |  
śuddhāmbaraḥ śūlavibhūtidhārī sa bhairavākhyo jayati prakāmaḥ ||

(1) サ音が主音，去聲音，終止音といわれ，リ音とハを欠く，bhairava-rāgaは，夜明けは，歌われる。

(2) 彼は gaṅgādhara (Śiva 神) である。立派な身体に月を飾り，蛇の飾りをつけている。淨衣をまとひ，強力な戟を持ち，烈しい欲望を制御している。

baṅgāla

1. gatrayeṇa manojñō'sau baṅgālo rivivarjitah |  
pūrṇo matrāyayukto vā Kallināthamatan-tv-idam ||
2. manojñāveśaḥ kamanīyakeśaḥ praphullanetraḥ śaradinduvaktraḥ |  
sadā vilāsī nava gehavāsī baṅgālanāmā ravikalpadhāmā ||

(1) baṅgāla はガ音の3音を具え，美しく，リ音を欠く。或は7音音階で，マ音の3音である。しかしこれらは Kallinātha の説である。

- (2) 美しい衣服をまとひ、髪は愛らしく、眼を開き、顔は秋月のようである。常に快活で、新しい家は住み、太陽のような光を具えている。

*lalita*

1. *sagrakanyāsasam yuktaś- sāmśah pañcamavarjitah |*  
*prātaḥ prayujyate nityam pūrṇah kair- api sammataḥ |*  
*dhatrayeṇa samāyukto mata- anyā lalitā budhaiḥ ||*
2. *saptacchadānām kusumair- vicitro gauro yuvā pañkajapatranetraḥ |*  
*vibhāti citram lalitabhidhānaḥ prasannaraktraḥ savilāsavesaḥ ||*

- (1) *lalita* はサ音が去聲音、終止音、主音で、ハ音と欠く。夜明けに演奏される。一部の韻者には、異説として、*lalita* は、常に、7音音階であって、ダ音の3音を具えていると考えている。

- (2) *lalita* は *saptacchada* の花を飾り、美しく、〔身体〕は黄色で、若い。眼は蓮弁のよう。何と美しいことよ。顔は暗々とし、華麗な衣服をまとっている。

gaudī

1. satrayā dhagariktā syād-gaudī sarvāṅgamañjulā ।  
gāyair-gīyate sāyam gambhiragunagumhitā ॥
  2. rasālanavyāṅkurakarnāpūrā kādambinī syāmalamañjudehā ।  
piyūṣaṇiṣyandimṛdusvanādhyā gaudī niyuktādhikakautukena ॥
- (1) gaudī はサ音の了音を具え、グ音とカ音と欠く。すべての部分が美しい。夕方には、歌われ、深遠な美音を織ります。
- (2) gaudī はマシゴ - (rasāla) の新芽を耳飾りとし、kādamba の花を飾り、身体は緑青色で、美しい。烈しい欲望にかられ、甘露の流れるのを穏やかな音に満ちてゐる。

śrīrāga

1. catuḥ śrutiridhau yatra bhavetām niyatasvarau ।  
sādhāraṇa'pi gāndhāro niṣādaḥ kaisikī punaḥ ॥  
vīṅikāvīṣaye śuddhāś-śadjamadhyama pañcamāḥ ।  
śrīrāgesya-api melo'yam kathito gāyako ttamaiḥ ॥  
dinānte gīyate śadjaḡrahāmśanyāśasobhitāḥ ।

ādhyamūrchanayā pūrṇaḥ śrīrāgo vā-atha gojjhitah |

2. kandarpamūrtis-taruno'ruṇāmbarah karnāvatamsōkṣtanavyapallavaḥ |

śadjādisevyah kṣitipālasundarah śrīrāganāmā nitarām vibhāti ||

- (1) śrīrāga は おゝゝは、確定の音階音は 4 śruti  
のり音とマ音とあり、カ音は sādharāṇa 音、ニ音  
(117)  
は kaisikī 音とあり。vīṇā を対象とする場合  
には、サ音、マ音、パ音は純粋音 (śuddha) と  
あり。サ音が出発音、主音、終止音で、一  
日の終りに歌われる。

- (2) śrīrāga は 愛の神 (kandarpa) の姿をし、若くしく、  
赤衣をまとひ、耳に花の蕾の耳飾りをつけ、  
サ音とニ音に傳かれ、国王のように美しく、  
大いに、威光を榮しといふ。

mālavasrī

1. pūrṇā śadjatrayena petā malavasrīs-sadā bhavet |

ridhālpā rasaśringāravardhanī cittarañjanī ||

2. praphullarakto tpalapāñir-eṣā mendasmitadbhāsitaḥ gallaḥ guḥmā |

svairam niṣaṇṇā sahakāramūle vibhāti nityam kila mālavasrī ||

- (1) mālavasrī は 7 音音階で、サ音の 3 音を具え

ている。リ音とダ音は少使用音である。恋  
情の情趣を増大し、人の心を彩る。

- (2) 満開の赤蓮花を手にし、両頬に微笑をたは  
え、静かに、マシゴ - 樹 (sahakāra) の下には坐  
り、常に、輝いている。

dhanyāsī ;

1. dhanyāsikā prabhāte' sau sadjatrāyamaṇḍitā |

ridhakīkā rase vīre gīyate gāyakottamāih ||

2. nīlotpalaśyāmalamūrtir-eṣā priyam likhanti virahena yuktā |

śrīkaṇḍacarcāvilasakucā syād-dhanyāsikā bhāti manojñaveṣā ||

(1) dhanyāsī はサ音の3音に5>と飾られる。

リ音とダ音を欠ぐ。勇猛の情趣が歌われる。

(2) 青蓮花のような緑青色の姿で、恋人と別れ

て、彼を描いている。美しい胸に白檀を塗

り、美しい衣服をまとっている。

bhairavī

1. sadjatrāyena samyuktā sadā pūrṇā pragīyate |

bhairavasvaraśamīśrā bhairavī ripamudritā ||

2. suvarṇavarṇā ghanavādyahastā viśālanetrā dvijarājavaktrā |  
nityam sthitā sphatikacārupīṭhe kailāsaśṛṅge kilā bhairavī-īyam ||

- (1) bhairavī はサ音の 3 音を具え、7 音音階で、常に、歌われる。bhairava-rāga の音階音と混合していて、リ音とバ音に飾られてゐる。
- (2) (身体は) 黄金色で、手にはシンバル (ghanavādyā) を持ち、眼は大きく、容顔は月のような。常に、kailāsa 山の美しい水晶の台座にゐる。

devagāndhāra

1. sampūrṇo devagāndhārah sadjatravibhūṣitah |  
gāyakair-gīyamāno saśobham datte nirantaram ||
2. gandharvavidyādharakinnarāṅgām nitambinūbhikḥ pariveṣṭito'sau |  
nṛtyotsarve prītim-upaiti devagāndhāro nitarām prasiddhah ||

- (1) devagāndhāra はサ音の 3 音に 5 > で飾られ、7 音音階でゐる。歌手に 5 > で歌われる時、常に、美を与える。
- (2) 彼は gandharva, vidyādhara, kinnara の女達に囲まれ、舞踏会では、常に、恋人のもとへ行く。

natta ; nata, nerta, nāta, natta.

1. nigam triśrutikau yatra patādyau sadjamedhyamau |  
viśuddhamelo 'sau śuddhāśajama (riṣabha) pañcamah ||  
śuddhanattas-sa vijñe yo grahāmsānyāsasadjakah |  
gamakair-gīyate sāyam yasya-ādyā mūrchanā matā ||
2. turāgam-ārūḍha viśālabāhur-viśuddhacāmīkaracāruvarṇah |  
raṇe pratāpī rudhirārdradeho virājate śuddhanatākhyarāgaḥ ||

(1) śuddhanatta は = 音 と が 音 に 3 śruti に あ り , pata-  
サ 音 と pata- マ 音 が あ る 。 4 音 と 1 音 は 純 粋  
音 に あ る 。 サ 音 は 出 発 音 , 主 音 , 終 止 音 に  
修 飾 音 と 具 之 て い る 。 mūrchanā は 最 初 の mūrchanā  
に あ る 。 夕 方 に , 歌 わ れ る 。

(2) 馬 に 乗 り , 腕 は 大 き く , [ 身 体 は ] 純 金 の  
よ う に 美 し い 色 に あ る 。 戦 場 に あ っ て , 勇  
取 に , 身 体 は 血 に 染 ま っ て い る 。

karnāta ; karnātagauda

1. śuddhās-samagapā yatra śuddho riḥ patamedhyamah |  
nā kaiśikī ca karnātagaudamelo 'yam-ucyate ||

nipātanīto 'yam yatra sampūrṇo vā ridhojjhitaḥ |

dinānte gīyate nityam karnāto 'yam sukhāvah ||

2. rājīvanetraḥ pṛthulāyātapatram padmam vakam dakṣiṇahastakena |  
stutyo nṛpaḥ kinnaracāraṇādyaikḥ karnātarāgaḥ karavālapāni ||

(1) karnāta は サ音, マ音, カ音, パ音, リ音が  
総称音で, マ音は pata 音である。ニ音は kai-  
śikī 音である。不規則型の場合は 7 音音階,  
或はリ音と マ音を欠く。一日の終りに歌わ  
れ, 安樂を享之る。

(2) 眼は蓮花のようで, 右手に大きな葉のついで  
蓮花を持つている。彼は王であり, 剣を  
手にし, kinnara や cāraṇa たちにより讃えら  
れてゐる。

sāmanta

1. sāmantas-satrayena-āptaḥ saptasvaravibhūṣitaḥ |

geyaḥ prabhātakāle 'sau kākalyantara-rājitaḥ ||

2. karadhṛtakaravālaḥ śāstrasandohakālah prathamam-adhikarālah  
praudhakīrtiyā viśālah |

hrdayanīhitamālah kinkumavyāptaphālah sphurati dharani-



pālah khyāta sāmantarāgah ||

- (1) sāmanta は 4 音 の 3 音 を 具 之 , 7 音 音 階 で 成  
る . 夜 明 け に 歌 わ れ る . kākali 音 や antara 音  
に よ り 輝 い て い る .
- (2) 手 に 劍 を 持 ち , 多 く の 武 器 に 勝 る 威 嚴 を 具  
之 , 偉 大 な 名 声 を 具 之 て い る . 彼 は 王 で あ  
り , 胸 に 首 飾 り を 垂 ら し , 額 に kuikuma ( サ  
ラ ン ) を つ け て い る .

todī

1. todī matrayasamyuktā gātavā divasodaye |

manyāhatā pakampā ca gāyakasvāntarañjanī ||

2. mṛṇālakundendu samānagātrī viliptadehā hericandanena |

vinodayanti vipine kuraṅgam todī vipaṅcim dadhati karābhyām ||

- (1) todī は 3 音 の 3 音 を 具 之 , 日 の 出 に 歌 わ れ  
る . 心 音 は 震 え る ( シ イ フ ラ ー ト ) . 彼 女 は 知  
識 を 起 之 て い て , 歌 手 の 心 を 射 る .
- (2) 身 体 は 蓮 糸 の よ う に [ 繊 細 で , ] 月 の よ う に  
[ 白 く ] , 黄 檀 を 身 体 に 塗 っ て い る . 両 手  
に vipaṅci ( 琴 ) を 持 ち , 森 で 鹿 を 樂 し ま せ

२ " ३ ।

vasanta

1. sadjatraya<sup>u</sup>tah pūrṇo vasanto vā ripojj<sup>h</sup>itah ।  
prātar-mathau prayoktavyau vire raudre' dbhute rase ।  
sahā<sup>^</sup>yah pañcabāṇasya rāgo hindolasambhavaḥ ॥
2. sikhandi piñchocchaya<sup>c</sup>ārucū<sup>ḍ</sup>ah cūtānkurodbhāsura<sup>k</sup>arṇapū<sup>r</sup>ah ।  
navyāmbudasyā<sup>m</sup>atanur-vilāsī vasantarāgo' timanokara<sup>s</sup>ōri ॥

- (1) vasanta はサ音の3音E具え、7音音階である。或はリ音とハ音E欠く(5音音階)。夜明けに、勇猛、恐れ、驚きの情趣にふいて、matha (du.?) の用である。彼は hindola-rāga のうしろ、pañcabāṇa の友である。
- (2) 美しい髪髻は孔雀の羽根とつけ、美しい耳飾はマシゴの若芽である。入道雲のように黒い (śyāma) 身体で、快活であり、非常に美しい。

bhūpālī

1. bhūpālī satrayena-ādhyā manihīnē-uditā-<sup>u</sup>ṣaṣī ।

ripahinā mate keṣāṃ rase śānte prayujyate ।

2. uttūṅgavakṣo bharabhāranamā gaurī sphuratkūṅkumalīptadehā ।  
sampūrṇaśītāṃsumanojñavaktrā bhūpālī sāvāeva patim smaranti ॥

(1) bhūpālī は サ 音 の 3 音 に 溢れ, マ 音 と = 音 と  
欠く。 usapī と い わ れ る (夕 方 に 歌 う 意 味  
か)。 取 る 人 達 の 意 見 で は, 彼 女 は リ 音 と  
ハ 音 と 欠き, 平 安 の 情 趣 に 用 い ら れ る。

(2) 彼 女 は 突 き 出 た 乳 房 の 重 さ に 身 と か か り,  
( 身 体 は ) 黄 色 く, 輝 く 白 檀 と 塗 り, 顔 は  
満 月 の よう に 美 し い。 彼 女 は 主 人 を 想 っ て  
い る。

ghaṅṭārava

1. dhāivatāṃśāgrahanyāso bhaved-gāndhāraravajitah ।

ghaṅṭāravo'yaṃ vikhyātas-sarvadā gīyate buddhairh ॥

2. kare dadhānah kila śāikhā-ekam vāme ca gāṅṭām kalanāda-  
ramyām ।

dhāntābmaras-cārukutīpradesē ghaṅṭāravo'yaṃ haribhakti-  
mukhyah ॥

(1) ghaṅṭārava は ガ 音 が 主 音, 去 聲 音, 終 止 音 で,

か音と欠く。彼は、常時、歌われる。

- (2) 右手に螺貝を持ち、左手に美しい音を出す鈴を持ちこいる。白衣をまとい、美しい茅屋で、hari 神に対する信愛を第一としてこいる。

kedāra

1. yadā samapaṅgās-śuddhāḥ nis-śuddhā śadja madhyamaḥ |  
patādyau rāgakedāramelaḥ proktaḥ-tathā budhaiḥ ||

niśādatrayasamyuktāḥ kedāro vā ripojjhitāḥ |

dhiraikḥ praṅyate sāyam kākālī svarabhūṣitāḥ ||

2. gaṅgādharaḥ sundaracandramauliḥ bhujāṅgamodbhāvāsura-  
yajñasūtraḥ |

dhyāne nivīṣṭo dhṛtāyogāpītheḥ kedārarāgo jāṭilo vibhāti ||

- (1) kedāra はカ音、マ音、バ音、カ音、ニ音が  
純粋音で、カ音とマ音が pata 音である。

ニ音の音と具えてこいる。或は、リ音とバ音と欠く。kākālī 音に鈴をれ、夕方、歌われる。

- (2) 彼は gaṅgādhara (śiva 神) である。美しい月

の冠を戴き、蛇から生じた悪魔の聖紐をつ  
け、瞑想に入っている。彼はヨーカの台座  
〔に坐り〕、頭は束髪に結っている。

velāvalī

1. prātar-velāvalī pūrṇā graha(?)-amśanyāsadhāivatā |  
prayujate rase vīre ripabhyām vā vivarjitā ||
2. vidhāya saṅketam-iyam priyena hemno llesadbhūṣaṇam-udvahantī |  
smaram smarantī smarakāminībhā velāvalī śyāmatanur-vibhāti ||

(1) velāvalī はク音階で、ガ音が土音(?)、主  
音、終止音で、夜明けに〔歌われる〕。勇  
猛の情趣に使用される。或はリ音と心音と  
欠く。

(2) 彼女は夫と共に寢舎の場に臥して、愛の神  
(smara)を想っている。黄金の輝く飾りを身  
につけ、身体は緑青色である。彼女は愛の  
神の最愛の女性である。

nattānārāyaṇa

1. nattānārāyaṇo rāgaḥ sadjatrāyabhūṣitah |

kākelyantara yukto gātavyas-sarvadā budhāih ||

2. navyāmbudaśyāmatanur-manojñāḥ praphulla pañkeruha locana-  
śrī |

caturbhujāḥ śaikhagadāripadmaih nārāyaṇo'sau nitarāṃ vibhāti ||

- (1) nattanārāyaṇa はサ音の3音に飾られ、kākalī音  
と antara 音を具え、常時、歌われる。  
(2) 彼は、身体は入道雲のようには黒く、美しい。  
眼は満向の蓮花のようである。四臂で、螺  
貝、棍棒、輪、蓮花を持ち、常に輝いてい  
る。

śaṅkarābharāṇa

1. śaṅkarābharāṇo rāgaḥ śaḍjatrāyamaṇoharaḥ |

geyas-sūryodayo nityaṃ mudritābhīdhābhūṣitaḥ ||

2. maheśamaulīnduśudhātītriptaḥ sphuratsphaṇāsthūlamāṇipradīpaḥ

bhujāṅgamūrtiḥ kamaṇīyākīrtir-virājate śaṅkarābharāṇākhyāḥ ||

- (1) śaṅkarābharāṇa は美しいサ音の3音を具えてい  
る。常に、日の出時に歌われる。即ちこれに  
名前には飾られてゐる (śaṅkara の飾りと飾りと  
してゐる)。

- (2) mahēśa (Śiva 神) の冠と飾る月の甘露水に満  
 ちし、大きな寶石の光のような、輝く蛇蓋  
 と具之、蛇の姿であり、美しい光輝と具之  
 とする。

malhāra

1. śuddhau sagau mapau śuddhau patādigau masau punah |  
 trīśrutis-syān-niṣādo'pi malhārasya-api melanāmā ||  
 dhivatāṃśagrahanyāsah padjapañcamavarjiteh |  
 malhāro gīyate prātar-gānavidyāviśāradaiḥ ||
2. vīṇātivādah kalakanṭhanādah suvarṇah sphuradebjakarnah |  
 kāśmīracitraś-śaradinduvaktro malhāranāmā nitaram vibhātīn

- (1) malhāra はサ音とガ音、マ音とパ音は純粋音  
 で、マ音とサ音は pata 音である。ニ音は 3  
 śruti である。ダ音が主音、出発音、終止音  
 である。〔或は〕サ音とパ音を欠く。彼は夜  
 明けに歌われる。

- (2) 彼は vīṇā に精通し、美しい声をしてゐる。  
 耳は高い大蓮花をつけ、秋月のような顔は  
 サフラン (kāśmīra) をつけてゐる (顔飾か?)。

〈身体は〕黄金色で、常に、輝いてゐる。

kāmodī

1. pūrṇā dhatrayasamyuktā malhāranikaṭas-tathā |  
geyā pratyūṣakāle sā kāmodī kāmāḍipinī ||
2. pītāmbarā kākalinēdinī-iyam sukeśapāsā vipine rudantī |  
vilokayantī bhayam-udvāhantī kāmodikā nātham-anusmarantī ||

(1) kāmodī は 7 音階で、7 音の 3 音を具えてゐる。彼女は malhāra (melakartī) の近くにはゐる。彼女は夜明け毎に歌われ、愛欲に燃えてゐる。

(2) 彼女は黄衣をまとい、低く甘い声 (kākalī) を立てゐる。美しい髪は 索 (pāsā) のようである。森の中で、決して、あたりを見廻さず、恐れおののきつつ、夫を想つてゐる。

deśāksī

1. patādikau samau yatra gāndhāras-triśrutir-bhavit |  
viśuddhā samapāni syur-mele deśāksīkodbhave ||  
pūrṇā deśāksīkī jñeyā bhūṣitā gātrayena ca |



vire rase prajojyā nā prātaḥkāle praḡiyate ॥

2. sampūrṇaśītāṃśumanojñavaktrā praphullarājīvavilolanetrā |  
prāptaprasannā savilāsabāhur-deśākṣikā-iyam geditā munīndraik ॥

(1) deśākṣī に は " ー は , ㄐ 音 と ㄨ 音 は pata 音 ー ,  
か 音 は 3 śruti ー あり 。 ㄐ 音 , ㄨ 音 , ハ 音 ,  
ニ 音 は 純 粋 音 ー あり 。 ㄐ 音 音 階 ー , か 音 の  
3 音 に 飾 ら れ ー いる 。 勇 猛 の 情 趣 に 使 用 し ,  
夜 明 け に , 歌 わ れ る 。

(2) 顔 は 満 月 の よ う に 美 し く , 動 く 眼 は 満 月 の  
青 蓮 の よ う 。 彼 女 は 穏 や か ー , 快 活 な 腕 を  
し ー いる 。

kalyāṇa

1. yatra suddham sapau syātām gaṇī ca sapatau sapau |

sādhāṇa'pi gāndhāro meḥ kalyāṇasambhavaḥ ॥

trisadjo gīyate sāyam pūrṇaḥ kalyāṇasamjñakah |

ritrayeṇa-athavā yuktaḥ proktaḥ saṅgītavedibhiḥ ॥

2. kare kṛpāṇam tilakam lalāṭe dhatte pratiṣṭhas-smare pracan  
ṇdah |

āraktavarṇas-tapanīyabhūṣaḥ kalyāṇarāgo muninā pradīṣṭah ॥

- (1) kalyāṇa においては、カ音とハ音は純粹音で、  
ganī (?), またカ音とハ音の pata 音がある。  
カ音は sādharāṇa 音である。カ音の 3 音を具  
え、7 音音階であり、夕方に歌われる。或  
は、リ音の 3 音を具える。
- (2) 手に劔を持ち、額に額飾をつけ、威厳あり  
り、恐ろしい。(身体は)黄色で、黄金の  
飾りをつけている、と賢者によって説かれ  
る kalyāṇa と名は想い (smare)。

kāmoda

1. kāmodo gīyate pūrṇo nisādaḥ satrayānvitah |  
Iṣadbhedo budhah proktaḥ kalyāṇākhyahamīrayoh ||
2. pītāmbarah phullasarojanetro nitambinīmandalamadhyā-  
vartī |  
yuvā manojītaḥ smitabhāsurasyāḥ kāmodarāgo nitarāṃ  
vibhāti ||

- (1) kāmoda は 7 音音階で、カ音の 3 音を具えて  
いる。夕焼け時に歌われる。kalyāṇa-hamīra  
の ニ ヲ カ イ 5 の、わすかには相違いなくのこ

ありと、賢者たちはいっている。

- (2) 彼は黄衣をまとい、眼は蓮花のよう。女達の輪の中に入れて、若々しく、愛らしく、顔は微笑している。

sāraṅga

1. viśuddhau śaḍjagāndhārau tathā madhyamapañcamau |  
patāḍau ca samau yatra niśāḍaḥ kaiśiki punaḥ ||  
sāraṅgo gīyate pūrṇaḥ śaḍjatrajāviraḥjitāḥ |  
madhyāhṇakālate paścād-gītañjais-cittarañjakaḥ ||
2. prasūnamāli paribaddhakeśi vīṇam dadhāno lasadamaśadeśe |  
saha priyābhir-sahakāramūle sāraṅgarāgo ruśiko vibhāti ||

- (1) sāraṅga においては、サ音とカ音、マ音とパ音は純粋音で、サ音とマ音の pata 音があり、ニ音は kaiśiki である。7音音階で、サ音の3音により輝いている。午後より以後に歌われ、心に彩る。

- (2) 髪は花輪を結い、美しい肩に vīṇā をかっぎ、恋人たちと、マノゴの下にいる。彼は ruśika (?) である。

## [V] Rāgavibodha

本書はインド音楽論書のうち、最も早くテキストが編集・刊行された論書である。つまり、1895 A.D. に P. G. Garpura の編集によって、テキストが刊行され、早くも、1903 A.D. に R. Simon が本書に説かれてゐる rāga の音符譜記法に関する研究を發表した。次いで 1915-16 A.D. に は K. B. Deval が本書の部分的翻訳と全体の梗概、及びテキストを發表し（以上筆者未見）、更に 1933 A.D. に M. S. R. Aiyar がテキストと全体の英訳を發表した。しかし、このテキストは本書の著者 somanātha の自注 (viveka) が省略されてゐるが、1945 A.D. に S. S. Sastri が完全なテキストを發表するに及ぶ、本書の研究資料として原典は一応、完備された。(118)

従来、本書の研究対象は somanātha が表示してゐる各々の rāga の音符譜記法 (5. 37-166) の解明と rāga の音楽的性質が中心であり、こ

れを西洋式譜記法と対応させる努力がなされてきた。筆者が課題とする観想図像については、特に、注目されていなかったが、1976 A.D., Emmie te Nijenhuisが第4章と第5章の詳細を研究結果と発表した<sup>(119)</sup>。この研究は本書の観想図像の内容を理解する上で、唯一の参考書である。本書は5章より構成されている。各章の最後の備に著者が述べている主題に従えば、次の通りである。

第1章は śruti, svara など (1.63)。

第2章は vīṇā の種類 (2.53)。

第3章は 23種の mela の形式と所属する rāga (3.61)。

第4章は 75種の rāga の形式 (4.48)。

第5章は 51種の rāga の観想図像 (5.224)。

したがって、本書は saṅgītaśāstra の構成工具として「なる」。

次に、somanātha について一言しておきたい。彼は第1章の備に於いて、「私は sakalakālā と通称されている一門の生れで、学者である Menga-

nātha の息子, Mudgalasūri の息子である, 浅学な  
 somanātha である」と述べ、各章の最後の偈に  
 も同主旨の記述がみられる。(120) sakalakalā は通称  
 であり、確実なことは不明であるが、一般に、  
 somanātha は Andhra 地方の出身とされている故、  
 この家系は、この地方の芸術家を多く出した  
 家系であると推定してよい。したがって、  
 彼の音楽理論は南インド、特に彼と同郷の先  
 輩である Rāmāmātya の svaramelakalānidhi (śaka. 1472;  
 1550 A.D.) の説に準拠し、また P. Viṭṭhala の説にも  
 近い。(121) (122) (123)

彼の rāga 組織は、Śrīkanṭha と同称、melakartī-  
 melarāga の分類に属している。Śrīkanṭha は 10 mela  
 であるのに対して、彼は 23 mela を説き mela-  
 rāga の数は 75 であり、Śrīkanṭha のほぼ 2 倍であ  
 る。mela の総数は 960 に及ぶのであるが、当  
 時、知られていた melarāga は 50 であり、明ら  
 かにされる mela は 23 種である (3.26a)。以下  
 第 3 章 (31-60) の記述に従って、melakartī と  
 その melarāga を表示する。

1. mukhārī-mela,  
mukhārī, turuṣkatodī.
2. revāgupti-mela. rāga 同名.
3. sāmavarālī.  
sāmavarālī, vasantavarātī.
4. todī-. rāga 同名.
5. nādarāmakrī- rāga 同名
6. bhairava-  
bhairava, pauravī.
7. śuddhavasanta-  
vasanta, takka, hiḥeja, hundola.
8. vasantabhairavī-  
vasantabhairavī, mālavī.
9. mālavagaṇḍa-  
mālavagaṇḍa, caittīgandī, pūrvī, pādī, devagāndhāra,  
gondakiyā, kurañjī, bahulī, rāmakriyā, pāvaka,  
āsāvarī, pañcama, baṅgāla, śuddhalalīla, gurjarī,  
paraja, śuddhagaṇḍa.
10. rītiḡaṇḍa-. rāga 同名.
11. ābhīranāṭa- rāga 同名.

12. hammīra-

hammīra, vihaṅgaḍa, kedāra.

13. śuddhavarāṭī- . rāga 14 同名 .

14. śuddharāmakrī- .

śuddharāmakrī, lalita, jaitāśrī, trāvanī, deśī.

15. śrīrāga- .

śrīrāga, mālavaśrī, dhanyāśī, bhairavī, dhavalā,  
saindhavī.

16. kalyāṇa- . rāga 13 同名 .

17. kāmbodī- .

kāmboda, devaki

18. mallāri- .

mallāri, natamallāri, pūrvagaḍa, bhūpāli, gōḍa,  
śaṅkarābharāṇa, natānārāyaṇa, nārāyaṇagaḍa,  
kedāra, sāraṅkanāṭa, velāvalī, madhyamādi,  
sāverī, saurāśtrī,

19. sāmanta- . rāga 14 同名 .

20. karnāṭagaḍa- .

karnāṭagaḍa, addāṇa, nāgaḍhvani, śuddhabaṅgāla,  
varṇanāṭa, turuṣkatodī (irākha).



21. devākṣī- . rāga は同名 .  
 22. śuddhanāṭā- . rāga は同名 .  
 23. sārāṅga- . rāga は同名 .

以上 75 種の mela-rāga の音楽的形式 (nādamayrūpa) は第 4 章において, mukhārī から sārāṅga までの (1) rāga における音階音の数, (2) 主音などの 3 音, (3) 歌われる時刻を中心に説かれている。第 5 章の観想図像 (devatāmayarūpa) は śaṅkarābharana から paraṅga までの 51 種であり、叙述の順序が第 3 章, 4 章と相違している。ここでは第 5 章の順序に従って, 観想図像を紹介し, 音楽的形式は第 4 章の記述を加えることにする。

śaṅkarābharana (4.37a ; 5.169)

1. pūrṇāḥ sāmśanyāśaḥ saḅraḥ uśaśi-īha śaṅkarābharaneḥ |
  2. gaḅarājīkamalarājīr-bhāle bhaśitī rataḥ sadā nṛtye |  
 suḅdaraḅaurāḥ śoṅāmbaraḅharanaḥ śaṅkarābharanaḥ ||
- (1) śaṅkarābharana は, 7 音音階で, ㄴ音が主音, 終止音, 出発音で, 曙に歌われる。

- (2) 首に美しい蓮花の輪を掛け, 額に灰を塗り, 掌に踊り狂っている。〔身体は〕美しく, 黄色で, 赤衣をまとっている。

velāvalī ( 4. 39 b ; 5. 170 )

1. dhāmāntādih pūrnā-aripa-api velāvalī vyoṣṭe ||

2. velāvalī vinilā tālīvana cārini taralakārā |

taruṇānveṣaṇakarūṇaṃ karatalataddalābharāṇā ||

(1) velāvalī は ヲ 音 が 主 音 , 終 止 音 (anta) , 出 発 音 (ādi) で , 7 音 音 階 で , リ 音 と ハ 音 と 欠 き , 夜 明け (vyoṣṭa = prabhāta) に 歌 わ れ る 。

(2) 彼 は ( 身 体 は ) 青 色 で , 椰 子 の 林 を 彷徨 っ て い る 。 首 飾 り は 揺 れ , 夫 を 探 し て , 悲 し み , 手 に 椰 子 の 葉 の 飾 り (taddalābharāṇa = tāli-patranirmitābharāṇa) を 持 っ て い る 。

bhūpālī ( 4. 36 a ; 5. 171 )

1. sanyāsagrahāṃsā manikīnā-ṣaḥ smṛtā-ika |

2. dolālolā vipine taralita valayam vibhūṣya bhūpālī |

kānte prasitātyantam kuikuma pītā smarād-bhītā ||

(1) bhūpālī は ヲ 音 が 終 止 音 , 出 発 音 , 主 音 で , マ 音 と ニ 音 と 欠 き , 曙 に 歌 わ れ る 。

(2) bhūpālī は , 森 の 中 で , ぶらん = の よう に 動

「こゝろ。小鈴のこゝろに花輪 (taralitavalaya = cañcalakankana) を飾り、恋人を求め、その想いに苦しんでゐる。彼女はおくくまのさうな黄色である。(注. vāsaka-sajjikā nāyikā)。

*lalitā* (4. 22 b ; 5. 172)

1. *uṣasi tu pūrṇā-apā vā sāmśāntyādya śucir-lalitā* ॥
2. *nīrājayanty-umesam dipair-anisam nisātyaye lalitā |*  
*vividhālakṛtimilitā lalitaśvetāmbarā gaurī* ॥

(1) *śuddhalalitā* (*śuci* = *śuddha*) は、夜明けには歌われ、7音音階、或は、ハ音とク。ナ音の主音、終止音、去聲音である。

(2) 彼女はおくくま、夜明けには、燈火で、*umes* (*śiva* 神) を照らす。種々の装身具をつけて、美しい白衣をまとい、〔身体は〕黄色い。

*vasanta* (4. 12 b ; 5. 173)

1. *sāmśānyāsaṅgako vasanta uṣasi vilaset-pūrṇā* ॥
2. *keśagakiṃśuka eṣa praveśitāmrāṅkurah pikasya mukhe |*  
*arunavasano vasanto gaurasuveṣo rasālagatah* ॥

- (1) *vasanta* は、サ音の主音、終止音、去聲音で、夜明けに遊ぶ。彼は7音音階である。
- (2) *kimśuka* の花を髪に飾り、マンゴーの若芽を鸚鵡の口に入れてゐる。彼は赤衣をきと、〔身体は〕黄色で、美しく、マンゴーの下にゐる (*rasālagata = mākaṇḍamūlavāsīn*)。

*hindola* (4. 14a ; 5. 174)

1. *hindolo ripatīno māṃśah sāntagrahaḥ sadā-uṣasi vā |*
2. *mālām-aśoka campakakamalānām-udvahan-mahābhūṣah |*  
*lalanāndolita dolā lolo hindolako gaurah ||*

- (1) *hindola* はリ音とハ音を欠く。マ音の主音で、サ音が終止音、去聲音である。常時、或は、夜明けに、歌われる。
- (2) *aśoka*, *campaka*, 蓮花の花環を掛け、多くの飾りを付けてゐる。彼は恋人がぶらんを揺り動かすことを望んでゐる。〔身体は〕黄色である。(註. *dakṣiṇa-nāyaka*)

*lalita* (4. 28a ; 5. 175)

1. *lalita uṣasi sampūrno dhāmsah sātāgrah pakīno vā |*  
 2. *kuṭilo lalito lalito vibhātayāto vinitatām naṭayan |*  
*nīhnutaparāratīcīhno gadati vadhūm cātu puṭuh khinnām ||*

- (1) *lalita* は、夜明けに、歌われる。ラ音が主音  
 と、サ音が終止音、去聲音である。或はハ  
 音を欠く。  
 (2) 彼は美しく、社には他の女と遊ぶ (*kuṭila = gū-*  
*dhapriyakaḥ*)、こゝそりて外に出で、朝方、  
 家へ帰り、他の女との愛の印をかくして、  
 口上手に、悲しむ妻にお世辞をいう。〔注。  
*khandita-nāyikā* と *śatha-nāyaka* )

*jaitāśrī* ( 4. 286 ; 5. 176 )

1. *saṅyāsaagrahāmsā-alparidhā prātes-tu jaitāśrī ||*  
 2. *esā mathuraveśā viśeṣapaṭur-akaṭudeśabhāṣābhṛt |*  
*veśe madanāveśam karoty-aleśena jaitāśrī ||*

- (1) *jaitāśrī* はサ音が終止音、去聲音、主音と、  
 リ音とラ音が少使用音。夜明けに歌われ  
 る。

- (2) 彼女は *mathurā* 地方の衣服を著し、非常に賢

く、滑りかな mathurā 語に話す。夫に對する  
愛情の深し。

dhanāśrī ( 4. 31 b ; 5. 177 ) ; dhanyāśikā

1. dhanyāśikā ridhonā samsānyāśagrakā prātaḥ ||
  2. dūrvābhavibhā virahāśehā likhanti pate patim rudati |  
śrapitakucā sitagallā sthiradhamillā dhanāśrī ||
- (1) nyāśikā は ㄱ 音と ㄷ 音と ㄴ 音と、ㄱ 音の主音、  
終止音、去聲音と、夜明けに歌われる。
- (2) dhanāśrī は dūrvā 草のよゝに美しい ( 身体の色  
の緑青色 )。恋人と別れて、春に彼を描き  
→、注いでいる。涙で胸を濡らし、頬は  
白く、髪を糸で結んでいゝる (sthiradhamillā = amo-  
citakeśapāsā) ( 注. prośitapatikā-nāyikā )

bhairava ( 4. 11 b ; 5. 178 )

1. dhāśagrakāsamyāśah sampūrno bhairavaḥ prātaḥ ||
  2. damarutrisūladhārī pannagahārī sito lasadbhasitah |  
dṛṭaśāsigaṅgo 'tijaṭo 'jinaṅvikāṭo bhairavo 'samadrak ||
- (1) bhairava は ㄱ 音の主音、去聲音、終止音と、

7音音階であり、夜明けに歌われる。

- (2) 彼は太鼓と三叉鉾を持ち、蛇の首飾りを掛け、(身体は)白色で、灰を塗り、頭には月を飾り、gāṅgāの水を受けている。束髪は大きく、大き象皮 (ajina = gajacarṃa, śārdu-lacarṃa) をつけ、三眼を具えている。

pauravikā ( 4. 12a ; 5. 179 )

1. sanyāsagrahamāṃsā svalparipā pauravī laśet-prātaḥ |
  2. tenugaurī pauravikā-āyatavenīmitakāñcukībandhā |
- dolāndolanalolā nīlanicolā madhau muditā ||

- (1) pauravī はサ音が終止音、出発音、立音で、リ音とハ音は少使用音である。夜明けに遊ぶ。

- (2) 彼女は(身体は)細く、黄色で、髪を長く編み、胴衣をつけている。揺れるおらんのように落ち着かず、青色の覆布 (nīlanicolan-asita pracchadapata) をつけ、春を喜ぶ。

todī ( 4. 10b ; 5. 180 )

1. gāndyamśāntapūrṇā todī kamprānu saṅgavaruk ॥

2. Lalitavipañcī vipine lalitaparinā-arunāmbārā harinī ।

dhavalāṅgaracānā mṛduvacānā bhūṣitā todī ॥

(1) todī は か 音 の 去 聲 音 , 主 音 , 終 止 音 で , 7 音 音 階 で あ る 。 か 音 と マ 音 は , 十 五 〇 か に , 震 之 三 ( ㄉ ー フ ー ト ) ( anu = alpa ; gandhāramadhyama yor-ity-arthah ) 。 夜 明 け の 早 〃 時 刻 に 輝 く ( ruc ) 。

(2) 彼 女 は , 森 で , pañcī ( 琴 ) を 樂 し み , 鹿 と 交 渉 し て い る 。 赤 衣 を 着 て い る , ( 身 体 は ) 緑 色 で あ る 。 白 膏 を 身 体 に 塗 り , ( 恋 人 に ) 優 し く 語 り か け る 。 彼 女 は 飾 り を 着 け て い る 。 ( 注 . vāsakesajjā-nāyikā )

turuṣkatodī ( 4. 44 b ; 5. 81. ) 注 . irākha

1. kamprā turuṣkatodī nisī māmbāntagrakā pūrṇā ॥

2. āyatanīlanicolā karamālājapyamānapatināmā ।

virahāturoccagaurī turuṣkatodī mahāreṇī ॥

(1) turuṣkatodī は マ 音 の 震 之 三 ( kamprā = svarasaptake 'pi kampanasīlā ) 。 夜 に 歌 わ れ , マ 音 の 主 音 , 終 止 音 , 去 聲 音 で , 7 音 音 階 で あ る 。



(2) *turuṣkatodī* は長い青色の覆布をまとひ、手は念珠を持ち、恋人（主人）の名を唱えてゐる。恋人と別れたため悲しみ悩んでゐる。〔身体は〕黄色く、長い弁髪を（垂さしてゐる）。

*mallāri* (4. 35a; 5. 182.), *naṭamallāri*, 注 *megharāga*.

1. *mallāriṅ-naṭayug-api sa dhāmsāntādir-ageniś-ca saṅgavabhāḥ* |

2. *nīlo ghanāntarāloḥṣitaḥ pitāmbaro varo vīraḥ* |

*mṛduhasito 'tipipāsita-cātaka-paśyesu mallāriḥ* ||

(1) *mallāri* は *naṭamallāri* (とゞゝゝ) 〕。ナ音の主音、終止音、去聲音で、カ音とニ音と欠く。夜明けの早い時刻に歌われる。

(2) 彼は〔身体は〕青色で、雨雲の中で輝く、黄衣をとり、堂々としてゐて、勇猛である。喉を渴さして *cātaka* 鳥の渴を癒す時、穏やかに微笑する。

*naṭamallāri* (4. 35 注; 5. 183)

1. *mallāriṅ-naṭayug-api sa dhāmsāntādir-ageniś-ca saṅgavabhāḥ* |

2. naṭamallāri-anilak nṛtyat-kutulena nartayan-sikhināḥ ।

Kalitakadambo lalito militāliḥ saurabhāt-sehajāt ॥

(1) mallāri と同じ。

(2) naṭamallāri は〔身体は〕白色で、面白がって  
 (kutukena)、孔雀を踊らせながら、〔自分も〕  
 踊ってゐる。kadamba 樹の下にいて (kalitakadmo  
 = nīpamūle sthitāḥ)、美しく、〔彼の〕生れながら  
 は具わらばる芳香のため、蜂が群がる。

gōṇḍa ( 4. 186 ; 5. 184 ) ; gōṇḍakriyā .

1. gōṇḍakriyā dhariktā sāmśanyāsāgratā prātaḥ ॥

2. palitakacāhita berhaḥ sakutaḥ jamālo dhanuḥ śarau kalayan ।

gōṇḍaḥ kirātaveṣo gairikarekhocito' linibhaḥ ॥

(1) gōṇḍakriyā はダ音とス音、サ音が主音、終止音、  
 去聲音で、夜明けに歌われる。

(2) 彼は白髪 (palitakaca) に孔雀の羽根をつけて、  
 kutāja 花の花環を〔首に〕掛け、弓と矢を  
 持つてゐる。彼は kirāta (kirātaveṣa = bhīllaveṣa ; bhī-  
 llā 族) の衣服をまとい、黄金の線と〔身体  
 に〕つけてゐる。〔身体は〕蜂のようになく

黒 " } 。

pūrvagāṇḍa ( 4. 35 b ; 5. 185 ).

1. sāntādigāṃśapūrṇo madhyāhne pūrvagāṇḍaḥ syāt ||
2. taruṇo 'ruṇavasana-yugo hari-pūjāṃ-ambujasrajā racayan |  
kamaladr̥g-uttamaveśo vidhumadhurāḥ pūrvagāṇḍo 'yam ||

- (1) pūrvagāṇḍa は 7 音 の 終 止 音 , 出 発 音 , 主 音 也 ,  
7 音 音 階 也 有 之 。 正 后 に (madhyāhne) 歌 わ れ 之 。
- (2) pūrvagāṇḍa は 若 々 し く , 赤 衣 正 妻 也 也 , 蓮 花 の  
花 輪 也 , hari (Viṣṇu 神) 正 供 養 し 之 也 也 。 眼  
は 蓮 花 の 中 也 。 衣 服 は 最 上 の 衣 服 也 有 之 。
- 彼 は 月 の 中 也 也 是 美 し 也 。

deśikāra ( 4. 27 b ; 5. 186 ), deśakṛt

1. sāmśādyanto 'hno 'ntaḥ kampramanir-deśakṛt-pūrṇaḥ ||
2. maṇimayamakuto kārī vicitravāsā lasan-gatāv-alasā |  
aruṇaḥ kṛpānapānir-deśikāraḥ sarojākṣaḥ ||

- (1) deśakṛt は 7 音 の 主 音 , 出 発 音 , 終 止 音 也 ,  
正 后 に (antar = madhye) 歌 わ れ 之 。
- マ 音 也 = 音  
は 震 之 也 。 7 音 音 階 也 有 之 。

- (2) 宝・石の冠を戴き、首飾りをかけ、種々の色の (vicitre = nānāvarṇe) 衣服をまとい、快活で、歩みは速い (alasa)。 (身体は) 赤く、手に剣を帯びてゐる。眼は蓮花のようである。

varāṭī ( 4. 27a ; 5. 187 ) . śuddha-varāṭī

1. śuddhavarāṭī pūrṇā sāmśāntā rīgrahā ca madhyāhne |
  2. taruṇī vane sakarūṇam gaveśayantī patim bhr̥śam gaṇṭī |
- nīlāmbarā varāṭī suratarukusumollasat-susamā ||

- (1) śuddhavarāṭī は 7 音音階で、サ音が主音と終止音、リ音が出発音である。正后に歌われる。
- (2) 彼女は若く、 (身体は) 黄色い。森の中で、非常に悲しく、夫を探し求めてゐる。青衣をまとい、神樹の花を飾り、この上なく美しい (susamā paramābhobhā ity-amareḥ)。

bahulī ( 4. 19b ; 5. 188 ) [注. abhisārika-nāyikā]

1. amanir-aparāhṇe geyā sāmśanyāsagrakā bahulī ||
  2. śyāmā caladharmillā tanvī tāmbūlinī sukañcukikā |
- bahulīlā-iyam bahulī lolacailāñcalā sugatīḥ ||

1. bahulī は ㄨ 音 と ㄷ 音 と 欠く。午後には歌われる。  
サ音が主音，終止音，出発音である。
2. 彼女は（身体は）緑青色で，頭髮を白くか  
せ，身体は細く，手にきんぎょを持ち，美し  
い胴衣をつけている。非常に快活で (bahulīlā =  
anekavilāsā)，衣服の裾を白くかき（衣服の  
裾は地面にすれ；注），歩む姿は美しい。

sāraṅga ( 4. 46a ; 5. 189 )

1. sampūrṇah sāraṅgah samsānyāsagrato 'parāhna ruçih |
2. pitāmbaro 'sita tanur- lalitālakṣṭir- rupeta cāpeṣuh |

sāraṅgo garudāṅko 'mbujakambugadāri dhārikarah ||

- (1) sāraṅga は 7 音音階で，サ音が主音，終止音，  
出発音で，午後には輝く。
- (2) 彼は黄衣をまとひ，身体は黒い。美しい飾  
りをつけて，弓と矢を持ち（肩に弓，  
矢筒に矢。注）。Garuda 鳥が彼に仕えてゐる。  
手に蓮花，螺貝，棍棒，輪を持ちてゐる。

naṭanārāyaṇa ( 4. 37b ; 5. 190 ).

1. sântādigāṃśapārṇo naṭanārāyaṇa ine namati |
2. indīveratanur-añcantī pīṭadukūlo maṇisphuraṇ-makutaḥ |  
<sup>nāṭa</sup>  
 nārāyaṇa uccaiḥ kuṇḍalalalīto mudā nr̥tyet ||

(1) naṭanārāyaṇa は ナ音の終止音，去聲音，カ音が主音で，7音音階である。午後には歌われる (ine sūrye namati sraṃsamāne 'parhne 太陽が傾く時)。

(2) 彼は身体は青蓮のよう(藍色)で，輝く (añcantī = śobhamāna)，黄色い絹の衣服をまとひ，宝石の輝く冠を戴き，美しい耳飾りを付け，全く熱狂的に，踊る。

devakṛti (4. 34b ; 5. 191), devakṛi

1. aparāhne devakṛi sāmśanyāsagrahā-apā vā |
2. bhāsuratanur-anugatasurataruṣūnā 'nūnasaurabhā sumukhī |  
 devakṛtir-atulabhūṣā maṇimayasimkāsānāsīnā ||

(1) devakṛi は午後には歌われる。ナ音が主音，終止音，去聲音で，[7音音階である]。或はハ音を欠く。

(2) 彼女は，身体は輝き，神樹の花に覆われ，(身体が)全体が香しく，微笑している (

sumukhī = smitavadanā)。無比の〔美しい〕飾りを  
ついで、宝石の柳子座に坐してゐる。

saurāṣṭrī ( 4. 41 a ; 5. 192 )

1. saurāṣṭrī sampūrṇā samsānyāsagrakā ca sāyāhne ।
2. cittrāmbarā-atigaurī mecakakañcukikayā-atigūḍhakuca ।

śonaradā vidhuvadanā madanārtā yāti saurāṣṭrī ॥

- (1) saurāṣṭrī は 7 音音階で、サ音が主音、終止音、  
去聲音で、夕方、歌われる。
- (2) 彼女は美しい衣服を身につけ、黒色の胴衣で  
胸を覆ってゐる。莖は赤く、頬は月のよう。  
恋に病んでゐる。〔注. abhisārikā-nāyikā〕

gaudī ( 4. 16 b ; 5. 193 )

1. gaudy-adhagā sāyāhne caittī ca sātādih ।
2. kṛīrodabhāsivāsā sahajasuhāsā pralambabāhulatā ।

karadhṛta sāhicchatrā gaudī gaurī sarojākṣī ॥

- (1) gaudī と caittī は サ音とカ音が欠き、夕方には歌  
われ、サ音が終止音、去聲音である。
- (2) gaudī は 乳海のような輝き(白さ)をもち、

衣服をきとひ、生れながらの美しい微笑を具之、蔓草のようには、手は長い。手に蛇が巻きつゝの広傘を持ち、〔身体は〕黄色く、眼は蓮花のようである。

caittī ( 4. 16 b ; 5. 194 )

1. gaurī と同じ。
2. śrutikṛtārasālavallarī-aruṇāmbara-gauratanur-abhiṣṭavanā |  
pikakalagalaravavittā cittaharā kīrtitā caittī ||

(1) gaurī と同じ。

- (2) caittī は耳にマニの管をつけ、赤衣をきとひ、身体は黄色く、森を好む。カマコーのような甘い声であり、〔恋人の〕心と奪う。

pūrvī ( 4. 17 a ; 5. 195 )

1. pūrvī pūrṇā sāntā gāṃśa śadjagrakā ca śāyāhne |
2. yāvakayukkaracaṭaṇā bahvābharāṇā kṛtśaḥṛddhāraṇā |  
dūrvābhatanur-akharvā cārvī bahugarvitā pūrvī ||

(1) pūrvī は 7 音音階で、カ音で終止音、カ音で



主音，カ音の出発音で，夕方，歌われる。

- (2) 手足に赤紅 (yāvaka = alaktaka) に塗り，多くの飾りにつけ，夫の心を奪う。(身体は) 大きく，dūrvā 草のような〔色〕である。美しく，大いに美しさを誇ってゐる。

travanī (4. 29a ; 5. 196)

1. sanyāsarigrahāṃśā sampūrṇā travanī tu sāyāhne ।

2. kadaliṃmūlāsīnā pīnakucā-adhīnanāyikā tanvī ।

kanakanibhā śubhatārā travanīkā varṇyavenīkā ॥

- (1) travanī はカ音の終止音，リ音の出発音，主音で，7音音階である。夕方に歌われる。
- (2) kadali 樹の下に坐り，胸は豊かである。彼女は美事で夫を魅了する型の女性 (adhīnanāyikā) で，〔身体は〕細く，黄金のような〔色で〕，素晴らしい弁髪を具えてゐる。(注 svadhīnapatikā)

kāmodī (4. 34a ; 5. 197)

1. pūrṇā sādīr-anīr-vā kāmody-āṃśāntasā ca sāyāhne ।

2. pītāṃśukā sukeśī śītikā smaranti patim bhayākuladrk ।

pikanādena vidūnā kāmōdī kānane rudatī ॥

(1) kāmōdī は 7 音音階で、サ音が去聲音。或は、  
ニ音と欠く。サ音が主音、終止音で、夕方  
に歌われる。

(2) 彼女は黄衣をまとひ、髪は美しく、〔身体  
は〕青色で、恋人を想いつつ、恐れおのの  
いてゐる。森の中で、カウコーの鳴き声に  
苦しむ、涙を流してゐる。〔注. proṣitabhartṛkā〕

nāṭā ( 4. 45b ; 5. 198 ) , śuddhanāṭā.

1. nāṭāḥ śuciḥ pradōṣe sāmśanyāsagrahaḥ pūrṇā ।

2. khetākakṛpānapāniḥ pratarjayan-vairiṇo reṇe 'runadrk ।

haritālābho hārī hayacārī dhīradhīr-nāṭāḥ ॥

(1) śucināṭā は日暮れに歌われる。サ音が主音、  
終止音、去聲音で、7音音階である。

(2) 彼は手に楯と剣を持ち、戦場で、敵を威嚇  
してゐる。〔怒りのため〕眼は赤い。〔身体  
は〕黄鳩のよう〔に黄色く〕、胸に首飾  
りと掛け、馬に乗り、威厳と知恵を具えてゐ  
る (dhīradhī = ramaṣṭhīrah) 。

ābherī ( 4. 25a ; 5. 199 ) , ābhīrī .

1. ābhīry-āpi pradoṣe pūrṇā gāṃsagrakā ca saṅyāpā ।

2. gaurāśyāmā-ābherī vīṇīlalolā savidrumāligalā ।

tāṭāṅkāñcītakarṇā mṛdutanuvānīśa suveṇībhr̥t ॥

- (1) ābhīrī は , 日暮れに , 歌われる。7音音階で、  
 が音が主音、出発音、サ音が終止音である。
- (2) 彼女は、〔身体は〕美しい緑青色で、黒衣  
 をまとい、首に珊瑚の首飾りを掛け、耳に  
 大型の耳飾りを付けている。声は穏やかであ  
 る。美しい弁髪を具えている。

kalyāṇa ( 4. 33b ; 5. 200 )

1. sādyanta-gāṃśa-pūrṇaḥ pradoṣa-geyaś-ca kalyāṇaḥ ॥

2. sacchātracāmaro 'cchaś-tāmbūlī maubiratnamālavān ।

kalyāṇaḥ śītavāsā rājā śimhāsanāsīnaḥ ॥

- (1) kalyāṇa はサ音が出発音、終止音で、が音が  
 主音、7音音階である。日暮れに歌われる。
- (2) 彼は傘蓋と松子と具え、〔身体は〕白く (   
 accha-avadāta )、手にきんぎょを持ち、冠を戴

き、寶石の首飾りと掛けてゐる。王の衣服  
で着る白衣をまとひ、獅子座に坐つてゐる。

śrīrāga ( 4. 30 a ; 5, 201 )

1. ryaṃśagrahā pradose śrīrāgo gatahago na vā sāntah |

2. kanakātapatramūle loladukūle gajāśrayo rājan |

śrīrāgo ' khilabhogo nīrajarājim bhajan-maulau ||

(1) śrīrāga はリ音が主音、去発音で、日暮れに  
歌われる。ゾ音とカ音を欠く。或は欠く＝  
とほなる。ナ音が終止音である。

(2) 彼は黄金の傘蓋の下で、絹衣をなつかせ、  
象に乗つて、輝いてゐる。すべての楽しみ  
を享受し、冠に蓮花の車輪をつけてゐる。

mālava ( 4. 15 b - 5. 202 ), mālavagauḍa .

1. mālavagauḍah pūrṇah pradosaśobho'tha vā rahitah ||

gāndhāradhaivatābhyām ninyāsāṃśagraho'tha vā sāntah |

2. kēntācumbitalapanaś-calamaulih kimapi kuṇḍalī śukabhāh |

nartanaśālāśīlī mālabhrn-mālavo mattah ||

(1) mālavagauḍa は7音音階で、夕暮れに輝く。或

か音とカ音が欠く。ニ音が主音、終止音、  
出発音である。或はサ音が終止音である。

- (2) 恋人に口づけし、冠を揺かせ、耳飾りをつけ、  
〔身体は〕鶯鶯のような〔青色〕である。  
舞踊堂に去かけ、花輪を掛け、酒に酔  
うこと (matta = madhupāno matta)。

gauḍa (4. 24a ; 5. 203), śuddhagauḍa

1. nyalpaḥ pradosaśālī śucigauḍaḥ pāmīśādisanyāśaḥ |
  2. kuṅkumakuṣumbhajāmbhaḥ kaṅakīrṇasitāmbaraḥ param surabhid |
- mṛgamadaṭilakī lalito mālā tāmbūlavān-gauḍaḥ ||

- (1) śuddhagauḍa はニ音が少使用音で、日暮れに歌  
われ、ハ音が主音、カ音が出発音と終止音  
である。

- (2) gauḍa はサヲラニヤ紅花の水溜に濡れた白衣  
をまとい、芳香を具え、麝香の額飾をつけ、  
美しい花輪を掛け、きんぎょを持っている。

kaṛṇāṭa (4. 42a ; 5. 204)

1. kaṛṇāṭo niśi pūrṇo niṅyāsāṃśaṅgaḥ kvacid-riḍhamuk |

2. sāsigajadantapānir-nīlagalo mīnabhūṣitaḥ karṇe ।

śṛṅgāravīrapoṣī karnāto yoṣitām-iṣṭaḥ ॥

(1) karnāta は、夜 (= niśi = rātrau), 歌われる。7  
音音階で、ニ音が終止音、主音、出発音で  
あり、時にはリ音とヤ音を欠く。

(2) 彼は手に剣と象牙を持ち、喉は青く、耳に  
真(の耳飾り)をつけている。恋情と勇猛  
の情趣を好み、女性たちの憧れの人である。

addāna (4. 42b ; 5. 205)

1. pūrṇo 'ddānaḥ pādya dhāmsaḥ saṅyāsa ullased-rātrau ॥

2. kuṭajaśrajā virājan kuntīkr̥taketake sphuran-makarāḥ ।

addāno ghanavarṇo ramate ratisaṅgre nitarān ॥

(1) addāna は 7 音音階であり、ハ音が出発音、カ  
音が主音、ケ音が終止音である。彼は夜に  
遊ぶ(歌われる)。

(2) kuṭaja 花環を掛ける, makara 真(印)と( sphu-  
ran-makarāḥ = rājan-mīnaciknaḥ), [身体は]両雲  
のうしろ(に黒い)色である。彼は、常に、  
ketakan 花で作った槍(を用いて)愛の戦を

樂しむ。

varṇanāṭa ( 4. 44a ; 5. 206 )

1. pūrṇo 'tha varṇanāṭah saṁśanyāsagraho nisā geyah ।

2. hārī gauro 'ruṇadṛk himasitavasano 'cchapāṭalośnīśah ।

chāyānāṭaparākhyah sa varṇanāṭo bhāto rasikah ॥

(1) varṇanāṭa は 7 音音階で、サ音が主音、終止音、出発音であり、夜に歌われる。

(2) 彼は首飾りを掛け、(身体は)黄色く、眼は(夕-ムウ花のようには)赤く、雪のようには白い衣服をまとひ、鬘布 (uṣṇīśa = keśaveṣṭana) は美しい白赤色である。彼は別名を chāyānāṭa とする。武士であり、恋情を具えてゐる (rasika = śṛṅgārin) 。

hammīra ( 4. 25b ; 5. 207 )

1. gaḡraḥ pāṁśah saṅyāso hammīro 'lpenī rātrau ।

2. rasiko yuvā saḥāso 'ruṇavasano dandakandukī kutukī ।

tāmbūkarucī ruciro gauro vīras-tu hammīrah ॥

(1) hammīra はカ音が出発音、ハ音が主音、サ音

が終止音で、ニ音は少使用音である。夜に歌われる。

- (2) 彼は恋情を具え、若々しく、笑い、赤衣をまとい、球のつゝ大棒を持って、遊んでゐる。きんまを好み、美しく、〔身体は〕黄色で、勇猛である。

kedāra ( 4. 26 b ; 5. 208 )

1. kedāro 'lparidho nīsi sanyāso gāmsāgagrah ||
2. jatilo 'hiyogapattah savidhūsakaramaulir-ullasadbhasitah |  
gāṅgādharas-tapasvī dhyānarato 'tīva kedārah ||

- (1) kedāra はリ音とカ音は少使用音で、夜に歌われ、カ音が終止音、カ音が主音と出発音である。

- (2) 彼は頭を束髪に結び、蛇のヨ一カ帯をつけ、冠に新月と飾り、身体に灰を塗ってゐる。

gāṅgā ( の水を頭に ) 受け、禅定に専念してゐる。

vihāṅgāda ( 4. 36 a ; 5. 209 )



1. nyamśagrahasanyāso' lpadho lasen-niśi vihaṅgadah kamprah |
2. vidhukara gaurah surabhiḥ sumanah kṛtabhūṣaṅāmbara-iśudhanuh |  
virahijana manomohī vihaṅgadah kīravāhī sah ||

- (1) vihaṅgada は = 音が主音，出発音，サ音が終止音で，フ音は少使用音である。夜に遊ぶ。音階音の震え（ガイ、ブー - ト）を具えている。
- (2) 彼は（身体は）月光のように白（gaura）く，芳香を具え，美しい花で作った飾りを付けて衣服をまとひ，矢と弓を持つている。彼は（恋人と）別れた人の心を慰めさせる。手は鵲鳥を手にしている。

mālāśrī ( 4. 306-31a ; 5. 210 )

1. sagrahasamśanyāsā mālāśrīr-nigratāmśā vā |  
pūrṇā-atha ridhālpā geyādau maṅgalāya śāśvatikī |
2. tanvī resāhatalagā kalagānā sasmitā prati svapatim |  
mṛgadṛk keraḡatakamalā mālāśrīr-malayollasitā ||

- (1) mālāśrī は サ音が出発音，主音，終止音である。或は = 音が出発音，主音である。7音音階で，リ音とハ音は少使用音。常は，幸

福のための、歌の初めに、歌われる。

- (2) 彼女はマングーの樹の下にいて、美しい歌を歌い、夫に笑いかけている。(身体は)細く、眼は鹿のよう、手に蓮花を持ち、花輪を掛けている。

dhavalā (4. 32b ; 5. 211)

1. nityam pamudritā-aridhasāmsānyāsagrahā dhavalā |
2. dhṛtanirājanapātrā sundaragātrā-adhimaṅgalā dhavalā |

pītāṅgarāgarasānā calarāsānā sudaśānā gaurī ||

- (1) dhavalā は、常に歌われる。ハ音は mudrā で、リ音とフ音と欠き、ヤ音が主音、終止音、出発音となる。(124)
- (2) 手は nirājana (神像の前で燈火を振り回す儀礼)用の器を持ち、身体は美しく、非常に目出度い。黄色い塗膏を塗り、黄衣をまとい、腰帯を揺らせ、蓋は美しく、(身体は)黄色い。

mukhārī (4. 8a ; 5. 212)

1. pūrṇā nityam geyā samsānyāsa grahā mukhārī-iyam ।

2. śyāmā kāmākrāntā kāntavīyogāsahā mukhārī-iyam ।

maṇimayasukucāvaranā vīṇāpāṇikā pravīṇoccaiḥ ॥

(1) mukhārī は 7 音音階で、常に歌われ、サ音が主音、終止音、去聲音である。

(2) 彼女は〔身体は〕緑青色で、愛情に占められ、恋人との離別に耐えられない。宝石の美しい胸覆いをつけ、vīṇā を持つている。彼女は非常に賢い。

rāmakṛtī ( 4. 20 a ; 5. 213 ), rāmakrī, rāmekrī,

1. sampūrṇā rāmakṛtīḥ samsāntādīḥ sadā-*api* gāmsādyā ।

2. kāñcanavibhā-atibhāsurabhūṣā nīlāmśukā-adhikam ranyā ।

rāmakṛtir-*anuvandī* sudatī dayate 'ntike gāte ॥

(1) rāmakrī は 7 音音階で、サ音が主音、終止音、去聲音である。常に歌われる。また、カ音が主音、去聲音でもある。

(2) 彼女は黄金のような〔身体の〕色で、輝く飾りをつけ、青衣をまとい、非常に美しい。姿は美しく (sudatī tārūnyarāśene śobhanaradanā), 恋

人の近くに来た時、小声で (anu = sūksman) 話す。

pāvaka ( 4. 20 b ; 5. 214 )

1. gādya dhāmsah sānto niviralitah pāvakah śaśvat |
2. gopālaveṣa eṣah kvaṇayan-veṇum sadā mudā krīḍan |  
citrāṅgarāgabhāvaḥ pāvakarāgo 'sito lalitaḥ ||

- (1) pāvaka はカ音が出発音，ガ音が主音，ヤ音の終止音で，ニ音を欠き，常に歌われる。
- (2) 彼は牧童の衣服をまとい，笛を吹き，常に，喜々として，遊んでゐる。種々の塗膏を好む (bhāvaḥ prītiḥ)。 ( 身体は ] 緑青色 (asita = śyāma) で，美しい (lalita = sundara)。

saindhavī ( 4. 33 a ; 5. 215 )

1. saindhavy-aganir-nityam samsānyāsagrahā lasad-gamakā |
2. uccatanus-tanur-atanur-jaghane śoṇāmsukā trisūlāikā |  
gaurī karigatir-abhimatayuddhā saindhavy-atikruddhā ||

- (1) saindhavī はカ音とニ音を欠き，常に歌われる。
- ヤ音が主音，終止音，出発音で，修飾音が

あり。

- (2) 彼女 は 背丈 は 高く、細く (tanur krśāṅgī), 腰は大きき。赤衣をまとひ、三叉鉞を持てり。 (身体は) 黄色く、象のような歩む姿であり、戦を好み、非常に残忍であり。

āsāvarī ( 4. 21a ; 5. 216 )

1. āsāvarī prageyā mādyāṃsā sāntimā sadā pūrṇā ।
2. calakadalī dala maulir-malayācalagā kalakvaṇan-muralih ।  
āsāvarī sakarunā barhālī sālīnī nīlā ॥

- (1) āsāvarī は常に歌われる。ア音が去聲音、主音で、サ音が終止音であり、7音音階である。

- (2) 彼女は冠に kadālī の花弁を揺らせ、malaya 山に棲み、美しく笛を吹いてゐる。悲しみをたはえ、腰に孔雀の羽根をつけてゐる。(身体は) 青色である。

devagāndhāra ( 4. 18a ; 5. 217 )

1. rigrakapāṃśah sāntah sadā-aganir-devagāndhārah ।

2. *simkāsānopaveśī bhūṣabhir-bhāṣitāḥ sitāḥ kumudī* ।

*dhavalāmbaraḥ suratanuḥ śṛṅgārī devagāndhāraḥ* ॥

(1) *devagāndhāra* はリ音の出発音，ハ音の主音，カ音の終止音で，常に歌われ，カ音とニ音と欠く。

(2) 彼は獅子座に坐り，諸々の飾りに輝いてゐる。〔身体は〕白色で，蓮花を持ち，白衣をまとつてゐる。恋情を具え，神々により讃えられてゐる (*suratanuḥ devaiḥ stutāḥ*)。

*māravī* ( 4. 15a ; 5. 218 )

1. *ridhakīnā śāśvatikī sātā gāṃśagraḥ tu māravikā* ।

2. *indumukhī kanakābhā dīrghā lambālakātulā caladyk* ।

*aruṇāmbarā nṛpavarāms-tvarayanti māravī samite* ॥

(1) *māravī* はリ音とカ音と欠く。常に歌われる。カ音の終止音，カ音の主音，出音である。

(2) 顔は月のように，〔身体は〕黄金のように〔金色〕で，背は高く，髪を垂らし，姿は喻えようもなく美しく，眼を動かさず，赤衣をまとつてゐる。彼女は戦場において

saṁite = saṅgrāme) 五の 5) を力に發揮する。

paraja ( 4. 236 ; 5. 219 )

1. parajo nyelṇo gāṁśagrahadhagakampraḥ sadā sāntaḥ ॥

2. paraja iṣudhanurdhārī hārī gauras-tanus-tanudīṅghaḥ ।

mitha āhatatālavadhū sāli stavanena sālinah ॥

(1) paraja はニ音が少使用音で、ガ音が主音、去  
発音であり、ダ音とカ音は廢える(ガイ  
ラート)。サ音が終止音で、常に歌われる。

(2) 彼は弓と矢を持ち、首飾りを科けている。  
身体は黄色く、細く、背は高い。各々 tāla  
(小型のシンバル) を打っている女性と共に  
いて、彼女たちの讚嘆に対して謙虚であ  
る。

### 第三節 後期文献における観想圖像

[1] Saṅgīta darpaṇa

本書は S. M. Tagor の編集による刊本 (Calcutta

1881. 筆看未見) 以来, K. V. Sastri の編集による刊本 (Sarasvatī Mahal Series, no. 34. Tanjore 1952) までの数種の刊本があり, 最近では S. R. Kulakernī の編集による刊本 (第1 - 2章) (Mumbai Mahārāṣṭra 1985) がある。また本書は R. Simon のチキスト及び内容紹介 (1902), A. A. Baker による部分的英訳 (第1 - 2章, 1930) の研究が示すように, 早くから研究された音楽論書の一つである (筆看未見) (125)。

本書は7章より成り, 音楽論書の伝統的構成に従っている。

第1章は śruti, svara, grāma, mūrchanā などに関する主題とする。

第2章は rāga に関する主題とし, Somanātha と同称, 種々の過去の rāga 組織を紹介している。彼は Hanuman 説の 6 rāga と 30 rāginī の組織を採用し, 各々の rāga の音楽的形式と観想図像を説き, mūrchanā を附記している。

第3章は雑論 (prakīrṇa) の章であり, 理論に対し, 音楽家の長所, 短所など, 実践的



lakṣya) 事項と主題とをいえるが、古説 (Śārṅgadeva) の再説・要約にすぎない。

第4章は歌詞 (prabandha) と主題とするが、これも伝統説の再説である。

第5章は楽器論であり、弦楽器 (vīṇā) と打楽器 (mṛdaṅga) と主題とする。

第6章は tāla (拍子) と主題とする。

第7章は舞踊論であり、これも伝統説の再説である。

本書の著者については、詳細は不明であるが、この口口には "lakṣmīdhara の息子 caturadāmodara" と明記されている。K. Vasudeva Sastri によると、<sup>(126)</sup> catura は称号をいし氏名である。彼の父 Lakṣmīdhara は Gitagovinda の注釈書 Śrutirāñjani の著者で、Vijayanagar の Tirumalairay (1570-73 A.D.) の宮廷詩人であった。したがって、Dāmodara は南インドの出身である。

彼の採用した Hanuman 説の rāga 組織は次の通

1) 2) 3) 4) ( 2. 183 - 189 ) .

rāga (1) bhairava

madhyamādi, bhairavī, baṅgālī, varāṭī, saindhavī.

rāga (2) [māla-]kauśika.

ṭodī, khambhāvātī, gaudī, guṇakrī, kakubhā.

rāga (3) hindola.

velāvalī, rāmakarī, deśākhyā, paṭamañjarī, lalitā.

rāga (4) dīpaka.

kedārī, kēnadā, deśī, kāmōdī, nāṭikā.

rāga (5) śrīrāga.

vasantī, mālatī, mālavasrī, dhanaśrī, āsāverī.

rāga (6) megha-rāga.

mallārī, deśākārī, bhūpālī, gurjarī, ṭakka.

⇒ 他に Kalyāṇanāṭa 等 6 rāga の 音楽形式に  
 観想図像がある ( 2. 271 - 281 ) , 更に pañcama-rāga  
 等 8 rāga に " と言及 1 2 " がある ( 2. 282 - 289 )  
 が , これらの rāga に " 等は類似の主要 rāga  
 を指摘するに止めてゐる。特に 3) 4) 5) , mālaśrī,  
 jaiśrī, dhanaśrī, māruka の 4 rāginī は 音乐的法則  
 に従って " 等 " 1 2 , 右前の 4 を掲げ " 2 "

白にすぎない (2. 289)。なお Dāmodara の観想図  
 像の記述には śubhankara (śaṅgītadāmodara) の観想図  
 像と全く一致する 6 種の rāga をあげたが、これ  
 らは「 $\text{c}$ 」では、指摘するに止め、śubhankara が  
 述べている音階形式の 2 を掲げると「 $\text{c}$ 」にす  
 る。

### 1. Bhairava と $\text{c}$ の rāgiṇī

bhairava (2. 197 - 198)

#### 1. dhairvatāmsāgrahanyāso ripahīno'tha māntakah |

bhairavaḥ sa tu vijñeyah dhairvatādikah mūrchanā |

dhairvato vikṛto yatra audavaḥ parikīrtitah ||

#### 2. udāharanam |

gaṅgādharaḥ śaśikalātilakas-trinetraḥ sarpaire-bhūṣitatanur

gajakṛttivāsāḥ |

bhāsvattriśūlakara eṣa nṛmundaḥārī śubhrāmbaro jayati

bhairava ādirāga ||

(1) bhairava は  $\text{g}$  音が主音、出発音、終止音で、

り  $\text{c}$  音と  $\text{h}$  音を欠く。また  $\text{c}$  音が終止音で

(127)

あり。mūrchanā は 7 音より始まる。= a rāga  
 には 7 音は 変音 (vikṛta) であり、5 音階 (audava) である。

## (2) 観想図像の例 (udāharana)

bhairava は gaṅgā の (水を頭へ) 受けてゐる。月  
 の額飾をとり、三眼を具えてゐる。身体に  
 蛇を飾り、象皮をまとひ、手に輝く三足鈴  
 を持ち、人頭を持ちてゐる。白衣をまとひ、  
 彼は最初の rāga である。

madhyamādi (2. 199-200)

1. madhyamādiś-ca rāgāṅgā grahāṃśanyāsamadhyamā |

saptasvarais-tu gātavā madhyamādikamūrchanā |

sampūrnā kathitā tadjñāih riddhānā kvacinmatā ||

2. udāharanam |

patyā saha hāsam parirabhya kāmam samcumbitāsyā kamalā-  
 yatākṣī |

svarnacchaviḥ kunkumaliptadehā sām madhyamādiḥ kathitā  
 munīndraiḥ ||

(1) madhyamādi は rāgāṅga (śāringadeva の分類) である

rāga の種類) である。マ音の出発音、主音、  
終止音と、7音階音で歌い、マ音より始ま  
る mūrchanā である。7音音階である。或説で  
はリ音とガ音と欠く(5音音階)。

(2) 観想図像の例

彼女は、微笑して、夫に抱擁され、口づけ  
されてゐる。眼は蓮花のようには長く、(身  
体は)黄金のような肌の色(chavi)で、kunku  
ma と塗られてゐる。

bhairavī (2. 201 - 202)

1. sampūrṇā bhairavī jñeyā grahāṁśanyāsamadhyamā

sauvīrīr-mūrchanā jñeyā madhyamaqrāmacārīṇī |

kaiścid-espā bhairavavat svarair-jñeyā vicakṣaṇaiḥ ||

2. udāharaṇam |

sphaṭikaracitapīṭe ranyakailāśaśṅge vikacakamalapatrair-  
arcayanti mahēśam |

keradhṛtaghanavādyā pītavarṇā-āyatākṣī sukavibhir-iyam-

uktā bhairavī bhairavastrī ||

(1) bhairavī は 7音音階で、マ音の出発音、主音、

終止音である。mūrchanā は madhyama-grāma の sau-  
vīṛī-mūrchanā である。" < > の音階音は bhairava と同じもの器具である。

(2) 観想図像の例。

美しい kailāsa 山の頂の水晶をとりはめた祭壇で、満開の蓮花で、meheśa (śiva 神) と礼拝し、手にシンバル (ghanaṅvādya) と持てる。 (身体は) 黄色 (pīta) と、眼は長い。彼女 は bhairava の妻である、と云われる。

baṅgālī (2. 203 - 204)

1. baṅgālī audavā jñeyā grahāṁśanyāsaśadjabhāk |  
riḍhakīnā ce vijñeyā mūrchanā prathamā matā |  
pūrṇā vā matrayopetā kallināthena bhāṣitā ||

2. udāharanam |

kakṣe niveśitakarandaḥaras-tapasvī bhāsvattriśūla parima-  
ṇḍitavāmahastah |

bhasmojjvalo nibida baddhajātā kalāpaḥ baṅgāla ity-abhi-  
hitas-tarunārkaḥvarṇah ||

(1) baṅgālī は 5 音階音である。その音は 出 発 音、

主音，終止音で，リ音とダ音を欠く。mūrchanā は最初の mūrchanā である。或は kallinātha は [baṅgālī は] 7音音階で，又音の3音である，と"う。

(2) 観想図像の例

彼は，森の中に，〔摘んだ花を〕入れた籠を持て"る。彼は苦行者 (tapasvī) で，左手に，輝く三叉鉞を持ち，〔身体は〕灰を〔塗り〕，頭髪は束髪に，堅く，結て"る。

varāṭī ( 2. 205 - 206 ).

1. śaḍjagrakāṃśanyāsā varāṭī kathita budhāi |

prathamā mūrchanā yasyām sampūrṇā kīrtivardhanī ||

2. udāharanam |

saṅgīta dāmodara と同じ。

(1) varāṭī はサ音と出聲音，主音，終止音で，mūrchanā は最初の mūrchanā であり，7音音階である。彼女は右声と増大する rāgīnī である。

(2) 観想図像の例。

saṅgīta dāmodara と同じ。

saindhavi ( 2. 207 - 208 )

1. sadjagratām śakanyāsā sampūrṇā saindhavi matā |  
mūrchanā-uttaramandrādyā kaiścit śāḍavikā matā |  
ritinā tu bhaven-nityam rase vire prayujyate ||

2. udāharenam |

trīśūlapāṇih śivabhaktiyuktā raktāmbarā dhāritabandhujivā |  
vire rase gīyaka gītavarṇā sā saindhavi bhairarāgiṇī-iyam ||

(1) saindhavi は 7 音 の 主 音 , 去 聲 音 , 終 止 音 で ,  
7 音 音 階 で あ る 。 mūrchanā は uttaramandrā で あ  
る 。 あ る 人 々 は 6 音 音 階 ( śāḍava ) で , 7  
音 と 欠 く と い う 。 常 に , 勇 猛 の 情 趣 に 用 い  
ら れ る 。

(2) 観 想 図 像 の 例 .

saindhavi は 三 叉 戟 を 持 つ , śiva 神 へ の 信 愛 の  
情 を 具 え て い る 。 赤 衣 を ま と い , bandhujīva 樹  
を 持 つ て い る 。 勇 猛 の 情 趣 に あ つ て , 歌 手  
の 歌 の 音 を 具 え て い る <sup>(128)</sup> 。 彼 女 は bhairava の rāgi-  
ṇī で あ る 。



## 2. Mālavakauśika ८ १ ० rāgiṇī

mālavakauśika ( 2. 209 - 210 )

1. sadjagrahāṁśakanyāśah sampūrṇah kauśiko matah |

mūrchanā prathamā jñeyā kākalīsvarasammatah ||

2. udāharanam |

ārektaverno dhṛtagaurayaṣṭih vīrah suvireṣu kṛtapravīrah |

vīrair-vṛto vairikapolamālāmālī mato mālavakauśiko 'yam ||

- (1) mālavakauśika は ८ 音 が 出 発 音 , 主 音 , 終 止 音  
で , 7 音 音 階 で ある 。 mūrchanā は 最 初 の mūrchanā  
で あり , kākalī 音 を 具 え て いる 。

(2) 観 想 図 像 の 例 .

mālavakauśika は [ 身 体 は ] 全 身 赤 く , 美 し い  
杖 と 持 つ て いる 。 勇 猛 で , 勇 者 の 中 の 勇 者  
で ある 。 勇 者 と 互 に 闘 まれ , 敵 の 骨 體 の 首  
輪 と 掛 け て いる 。

ṭodī ( 2. 211 - 212 )

1. sampūrṇā kathitā tajjñaiḥ ṭodī strī kauśike matā |

grahāṁśanyāśasadjāś-ca kecid-atra pracakṣate ||

## 2. udāharaṇam |

tuṣāarakundojjvaladehayastih kāsmīrakarpūravilīptadehā |  
vinodayanti harīṇam vanānte vīṇādhara rājati todikā-iyam ||

- (1) todī は 7 音階で、(mālavā-)kāvīka に属する女性である。サ音が主音、終止音である、とある人たはいる。〔規定では〕マ音が主音、終止音で、murchanā は sauvīri である。

## (2) 観想図像の例、

todī は身体は細く、雪のように白く、シヤミシンの色に白え、カシミールの白檀を身体に塗り、森の近くで、vīṇā を手にして、子鹿に餌を与えている。

khambhāvati (2. 213 - 214)

## 1. dhāivatāmsā grahanyāsā śāḍavā tyaktapañcamā |

khambhāvati ca vijñeyā murchanā pauravi madā ||

## 2. udāharaṇam |

khambhāvati syāt sukhadā rasajñā saunderyalāvanyavibhū-  
sitāṅgī |

dānapriyā kokilanādatulyā priyamvadā kauśikarāgini-iyam ||

- (1) khambhāvati は ㄅ 音が主音，去聲音，終止音で，  
ハ音と欠く，6音音階である，mūrchanā は pau-  
ravī である。

(2) 観想団像の例

khambhāvati は安樂を与え，情趣に精通してお  
り，身体は美しく，優雅である。彼女は施  
しを好み，声はユキウ鳥と等しく，優し  
い言葉を語る。彼女は kauśika の rāgini である。

gaurī ( 2. 215 - 216 )

1. grahāṃśanyāsaśadja śyād-ripavarjā sukhapradā |  
mūrchanā prathemā jāneyā gaurī sarvāṅgasundarī ||

2. udāharaṇam |

niveśayanti śravane 'vasantasamam-āmrāṅkuram kokilanāderamya |  
śyāmā madhusyanditasūkṣmanādā gaurī-iyam-uktā kila kohalena ||

- (1) gaurī は サ音の去聲音，主音，終止音で，  
ハ音とハ音と欠く。安樂を与え，mūrchanā は最  
初の mūrchanā である。彼女は身体は可憐で美  
しい。

## (2) 観想図像の例

gauri は耳にアムラの蕾の花輪をつけ、コ  
 ーキウのように声は愛らしい。〔身体は〕  
 緑青色で、蜜がしたたるような微妙な声で  
 ある。— Kohala 説。

guṇakarī ( 2. 217 - 218 )

1. ridhahinā guṇakarī ca-udavā perikīrtitā ।

nigrahāmsā tu ninyāsā kaiścit śaḍjatraya matā ॥

rajanī mūrchanā ca-atra mālavāśrayaṇī tu sā ॥

2. udāharaṇam ।

śokābhikūtanayanārūnadīnadṛṣṭikḥ namrānā dharaṇīdhū-  
 sara gātrayaṣṭikḥ ।

āmuktacārūkavariḥ priyadukkhavartī samkīrtitā guṇakarī

karuṇe kṛśāṅgī ॥

(1) guṇakarī は 1) 音と声とを欠く 5 音音階である。

= 音の始発音、主音、終止音。或は人たす

は 4 音と 3 種の音とす。mūrchanā は rajanī。

彼女は mālava に属している。

## (2) 観想図像の例。

悲しみに打たれし彼女の眼は赤く、目指しは弱々しく、顔をうらむけ、細い身体は灰色で、美しい髪を解き、愛の苦しみの中にいる。細い身体は悲の情趣の中にいる。

kakubhā (2. 219 - 220)

1. dhavatāmśagrahanyāsā sampūrṇā kakubhā matā |

tr̥tīyamūrchanotpannā śṛṅgārarasamaṇḍitā ||

2. udāharanam |

supositāṅgī ratimaṇḍitāṅgī candrānā campakadāmayuktā |

kaṭākṣiṅgī syāt peramā vicitranāden yuktā kakubhā manoḥṅā ||

(1) kakubhā はカ音の主音、去聲音、終止音で、7音音階である。mūrchanā は茅 ≡ mūrchanā である。彼女は悲情の情趣に飾られてゐる。

(2) 観想画像の例。

身体はよく太り、愛欲に飾られ、月のように

と顔と具之、campaka の花環を帯けてゐる。

彼女の眼は流し目で、この上なく美しい声

と具之、美しい。

## 3. Hindola × ㄨ の rāgiṇī

hindola ( 2. 221 - 222 )

1. hindolako ridhatyaktah satrayah kathito budhaiḥ ।  
mūrchanā śuddhamadhyā syāt auḍavaḥ kākaliyutah ॥

## 2. udāharaṇam ।

Sāṅgītadāmodara, 9 × 同し。

- (1) hindola は ㄨ 音 と ㄨ 音 を 欠き、ㄨ 音 が 三 種 音 である。mūrchanā は śuddhamadhyā である、5 音 音階 である。kākali 音 具 之 である。

## (2) 観想图像の例。

velāvalī ( 2. 223 - 224 )

1. dhāivatāṃśagrahanyāsā pūrṇā velāvalī matā ।  
pauravī mūrchanā jñeyā rase vire prayujyate ॥

## 2 udāharaṇam ।

Sāṅgītadāmodara, 23 × 同し。

- (1) velāvalī は ㄨ 音 が 主 音、出 発 音、終 止 音 である、7 音 音階 である。mūrchanā は pauravī である、勇 猛 の 情趣 に 使用 する。

(2) 観想図像の例。

rāmakarī ( 2. 225 - 227 )

1. śaḍjagrahāṁśakanyāsā pūrṇā rāmakarī matā ।

mūrchanā prathamā jñeyā karuṇe sā prayujyate ॥

vidhatyaktā tu kecīt-tu kecīt-pañcamavarjitā ।

śāḍavā audavā jñeyā sampūrṇā ca tridhā matā ॥

2. udāharaṇam ।

saṁgītadāmodara, 32 : svaṇṇaprabhā → hemaprabhā ;

padopāntam-adhiśrite'api → samīpe kamanīyakanṭhā .

(1). rāmakarī は 4 音の去聲音, 主音, 終止音で,  
7 音音階である。mūrchanā は最初の mūrchanā で,  
悲の情趣に使用される。或 人はリ音とク音  
と欠くといい, 或 人はハ音と欠くといい。  
1 音の, 5 音音階, 6 音音階, 7 音音  
階の三種である。

(2) 観想図像の例。

「恋人が足元にはひたすゝゝ大時でも」 → 恋

人の近くにはいい, 声は愛らしい。

deśākhyā ( 2. 228 - 229 )

1. deśākhyā śāḍavā jñeyā gaṭrayeṇa vibhūṣitā ।  
 ṛṣabhena viyuktā sā śārṅgadevena kīrtitā ॥  
 mūrchanā harināś-vā ca sampūrṇā kecid-ūcire ॥

2. udāharanam ।

vīre rase vyañjitaromaharṣā niradhya sambaddhaviḷāsabāhu ।  
 prāmsuh pracandā kila sunderāṅgī deśākhyārāgaḥ kathito  
 munīndraiḥ ।

- (1) deśākhyā は 6 音 音 階 で、ガ 音 の 三 種 音 を 具 せ、  
 7 音 と 欠 く、と śārṅgadeva は 逆 へ て い る。mū-  
 rchanā は harinā と あり。或 人 た ち は 7 音 音 階  
 と あり と い っ た。

- (2) 観 想 図 像 の 例

勇 猛 の 情 趣 は 欠 い て、毛 と 逆 立 て て、(相  
 手 と ) 組 み 合 っ た 腕 と 抱 っ て け っ て い る。彼  
 (?) は 背 が 高 く、盤 々 し く、身 体 は 美 し い。

paṭamañjarī ( 2. 230 - 231 )

1. pañcamāṃśagrahanyāsā pūrṇā syāt-paṭamañjarī ।  
 hr̥ṣyakā mūrchanā jñeyā rasikānām sukhaṇṇadā ॥



## 2. udāharaṇam ।

saṅgī tadāmodara, 22 : kāntavitirṇapuspā → kāntavīśirṇa-  
netrā ; vapuṣātimugdhā → vapuṣā ca śuklām ; vidhūsarā-  
ṅgī → sudhūsarāṅgī .

(1) paṭamaṅjarī はハ音の主音，去聲音，終止音で，  
7音音階である。mūrchanā は kṛṣṇakā . 芸術通  
の人々に安樂を与える。

(2) 観想図像の例。

「恋人が残した花環を持つている」 → 眼は  
美しさを失い。 「美しい幼い女性」 → 身  
体は白い。

lalitā ( 2. 232 - 233 )

## 1. ripavarjā ca lalitā audavā satrayā matā ।

mūrchanā śuddhamadhya syāt sampūrṇā kecid-ūcīre ॥

dhaivatatrayasamyuktā dvitīyalalitā matā ॥

## 2. udāharaṇam ।

praphullasaptacchadamālyayuktā gaurī kṛṣṅgī taruṇī calāksī ।

viniśvasat sādavasāt prabhāte vilāsavesā lalitā-upadiṣṭā ॥

(1) lalitā はリ音とハ音を欠く5音音階で，サ音

の三種音を具えてゐる。mūrchanā は śuddhamadhyā  
 とある。或人たはは 7 音音階とあるといふ  
 人。第 = kalitā は 7 音が三種音とある。

(2) 産想図像の例<sup>(129)</sup>

清南の saptaśchada の花環とて、(身体は) 3  
 黄色く、細く、弱々しい。眼を動かして  
 3。彼女は美しい衣服とて、夜明けには、  
 疲れのためは、溜息とていふ。

4. Dipaka と 8 の rāgiṇī

dipaka (2. 234 - 235)

1. sadjagrahāṃśakanyāśah sampūrṇo dipako mataḥ |  
 mūrchanā śuddhamadhyā syāt gātavyā gāyanai sadā ||

2. udāharanam |

bālāratārtham pravilīnadīpe gṛhāndhakāre subhāgī pravṛttāḥ |  
 tasyāḥ śirobhūṣaṇaratnadīpāḥ lajjāṃ tadānim kṛtavān pradīpāḥ |

(1) dipaka は 7 音が去聲音、主音、終止音と、7  
 音音階とある。mūrchanā は śuddhamadhyā。常時  
 歌われる。

## (2) 觀想圖像の例.

乙女との情走のため、燈火を消した暗い部屋で、めでたきことと始める。その時、乙女の頭に飾った宝石により、明り (pradīpa : dīpaka) は輝く。

Kedārī ( 2. 236 - 238 )

1. kedārī ridhahinā syāt audavā parikīrtitā |  
nitrayā mūrchanā mārgī kākalīsvaramanditā ||
2. udāharanam |
- (a) jāṭam dadhānah sītacandramaulik nāgottariyo dhṛtayoḡapīthah |  
gaṅgādharo dhyānanimagnacittah kedārarāḡah kathitas-tapasvī ||
- (b) virehavibudhacittā pāṇḍuḡandā kṛśāṅgī malayajarasapūrait |  
sīñcyamānā sakhībhit |  
sarasakamalapatrait kṛptaśayyāniviṣṭā himakarasitavastrā  
bhāti kedārī-iyam ||
- (1) kedārī は 1) 音と 2) 音と 欠く 5 音音階で、2 音の三種音と具之と 3) 3) 。 mūrchanā は mārgī で、kākalī 音と具之と 3) 3) 。

## (2) 觀想圖像の例.

(a) *kedāra* は束髪を具え、白い月を冠に飾り、蛇の上衣をまとい、ヨ一かの台に坐っている。Gangā (の水を頭に) 支え、心は禅定に沈滞している。彼は苦行者である。

(b) *kedārī* は (恋人と) 離別して正気を失い、頬は紅く、身体は細く、女友達によつて、白檀の香水をふりかけてもういつつ、美しい蓮弁を撒いた寢床にいる。彼女は月のように白い衣服をまといている。

*karnāṭī* ( 2. 239 - 240 )

1. *triniśādo'tha sampūrṇaḥ niśādo vikṛto bhavet |*

*mārgī ca mūrchanā jāyā karnāṭī-iyam sukhapradā ||*

2. *udāharaṇam |*

*karnāṭī kamaleśanā surataror-mūle vasanti mukha svā-*

*socchvāsavibhinna modam-abhitaḥ sampūryanti diśaḥ |*

*kīram nilanicolajuṣṭam-abhitaḥ svarṇābhayā bibhrati*

*kāntāre pikakūjite svadayitam sāṅketike paśyati ||*

(1) *karnāṭī* は = 音  $\sim$  三種音  $\sim$ 、7 音音階  $\sim$  あり、  
= 音は変音  $\sim$  あり。 *mūrchanā* は *mārgī*  $\sim$  あり。

彼女は安楽を与える。

(2) 観想図像の例。

karnāti は蓮花のやうな眼と具え、神樹の下に坐り、度々、あたりには歡ひまじりの溜息を満ちしてゐる。青色の覆布のやうな色の鸚鵡を黄金のく節りの光で、迷わしつゝ、カッユ一の鳴く森の宴会の場所で、恋人を見つめてゐる。

deśī ( 2. 241 - 242 )

1. deśī pañcamahinā syāt-rṣabhatrayasamyutā |

kalopānatikā jāyā mūrchanā vikṛtarṣabhā ||

2. udāharaṇam |

nidrāhasam sā kapaṭena kāntam vibodhayanti suratotsukena |

gaurī manojñā śukapucchavastrā khyātā ca deśī rasapūrṇaciṭā ||

(1) deśī は  $\text{h}$  音と欠き、 $\text{r}$  音の三種音と具えてゐる。mūrchanā は kalopānatikā とあり、 $\text{r}$  音は変音とある。

(2) 観想図像の例。

眠り睡む恋人を情交を望んでゐるやうに見

せかけで、覚めさせたい。〔身体は〕黄色く、美しく、孔雀の羽根の衣服をまき、心は情趣 (rasa) に満ちている。

kāmodī ( 2. 243 - 244 )

1. dhāṁśanyāsagrahā pūrṇā pauravī mūrchanā matā |

mallārīnikāṭe geyā kāmodī ca nigadyate |

śivabhūṣana kedārayuktā sarvasukhapradā ||

(130)

2. udāharaṇam |

pītaṁ vasānā vasam sukeśī vane rudantī pikanādādūnā |

vilokayantī vidiśo' tibhītā kāmodikā kāntam-anusmarantī ||

- (1) kāmodī は 夕 音 の 主 音、終 止 音、去 聲 音 也、  
 7 音 音 階 也 有 也。mūrchanā は pauravī 也 有 也。  
 彼女 は mallārī の 近く で 歌 わ れ、śivabhūṣana (   
 śaṅkerābharāṇe ) と kedāra と 一 緒 の 彼女 は 可 べ  
 (131)  
 くの 安 樂 を 与 へ 也。

(2) 觀 想 因 像 の 例。

kāmodī は 黄 衣 を ま きて、髪 は 美 し く、森 の  
 中 に、カマコウの 鳴き 声 に 悩 ま さ れ て、泣  
 き つ つ、所 方 へ を 見 ま わ し、恐 れ ぬ の き、

恋人と想，こゝる。

nāṭikā ( 2. 245 - 247 )

1 grahāṃśanyāsaśadjā syāt sampūrṇā nāṭikā matā ।

prathamā mūrchanā jñeyā gamakair - bahudhā matā ॥

2. udāharanam ।

udyad - bhānu suhr̥cchavir - vikasitam paṅkeruham pāninā spr̥śyanti

madhupānadhūrṇanayanā tanvī tāmala dyutiḥ ।

tāmbūlāharanacchaleṇa dayatam saṅketayanti nijam kṛdākūñja -

gr̥he lavaṇ - galati kāmodānile kāmīni ॥

jaṇākusumasāṅkāśam nicolam pītavāsasam ।

valanti vapuṣā tanvī nāṭikā raktakañcukī ॥

(1) nāṭikā は ㄴ 音 の 去 聲 音 ， 主 音 ， 終 止 音 で ， ㄴ

音 音 階 で ある 。 mūrchanā は 最 初 の mūrchanā で ，

諸 々の 装 飾 音 に よ り ， 多 称 で ある 。

(2) 觀 想 圖 像 の 例 <sup>(131)</sup>

nāṭikā は 昇 る [ 太 陽 の ] 光 の よ う な 肌 の 色 で ，

微 笑 し ， 手 で 蓮 手 に 触 っ て いる 。 蜜 蜂 を 欺

く [ 蓮 花 の よ う な ] 眼 と 具 え ， 身 体 は 細 く ，

tāmala の よ う く に 黒 い ] 。 きんぎょ を 持 っ て

きたふりをして、恋人を誘い、愛の神 kama  
 と遊ぶ、遊むの岩屋の中で、にくづく (lava)  
 と食べるといふ。彼女は愛らしい。シナは  
 の花のさすを覆と黄衣をまとい、身体は細  
 く、赤い胸衣をつけている。

### 5. śrīrāga とその rāginī

śrīrāga ( 2. 248 - 249 )

1. śrīrāgaḥ sa ca vikhyātaḥ satrayena vibhūṣitaḥ |  
 pūrṇā sarvaguṇa petāḥ mūrchanā prathamā matā |  
 kecit-tu kathayanty-enam śābhatrayasammataḥ ||

2. udāharanam |

aṣṭaśābdaḥ smaracārumūrtiḥ dhīrollasatpallavakarnaṇapūraḥ |  
 śaḍjādi-sevya'ruṇavastradhārī śrīrāgerājāḥ ksītipālamūrtiḥ ||

(1) śrīrāga はサ音の三種音に飾り、7音音階  
 である。サ〜の美声を具えていふ。mūrchanā  
 は最初の mūrchanā である。或人は5はり音の  
 三種音説を主張している。

(2) 観想図像の例。



śrīrāga は年頃 18 才で、姿は愛の神のようには美しく、堂々としてゐる。美しい小枝を耳飾りとし、サ音を二か仕えてゐる。彼は赤衣をまとひ、王者の姿である。

vasantikā ( 2. 250 - 251 )

1. vasantī syāt-tu sampūrṇā satrayā kathitā budhaiḥ ।

śrīrāgamūrchanā - eva - atra geyā rāgaviśāradaiḥ ॥

2. udāharanam ।

śikhāṇḍivarocchaya baddhapīḍā kaṇṇāvataṃsā sphuradāmrapatrā ।

indīvaraśyāmatanur - manoḥṇā vasantikā syād - alimañjulaśrīḥ ॥

(1) vasantī は 7 音階で、サ音の三種音を具えてゐる。mūrchanā は śrīrāga と同じ。

(2) 観想図像の例。

vasantikā は髪髻に多くの孔雀の羽根を結ひ、満ちたāmra花の耳飾りをつけてゐる。身体は睡蓮のような緑青色で、美しく、黒蜂のよき休息所である。

mālavī ( 2. 252 - 253 )

1. mālavī ca-udavā jñeyā nitrayā parivarjitā |

rajanī mūrchanā jñeyā kākalīsvaramanditā

2. udāharanam |

saṅgītadāmodara, 1 と同じ。

(1) mālavī は 5 音音階で、二音の三種音を具え、  
ハ音とリ音と欠く。mūrchanā は rajanī で、kākalī  
音に飾られてゐる。

(2) 観想図像の例, saṅgītadāmodar no.1 と同じ

mālavaśrī ( 2. 254 - 255 )

1. mālavaśrīś-ca raktāṅgī pūrṇā setrayabhūsitā |

mūrchanā-uttaramandrā syāt śṛṅgāraśasamanditā ||

2. udāharanam |

raktotpalam hastatale niyuktam vibhāvayantī tanudehavallī |

rasālavṛkṣasya tale niṣaṅṅā stokasmitā sā kila mālavaśrīḥ ||

(1) mālavaśrī は 身体は赤色である。7 音音階で、  
ソ音の三種音に飾られてゐる。mūrchanā は utta-  
ramandrā で、恋情の情趣に飾られてゐる。

(2) 観想図像の例。

手掌に持てゐる紅蓮花を見つめてゐる、

身体は蔓草のように細く，マユコの下に  
坐り，微笑してゐる。

dhanāśrī (2. 256 - 257)

1. satrayā hīnarśabhā śāḍavā ca dhanāśrī ।  
mūrchanā prathamā jñeyā rase vire prayujyate ॥
2. udāharanam ।

dūrvādalaśyāmatanur-manojñā kāntaṃ likhanti virahena dūnā ।  
(132)  
śvete kapole nayanāravindanīśyandanirdhūtakucā dhanāśrī ॥

- (1) dhanāśrī はサ音の三種音と具之，リ音と欠く  
6音音階である。mūrchanā は最初のmūrchanāと  
なる。勇猛の情趣に使用される。

- (2) 観想図像の例。

dhanāśrī は身体は dūrvā 草の花弁のように黒く，  
美しく，恋人との離別には悩む，恋人を描い  
てゐる。頬は白く，胸は蓮花のように右眼の  
涙が流れる〔涙に〕洗われてゐる。

sāverī (2. 258 - 260)

(133)

1. āsāverī garityaktā dhagrahāṃsā ca śāḍavā ।

nyāsa-tu dhāvato jñeyah karuṇārasanirbharā || athavā

(134)

kakubhād-eva ca-utpannā dhāntāmsāgrahā matā |

pañcamena-eva rakitā sādavā ca nigadyate ||

2. udāharanam |

śrīkhaṇḍaśailaśikhare śikha-pucchavestrā mātaṅgamauktikakṛto-  
ttamahāravallī |

ākaroṣya candanataror-uragam vahanṭī sā-āsāvari-ṭī kathito-  
jvalanīlakāntikā ||

- (1) āsāvari は か 音 と り 音 と 欠 く 5 音 音 階 で , ㄱ 音  
の 去 聲 音 , 主 音 , そ の 終 止 音 で あ る 。 悲  
の 情 趣 に 満 ち て い る 。 或 は , kakubha の ; 生 い ,  
ㄱ 音 の 終 止 音 , 主 音 , 去 聲 音 で , ㄷ 音 と 欠  
く 6 音 音 階 で あ る 。

(2) 観想图像の例.

āsāvari は 白檀樹の山頂にゐる。孔雀の羽根  
の衣服をまとい、狂象の真珠のてつた立  
派な首飾りを掛けた、白檀樹で蛇を誘い出し、  
蛇を身体につけてゐる。彼女は輝くばかり  
美しい青色である。





## 2. udāharaṇam |

bhartrā-samam keliretim sukeśi sarvāṅgapūrṇā kamalāyatākṣī |  
pīnastanī rūkmataṅgā suveśā sampūrṇacandrānā deśakārī ||

- (1) deśakārī は 7 音 音階で、7 音が終止音、去聲音、主音である。mūrchanā は最初の mūrchanā で、varāṭi-rāgini との混成である。

## (2) 観想図像の例。

deśakārī は夫と共に「で、遊む」(keli) は夢中である。髪は美しく、身体はすべて完全で、長い眼は蓮花のよう。胸は豊かであり、身体は黄金色で、美しい衣服をまとひ、顔は満月のようである。

bhūpālī (2. 266 - 267)

## 1. śadja grāmaśakenyāsā bhūpālī kathitā budhaiḥ |

mūrchanā prathamā yatra sampūrṇā śāntike rase |

kaiścit-tu vipahīnā-iyam aṅgavā parikīrtitā ||

## 2. [ udāharaṇam ]

gauradyutiḥ kuṅkumalīptadehā tuṅgastanī candramukhā manojñā |

bhartuḥ smaranti virahena dūnā bhūpālī-iyam rasośāntiyuktā ||

(1) bhūpālī はサ音が去聲音, 主音, 終止音である  
 ) , mūrchanā は最初の mūrchanā である。この場  
 合, 7音音階で, 平安の情趣にく使用され  
 した。或人は5はリ音とハ音と欠く5音音  
 階である, という。

(2) 観想図像の例。

bhūpālī は〈身体は〉黄金色に輝き, kunkuma  
 と身体に塗り, 胸は高く, 顔は月のようで,  
 美しい。彼女は夫と想い, 離別に苦しむ,  
 平安の情趣と具えてゐる。

gurjarī ( 2. 268 - 269 )

1. gṛhāṃśanyāsarśabhā sampūrṇā gurjarī matā ।

saptamī mūrchanā tasyām bahulāsahamīśritā ॥

2 udāharāṇam ।

Saṅgīta-dāmodara, 25 dakṣiṇa-gurjarī と同じ。

(1) gurjarī はリ音の去聲音, 主音, 終止音で,  
 mūrchanā は第7 mūrchanā である。gurjarī では多  
 くのうゝ-かゝの混在がある。

(2) 観想図像の例, Saṅgīta-dāmodara no. 25 と同じ。



ṭakka ( 2. 270 )

1. ṭakkā syāt-tu tridhā śadjā sampūrṇā ca-ādimūrchanā ।
2. udāharanam ।

śayyāsu saptām nalinīdolānām viyoginīm vīkṣya viśannacittām ।  
(136)  
svarṇavarṇo graham-āgataḥ saṁ sambhāṣate tām kila ṭakkasāñjñāḥ ॥

- (1) ṭakka は ㄗ 音が三種音で、7 音音階で成る。  
mūrchanā は最初の mūrchanā で成る。

- (2) 観想图像の例。

ṭakka は [ 身体は ] 黄金色で、[ 恋人と ] 別れて、蓮花の寢床に身を代わり、悲しく成る女と見ゆゆ、家に来て、彼女に話しかけて成る。

7. その他 rāga

kalyāṇanāṭa ( 2. 271 - 272 )

1. kalyāṇanāṭo vijñeyah sampūrṇo ritrayo mataḥ ।  
śadjatrayo 'pi kaiścit-tu sampradiśto manīṣibhiḥ ॥
2. udāharanam ।

krpāṇapāṇis-tilakam lalāṭe suveśaveśaḥ samare pracandah |  
 smaran pravīṣṭah kila raktavarṇah kalyāṇanāṭah kathito munindraiḥ ||

- (1) kalyāṇanāṭa は 7 音音階で、リ音の三種音と具  
 えてゐる。或くは 5 は 4 音の三種音と具と  
 えてゐる、とゐる。

- (2) 観想図像の例。

kalyāṇanāṭa は 手に劍を持ち、額に額飾をつけて、  
 美しい衣服をつけてゐる。戦に赴いて勇  
 戦をふる。彼は〔身体は〕赤色をとり、想  
 ひに耽けてゐる。

sāraṅganāṭā ( 2. 273 - 274 ) ; sāraṅgā .

1. sāraṅganāṭah sampūrṇah satrayo ttaramandrajah |
  2. udāharanam |
- (a) viṇām dadhānā dr̥ḍhabaddhavenī sakhyā samam mañjulavṛksamūle |

jāmbūnadābhā ca niṣaṅgadehā sāraṅganāṭā kathitā suveśaiḥ || aṭṭavā

- (b) karadhṛtavīṇā sakhyā saha pravīṣṭā ca kalpatarumūle |

dr̥ḍhataranibaddhakabarī sāraṅgā sā suraṅginiṅ proktā ||

- (1) sāraṅganāṭa は 7 音音階で、4 音の三種音と具  
 えて、〔murchanā は〕uttaramandrā をとる。

- (2) 観想図像の例。

(a) sārāṅganātā は *vīṇā* を持ち、堅く弁髪を結び、  
女友達と共に、*mañjuvala* 樹の下に、坐して  
いる。〔身体は〕黄金色である。

(b) sārāṅgā は手に *vīṇā* を持ち、女友達と共に、  
*Kalpa* 樹の下にいる。髪は普通より堅く結  
びている。彼女は情熱的である。

devagiri (2. 275)

1. devagiryaḥ svarāḥ prokṭāḥ sārāṅgadṛśā matāḥ |

2. udāharāṇam |

nitambini śyāmatanuh pravṛttatūṅgastanī sunderahāravallī |

citrāmbarā mattacakoranetrā madālasā devagiri matā-iyam ||

(1) devagiri の音階音は sārāṅga と同じである。

(2) 観想図像の例。

devagiri は腰が大きく、胸は小さく、突き出  
て、美しい首飾りを掛け、美しい衣服をま  
とめている。眼は欲情を起し、cakora 鳥  
の眼のようである。彼女は情熱に輝いて  
いる。

sorati ( 2. 276 - 277 )

1. sorati śāḍavā jñeyā pañcamatrayasammataḥ |

rihīnā ca samākhyātā kaiscit - pañjatrāyā mataḥ ||

2. [ udāharanam ]

pīnonnatastanatato ttamahāravallī karnōtpalabhramaranāḍavilagnā-  
cittā |

yāti priyāntikam - atīślathabāhuvallī saurāṣṭrikā medanamūrtti-  
sucārūgaurā ||

- (1) sorati は 6 音音階で、ハ音から三種音まである。  
リ音に欠く。或る人は 5 はリ音から三種音まである、と云う。

(2) 観想図像の例。

saurāṣṭrī は豊かに突き出た胸に最高の首飾りを掛ける、耳飾りの蓮花くに群がった蜂の音に心に集中してゐる。蔓草のような腕は、灰より白く、垂れ下り、恋人の毛皮へ行く。彼女は愛の神の姿のようには美しく、黄色である。

trivāṇā ( 2. 278 - 279 )

1. trivaṇā sā ca vijñeyaḥ grahāṃśānyāsadhāivatā ।

śudavā sū samākhyātā parihīnā prakīrtitā ॥

2. udāharanam ।

rambhāyās-tu taror-mūle niṣannā pitavarnabhāk ।

tanvaṅgī hārasamyuktā priyena trivaṇā matā ॥

(1) trivaṇā は ㄸ 音 の 去 聲 音 , 主 音 , 終 止 音 で あ り ,  
ハ 音 と リ 音 と 欠 く 5 音 音 階 で あ る 。

(2) 観 想 図 像 の 例 .

trivaṇā は バ ナ ナ の 樹 の 下 に 生 っ て い る 。 ( 身  
体 は ) 黄 色 で , 細 い 。 首 飾 リ と 掛 け , 恋 人  
と 共 に い る 。

pahādī ( 2. 280 - 281 )

1. śaḍjatrāyā pahādī syāt ripahīnā ca gaurīvat ।

chāyā tailaṅgadesīyā ālāpe ca-śudavā matā ॥

2. udāharanam ।

vīnopagāyaty-atisundarāṅgī raktāmbarā mañjukadambamūle ।

śrīcandanādrau sthītikāriṇī sā śrīrāgakāntā kathitā pahādī ॥

(1) pahādī は サ 音 の 三 種 音 で , リ 音 と ハ 音 と 欠 き ,

gaurī-rāgiṇī と 同 じ で あ る 。 tailaṅgī-rāgiṇī の chāyā

(影; 影響を受けた旋律型) であり, *ālāpa* に (使用される)。彼女は 5 音階である。

(2) 観想図像の例.

彼女は *vīṇā* に合せて歌っている。身体は非常に美しく、赤衣をまとい、美しい *kadamba* 樹の下にいます。彼女は白檀の山の住人であり、*śrīrāga* の愛人である。

*pañcamarāga* (2. 282 - 283)

1. *rāgaḥ pañcamako jñeyah pakīnah sādavo mataḥ |*  
*prathamā mūrchanā yatra sadjatrāyavibhūṣitah |*  
*kecid-vadanti sampūrṇah śrīgārarasapūrakah ||*

2. *udāharanam |*

*raktāmbero raktaviśālanetraḥ śrīgārayuktas-taruṇo mansuī |*  
(137)  
*prabhātakāle vijayī ca nityam sadā priyah kokilamanjubbhāṣī ||*

- (1) *pañcamarāga* は 10 音と欠く 6 音階である。 *mūrchanā* は最初の *mūrchanā* で、サ音の三種音に合節されていく。或人たは 7 音階で、恋情の情趣に満ちていく、という。

(2) 観想図像の例.

彼は赤衣をまとい、大きな眼は赤く、悪情を具え、若々しく、賢明である。常に、夜明け時に活動する (vijayin)。彼は、断えず、kokila鳥のように美しく語り、愛される。

## [II] Saṅgītanārāyaṇa

本書は刊本 (Orissa Saṅgīt Nāṭaka Academy, Bhuvaneśvar. 1966) がある。各章のゴロホシは Nārāyaṇadeva (1718-1767 A.D.) の著作であることが明記されているが、<sup>(138)</sup> 宮廷詩人 Puruṣottama Miśra と著者とすべしと説くもある。Nārāyaṇadeva は南オリッサの Khemundi の王であるから、本書はオリッサ成立の音楽論書といえるが、Pañcamasārasaṅgītaḥ を多くの音楽論書からの引用による集成本といってもよい。

本書は4章から構成されている。

第1章は音楽論 (gītanirṇaya) と主題とし、音楽の成立伝説から始まり、śruti, svara, grāma, rāga, tāla などを説明している。

第2章は、同じく、音楽論であるが楽器論

(vādyā) と主題と 1 つ 1 つ である。

・ 第 3 章は舞踊論 (nāṭyanirṇaya)。

・ 第 4 章は声楽曲を主題とし、实例を掲げ、その構成を説明している (śuddhaprabandhodāharana)。

以上から、本書は音楽論 (saṅgītasāstra) の形式と完全に具えている。

観想図像は第 1 章 132-260 節に及んで説かれる。叙述形式は、saṅgītadarpaṇa と同称、最初に音楽形式 (lakṣaṇa)、次に観想図像を説く。saṅgītadarpaṇa は観想図像を udāharana として掲げているが、本書には mūrti (姿) として掲げている。著者自身も「うように、この観想図像 (mūrti) の典拠は dāmodara, kalāṅkura, nāradasamhitā, candrikā, ratnamālā などの音楽論書である。以上から、Nārāyaṇadeva の観想図像は、saṅgītadarpaṇa と同じく、独創性はない。

本書のうかが説は、ベンガル・グイシェス派の音楽論書である、Ghanaśyāmadāsa (Naraharidāsa, Narahari chakravartī, 18 世紀) の Rāgaratnākara と完全に一致している。Ghanaśyāmadāsa の著書として、



他に, *Saṅgītasārasaṅgraha*, *Gītacandrodaya*, *Bhaktiratnākara*.  
 (139)  
 が知られてゐるが, 彼は *Śrī Rādhāmohona Thākura* (1699  
 - 1777 A.D.) の詩文に *Gītacandrodaya* に引用されてゐる  
 ので, 年下ではあるが, *Śrī Rādhāmohona Thākura* と  
 同時代に活躍したと推定されてゐる。(140) したが  
 つて, 彼の *Saṅgītanārāyaṇa* から観想因縁を全面的  
 に引用した可能性は高い。このことは本書が  
 ヴィシュヌ派の音楽論として尊重されてゐた  
 ことと物語られてゐる。

*nārāyaṇadeva* のラ一カ分類の基準はラ一カの  
 音階音の数によつてゐるが, 具体的には *Harī-*  
*nāyaka* の *Saṅgītasāra* (ca. 16 世紀 A.D.) に従つてゐ  
 る。そのラ一カのリストは次の通りである。

(1). 7 音音階 (*sampūrṇa*) ラ一カ (1.127 - 130)

*śrīrāga*, *natṭa*, *karnṇāṭa*, *revagupta*, *vasantaka*, *śuddha-*  
*bhairava*, *baṅgāla*, *somarāga*, *āmrapañcama*, *kāmoda*, *megha-*  
*rāga*, *drāviḍagaudaka*, *varādī*, *gurjjarī*, *toḍī*, *mālava-*  
*śrī*, *sāindhavī*, *devakrī*, *rāmakrī*, *pañcamamañjarī*, *natṭā*  
*vellāvalī*, *gaudī*, *naṭa*, *ghanṭārava*, *naṭanārāyaṇa*,  
*bhūpetī*, *śaṅkarābharāṇa*.

(2) 6 音 音 階 (śāḍava) → - ㄐ (I. 190 - 192)

gāṇḍā, karnnāṭagāṇḍā, deśī, dhannāsikā, kolāhalā,  
vallārī, deśākhyā, śāvarī, khambhāvātī, harṣapurī,  
malārī, huñcikā, śrīkanṭha, bhaulī, tāra, sālagagāṇḍā,  
śuddhābhīrī, madhukīrī, chāyā, nīlotpalā.

(3) 5 音 音 階 (audava) → - ㄐ (I. 227 - 229)

madhyamādi, mallāra, deśapāla, mālava, hindola, bhairava,  
nāgadhvani, goṇḍakṛti, Lalitā, chāyāṭoḍi, pratāpavelāvati,  
saindhavī, turuṣkagāṇḍā, gāndhāra, pulindā, megharañjikā.

この順に、→ - ㄐ の音楽形式と観想図像が説  
かれている。以下、この記述を紹介するが、  
既説の文献と一致する観想図像については、  
これに指摘するに止める。(R. は Rāgaratnākara)

1. 7 音 音 階 の → - ㄐ

śrīrāga (I. 132 - 133 ; R. 62)

1. jātinyāsa grahāṃśeṣu śāḍjo'lpapañcamah |

śrīṅāravīraṅor-geyaḥ śrīrāgo gītakovidaik ||

2 mūrtiḥ-tu nāradasamhitāyām -

(1) jāti の終止音，去聲音，主音はサ音で，ハ音は少使用音 (alpa) である。恋情と勇猛の情趣で歌われる。

(2) 観想図像。 pañcamasārasaṃhitā, 3.40. と同じ。

natta (l. 134 - 135; R. 63 - 65)

1. śrīrāgavat-tathā nāṭak kintu na-eso 'lpapañcamah |  
dharitāro nimandraś-ca gamakair-utkatair-yutah ||

2. mūrtiḥ-tu nibandhāntare -

aikāstradhṛtvā rjūtām nayan vāṇān śukadyutiḥ |  
āsanastho yuvā cāruveśo nattas-tu bāhujah ||

(1) śrīrāga と同じであるが，ハ音は少使用音ではない。ダ音とリ音は高音で，ニ音は低音である。多くの裝飾音を具えている。

(2) 観想図像。他文献では -

脇に弓を持ち，矢を立てて持っている。(  
身体は鵞鳥武鳥の色で，座に坐り，若々しく，美しい衣服をまとっている。彼は武人である。

karṇāṭa ( I. 136 - 137 ; R. 66 - 68 )

1. karṇāṭah tadvad-ākhyāto ninyāsa grahaṇāmśakah ।

2. mūrtis-tu -

• saṅgīta dāmodara 4 と同じ。

nārada saṃhitāyām tv-anyaṭhā dṛśyate -

• pañcamasārasaṃhitā 3. 61.

(1) karṇāṭa は natta と同じであるが、二音が終止音、去聲音、主音である。

(2) 観想図像 (以下、上記の文献名省略)。

revagupta ( I. 138 ; R. 69 - 70 )

1. revagupto ri grahāṃso mānto marṣatamodbhavaḥ ।

2. mūrtis-tu nibandhāntare -

arke niṣaṇṇām suratāntakhinnām-āśvāsayam svāñcalavijānena ।

sīmāntinīm śvāścalat kucāntām suvarṇakāntik kila revaguptah ॥

(1) revagupta は 3 音が去聲音、主音で、2 音が終止音である。marṣatama (?) より生れる。

(2) 観想図像、他文献では -

膝に坐り、情走の後で疲れた恋人を、自分

の衣服の端で扇いで、慰めてゐる。恋人は

溜息を吹き、胸を動かしてゐる。彼は黄金  
のよりに美しい。

vasanta ( l. 139 - 141; R. 71 - 73 )

1. *śaḍjamadhyamikājātaḥ śaḍjanyaśagrahāṃśakalḥ* |  
*geyā vasantarāgo'yam vasantasamaye budhaiḥ* ||

2. *mūrtis-tu -*

• *saṅgīta-dāmodara*, 19 x 14 " .

*nāradaśaṃhitāyāṃ tu -*

• *pañcamasārasaṃhitā*, 3. 47.

(1) *vasantarāga* は *śaḍjamadhyamā-jāti* より生れ、 $\sharp$ 音  
が終止音、去聲音、主音である。春に歌わ  
れる。

(2) 観想图像。

bhairava ( l. 142 - 143 ; R. 74 - 75 )

1. *dhaivatāṃśagrahanyāsayuktah syāc-chuddhabhairavaḥ* |  
*sakampamandra gāndhāro geyo madhyāhñataḥ param* ||

2. *mūrtis-tu nibandhāntare -*

*sa candrahāsam phalakam dadhāno nibaddhakakṣo dṛḍhabaddhacūḍaḥ* |

gatir-uitanvan bahudhā padātiḥ pracāṇdarūpaḥ kila bhairavo 'yam ॥

- (1) *suddhabhairava* は ㄱ 音 の 主 音 , 去 聲 音 , 終 止 音  
 の ある 。 低 音 の が 音 は 震 え ( ヴ ァ イ ブ ラ - ト )  
 と 具 え , 正 午 以 後 に 歌 わ れ る 。

- (2) 觀 想 図 像 , 他 の 文 献 に は -

*bhairava* は 月 の よ う に 微 笑 し , 楯 を 持 っ て い  
 る 。 下 衣 の 端 (*kakṣa*) と 結 む , 髻 を 堅 く 結 む ,  
 種 々 の 動 き を し て , 歩 く , 盤 々 し い 姿 に あ  
 る 。

*baṅgāla* ( l. 144 - 145 ; R. 76 - 77 ).

1. *baṅgālaḥ kaisikījātaḥ śaḍjanyāsaḡrahāmśakāḥ |*  
*śakampamandraḡāndhāro geḡaḥ karuṇahāsayoḥ ॥*
2. *mūrtiś-tu -*

*saṅgītadāmodara , 21 .*

- (1) *baṅgāla* は *kaisikī-jāti* より 生 れ , ㄱ 音 が 終 止 音 ,  
 去 聲 音 , 主 音 の ある 。 低 音 の が 音 は 震 え と  
 具 え て い る 。 悲 と 笑 い の 情 趣 に お い て 歌 わ  
 れ る 。

- (2) 觀 想 図 像 ,

soma ( I. 146 - 147 ; R. 78 - 79 )

(141)

1. jātinyāsagrahāṃśeṣu śādjo vīre ghanāgame |

nitārah panibāhulyah somarāgo 'tre gīyate ||

2. tasya mūrtis-tu candrikāyām -

niśāṅganām vakṣasi sāyayitvā kalāṅkadambhāt surataśramārttām |

skhalatkarah sālasalocanaśrī kāmī sudhāpāṇḍar eva somah ||

(1) jāti の 終 止 音 , 去 聲 音 , 主 音 は 可 音 と 可 々 。

勇 猛 の 情 趣 , 雨 雲 の 襲 来 の 時 に 歌 わ れ る 。

二 音 は 高 音 と , ハ 音 と = 音 は 多 使 用 音 と 可 々 。

(2) 観 想 図 像 . candrikā と は -

夜 中 , 情 交 に 疲 れ た 女 を , ( 愛 の ) 乳 房 と

と か く す た め , 胸 に 抱 き し め て , 手 を 垂 ら

し , 眼 は 疲 れ て い る 。 彼 は 愛 を し く , 漆 喰

の よ う に 白 い 。

āmrapañcama ( I. 148 - 149 ; R. 80 - 81 ) , amrapañcama.

1. āndhrījāti samutpannah madhyama grāmagocarah |

gāndhārāṃśagrahanyāso rāgas-syād-āmrapañcamah ||

2 mūrtis-tatra-eva -

yuvā 'tasī sūna samānakāntiḥ śrīkhaṇḍapaṅkārdrasamastadehaḥ |

vīṇāpravīno 'marapañcamo 'yaṃ gītena mugdhīkr. tadevarājah ||

- (1) āmarapañcama は āndhrī-jāti の 5 生に、マ・グ → -  
 2 に属す。加音 ~ 主音、出発音、終止音で  
 ある。

(2) 観想図像。

amarapañcama は若々しく、atesī の花のようには  
 美しく、身体に白檀膏を塗ってゐる。彼は  
 vīṇā の巧みで、歌にふり、神々の王インド  
 う神を陶醉させる。

kāmoda ( I. 150 - 152 ; R. 82 - 84 )

1 kāmodaḥ karuṇe hasye nitāro bahukempanaḥ |

śāḍḍjo jāti-grahāṃśesu yāmārdham nyāsamandagah ||

2 mūrtis-tu -

• saṅgītadāmodara, 16.

• nāradasaṃhitāyāṃ tu -

Pañcamasārasaṃhitā, 3. 66.

- (1) kāmoda は悲の情趣と笑の情趣に使用す



3]。 jāti の 去 聲 音， 主 音 は 下 音 に 属 する。(141)  
 以下， 歌 の 時 向 は 不 詳 )。

(2) 観 想 図 像。

megharāga ( I. 153 - 154 ; R. 85 - 86 )

1. vīre dhāmsāgrahanyāsah sādjadhaivatikodbhavaḥ |  
 geyā ghanāgame megharāgo 'yam mandrahīnakah ||
2. mūrtis-tu nibandhāntare -

paryanike priyayā sārddham-āsīnam-upavīnayan |

pitāmbaro subhūṣādhyo megharāgo ghanadyutiḥ ||

- (1) megha-rāga は 下 音 の 主 音， 去 聲 音， 終 止 音 である。  
 sādjadhaivatikā (?) より 生 じ ぬ。(142) 勇 猛 の 情 趣 を  
 雨 雲 の 襲 来 の 時 に [ 使 用 する ]。 低 音 は 不  
 なる。

(2) 観 想 図 像。 他 の 文 献 に は -

megha-rāga は， 恋 人 と 一 緒 に， 寢 床 に 坐 り，  
 vīṇā を 弾 いて いる。 彼 は 黄 衣 を 着 ている， 美  
 しい 飾 り を つけ， [ 身 体 は ] 雨 雲 の 色 を  
 色 である。

drāvidagauḍa ( l. 155 - 156 ; R. 87 - 88 )

1. niṣādāṃśagrahanyāśah sadjapañcama saṅkulah |  
geyo drāvidagauḍo 'yam viraśṅgārayor-niśi ||

2. mūrtiḥ-tu nibandhāntare -

amśāptakarṇnah śiśirāṃsadhāmā kṛtāṭikācumbitacārucūḍah |  
sragvī jajan pānidhṛtākṣaderbho vipro yuvā drāvidagauḍa eśah ||

(1) drāvidagauḍa は = 音の主音，出発音，終止音で，  
サ音とハ音は多使用音 (saṅkula) である。彼  
は勇猛と恋情の情趣に富んで，夜中，歌わ  
れる。

(2) 観想図像。他文献では -

drāvidagauḍa は耳が肩に達し，月光と是之 (身  
体は白色)，美しく髪髻は首に触れ，花環  
とつけている。彼は若いバラとて，誦唱  
し，手に kuśa 草とつけている。

varādī ( l. 157 - 159 ; R. 89 - 91 )

1. praharād-ūrddhvato yeyā bhinnapañcama sambhavā |  
sadjanyāsa grahāṃśā-esā varādī bharatoditā ||

2. mūrtiḥ-tu -

• Saṅgīta-dāmodara, 7; Saṅgīta-darpana, 2. 206.

nārada-saṁhitāyām tu anyathā dr̥śyate -

• Pañcamasāra-saṁhitā, 3. 59.

- (1) varādī は一日の〔最初の〕 prahara (約3時間) より後に歌う。 bhinnapañcama (grāma-rāga の一種) より生れ、サ音の終止音、出発音、主音である。 Bharata 説。

- (2) 観想図像。

gurjjarī ( I. 160 - 162; R. 92 - 94 )

1. gurjjarī ri-grahāṁśāntā jātā pañcamasādevāt |

kvacin-māṁśa-āpi ghaorādau geyā śrīṅgāravarddhinī ||

2. mūrtaś- tu -

Saṅgīta-dāmodara, 25; Saṅgīta-darpana, 2. 269.

saṁhitāyām tu -

Pañcamasāra-saṁhitā, 3. 52.

- (1) gurjjarī は 1) 音の出発音、主音、終止音 (anta) の、 pañcamasādeva (uparāga の一種) より生れた。或時は又音が主音である。一日の最初に歌われ、恋情の情趣を増大する。

## (2) 観想图像.

toḍī ( l. 163 - 164 ; R. 95 - 96 )

1. madhyamāṃśagrahanyāsā toḍikā śuddhaśāḍavāt |

jātā madhyāhnasamaye geyā śṛṅgāravīrayoh ||

2. mūrtis-tu -

Saṅgīta dāmodara, 6 .

- (1) toḍī は 2 音 の 主 音, 去 聲 音, 終 止 音 で, śuddhaśāḍva ( grāma-rāga の 一 種 ) より 生 れ た。  
正 午 に 歌 わ れ, 恋 情 と 勇 猛 の 情 趣 に ( 使 用 可 能 ) 。

## (2) 観想图像.

mālavasrī ( l. 165 - 167 ; R. 97 - 99 ) ; mālasī .

1. mālavasrī śaradgeyā jātā mālavakāśikāt |

esā śaḍjagrahanyāsā pārvatīprītikārinī ||

2. mūrtis-tu -

Saṅgīta dāmodara, 13 ( mālasikā )

Samhitāyām tu -

Pañcamasārasamhitā, 3. 28.

(1) mālavasrī は秋に歌われる。mālavakaisika (grāma-rāga の一種) より生れた。彼女はサ音が去聲音、終止音である。

(2) 観想図像

saindhavī ( I. 168 - 169 ; R. 100 - 101 ) ; sindhudā .

1. saindhavi pañcamā-jātā grahāṃśanyāsapañcamā |  
madhyāhṇād-ūrdhvaṭo geyā śrīṅgāre karuṇe 'pi ca ||

2. mūrtiḥ - tu -

pañcamasārasaṃhitā , 3. 30 . ( sindhudā ) .

(1) saindhavī は pañcamā-jāti より生れた。ハ音が去聲音、主音、終止音である。正午より後に、恋情と悲の情趣に由りて歌われる。

(2) 観想図像。

devakṛti ( I. 170 - 171 ; R. 102 - 103 ) ; devakirī .

1. śaḍjanyāsagrahāṃsā-iyam vire devakṛtir-matā |  
āsāv-ṛtuṣu sarveṣu gātavyā samayeṣu ca ||

2. mūrtiḥ - tu -

saṅgīta dāmodera , 31 ( devakirī )

- (1) devakṛti はサ音の終止音，去聲音，主音である。勇猛の情趣に〔使用に〕，すべての季節と時間において歌われる。

(2) 観想図像。

rāmakṛti ( I. 172 - 173 ; R. 104 - 105 ) ; rāmakirī .

1. praharābhyantare geyā śaḍjanyāsagrahāṁśakā ।  
śaḍjaraśabha ghanārambhā tajjñai rāmakṛtir-matā ॥
2. mūrti-s-tu -

Saṅgīta-dāmodara, 32 (rāmakirī) .

- (1) rāmakṛti は一日の〔最初の〕 prahara (約3時間) より後に歌われる。サ音の終止音，去聲音，主音であり，サ音とリ音は多使用音 (ghana) である。

(2) 観想図像。

prathamamañjarī ( I. 174 - 175 ; R. 106 - 107 ) ; pathemañjarī .

1. pañcamāṁśagrahanyāsā dharitārā gamotkatā ।  
saṅgāre ca-utsave geyā prātaḥ prathamamañjarī ॥
2. mūrti-s-tu -

saṅgī tadāmodara, 22 (paṭhamañjarī).

- (1) prathamamañjarī はパ音が主音，出発音，終止音で，ク音とリ音は高音，カ音とマ音は多使用音である。夜明けに，恋情の情趣，祭に歌われる。

(2) 観想図像。

nattā ( I. 176-177 ; R. 108-109 )

1. nattā natavad-ākhyātā sakampāndolitasvarā |  
hāsyē 'dbhute ca śringāre gātavyā nisī maṅgale ||

2. mūrtis-tu nibandhāntare —

videśasthasya kāntasya vṛttāntam-ativihvalā |  
nattā-avahitaveśādhya pṛcchantī kākām-ādarāt ||

- (1) nattā は nata (natta) と同称，震えと伴った，āndolita ( ストイ > グ ) の音階音と具え，突い，驚き，恋情の情趣に〔使用し〕，夜中，吉事 (maṅgala) において歌われる。

(2) 観想図像。他文献では，

異国にいる恋人の消息を〔聞いと〕，悩み，しきりに，鳥に伺うている。彼女は華麗な

衣服と手とをこゝる。

velāvalī ( l. 178 - 179 ; R. 110 - 112 )

1 dhāivatāṃśāgrahanyāsā samandrā ca samasvarāḥ ।

śṛṅgāre karuṇe ca-eva geyā velāvalī budhaiḥ ॥

2 mūrtis-tu nibandhāntare -

• Saṅgīta-dāmodara , 23 .

nārada-saṃhitāyāṃ tu īśādbhedena-uktā velāvalī । (143)

• Pañcamasārasaṃhitā , 3. 34 .

(1) velāvalī は ㄨ 音 の 主 音 , 出 発 音 , 終 止 音 で ,  
低 音 と 等 音 位 の 音 階 音 を 具 之 て い る 。 恋 情  
と 悲 の 情 趣 に お い て 歌 わ れ る 。

(2) 観 想 因 像 .

gaudī ( l. 180 - 181 ; R. 113 - 114 ) ; gaurī

1 grahāṃśanyāsasādhā syād gaudī mālavakāśikā ।

vīraśṛṅgārayor-geyā sakampāndolitasvarā ॥

2. mūrtis-tu

Saṅgīta-dāmodara , 14 .

(1) gaudī は ㄨ 音 の 出 発 音 , 主 音 , 終 止 音 と あり ,



mālavakaiśika ( grāma-rāga の 一 種 ) よ り ( 生 れ 石 ) 。  
 勇 猛 と 恋 情 の 情 趣 に お い て 歌 わ れ る 。 彼 女  
 は 震 之 と 伴 々 と T= āndolita の 音 階 音 と 具 之 と  
 " 3 。

(2) 観 想 図 像 .

nāṭa ( l. 182 ; R. 115 - 116 )

1. nāṭe niśi śucau vīre paḍjāṃśo gamakotkataḥ |
2. mūrtis-tu

saṅgīta dāmodara, 3 .

- (1) nāṭa に お っ て は , 女 音 が 主 音 と , 多 く の 装  
 飾 音 と 具 之 , 夜 中 , 恋 情 ( śuci ) と 勇 猛 の 情 趣  
 (144)  
 に お い て [ 歌 わ れ る ] 。

(2) 観 想 図 像 .

ghaṅṭārava ( l. 186 ; R. 117 - 118 )

1. ghaṅṭārava dhaivatajaḥ pratāpe sarvadā'pi ca |
2. mūrtis-tu saṅgītaratnamālāyām -

prasaraḍibhavarasya skandham-āruhya codyat kanakarucira-  
 madhyam dhūnayat sarvagātram |

pradalitaripusainyo bhīmaghaṅtāraṇa sphuritanakakāntir.  
bhāti ghaṅtāraṇo 'yam ॥

(1) ghaṅtāraṇa は dhāvata (? dhāvati-jāti) より生れ、勇  
猛な情趣 (pratāpa) にふいて、常に、(歌われ  
る)。

(2) 観想図像。 Saṅgītaratnamālā では、

ghaṅtāraṇa は前進する堂々たる象の背に乗り、  
〔象E〕馳せている。胴体は黄金のよう  
に美しく、全身E震わせ、恐ろしい鐘の音で  
敵軍E破碎する。彼は輝く黄金のよう  
に美しい。

naṭanārāyaṇa ( I. 187 ; R. 119-120 )

1. dhāvataṁśagrahanyāso naṭanārāyaṇo divā ।

2. mūrtis-tu ratnamālāyam —

strīveśadhārī puruṣo navīnaḥ saṅgītasāstre bhramim-ādadhānaḥ ।  
gāyan satālam salayam manojñāḥ syān-nattanārāyaṇarāga eṣaḥ ॥

(1) naṭanārāyaṇa は 夕音の主音、去聲音、終止音  
で、句中に (歌われる)。

(2) 観想図像。〔Saṅgīta-〕ratnamālā では、

nattanārāyaṇa は年若い男で、女性の衣服をま  
とひ、音楽書を胸に抱いてゐる。彼は tāla と laya  
[で拍子をとって] 歌つてゐる。彼は美し  
い。

bhūpati ( I. 188 ; R. 121 - 122 )

1. madhyamāṃśagrahanyāso bhūpatiḥ karuṇe divā |
2. mūrtis-tu nibandhāntare -

siṃhāsana-gataḥ śvetasī-cāmaradvayavijītaḥ |

mantri-bhir-veṣṭitaḥ śyāmacchatrādhyo nāgabhūpatiḥ ||

(1) bhūpati は 2 音の主音、去聲音、終止音で、悲  
の情趣にふいて、日中、(歌われる)。

(2) 觀想圖像。他文獻では、

bhūpati は獅子座に坐り、身体は白く、二本の  
松子で扇かれてゐる。大連たすかより囲ん  
でゐる。緑青色の華麗な傘蓋を具えてゐる。

śaṅkarābharāṇa ( I. 189 ; R. 123 - 124 )

1. vire nīśi niṣādāṃśah śaṅkarābharāṇaḥ sadā |
2. mūrtis-tu ratnamālāyām -

vyāghracarmaśakalam paridadhāno bhogihāravalayāṅgadabhūṣaḥ |  
sāndramūtipariliptaśarīrah śaṅkarābharana eṣa udīritah ||

(1) śaṅkarābharana は = 音の主音と与る。常に、夜  
中には、勇猛の情趣に於いて〔歌われる〕。

(2) 観想図像。〔Saṅgīta-〕ratnamālā では、

śaṅkarābharana は全身に虎皮をまとひ、蛇の首  
飾り、臂釧、腕釧をとり、身体に灰を塗っ  
てゐる。

2. 6音音階のラーガ

gauḍa ( I. 194-195 ; R. 130-131 )

1. niśādāṃśagrahanyāso gauḍaḥ syāt-pañcamojjhitah |

vīraśṅgārayor-geyo dinānte viralarābhaḥ ||

2. mūrtiś-śu nibandhāntare -

vidhāya śambham suranīmagātaṭe mudārcayaṃ nīlasarojasamghaiḥ |

manoḥnamūrtiś-dadhād-amsūke site tvagāsanastho divija eṣa gauḍaḥ ||

(1) gauḍa は = 音の主音、去聲音、終止音と、ハ  
音と欠き、リ音が少使用音と与る。一日の  
終りに、勇猛と恋情の情趣に於いて歌われ

る。

(2) 観想図像。他文献では、

śambhu (śiva 神) (像)を置いて、Gaṅgāの河辺で、  
歡喜して、多くの青蓮にまじり礼拝している。  
姿は美しく、白衣をまとい、皮の座に坐っ  
ている。彼は再生族である。

(145)

karṇātagauḍa (l. 196 ; R. 132)

1. niśādāmśa grahanyāsayuktah pañcamavarjitaḥ |

esa karṇātagauḍas-tu karṇātavad-udāhṛtaḥ ||

(1) karṇātagauḍa は = 音の主音，出発音，終止音  
で、ハ音と欠ク。彼は karṇāta と同じである。

(2) 観想図像。karṇāta と同じ。

karṇātabaṅgala (l. 197 ; R. 133)。リストに於て。

1. gāndhārāmśa grahanyāśah śaḍjapañcamavarjitaḥ |

esa karṇātabaṅgalaḥ śṛṅgāre takkavamśajah ||

(1) karṇātabaṅgala はカ音の主音，出発音，終止  
音で、カ音とハ音と欠ク。恋情の情趣に用  
使用する。彼は takka (grāma-rāga の一種)

よ) 生れた。

ṭakka ( I. 198 ; R. 134 ), 1) 又 t = ṭ c .

1 ṭakkalakṣaṇam-āha mammathah -

nāṭa karnṇāṭayor- yoge ṭakkarāgah napumsakah iti |

2. mūrtis-tu baṅgālavat |

(1) Mammatha ( Saṅgītaratnamālā ) は ṭakka の 形 式 に > "   
 ㄷ 速 ~ ㄷ " 3 .

ṭakkarāga は nāṭa と karnṇāṭa の 結 合 形 ㄷ , 重 要   
 ㄷ は ㄷ " ( 中 性 ) , ㄷ .

(2) 観想图像 は baṅgāla と 同 ㄷ .

deśī ( I. 198 - 199 ; R. 135 - 136 )

1. revaguptadbhavā deśī patyaktā manivistarā |

ninyāsāṃśagrahā prātar-geyā karuṇāśāntayoh ||

2. mūrtis-tu ratnamālāyām -

gajapatigatir-venī locanendīvarāṅgī pṛthulataraṇī ambā lambive-   
 nībhujāṅgī |

tanutaravallī pītakausumbhavāsā iyam-udayati deśī rāgiṇī

cāruhāsā ||

(1) *deśī* は *revagupta* (*uparāga* の一種) より生れた。  
ハ音と欠き、マ音とニ音は多使用音 (*vistara*)  
で、ニ音が終止音、主音、出発音である。  
夜明けには、悲と平安の情趣にふいて、歌わ  
れる。

(2) 観想図像。 (*saṅgīta*-) *ratnamālā* では、  
*deśī* は象王のような歩む姿で、弁髪と具え、  
眼は蓮花のよう。身体は普通より丈高く、  
豊かな腰で、蛇のような弁髪と垂らす。  
蔓草のようには身体は細い。彼女は美しく微  
笑している。

*dhannāsī* ( I. 200 - 201 ; R. 137 - 138 )

1. *sāṃsā dhannāsikā jāta śuddhakaiśīkamadhyamāt |*  
*śadyagrahā madhyamāntā rihīnā vijaye sadā ||* (146)

2. *mūrtis-tu -*

*saṅgīta dāmodara*, 12.

(1) *dhannāsī* はサ音が主音で、*śuddhakaiśīkamadhyama* (*grāma-rāga* の一種) より生れた。サ音の出発音、マ音が終止音で、リ音と欠く。常に (

夜も、昼も)、勝利にたいして(歌われる)。

(2) 観想図像。

kolāhalā ( l. 202 - 203 ; R. 139 - 140 )

1. śaḍjaṅyāsa grahā kolāhalā ṭakkakulo dbhavā |  
madhyamāṃśā pahīnā ca kalāhe gamakotkṛtā ||

2. mūrti-śū

unmattapūṃsākokilavṛndaramyaṇādasvaram gāyati kṛṣṇagāthā |  
vaśī sadā sarvapurāḥ pravarttī kolāhalo 'yaṃ taruṇo 'śitāṅgī ||

(1) kolāhalā は ㄐ 音 の 終 止 音, ㄒ 音 で, ṭakka ( grāma-rāga の 一 種 ) 族 か ら 生 れ た。ㄐ 音 の 主 音 で, ㄒ 音 を 欠 く。口 論 に ( 使 用 し ) , 装 飾 音 が 多 い。

(2) 観想図像。

(147)

kolāhalā は 求 愛 す る 雄 の コ - キ ャ 鳥 の よ う な 美 し い 声 で, kṛṣṇa 神 の 讃 歌 を 歌 う。彼 は 自 心 を 制 し て お り, 常 に, ㄐ ㄒ ㄓ ㄔ ㄕ ㄖ に いる。若 々 し く, 身 体 は 黒 い。

vallāḥī ( l. 204 - 205 ; R. 142 - 143 ), ballāḥī.



1. hindolānvayasampannā vallālī saṅrahāṃśakāḥ ।  
 śṛṅgārākhye dhamaṅdrā ca rihīnā nyāsaśadjikā ॥
2. mūrtis-tu nibandhāntare -  
 sakhyā prabodhyamānā-api kānte roṣaṃ na muñcati ।  
 parāvṛttamukhī syāmā vallālī praudhanāyikā ॥

(1) vallālī は hindola (grāma-rāga の一種) 族より生  
 れ、サ音が出発音と主音とある。恋情の情  
 趣に〔使用する〕。マ音は低音と、リ音と  
 欠き、サ音が終止音とある。

(2) 観想図像。他文献には、  
 vallālī は女友達の説明してて、恋人に好す  
 る怒りを解かず、顔にそむけてゐる。彼女は  
 は〔身体は〕緑青色と、成熟した女性とある。

deśākhyā ( I. 206 - 207 ; R. 144 - 145 )

1. gāndhārapañcamā-jātā deśākhyā roḥhavarjitā ।  
 gāndhārāṃśaṅgrahanyāsā śāntaśṛṅgārāyokḥ prage ॥
2. mūrtis-tu -

Saṅgītatadāmodara, 20

(1) deśākhyā は gāndhārapañcamā (grāma-rāga の一種) と

り生れり。り音と欠き、か音の主音、出音  
音、終止音とあり。平安と恋情の情趣にお  
いて、夜明けには、歌われり (prage = prātar-geyā)。

(2) 観想図像

sāvarī ( l. 208 - 209 ; R. 146 - 147 )

1. sāvarī dhaitāntā ca gatārā mandramadhyamā |

magrahāmsō 'lpaṣadjā ca pahinā karuṇe matā ||

2. mūrtis-tu kalāṅkuranibandhe -

śrīkhaṇḍaśailaśikhare śikhībarhavāsā mataṅgamauktikakṛtōttama-  
hārayaṣṭīh |

ākṛṣya candanatarohā sāvarī bhujāṅgam-ābandhatī valayam-ujjva-  
lanīlakāntīh ||

(1) sāverī は ㄱ 音 の 終 止 音 で、か 音 は 高 音、ㄴ 音  
は 低 音 で、か、出 音 と 主 音 と あり。ㄱ 音  
は 少 使 用 音。ㄴ 音 と 欠 ぎ、悲 の 情 趣 に 使  
用 する。

(2) 観 想 図 像。 <sup>(148)</sup> kalāṅkura の 著 書 と は、

白 檀 の 山 の 頂 に いて、孔雀 の 羽 根 の 衣 服 と  
ま っ っ っ いる。狂 象 の 〔 額 から 出 る 〕 真 珠

の素晴らしい首飾りをつけて、白檀の木に蛇を  
誘い出し、〔蛇を〕腕輪としてつけている。  
彼女は輝くばかり美しい青色で巧み。

Khambhāvati ( l. 210 - 211 ; R. 148 - 149 )

1. dhāivatām śaṅkrahanyāsā sāndolā manimanditā |

khambhāvati pakīnā ca śṛṅgāre niśi gīyate ||

2. mūrtis-tu tatra-eva -

Saṅgīta-dāmodara, 28.

(1) khambhāvati は ア 音の主音、出発音、終止音で、  
āndola ( スクイーン ) の ア 音とニ音に飾ら  
れている。ハ音と欠き、夜中には、悲情の情  
趣にふいて歌われる。

(2) 観想図像。

harṣapuri ( l. 212 - 213 ; R. 150 - 151 )

1. jātā harṣapuri śaḍjamandrā mālavakaiśikāt |

śaḍjadyantā tāramadhya dhahīnā vijaye matā ||

2. mūrtis-tu nibandhāntare -

nipātya talpe sudr̥dhānurāgāt-kāntam ratīśrāntam-avekṣya mugdhā |

praudhāṅganā pauruṣam-ācarantī manoharā harṣapūrī pradiṣṭā ॥

- (1) harṣapūrī は mālavakaiśika (grāma-rāga の一種) より生れた。サ音が低音で、出発音、終止音である。マ音が高音。ダ音と欠き、勝利の時に〔歌われる〕。

- (2) 観想図像。他文献では、

harṣapūrī は mugdhā (無経験な女; 女主人公の一種) であり、烈しい恋心のために、寢床に臥し、情交に疲れ去愛人と見ゆめゆ、男のようにふるまう。彼女は成熟した女性で、美しい。

mallārī (I. 214 - 215 ; R. 152 - 154). mādhavādi.

1. pañcamāṃśa grahanyāsā gahinā mandramadhyamā ।

śṛṅgāre durddine geyā mallārī parikīrtitā ॥

2. mūrtiś-tu

saṅgītadāmodara, 17.

- (1) mallārī は ハ音が主音、出発音、終止音で、カ音と欠き、マ音は低音にある。両の日に、恋情の情趣にふいて歌われる。

## (2) 観想図像.

huñcikā ( I. 216 - 217 ; R. 155 - 156 ), huñcchikā

1. āndolitamapā ( dhapā, sapā, samā ) dhāntagrahā madhyamavarjitā |

geyā yāmadvayādūrddhvam śṛṅgāre huñcikā budhaiḥ ||

2. mūrthiś-tu nibandhāntare -

dūrvādalaśyāmarucir-vivatrā balād-viśanti dayitorumadhye |

Kakṣāntarapreritadakṣahastadhṛtastanāntā kila huñcikā syāt ||

(1) huñcikā は āndolita ( スウ、ン、グ ) の サ 音 と パ 音 と 具 之 , グ 音 が 終 止 音 , 出 発 音 で , マ 音 と 欠 ぐ , 一 日 の 第 二 yāma ( 一 日 の  $\frac{1}{8}$  ) 以 後 に , 恋 情 の 情 趣 に 由 り て 歌 わ れ る .

(2) 観 想 図 像 . 他 文 献 に 由 り て ,

huñcikā は 身 体 は dūrvā 草 の 花 弁 の よ う な 緑 青 色 の あ る . 夜 服 と ま と わ ず , 愛 人 の 腿 の 間 に , 無 理 矢 理 に , 坐 ら さ れ て い る . [ 愛 人 は ] , 腋 の 下 か ら 手 を 用 心 深 く 入 れ て , 彼 女 の 胸 に 触 れ て い る .

Śrīkanthā ( I. 218 ; R. 157 - 158 )

1. geyā-utoave ga(pa)rahitā dhāntā śrīkaṅṭhikā matā ।

2. mūrtis-tu nibandhāntare -

kāntasya kuntalāśreṇim śoṇayantiy-añjanadyutiḥ ।

kvaṇatṣvarṇavalayāvaliḥ śrīkaṅṭhikā matā ॥

(1) śrīkaṅṭhā はカ音に欠き、ク音が終止音で、祭  
にふいて歌われる。

(2) 観想図像。他文献では、

śrīkaṅṭhā は〔身体は〕墨膏のように〔黒く〕、

恋人の髪に赤い印をつけている。〔腕には〕

音を出す、一連の黄金の腕輪をつけている、

bhauṭī ( I. 219 ; R. 159-160 ), bhōṭī .

1. pojjhitā saḡrahā bhauṭī prātar-geyā surastutau ।

2. mūrtis-tu nibandhāntare -

nidhāya-āspotaṅṅair-aṅke lālayanti sutam muhuḥ ।

kurvatī vividhālāpaṃ bhauṭī maulimanoharā ॥

(1) bhauṭī はハ音に欠き、ウ音が去聲音である。

夜明けには、神を讃える時に歌われる。

(2) 観想図像。他文献では、

手と足に音をだし、膝に子供を坐らせ

て、あやしている。幾度も、種々の ālāpa を

行なっている。彼女は美しい冠を戴いている

3。

tārā ( I. 220 ; R. 161 - 162 )

1. tārā divā ratau yuddhe niṣādāṃśā mavarjitā ।

2. mūrttis-tu nibandhāntare -

aṅgahārān śikṣayanti kumārān nṛtyamandire ।

tārā mārāṅganākārā nāṭyātopavidāṃ varā ॥

(1) tārā は = 音が主音で、マ音を欠く。日中、情走時や戦争において歌われる。

(2) 観想図像。他文献では、

tārā は、舞踊堂で、子供に舞踊を教えている。彼女の様は愛の神のようで、戯曲に對する自信と知識を持つ女性のうち、最も勝れている。

sālagagauda ( I. 221 ; R. 163 - 164 )

(149)

1. māṃśah pahīno vīre ca ratau sālagagaudakah ।

2. mūrttis-tu -

saṅgītakadāmodara, 30. (sālaka)

(1) sālagagauda はマ音が主音で、ハ音を欠く。勇

猛の情趣や情交時に（使用する）。

(2) 観想図像。

ābhīrī ( I. 222, R. 165 - 167 )

1. dhāntā-ābhīrī dhāvatajā rihīnā ca śucau prage |

2. mūrtis-tu kalānkuroktā -

vācālakāṅkaṇāvibhūṣitā bāhuvallī unnidracampakamanoharagātrayaṣṭī |  
śrīkhaṇḍaśailaśikhare gajamauktike dve ābhīrikā vidadhati srajam-indu-  
śubhrām ||

3. nibandhāntare tu anyathā dṛśyate -

dadhimanthanaśiñjānamekhalāṅgadakaṅkaṇā |

śvedārdravadanāmbhojā ābhīrī gopālavallabhā ||

(1) ābhīrī は 夕 音 の 終 止 音 で、dhāvata (?) の 子 生 け  
た。リ 音 と 欠 き、恋 情 の 情 趣 (śuci) に（使用  
され）、夜 明 け に 歌 わ れ る (prage)。

(2) 観 想 図 像。 kalānkura 説 二 は -

蔓 草 の 子 を 腕 に、音 と 奏 する 腕 輪 と 一、  
細い 身体 は、満 開 の campaka の 子 に 美 し い。  
彼 女 は 白 檀 の 山 の 頂 に 一、二、の 象 真 珠  
の 首 飾 り と 掛 け て お り、〔 身体 は 〕 月 の 子



うに白い。

- ・他の文献では、別の〔観想図像〕がみられる。

ābhīrī は腰帯や臂釧、腕釧と鳴らせ、乳を  
まかせている。蓮花のような顔は汗に濡れて  
いる。彼女は牧夫の妻である。

madhukirī ( I. 224 ; R. 168 - 169 )

1. dhāṃśagrahā madhukirī gahinā karuṇādike |
2. mūrttis- tu -

Saṅgīta dāmodara, 29.

- (1) madhukirī はマ音が主音、ス音で、カ音と  
欠き、悲の情趣などに〔使用される〕。

(2) 観想図像。

chāyā ( I. 225 ; R. 170 - 171 )

1. padjagrahā marahitā chāyā śṛṅgāravīrayoh |
2. mūrttis- tu nibandhāntare -

sūryapriyā sūryamayūkhadūnā āhlādayanti pathikān  
svakāntyā |

kare dadhānā 'ruṇa padmamālāṃ chāyā pradīptā-ika manojnārūpā ||

(1) chāyā は 才 音 の 去 聲 音 也 , 又 音 ㄟ 欠 き , 恋 情  
と 勇 猛 の 情 趣 に ( 使 用 さ れ る ) 。

(2) 観 想 図 像 . 他 文 献 に は 一

chāyā は 太 陽 の 愛 人 也 , 太 陽 の ( 愛 の ) 光 に  
悩 ま さ れ て い る . 自 分 の 恋 人 と 共 に , 旅 人  
と 喜 ぶ ば 有 す . 彼 女 は 手 に 赤 蓮 の 花 輪 を 持 ち ,  
美 し い 姿 を 有 す .

nīlotpalā ( l. 226 ; R. 172 - 173 )

1. nīlotpalā dhāvatajā gahīnā bibhātsaraudreṣu sadā-eva geyā |

2. mūrttis-tu nibandhāntare -

kṛpāṇa kharpare pānyor-vibhrāṇā mukta mūrdhajā |

nīlotpalāghanaśyāmā bhīṣaṇā ca digambarā ||

(1) nīlotpalā は dhāvata (?) か い 生 れ た . か 音 ㄟ 欠 き ,  
常 に , 嫌 悪 や 怒 り の 情 趣 に ぶ い て , 歌 わ れ  
る .

(2) 観 想 図 像 . 他 文 献 に は ,

nīlotpalā は 両 手 に 劍 と 水 瓶 を 持 ち , 頭 髪 は  
流 し 髪 を 有 す . ( 身 体 は ) 青 蓮 花 の よ う に

濃い緑青色である。彼女は恐ろしく、衣服  
とまじって「音」。

3. 5 音階のうーか

madhyamādi ( I. 230 - 231 ; R. 178 - 180 )

1. madhyamādir-magrahāntā madhyamaग्रामागocarāḥ |

ayam sāyam tu gātavyaḥ śrīgāre rīdhavarjitah ||

2. mūrttis-tu candrikāyām -

atitarunavayaḥ śrīḥ kundakarpūrakāntiḥ yuvatibhajanadaksah kraunca-  
cātūkti bhāṣah |

arunajalajanetraḥ skandhasanyastavīṇaḥ smitamadhuravacesko  
rājate madhyamādiḥ ||

(1) madhyamādi は 2 音の 2 音階音、終止音で、madhya-  
magrāma ( grāma-rāga の 一種 ) に属する。彼は夜  
中には、恋情の情趣において歌われ、7 音の  
7 音となく。

(2) 観想図像、candrikā では、

madhyamādi は非常に若く、吉祥で、ジャスミン  
の花 karpūra の 5 音に美し。若く婦人との

付き合ひの上手で、kramca 爲のようには世  
辞をいふ。眼は赤蓮のようで、肩に vina 置  
置き、微笑し、優しき言葉で話す。

mallāra ( I. 232 - 233; R. 181 - 183 )

1. dhāmsānyāsah pānvayato mallārah sapavarjitah |  
sadā varṣāsu-īṣṭarase gamandras-tārasaptamah ||
2. mūrtiś-tu -

(150)  
saṅgīta dāmodara, 2.

- (1) mallāra は 7 音の主音、終止音で、pañcama (śuddhapañcama; grāma-rāga の一種) かゝる [ 生れた ]。カ音とハ音と欠く。常は、雨季は、好みの情趣に [ 使用される ]。カ音は低音で、ニ音 (saptama) は高音で与る。

- (2) 観想図像。

deśapāla ( I. 234 - 236; R. 184 - 186 ), deśakāri, kedāra.

1. nyāmsānyāsagraho deśapālah sāndolasadjakah |  
viraśṛṅgārayoh sāyam ṭakkavamśo ripojjhitah ||
2. mūrtiś-tu nāradasamhitāyām -

Pañcamasārasaṁhitā, 3. 57 (deśakārī)

mūrttir-bhinnaḥ tad-uktam candrikāyām -

cirapravāsi jaladāvalokād vicintayan-nīlasaroruhākrīm |

kāmī yuvā gītakalābhikāsi kedārarāgas-taruṇo 'ruṇābhah ||

- (1) deśapāla は = 音の主音, 終止音, 去聲音で,  
āndola (スウ, ヌウ) と伴うナ音を具えて  
いる。勇猛と恋情の情趣に〔使用される〕。  
彼は夜中に〔歌われ〕, takka (grāma-rāgaの  
一種) に属し, リ音とハ音を欠く。

## (2) 観想図像

他の観想図像, Candrikā では,

彼は長い旅をいとがり, 雲をみて, 青蓮の  
ように眼をいた女を想っている。彼は若く,  
愛らしく, 音楽を好み, 身体は赤色である。

mālava ( 1. 237 - 238 ; R. 187 - 188 )

1. ripahīnaḥ-takkavamśo gabhūrīḥ sadhakampitaḥ |

ninyāsāmsāgrahaḥ sāyam nīsi vā mālavaḥ śucau ||

2 mūrttis-tu

Saṅgīta-dāmodara, 1 ; Pañcamasārasaṁhitā, 3. 26.

(1) *mālava* はリ音とハ音と欠き、*takka* (*grāma-rāga* の一種) に属す。カ音が多使用音で、ナ音とガ音は震える(ジイ、フーラート)。ニ音が終止音、主音、出発音である。夕方(一日の終り)或は、夜中には、恋情の情趣において〔使用される〕。

(2) 観想図像。

*hindola* (I. 239-240 ; R. 189-191)

1. *sadjanyāsaḡrahāṃśo 'yam hindolo nipavarjitaḡ*  
*adhaivatyaṛṣabhijāto viraśṛṅgārayoḡ sadā* ॥

2. *mūrttis-tu*

(151)

*Saṅgīta-dāmodara*, 9.

(1) *hindola* はナ音の終止音、出発音、主音で、リ音とハ音と欠く。*dhaivatī* と *ārṣabhī* (兩者共に *jāti* の一種) 以外の *jāti* ありなし、常に、勇猛と恋情の情趣に〔使用される〕。

(2) 観想図像。

*bhairava* (I. 241-242 ; R. 192-194)

1 bhinnasadjasamutpanno bhairavo'pi ridhojjhitah |  
(152)

dhagrahāṃso madhyamānto geyā maṅgalakarmaṇi ||  
(153)

2. mūrttis-tu -

Saṅgīta-dāmodara, 35

- (1) bhairava は bhinnasadjā (grāma-rāga の一種) より  
生れた。リ音とマ音と欠く。マ音の出発音、  
主音で、マ音の終止音である。吉率に  
て歌われる。

(2) 観想図像。

nāgadhvani (I. 243 - 244 ; R. 195 - 196)

1. ṭakkānvayabhavo nāgadhvanī ridhavivarjitah |

ṣadjanyāsa grahāṃso'yam gayo virarase divā ||  
mūrttis-tu nibandhāntare -

2. nāgadhvanīḥ samārūdhagayo hingala-sannibhaḥ |

sitavāsāḥ kuntakaro yuvā rājakulodbhavaḥ ||

- (1) nāgadhvani は ṭakka (grāma-rāga の一種) より生  
れた。リ音とマ音と欠く。マ音の終止音、  
出発音、主音で、日中、勇猛の情趣に  
て歌われる。

(2) 観想図像。他文献では、

nāgadhvani は象に乗り、(身体は)赤きである。  
白衣とすとい、手に戟を持てゐる。彼は  
王家の生れである。

gṇḍakī ( I. 245 - 246 ; R. 197 - 198 ), gṇḍakīrī.  
(154)

1. sādjan̄yāsaḡrahāṃśā-eṣā gṇḍakī meparīkṛtā |

riḍhakīnā dinādau tu gātavyā-iṣṭarase budhaiḥ ||

2. mūrṭtis-tu -

Saṅgītaḍāmodara, 24. (gṇḍakīrī)

(1) gṇḍakī は ㄨ 音の終止音、去聲音、上音で、  
ㄨ 音と ㄨ 音と欠く。一日の初めに、好みの  
情趣に合せて歌われる。

(2) 観想図像。

lalitā ( I. 247 - 248 ; R. 199 - 200 )

1. ṭakkānvaya samudbhūtā Lalitā Lalitasvarā |

sādjan̄yāsaḡrahāṃśā-ca samandrā ripavarjitā |

śṛṅgāravīrayor-geyā niśānte ca dinādike ||

2. mūrṭtis-tu -

Saṅgītaḍāmodara, 34.



- (1) *lalitā* は *ṭakka* (*grāma-rāga* の一種) より生じた。  
 音階音は美しく (*lalita*)、マ音が終止音、去  
 聲音、主音で、カ、低音である。リ音とハ  
 音と欠き、夜間の終りと一日の初めに、恋  
 情と勇猛の情趣において歌われる。

(2) 観想図像。

*chāyātodī* ( I. 249 ; R. 201 )

1. *chāyātodī ripatyaktā sañjātā śāḍavānvaye |*  
*mṛdukampasvarā māṃśagrahanyāsā divātāni .*

2. *mūrttiś-ī tu todītulyā pūrṇnarāgamadhye uktā |*

- (1) *chāyātodī* はリ音とハ音と欠き、*śāḍava* (*śuddha-śāḍava*; *grāma-rāga* の一種) に生じた。弱ハ震え (カイゴエト) と異え、マ音が主音、去聲音、終止音で、日中に歌われる (*divātāni*)。

(2) 観想図像。

7音音階の *todī* と同じ。

*pratāpavelāvalī* ( I. 250 ; R. 202 )

1. *kakubhasya kule jātā pratāpopapadā divā |*

jñeyā velāvalī tajjñāih dhagrahāntā ripojjhatā ॥

2. mūrttis-tu velāvalī tulyā

- (1) pratāpa-velāvalī は kakubha ( grāma-rāga の 一 種 ) に 生  
れた。日中には〔歌われる〕。少音の出発音、  
終止音で、リ音とハ音と久く。

(2) 観想図像

velāvalī ( 7 音音階のうーか ) と同じ。

saindhavī ( I. 251 ; R. 203 )

1. padjanyaśagrahāṁsā saindhavī niṣavarjitā ।

mṛdukampasvarā jñeyā jātā mālavakaiśikāt ॥

2. mūrttis-tu pūrṇasaindhavivat ।

- (1) saindhavī は ㄨ 音の終止音、出発音、主音で、  
ニ音とカ音と久く。弱い震える音階音と具  
えてゐる ( ㄨ ; ㄨー ) 。 mālavakaiśika (   
grāma-rāga の 一 種 ) から生れた。

(2) 観想図像

7 音音階の saindhavī と同じ。

dvitīyā saindhavī ( I. 252 ; R. 204 )

1. dvitīyā saindhavī bhinnasādajā āndolitasvarā |  
dhaivatāmśagrahanyāsā śṛṅgāre ripavarjitā ||
2. mūrttis-tu punah pūrṇa saindhavivat |

(1) 第 2 の saindhavī は bhinnasādajā ( grāma-rāga の 一 種 )  
より生じた。āndolita ( スラ, > ) の 音階  
音を具えてゐる。ス音が主音, 出発音, 終  
止音で, リ音とハ音とを欠く。恋情の情趣に  
ふいて [歌われた]。

(2) 観想図像。

7 音音階の saindhavī と同じ。

turaṣkagaṇḍa ( I. 253-254 ; R. 205-206 )

1. vīre ca raudre ca turaṣkagaṇḍo |

niśādaajāṃśo ripavarjitāś-ca ||

2. mūrttis-tu nibandhāntare —

turaṣkagaṇḍa ārūḍhahayaḥ pakkeṣṭakāruciḥ |

śaracāpadharaś-canda usṭisī kavacāvṛtaḥ ||

(1) turaṣkagaṇḍa は勇猛と怒りの情趣に ( 使用され  
た )。ニ音が主音で, リ音とハ音とを欠く。

(2) 観想図像。他文献では,

turaṣkagauḍa は馬に乗り、(身体は) 煉瓦のよ  
 うな色である。手には矢と弓を持ち、盤を  
 持つ。> - ン > (uṣṇīpa) と鎧をまとっている。

gāndhāra ( I. 255 - 256 ; R. 207 - 208 )

1. gāndhāraḥ madhyamaś-ca māntaḥ ।

sapojjhiteḥ syāt karuṇe sadā-eva ॥

2. mūrttis-tu

saṅgīta-dāmodara, 8.

(1) gāndhāra は madhyama ( jāti の一種 ) より生  
 じた。> 音の終止音で、カ音とハ音とを欠く。  
 常に、悲の情趣に使用される。

(2) 観想図像。

pulindī ( I. 257 - 258 ; R. 209 - 210 )

1. gapojjhītā sadjabhavā sadā syāt ।

pulindikā bhīṣṭaraseṣu dhāntā ॥

2. mūrttis-tu nibandhāntare →

gūṭjāpuṭja lasadbhūṣā pallavaiḥ satkṛtāmbarā ।

kaṇṭhena vināṃ dadhatī pulindī-indīvaradyutiḥ ॥

(1) pulindī は が音とハ音と欠く。 sadja (bhinna-sadja; grāmarāga の一種) より生じ、常に、好曲の情趣に〔使用される〕。ダ音が終止音。

(2) 観想図像。他文献では、

pulindī は多くの guñja 草の美しい飾りをつけ、若葉で作った美しい衣服をまとひ、首で vinā と交えてゐる。彼女は〔身体は〕睡蓮の色を帯びてゐる。

megharāñjī ( I. 259-260 ; R. 211-212 )

1. dhapojjhita sadjabhavā ca gāntā |

divā ca vīre kila megharāñjī ||

2. mūrttis-tu nibandhāntare -

śrutau dadhānā nava karnakāram-ārāmagā keśarapuspakāñcī |

adhyāpeyanti svararasthasārīm śrīrāmarāmā-iti megharāñjī ||

(1) megharāñjī はダ音とハ音と欠く。 sadja より生じ、が音が終止音である。日中、勇猛の情趣にふいて〔歌われる〕。

(2) 観想図像。他文献では、

megharāñjī は耳に karnikāra の若木をつけ、園

にゐる。keśara の花の腰帯をつけ、手に乗せた sārī 鳥に〔言葉に〕教えてゐる。彼女は Rāma の妻である。

#### 4. 混成 (saṅkīrṇa) うーか

混成うーかとは、以上において述べたうーかの部分 (amśā) を組合せて作ったうーかである。Saṅgītanārāyaṇa, Rāgaratnākara 又は Harināyaka の説として、9 種類の混合うーかについている (I. 261-270; R. 213-218) が、このうーか観想図像はむしろ 2 種類のうーかについて言及しているにすぎない。混合うーかは、理論的には、多種多称に作ることもできるが、そのすべてが美しい旋律とは限らない。Harināyaka は「これらのうーか相互の組合せによって、多種の名前が生れる。このうーか、耳は快く混成うーかの、いくつかに述べよう」(I. 261; R. 213) と述べて、特に 9 種の混成うーかについている。この中には pauravī, gaurī, sārāṅga, āsāvārī

なと既出のラ一がみられる。これは9種の  
混成ラ一かの説明はラ一が相互の組合せが主  
であって、ラ一かの音楽形式に言及していない。  
例之は *pauravī* は「6音音階のラ一から  
生じる *deśākhyā* と *mallārī* の二つの部分から生じ  
る」(1.262) と述べるに過ぎず、他のラ一がそ  
同様の論調で与る故、ここには観想図像を説  
く *mañjukalyāṇikā* と *mukhāvārī* の二混成ラ一を紹介  
するに止る。

*mañjukalyāṇikā* (1.263-264; R. 215)

1. *varādyākhyānāṭakannāṭakebhyah* ।

*sambhūtā-iyam mañjukalyāṇikā sā* ॥

(155)

2. *mūrtis-tu* —

*śṛṣṭvā mālām dhyāyamānā bhramanti dṛṣṭvā kṛṣṇam kuñja-  
madhye vasānam* ।

*dattvā hr̥ṣṭā ākr̥ṣṭacittā vabhūva vṛndārṇye mañjukalyāṇi-  
kākhyā* ॥

(1) *mañjukalyāṇikā* は *varādī*, *nāṭa*, *kannāṭa* (*karṇāṭa*)

から生じる。

## (2) 觀想圖像。

mañju kalyāṇikā は花環を作り、瞑想したり、動揺したりしてゐる。或々の中にはゐる kṛāṇa を見て、〔花環を〕与えて、心晴やかに、魅了されて、彼女は vṛndā の森にゐた。

mukhāvarī ( l. 269 ; R. 218 a )

1. saindhavī todīkā yogāt samutpannā mukhāvarī ।  
(156)
2. mūrttis-tu -

devapuṣpam kare dhṛtvā tiṣṭhaty-ekāntamandire ।

gītābhinayavijñātā raktavarṇā mukhāvarī ॥

- (1) mukhāvarī は saindhavī と todī の組合せにより生  
いゝ。

## (2) 觀想圖像。

mukhāvarī は手に神への献花を持ち、森に神  
殿にゐる。彼女は歌と踊りの紅草に精通し  
ており、〔身体は〕赤色である。



#### 第四節 通例の観想図像集

これまで紹介した観想図像はすべて著者が知られ、それなりに权威ある音楽書に記載されてゐるものである。しかし、意外にも、rāga-māla画の制作に際して、この観想図像が使用されることは少なく、現在、完全なセットとして与ることが出来る作例は、前述の通り、極めて少ない。

多くの作例によつて rāga-rāginīの組織を検討した結果、K. Ebeling は音楽書の組織と一致しないものの約半数を占めることを知り、この組織を painter's system と呼んだ。この組織は、必ずしも、一定のものではなく、細部においては相違するが、最大公約数的組織である。この組織を持つ作例の観想図像はサンスクリット語のほか、ヒンディー語、ペルシア語によるものが多い。サンスクリット語の観想図像は Saṅgīta-dāmodara (S. dāmo.) や Saṅgīta-darpaṇa (S. darp.) から、部分的に、借用してゐる例が多い。こ

のことは画家（あるいは注向主）が一般に知られてゐる rāga-rāginī の観想図像を任意に送んで、rāga-mālā 画制作に備へたことを暗示してゐる。これをてみてきた通り、観想図像の数は多く、一つの rāga についても複数の観想図像が説かれてゐる故、一人の画家が rāga-rāginī の組織を決め、それに適した観想図像を各々送んだとは考へ難い。挿図入りの聖典の例か  
(157)

う、rāgamālā 画の制作過程を推測すれば、注向主の希望に応じて、Kṛemakarna の Rāga-mālā のように、或る音楽家が任意に観想図像を編み、これを画家と書写者に示し、まず画家が絵を描き、次に書写者が画面の上段のバネルや紙背に観想図像を書き入れたと考へられる。したがって、このためのみに音楽家が編んだ、書名の無い、観想図像集が存在してゐても不思議ではない。この推測に副う文献として、Bhandarkar Oriental Research Institute 所蔵の仮称 Rāga-rāginī-svarūpāni (写本: 978/1887-92) を挙げることもできる。

本書は書名がなく、内容に副って、前記の書名がつけられて<sup>(158)</sup>いる。最初の2偈は恭敬文と含む緒言であり、第3偈から第40偈は観想図像に当てられ、最後の3偈は結語に相当し、結句の句は *śubham-astu* であるから、本書は完結した独立の文献といえる。 *rāga-rāginī* の数は38種であるが、最初の *bhairava* から第36 *kedāra* は、次に示すように、K. Ebeling のいう *painter's system* に極めて近い構成である。

本書の観想図像の特徴は *S. dāmo.* と一致する偈が20、類似する偈が3あり、他の音楽書の観想図像と対応する偈が15あり、*S. dāmo.* の影響を強く受けているといえる。

本書と完全に一致する観想図像を持つ *rāga-mālā* 画の作例を知りたいが、India Office Library 所蔵の Johnson album (J.A.) no. 35 は、現存30画のうち、22画の紙背に記入されている観想図像は本書と一致する(4画は観想図像の記入がなく、3画は本書と一致せず、1画は *rāga* が相違する)。この *rāga-mālā* 画は *S. darp.* に紹介

1. である Hanumān 説 (36 rāga-rāginī 組織) に  
よってあるが、組織に「これは、疑問な真が  
(159)  
ある。しかし、S.darp. の観想図像より S.dāmo.  
のそれに多くよってある真に興味を持つ。

以下、二の三者と比較しよう。最初には本書  
の記述の順序に従って、rāga-rāginī の名称を挙  
げ、左から、前述の S.dāmo の番号、J.A. no. 35 の  
番号、painter's system の構成番号を挙げる。

(本書)	(S.dāmo.)	(J.A. no. 35)	(P.S.)
1. bhairava	5 L	27	<u>rāga 1</u>
2. bhairavī	35	25	(1) の rāginī 1
3. nāṭa	3	8	2
4. mālavikā	13 (不一致) 5 L		3
5. pathamañjarī	22	5 L	4
6. lalita	34	12	5
7. mālavapañcama	5 (pañcama) 5 L		<u>rāga 2 (malikos)</u>
8. gaurī	14 (不一致)	18 (不一致)	(7) の rāginī 1
9. khambhāvati	28	19	2
10. mālava	1	20	3 (mālavī)
11. rāmakarī	32	14	4

12	gunakari	५ L	17	5
13	hindola	9	५ L	<u>rāga 3</u>
14	velāvalī	23	15 (vilāvalī)	(13) rāgini 1 (bilawal)
15	ṭodī	6 (不-致)	५ L	2
16	deśāka	20 (deśāga)	13	3
17	gāndhāra	* 8	3	4 (deva°)
18	madhumādhavi	५ L	26	5
19	meghamallāra	५ L	* 2	<u>rāga 5 (megha)</u>
20	dakṣiṇagurjjari	25	५ L	(19) rāgini 1 (gurjari)
21	gaṇḍakari	24 (gṇḍa°)	५ L	2 (gormalar)
22	kakubhā	10	16	3
23	vibhāsa	* 26 (bhāṣā)	22	4
24	baṅgāla	21	24	5
25	nṛpadīpaka	५ L	11 (dīpaka 不-致)	<u>rāga 4 (dīpak)</u>
26	dhanāśrī	12 (dhanāśī)	(160) 30	(25) rāgini 1
27	vasanta	19	29	2
28	kārṇāṭa	* 4	9 (不-致)	3 (kanada)
29	varādī	7	23	4 (bairadi)
30	deśavarādī	५ L	५ L	5
31	śrī-rāga	५ L	* 28	<u>rāga 6</u>

32	mallāra	2	1	(31) a rāginī 3 (setmālar)
33	sāraṅga	30 (不一致)	㊦㊧	㊦㊧ (pañcama)
34	kāmōda	16	㊦㊧	2
35	āsāvārī	㊦㊧	㊦㊧	4
36	kedāra	㊦㊧	10	5
37	naṭanārāyana	㊦㊧	㊦㊧	㊦㊧
38	śuddhasālaṅga	㊦㊧	㊦㊧	㊦㊧

kalyāṇa

4

devakārī

5 (觀想圖像  
skt. ㊦㊧)

bhopālī

6 ( ' )

gujārī

7 ( ' )

vihāgarā

21 ( ' )

( \* は 一 部 不 一 致 )

この比較によつて明らかな通り、Painter's system  
の rāga とある megha (5) の ガル - ㊦㊧ と dīpaka (4)  
の ガル - ㊦㊧ の 順 序 が 変 り、 śrīrāga (6) の rāginī  
の 1 (pañcama) に 相 違 が み ら れ る 以 外、本 書 の  
記 述 の 順 序 は painter's system の 構 成 と 一 致 し て  
い る。現 在 の と 同 じ painter's system に よ る 完 全

な観想図像と云ふこと、その内容を比較することはできないが、少なくとも、組織に因るとは、本書は K. Ebeling の " painter's system " の観想図像集の一つであるといえる。

なお、Johnson album no. 35 の組織は Hanumān 説に近しい。しかし観想図像は Hanumān 説によつて観想図像と説く S. darp. よりも S. dāmo. に多く一致する点からいへば、Johnson album no. 35 は Hanumān 説の変型である painter's system といえる。

すなわち S. dāmodara の観想図像は紹介したつて、以下本書の観想図像のうち、S. dāmodara にみられるものとも一致するものも紹介する。

bhairava ( fol. 1. rev. )

(161)

sukhopaviṣṭaḥ suratārtham-īśo viśuddharāgair parirañjitāṅgaḥ!

lāsini moditacittavṛttir maṣṭiprabho'yam kila bhairava syāt || 3 ||

神は仰つたりと坐り、喜ぶため、淨らかな愛情により、身体は輝いてゐる。戯れて、心

は満され、黒く輝く者、これこそ bhairava。

mālasikā (fol. 2, obv.)

pullāravindasya dalāni pānau vibhāvayanti tanudehavallī |

(162)

mālūravr̥kṣasya tale niṣannā śonā mūr̥dur mālasikā pra-

diṣṭā || 6 ||

mālasikā は大輪の蓮花を手に赤し、身体は蔓草のように細く、mālūra 樹の下に坐っている。  
〔身体は〕赤色で、穏やかである、といわれる。

gaurī (fol. 2, rev.)

nidhāya pānau suravr̥kṣagucham kāñcikalāmanditamadhya-

bhāgā |

śubhrābarādhāreṇa gaurakātir gaurī sadānandakarī pra-

diṣṭā || 10 ||

gaurī は神樹を手に持ち、腰に小鈴のついた帯を飾り、白衣をまとひ、輝くばかり美しく、常に(真の)歡喜を作すもの、といわれる。



guṇakarī (fol. 3. obv.)

kalpataruguchalāñchitakanakaghaṭāny-agraṭaḥ kṛtvā | (163)

tanvī guṇaguṇayuktā guṇakarī-indīvaraśyāmā || 14 ||

guṇakarī は、前で、黄金の壺に如意樹の枝を飾  
るといふ。身体は細く、それぞれの美德を具  
え、〔身体は〕青蓮のような緑青色である。

ṭodī (fol. 3. obv.)

vicitrapaṅkeruharamyavaktrā kuraṅgasāvaṃ kalamāṅkureṇa |

pralobhayantī vipinokanthe ṭodī-iyam indīvaradāmaramyā || 17 ||

ṭodī は青蓮の美しい花輪をつけ、顔は色彩り  
豊な蓮花のように美しく、森の近くで、子鹿  
を、木の若芽で、誘うといふ。

gāndhāra (fol. 3. rev.)

jātaṃ dadhānaḥ kṛtakānthesūtraḥ kaṣāyavāsāḥ kṛśadeha-  
yastīḥ |

sayogapādāvṛtanetramudro gāndhāraḥ rāgaḥ kathitas-tava-  
(164)

svī || 19 ||

gāndhāra-rāga は苦行者で、束髪を具え、首飾り

とけ、褐色の衣服（袈裟）をまとひ、身体は細く、ヨ一ガの脚勢をとり、閉目を印としてゐる。

madhumādhavī (fol. 3. rev.)

nīlanicolāṃ vapuṣā vahantī kṣannaprabhā lambitamārgabhāṅgī |

tamālatīre timire carantī priyānurāgā madhumādhavī-iyam || 20 ||

madhumādhavī は身体に青色の衣服をまとひ、一瞬の光（雷光？）によつて道の曲を知り、暗い tamāla 樹の堤をさまよひつゝ、恋人を恋慕してゐる。

meghamallāra (fol. 3. rev.)

nīlāmbārāsamvṛtanādalinah sukomalāṅgah kamanīyamūrttiḥ |

anaṅgalīlāniratākṣayugmah sa meghamallāreḥ bruvan sarā-

ṅgaiḥ || 21 ||

meghamallāra は青衣をまとひ、音 (nāda) に魅せられてゐる。身体は非常に若々しく、姿は美しい。両眼は愛の神の遊戯の故に輝いてゐる、と rāga を具えた人たち（音楽家たち）はいふ。

nṛpadīpaka (fol. 4. obv.-rev.) (165)

priyaḥ priyāsannihito nisārdhe sakhī sukham cāmaracalanena |  
parasparam kṛḍati bāhulilā munipranītā nṛpadīpakasya || 27 ||

夜半に、夫は妻と交はして、抱き合ひ振る、  
侍女〔を送る風〕快樂と、互に、樂しん  
でゐる。 nṛpadīpaka 〔以下不詳〕。

kārṇāṭa (fol. 4. rev.)

kṛpānapānir-gajadantapatram-ekam vahan daksinatarnapūre |  
samstūyamānaḥ suracāraṇo ghaikḥ kārṇāṭarāgaḥ sikhikanṭha-  
nīlaḥ || 30 ||

kārṇāṭa-rāga は手に劔を持ち、一片の象牙を右  
の耳につけ、〔身体は〕孔雀の首のようは青  
く、多くの神や cārana たちを讃えてゐる。

deśavarādī (fol. 4. rev. - fol. 5. obv.)

(166)

ālasya maunamudrā nidrā ghūrṇāyamāna (nayana) yugmādyā |

sukhaśāyini nijadayite deśavarādī bhaved gaurī || 32 ||

deśavarādī は〔身体は〕黄色で、くちくちと

て、黙りこみ、ねむそうで、長い両眼を動か  
せて、自分の夫の寢床にいる。

śrī-rāga (fol. 5. obv.)

vicitrasinghāsanamadhya varṭti kāntiḥ pavitrābhiratī' tīśubhram  
kurvan kathā nāradataṁ varābhyāṁ śrīrāgarājah kathito muni-  
ndraiḥ || 33 ||

rāga の王 śrī は美しく獅子座に坐り、美しく、  
神々しく、心満たされ、〔身体は〕非常に白  
い。彼は Nārada と Tumvara の二人と話しこいて、  
と賢者たちはいう。

sāraṅga (fol. 5. obv.)

priyākatoṣaṅga viniṣṭaḥ] gātram<sup>sparśan</sup>uroje mukhacumbanāya |  
jātasya ho (?) gaurasārīrakāntiḥ sāraṅgo harināṅkitadvāḥ (?)

|| 35 ||

sāraṅga は恋人の唇を膝に乗せ、口づけするた  
めに、身体を胸に触れている。〔中略〕身体  
は黄色く美しく、〔後略〕。

āsāvarī ( fol. 5. obv-rev. )

śrīkhaṇḍaśailaśikhare parisanniviṣṭā mauktikacittamahara-  
vallī ।

ākṛṣya caṇḍanataro śavarībhujaṅgī āsāvarī valayamañjula-  
nīlakanti[ḥ] ॥ 37 ॥ (168)

āsāvarī は白檀の山の頂に坐り、真珠と重ねた  
最上の胸飾りをつけ、白檀の木から蛇を誘い  
出してゐる。彼女は美しい腕輪をつけ、[身  
体は]青色で、美しい。

kedāra ( fol. 5. rev. )

priyāvirahasantāpabhūṣito dhūsarākṛtiḥ ।

kedārarāgaḥ syāmo 'yam yuvā sarvvāṅgasundaraḥ ॥ 38 ॥

愛人との離別の苦しみを飾りとし、外観は灰  
色である。kedāra-rāga は[実は]緑青色で、  
若々しく、身体はすべて美しい。

naṭanārāyaṇa ( fol. 5 rev. )

murajena ca vīṇayā ca pārśve madhuram gāyati gāyate  
smitaśrī ।

dayitām saniveśitaikabāhur naṭanārāyaṇa eṣa nīlavarnaḥ || 39 ||

naṭanārāyaṇa は太鼓と vīṇā と脇に [持ち]、楽しく、歌い、歌ってゐる。微笑して美しく、恋人を片手に抱いてゐる。彼は青色である。

śuddhasālaṅga (fol. 5. rev.)

pārśvasthā tāmbūlasamarpiḥyā muhur-muhur vīṭakam  
ādadhān |

hemaprabho mugdhamṛdaṅgaveśita śa śuddhasālaṅga  
iti prasiddhaḥ || 40 ||

きんぎょと手える尺女に、側には女性がいて、しばしば、きんぎょを作ってゐる。śuddhasālaṅga は [身体は] 黄金色で、美しい太鼓をかかえてゐる。これが定説である。

## 第五節 観想圖像の伝承

従来、rāgamālā 画の研究は個別の作例に基づき、その絵画的表現を分析することによって、その成立年代と地域とを同定する作業に

重奏が置かれる傾向が強く、作例と観想図像との関係は必ずしも十分ではなかつた。しかし、O.C. Gangoly は *Rāgas and Rāginīs, vol. II* の図版(筆者未見)によつて、冒大を作例で紹介し、それに記入されている観想図像の文献的根拠を検証し、*rāgamālā* 画の観想図像の資料的研究の道を拓いた。また、単独の作例の場合にも、その観想図像の翻訳によつて、作例の図像的根拠を明らかにした貴重な研究も多い。これらの成果に基づき K. Ebeling (1973 A.D.) は彼の調査した *rāgamālā* 画 127 セットについて、可能な限り、その図像的根拠となる観想図像のテキストを 23 種 (A~W) に分類し、サンスクリット語の文献をも指摘した。これと同様の研究は Waldschmidt 夫妻の研究 (1975 A.D.) や A. L. Dallapiccola の研究 (1975 A.D.) があげられる。筆者はこれらの研究に導かれて、観想図像関係の文献資料を収集し、上記にふつて紹介したような結果を之にのべてみるが、いわゆる通例の *rāgamālā* 画の連作組織である painter's system

の観想図像の文献的根拠と伝承過程は、*Saṅgita-dāmodara* と *Saṅgitadarpaṇa* が指摘されているとは  
 (169)  
 いえ、従来の研究では、必ずしも、論証されて  
 いない。

また、K. Ebeling は painter's system のリストの  
 根拠を明にしているが、このリストは  
 Johnson album 31, 32 (Lucknow, ca 1780-82) のリスト  
 と一致する故、恐らく、これに依っているもの  
 と推測することはできる。Johnson album のリ  
 ストに類似する作例は Bundi 地方の Chattera-  
 Mahal と呼ばれる王宮の壁龕に描かれている。  
 Chattera Mahal は Bundi の Chatterasal (1631-1658 A.D.  
 r. 1652-1658 A.D.) によって建立されたが、壁画  
 は18世紀の Bundi 様式によるものであり、そ  
 の成立は Budh Singh (1695-1739 A.D.) の治世 1720-  
 1727 A.D. であると推定されている。(170)  
 Joachim Bautze  
 の報告によると、この rāga-mālā 壁画は壁面の  
 西から始まり北、東、南と展開する。これを  
 rāga-rāginī の組織によって表示すると、以下  
 の通りになる。



西 - 北

bhairava : bhairavī , naṭa , \* mālaśrī , \* lalita , paṭamañjarī .

北

mālavakauśika : gaudī , mālava , 〇 , rāmakarī , khambhāvati ,  
\* guṇakarī .

北 - 東

hindola : \* todī , \* madhumākhavī , \* deśākha , 〇 , vilāvalī ,  
gāndhāra .

東 - 南

dīpaka : dhanāśrī , vesanta , vairāṭī , karnāṭa , \* deśa-  
vairāṭī .

南

megha : vibhāsa , 〇 , gurjarī , baṅgāla , \* gauramallāra ,  
\* kakubhā .

西

śrī-rāga : \* kāmōda , kedāra , guṇḍa , pañcama , 〇 ,  
āsāvarī .

[ 〇印の位置に rāga が入る。\*印の rāginī は壁  
龕の側面に描かれた。 ]

上のリストのうち rāgini の名称と painter's system と相違するのは guṇḍa (p.s. setmalar) である。この壁画は Johnson album 31, 32 より約 50 年以前のものとある。したがって, painter's system は, 少し早くとも, これ以前に成立したものであるといえる。

同じく, Bundi 地方 Badal Mahal と Indragarh の Supari Mahal の rāgamālā 画の壁画が Joachim Bautze によって報告されている。前者の壁画は 1644-1680 A.D.<sup>(171)</sup>, 後者の壁画は 1658-1680 A.D. に成立したと推定されている。<sup>(172)</sup> この壁画の rāga-rāgini のリストは Manley rāgamālā (ca. 1610 A.D.), Johnson album 43 (ca. 1630 A.D.) と同称, 第 4 と第 5 のグループが, 各々, dipaka : dhanāśrī, vasantā, kanara (karnāṭa, M.rāg. 2), varādī, deśavarādī (deśī, J.A. 43), pañcama : gurjarī, kakubha, vibhāsa, baṅgāla, 最後の rāgini は一定せず kāmōda (Badal.M., Supari M), sārāṅga (J.A. 43), guṇḍakarī (M.rāg.) と 3 称である。Badal Mahal と Supari Mahal の kāmōda は明らかな誤りで, 第 6 グループの guṇḍa と入れ替之

る必要がある。このリストの特徴は pañcama 及び rāga となっている点である。このように、この rāga-rāgini の組織は Chattera Mahal と Johnson album 31 の組織より約 50~100 年古いリストを具えている。Bundi 地方の以上の種の rāga-mālā 画は壁画であるから、リストを検証する場合、画紙に描かれた rāga-mālā 画より確実性が高い。

なお、前節で述べた Rāga-rāgini-svarūpāni は Chattera Mahal のリストに類似している故、同時代（18 世紀前半）の成立とみることはできる。

前節で検証した通り、この写本のリストは painter's system と原則的に一致する故、painter's system による rāga-mālā 画の図像資料と做すことは許されよう。この前提に基づき、先に紹介した音楽論書に出る観想図像とこの写本の観想図像の伝承関係を考察することは、よって、第四章を終ることにしたい。なお painter's system の決定的な観想図像は存在しない故、Johnson album 31, 32 の絵画表現と簡単に各 rāga, rāgini の後に掲げることとする。<sup>(173)</sup>

## 音樂論書，略号。

初期文献	SUS. : Saṅgītopaniṣatsārodhāra (1350 A.D.)
	S.rāj. : Saṅgīta-rāja (1433-1468 A.D.)
	PSS. : Pañcamasārasaṃhitā (ca. 1440 A.D.)
	R.sāg. : Rāgasāgara (?)
中期文献	S.dāmo. : Saṅgīta-dāmodar (ca. 1525 A.D.)
	K.rāg. : Kṣemakarna rāgamālā (1570 A.D.)
	P.rāg. : P. Viṭhala rāgamālā (1576 A.D.)
	Rasa-k. : Rasa-kaumudī (ca. 1575 A.D.)
	R.vib. : Rāgavibodha (1609 A.D.)
後期文献	S.darp. : Saṅgīta-darpana (ca. 1625 A.D.)
	S.nārā. : Saṅgītanārāyaṇa (1718-1767)
	RRS. : Rāga-rāgiṇī-svarūpāṇi (18 <sup>o</sup> 前半)

1. bhairava ; 坐，て " 子 bhairava と 彼 に 白檀膏 に 塗 了 毒。

観想图像出典：初期文献なし。中期文献：

K.rāg., P.rāg., Rasa-k., R.vib., 後期文献：S.darp., S.nārā., RRS.

観想图像はすべて Śiva 神の图像的記述である。K.rāg. と P.rāg. は極めて類似しており、Rasa-k. では持物に変化があり、图像学的要素にも変化がみられる。後期文献の S.darp. は Rasa-k. に近い論調である。S.nārā. は图像学的要素の記述より、Śiva 神に対する印象を述べることに重きが置かれている。RRS. も同様に述べている。神像の图像学的要素の典型として、持物の変化を述べて、

三叉鉞、髑髏、角笛 (K.rāg.) — 三叉鉞、髑髏 (P.rāg.) — 戟 (Rasa-k.) — 太鼓、三叉鉞 (R.vib) — 三叉鉞、人頭 (S.darp.) — 楯 (S.nārā.)  
 と述べていて、各文献の間には直接の伝承関係はみられない。

2. bhairavī ; Śiva 神の祠堂に礼拝する女性。  
 前庭に牛がいる。

観想图像出典：初期文献 sus., s.rāj., PSS.; 中期文献 S.dāmo., K.rāg., P.rāg., Rasa-k.; 後期文献 S.darp., S.nārā., RRS.

Sus. と S.rāj. は神像的記述に徴し（以下同じ）、  
 身体は赤色，青衣をまとひ，鸚鵡に乗る，と  
 する。Śiva神の祠堂に礼拝する女性を述べる  
 のは PSS. が最初である。中期文献中，S.dāmo. は  
 PSS. と完全に一致する。K.rāg. と P.rāg. Rasa-k は  
 bhairavī の外觀描写を主とするが，Rasa-k は手  
 tāla を持ち，Kailāsa 山の水晶の台座に坐して  
 いる，とし，礼拝行為を暗示している。後期  
 文献の S.darp. は Kailāsa 山頂の水晶の祭壇に Śiva神  
 を供養する女性を描写している。情景として  
 は Rasa-k. と類似している。S.nārā と RRS. は PSS.  
 と完全に一致している。

### 3. nāṭa ; 騎馬して戦う兵士。

観想図像出典：初期文献 R.sāg. ; 中期文献  
 S.dāmo. , K.rāg. (nāṭa), Rasa-k. (nāṭa) ; 後期文献  
 S.nārā. , RRS. 。

観想図像のすべてが馬に乗り，戦場を駆け  
 回る兵士を主題としている。R.sāg. は剣と盾を  
 持ち，弓と矢を抱える，としているが，中期

文献は持物は剣のみ (Rasa-k. とはなし) とし、血に染った勇士の外観描写を重視してゐる。後期文献の S.nārā. と RRS. は S.dāmo. と完全に一致してゐる。なお、S.darp. は基本は nata とし、この rāginī と出す。観想図像は、中期文献と同じであるが、持物の剣はなく、馬の肩に腕をのけてゐる。なお、S.nārā. は Rasa-k. と同名の nata とし、この rāginī と出す。この観想図像は勇士を主題としてゐるが、台座に坐る姿である故、nata とは別種の rāginī とある。

4. mālavikā ; 蓮花を持った女性と女友達。

観想図像出典：初期文献 PSS. (mālavī) ; 中期文献 S.dāmo. , P.rāg. (mālavāśī) , Rasa-k (同前), R.vib. (mālavī) ; 後期文献 S.darp. (mālavāśī) , S.nārā. (同前) , RRS. 。

図像学的要素として、女性の持物を蓮花とするものはすべて共通してゐる。また、PSS. と P.rāg. を除き、他はすべて木の下に坐つてゐる。また、P.rāg. と R.vib. は男性と一緒にゐる情景。

描写であるが、他はすべて、女性一人である。  
 S.nārā. は2種の観想図像を出し、S.nārā.(2)はPSS.  
 と一致し、S.nārā.(1)、RRS.はS.dāmo.と完全に  
 一致している。

5. pathamañjarī: 二人の女友達に慰められて  
 いる女性。

観想図像出典: 初期文獻 SUS., S.rāj., R.sāg.,  
 PSS.; 中期文獻 S.dāmo., K.rāg., P.rāg.; 初期文獻  
 S.darp., S.nārā., RRS.。

SUS. と S.rāj. は身体は黄色、ぶらんこに乗り、  
 nāda に満ちている、とす。R.sāg. は森に棲み、  
 左右に侍女と伴う女性と描写しているが、  
 PSS. の描く情景は晴やかで、いんづ壺とペン  
 と持ち、詩文の欠けた語句を満ちし、大いに  
 楽しみ、笑っている。中期文獻の S.dāmo. は恋  
 人と別れて、彼が残した花輪を手にし、悲し  
 み、友達に慰められているというPSS. とは全  
 く逆の情景を述べている。これが絵画表現と  
 一致する。K.rāg. と P.rāg. は極めて類似した観



想図像と述べている。其は *vīṇā* を持ち、額に麝香の額飾をつけていて、頭は流し髪であるとする。ただ、身色は白色 (*k.rāg.*) と黄色 (*p.rāg.*) の相違がある。後期文献の *s.darp.* は *s.dāmo.* に近いが、友達に慰められるという情景や恋人が残り花輪を持つといった図像学的な要素は述べていない。*s.nārā.* と *RRS.* は完全に *s.dāmo.* と一致している。このように *pathamañjarī* の観想図像は多岐である。

6. *lalita* ; 眠るたふりをする女性の元を去る男性。

観想図像出典：初期文献なし；中期文献 *s.dāmo.*, *k.rāg.*, *p.rāg.*, *Rasa-k.*, *R.vib.*；後期文献 *s.nārā.*, *RRS.*。

観想図像は中期文献が中心で、後期文献の *s.nārā.* と *RRS.* は *s.dāmo.* と完全に一致している。*s.darp.* にこの観想図像がないのは不思議であるが、*s.darp.* は *lalitā* として女性を主題としている。つまり *lalita* の相手の女性に属する観想

図像を述べている。中期文献の観想図像に与えられる図像学的要素、例えば、装飾は *saptacched* の花輪 (*s.dāmo.*, *Rasa-k.*)、*campaka* の花輪 (*k.rāg.*)、蓮花 (*p.rāg.*)、あるいは、黄色の額飾 (*k.rāg.*) であり、花輪とこの身では大きな相違はない。身色は黄色 (*s.dāmo.*, *k.rāg.*, *Rasa-k.*) である。情景描写と明確に述べているのは *s.dāmo.* が夜明けに家から出る、とし、*R.vib.* が朝方家に帰り、浮気とかくして、悲しむ女性にお世辞を言う、とするので、*p.rāg.* が *lalita* と *kuṭila* (社か、に他の女と遊ぶ男) と定義しているから、*R.vib.* と同じ情景を暗示しているといえる。

7. *mālavapañcama*; 台座に坐する王と侍女。

観想図像古典：初期文献 *sus* (*mālavakauśika*)、中期文献 *s.dāmo.* (*mālavakauśika*)、*k.rāg.* (同前)、後期文献 *s.darp.* (*mālavakauśika*)、*RRS.*。

*sus.* は身体は黄色、赤衣をまとい、*krauñca* 鳥に乗る女性として述べている。中期文献は2種類とあるが、女は、王者と主是と1つ

てゐる。しかし情景描写は大きく異なつてゐる。S.dāmo. は侍女が彼を扇ぐとすゝか、K.rāg. では侍女にまついて述べてゐない。図像学的要素として、身色は S.dāmo. は黄金色であるが、K.rāg. は緑青色であり、S.dāmo. にある台座の記述は K.rāg. にない。K.rāg. は扇を持ち、黄衣をまとい、宝石を飾り、額に kuikuma の額飾をつけてゐるというように、図像学的要素を多く出し、坐勢を三曲とつう気分的にくらけたものにしてゐる。後期文献の S.darp. は王者を主題としてゐるが、身体は赤色、持物は杖とし、勇者に囲まれてゐるとつう偉厳ある情景を描写してゐる。RRS. は S.dāmo. と完全に一致してゐる。

8. gaurī ; 花のつゝ小枝を持つ女性。

観想図像出典：初期文献 SUS. (gaurī), S.rāj.  
 (同前), PSS. ; 中期文献 S.dāmo., K.rāg. (gaurī),  
 Rasa-k. (同前), R.vib. (同前); 後期文献 S.  
 darp., S.nārā. (gaurī), RRS.。

SUS. と S.rāj. は身体は黄色、衣服は黄衣、乗

物は象とする。PSS.の観想図像は情景が描写  
 されていて、花園にいて、花輪を持ち（共に  
 C.A.S.写本に乏し）、カッコーの声と戯れると  
 する。中期文献の観想図像は多称である。S.  
 dāmo.はRatiと共にいるManmatha神に対する礼  
 拝の情景と述べている真が特異である。また、  
 P.rāg.は物乞いと一緒にいるとしている。K.rāg.  
 Rasa-k., R.vib.は特に情景を想わせる記述は乏  
 しい。図像学的要素として、身色と持物をみる  
 と、身色はRasa-k.の緑青色とする他はすべて  
 黄色である。持物はS.dāmo.の礼拝用の白檀の  
 塗香、K.rāg.とP.rāg.が蓮花、R.vib.は特異で  
 ある、蛇が巻きついた傘とする。後期文献  
 ではS.darp.はRasa-k.と同じく、身色を緑青色  
 とし、耳飾りに言及している真が共通である。  
 S.nārā.はS.dāmo.と完全に一致している。ただ  
 し、rāginīの名称が相違している。RRS.は絵  
 画表現と一致する唯一の観想図像と出している  
 と、持物と神樹としている。したがって、こ  
 のrāginīの観想図像の伝承については疑問と

せざるをえなし。

9. *Khambhāvati*; *Brahmā* 神に礼拝する女性。

観想図像出典：中期文献 *s.dāmo.*；後期文献

*s.darp.*, *s.nārā.*, *RRS.*。

*s.dāmo.* の観想図像は身体が白く、白衣をまとう女性が *Brahmā* 神の祭壇に節をこらう情景に描写されている。後期文献では *s.nārā.* と *RRS.* はこの観想図像と完全に一致している。しかし、*s.darp.* は全く異なる観想図像と述べており、情景描写はなく、女性 (*Khambhāvati*) の性格描写に終止している。文献的には少ないが、*s.dāmo.* が初出である。

10. *mālava*, 寢室の外で女性を抱く男性。

観想図像出典：初期文献 *PSS.*, *R.sāg.*；中期

文献 *s.dāmo.*, *K.rāg.*, *P.rāg.*, *R.vib.*；後期文献

*s.nārā.*, *RRS.*。

*PSS.*, *s.dāmo.*, *s.nārā.*, *RRS.* の観想図像は完全に一致する。*PSS.* の観想図像は、身体は鴟鵂

のような色で、耳飾りをつけて、愛欲に高まり、  
 女性に口づけして、二人で音楽堂に入って行  
 く男性を描写している。R.sāg. は音楽堂に入る  
 という描写を除いて、K.rāg. の観想図像は  
 これと全く異なる。其情景描写のため、松子  
 で侍女に窮められている美しい男性を主題とし  
 ている。同じ中期文献の P.rāg. は侍女について  
 の記述はないが、男性を王の妾として描写し、  
 外観の図像学的要素は K.rāg. と共通する点か  
 ある。しかし、K.rāg. には「集會堂」に現われる  
 という記述がみられる。男女の愛の情景を述  
 べている点も K.rāg. と P.rāg. が共通の心象に  
 基づいているといえる。R.vib. は PSS. と内容的  
 に同じであるが、音楽堂ではなく舞踊堂に入  
 るとしている。中期文献の観想図像は2種類  
 あるが、これは後代に伝承されなかった。mā-  
 lava の観想図像は bhairavī と同称、PSS → s.dāmo →  
 s.nārā, RRS. と伝承されている。

11. rāmekarī, 女性の足元に平伏する男性。



この rāmakṛti は別の rāgini であるから、ここには掲げること躊躇するが、R.vib. の観想図像の内容は P.rāg. と同じく、青衣をまとい、また恋人の前で小声で話すという姿は、悲しみに繰り返し話すとする K.rāg. と類似の心象を示している。このように中期文献は各々異なつた観想図像を説いている。後期文献の S.darp. S.nārā. RRS. は S.dāmo. と完全に一致している。

12. guṇakarī, 壺の花を整える女性。

観想図像出典：中期文献 P.rāg. ; 後期文献 S.darp., RRS.。

guṇakarī の観想図像は少ない。P.rāg. は、身体は緑青色で、細く、白衣をまとい、赤色の胴衣をつけ、胸に飾りをつけた、無垢にして、貞節を、愛らしい女性を主題とし、情景として、夕方、夫が指示した場所に赴く、としている。S.darp. は悲しみの情趣に満ちた女性を主題とし、悲しみのため眼は赤く、弱々しく、髪を結わず、顔をうつ向けて、身体が灰色の女性を



描いてゐる。このように両者の観想図像は全く相違してゐる。絵画表現と一致するのは RRS の観想図像のみであり、この典拠は不明である。

13. hindola, ふらんこに乘る男性と、側で、音楽を奏でる女性。

観想図像出典：初期文献 PSS. ; 中期文献

S.dāmo., K.rāg., P.rāg., R.vib. ; 後期文献 S.darp., S.nārā., RRS.。

PSS の観想図像は遊ぶの中で、地面に倒れ、女性に助け起され、歌によつて女性と喜ばせる男性を主題としてゐる。K.rāg. は hindola と、Brahmā の脐から生れ、春の番人であるとして規定してゐる。図像学的要素としては、身色は黄色、持物は花の弓と矢とする。そして、花の矢に蜂が集るといふ春の情景を描写してゐる。ふらんこに乘るといふ、絵画表現にみられる、特徴を出すのは S.dāmo. の最初で、P.rāg., R.vib. がこれに続く。図像学的要素として、S.dāmo.

が身色と斑色とするのに対して、兩者は黄色とする他、装飾などは特記するほどの相違はない。後期文献はすべて *S.dāmo.* と完全に一致する。

14. *velāvālī*, 鏡を見つめて化粧する女性。

観想図像出典：初期文献 *sus. (velākūlī), s.rāj., pss.* ; 中期文献 *S.dāmo., k.rāg., p.rāg., Rasa-k., R.vib.* ; 後期文献 *S.darp., s.nārā., RRS.*。

*sus.* と *s.rāj.* は、共に、身体は黄色、赤衣をまとい、牛に乗る、とする。 *pss.* は情景描写を出し、恋人を待つながら、蔓草の花咲く茂みにいる、とする。図像学的要素は花輪の冠以外に特記するべきものはない。

*S.dāmo.* は身体は緑青色、飾りをつけてながら、弁護神（恋人）を念じながら、彼との密会の場を整えている、とする。 *S.dāmo.* と身色が同じ文献は *Rasa-k.* と *R.vib.*（青色）である、しかし、*Rasa-k.* は恋人と密会の場と一緒にいる、とし、*R.vib.* は椰子の林の中で、夫を探し求める

ながら、悲しんでいる、とする。このように、三者の間に情景描写は相違している。K.rāg.には情景描写はなく、外観を表わす図像学的要素と掲げるところである。つまり、手にきんぎょを持ち、全身に香と熏じ、両眼に眼膏、額に額飾をつけ、鼻に真珠と飾り、弁髪と結っている。後期文献はすべて S.dāmo. と完全に一致する。しかし、S.nārā. は2種の観想図像と出ず。1種は PSS. と一致し、他の1種は S.dāmo. と一致している。

15. todī, vīṇā と持った女性と鹿。

観想図像出典：初期文献 sus (totikā), S.rāj.; 中期文献 S.dāmo., K.rāg., P.rāg. (todikā), Rasa-K., R.vib.; 後期文献 S.darp., S.nārā., RRS.。

SUS. と S.rāj. は共に、身体は赤色、赤衣とまとい、鹿に乗る (S.rāj. をし)、とする。

S.dāmo. は森の近くで、米の若芽により鹿を誘い、蓮花のさうを眼の、青蓮の花輪をつけ、女性と主題としている。これと同じ主題の

観想図像は *Rasa-k.*, *R.vib.*, *S.darp.* にみられる。  
 場所は森の近くで, *viṇā* を持つてゐる英は一  
 致してゐる。しかし身色は *R.vib.* は緑青色とし,  
*Rasa-k.* と *S.darp.* は白色としてゐる。この英に  
 相違がみられるが, 観想図像の内容は *S.dāmo.*  
 と同じである。 *K.rāg.* と *P.rāg.* はこの *rāginī* の重  
 要な図像学的要素である「鹿」を出してゐな  
 い。持物は, 英に, *viṇā* と *tāla* であるが, こ  
 の楽器を持つ手の左右が相違してゐる。後期  
 文献では, 前述の通り, *S.darp.* が *Rasa-k.* と類似  
 してゐるが, 観想図像の詩文が異なつてゐる。  
*S.nārā.* と *RRS.* は *S.dāmo.* と完全に一致する。

16. *deśākha*, 5人の男性曲芸師; [レスリ  
 への競技場面]。

観想図像出典: 初期文献 *S.rāj.* (*deśākhyā*);  
 中期文献 *S.dāmo.* (*deśāga*), *K.rāg.*; 後期文献  
*S.darp.* (*deśākhyā*), *S.nārā.* (同前), *RRS.*。

*S.rāj.* は身体は黄色, 黄衣をまきてゐる, 羊に乗  
 る, とする。

S.dāmo. の観想図像はレスラ - E 主題としてあり、腕を反らさ、逆毛を立て、相手と組み合せていると、競技の情景を描写している。しかし、K.rāg. は *oleśākha* のレスリングの知識に精通していること、体格が大きく、頑丈であることを述べるのみで、レスリング競技の情景については言及していない。後期文献の S.darp. は S.dāmo. と同じ内容の観想図像を述べているが、詩文は、むしろ少しも一致していない。つまり、心象は同じであるが、言語表現は相違している。S.nārā. と RRS. は完全に S.dāmo. と一致している。したがって、文献的にはレスラ - E が主題であるとして、絵画表現にみられる曲芸師を主題とする観想図像は、現在のところ、知らない。

17. *gāndhāra*, 虎皮に坐す修行者。

観想図像出典：中期文献 S.dāmo., P.rāg., Rāsak., R.vib.; 後期文献 S.nārā., RRS.。

中期文献の観想図像の主題は修行者と王者

に分かれる。修行者と主題とするものは *S.dāmo* のみで、王者を主題とする文献のうち、*P.rāg.*, *R.vib.* と *Rasa-k.* は情景描写は相違する。後期文献では *S.nārā* は *S.dāmo* と完全に一致する。*RRS.* の観想図像も修行者と主題としてゐるが、その言語表現は *S.dāmo* と相違してゐる。

王者と主題とする *P.rāg.* と *R.vib.* の図像学的要素は、殆んど同じで、獅子座に坐り、身体は白色、衣服は白衣、持物は蓮花である。神々が王を讃えてゐるといふ情景描写も同じである。*S.dāmo* と *RRS.* との相違は、前者が身体は細く、束髪を結ひ、灰を身体に塗り、袈裟をまとひ、ヨ一がハタに坐る、と図像学的要素を詳細に列挙するのに対して、後者はヨ一がハタの脚勢をとり、閉目してゐるとするのみである。したがって、両者の観想図像は直接関係はない。

18. *madhumādhavī*, 雨を避けて家の中に駆け込む女性。

観想图像出典：中期文献 P.rāg.；後期文献  
RRS.。

この rāginī の観想图像を説く文献が少ないうえ、理由は不明である。P.rāg. の観想图像の主題は、夜明けには、友達と一緒に、恋人を訪れる生娘である。その記述は彼女の外觀描写に重点を置いていす。RRS. の観想图像も恋人を求めた女性を主題としていすか、その情景は P.rāg. と違って、恋人に恋心を抱かれ、雷光の走る雨模様の中へ、暗い tāmala 樹の堤を彷徨うと述べていす。この点、絵画表現と違っていす。これに似て、RRS. の観想图像の伝承関係は、現在のところ、不明である。

19. meghamallāra, 女性と共に踊る Krāṇa.

観想图像出典：初期文献 sus. (megha), s.rāj.  
(同前)；中期文献 k.rāg. (megha)；後期文献  
s.darp. (megha), s.nārā., RRS.。

sus. と s.rāj. は一面八臂で、身体は空のうろたひ色、黄衣をまとい、孔雀に乗る、とす。

この觀想圖像は兩雲の心象に基づいてゐるこ  
 とは明らかである。K.rāg. は觀想圖像と出す  
 唯一の中期文献である。圖像学的要素として  
 は、身色は黒色、衣服は黄衣、持物は劍と螺  
 貝、束髪を結うといつた吳が挙げられる。抽  
 象的であるが、彼は空中に位し、光であり、  
 河神のような姿である、と述べてゐる。後期  
 文献では、各々、相違してゐるが、S.darp. の觀  
 想圖像は中期文献の K.rāg. に近い。身体は青蓮  
 のようで、黄衣とまつとつた吳は共通の圖  
 像学的要素である、また、S.darp. の雲中に  
 いるといふ吳は、抽象的であるが、K.rāg. と共通  
 の心象に基づいてゐる。また、情景描写とし  
 て、cātaka 鳥が彼を讃えてゐると述べてゐる  
 ことは、兩を呼ぶ、この rāga に応し。S.nārā.  
 は身色と衣服は前者と同じであるが、情景  
 は全く異なり、恋人と寢床にいて、vīṇā を弾  
 いてゐる、としてゐる。RRS. の觀想圖像は青  
 衣とまつといふ、姿美しい青年を主題とし、愛の  
 戯れに眼を輝やかせ、音に魅せられてゐる、



と述べている。この情景は、ゆがみも、両  
雲に對する心象に基づいていられるとはいえない。  
各文献の觀想圖像は、各々、独立しており、  
伝承関係はみられない。

20. *dakṣiṇa-gurjārī*, 坐つて *vīṇā* を弾く女性。

觀想圖像出典：初期文献 *sus.* (*gurjārī*), *s.rāj.*  
(同前), *PSS.* (同前), *R.sāg.* (同前)；中  
期文献 *S.dāmo.*, *K.rāg.* (*gurjārī*), *P.rāg.* (同前),  
*Rasa-k.* (同前)；後期文献 *S.darp.* (同前),  
*S.nārā.* (同前), *RRS.*

*sus.* と *s.rāj.* は身体は黄色、黄衣をまとい、  
羊に乗る、とする。PSS.の觀想圖像は、又方、  
恋人の所へ行こうと、身体を飾っている女性  
を主題としていられる。R.sāg. は手鞞遊曲をしつ  
つ、小鹿を焦らしている女性を主題としてい  
る。両者の情景描写は全く相違している。中  
期文献では *R.vib.* を除く、すべての文献が觀想  
圖像を述べている。このうち、*S.dāmo.* と *Rasa-k.*,  
*K.rāg.* と *P.rāg.* は、各々、觀想圖像の内容が等

し。前二者は *vinā* と調律してゐる女性と主題とし、後二者は圖像学的記述に重点を置き、情景描写を述べてゐる。後期文献はすべて *S.dāmo.* と完全に一致してゐる。

21. *gaṇḍakārī*, 花を摘む女性。

観想圖像出典：初期文献 *Sus.* (*gundagirī*), *S.rāj.* (*gaṇḍakṛti*); 中期文献 *S.dāmo.* (*gaṇḍakirī*), *K.rāj.* (*gundagirī*), *P.rāj.* (*gaṇḍakṛī*); 後期文献 *S.nārā.*, *RRS.*。

*Sus.* と *S.rāj.* は共に、身体は黄色、ぶらんには乗り、*vinā* と弾いてゐる (*S.rāj.*) とする。

*S.dāmo.* の観想圖像は恋人との愛の交り并希望してゐる女性と主題としてゐる。彼女は花を撒いた寢床にいて、落ちつかぬ、といた情景描写である。圖像学的要素は身色と緑青色とするのみである。*K.rāj.* と *P.rāj.* の観想圖像では、女性が木蔭にゐる姿は共通してゐるが、*P.rāj.* は恋人が来る道を見つめてゐるといふ。*S.dāmo.* と同じ情景を描写してゐる。圖像学的要

素とすは、身体は黄色、持物は蓮花である  
 真は、両者、等しいが、衣服は赤衣 (k.rāg.) と  
 青衣 (p.rāg.) の相違がみられる。両者のうち、  
 p.rāg. の方が s.dāmo. に近い。後期文献では s.nārā.  
 は s.dāmo. と完全に一致する。RRS. の観想図像  
 の内容は s.dāmo. と一致するが、言語表現が相  
 違する。

22. kakubha, 孔雀と実には、森に佇む女性。

観想図像出典：初期文献 sus. (kakubhā)；中  
 期文献 s.dāmo.；後期文献 s.darp., RRS.。

sus. は身体は黄色、赤衣とすとい、雀に乘  
 る、とす。中期文献では、s.dāmo. のみに観想  
 図像がみられる。これでは、森の中をオッコ  
 一の鳴き声を聞き、心は痛め、周辺を見まわ  
 して、恐れ戦く女性を主題にしている。図像学  
 的要素は少なく、衣服と黄衣とすのみで、  
 情景描写は重んじられている。後期文献の  
 s.darp. は、これとは逆に、愛欲に高まった女  
 性を主題としていえるが、情景描写は少なく、女

性の外観描写は重美と置いている。RRS.の観  
想図像は S.dāmo. と完全に一致する。

23. vibhāsa, 花の弓と矢を持ち、女性を抱  
く男性。

観想図像出典：初期文献 sus.(vibhāsa)；中  
期文献 S.dāmo.(bhāsa), K.rāg., P.rāg.；後期文  
献 RRS.。

sus. は身体は緑青色、黒衣と弓と矢、カル  
ガ鳥に乗る、とする。中期文献では、S.dāmo.  
の観想図像は女性を抱擁する男性と主題とし、  
女性に口づけし、心満たされ、寢床にあり、  
目覚めた情景を描写している。図像学的要素  
としては、身色は黄色、持物は花の弓と矢と  
ある。K.rāg. と P.rāg. の観想図像は、内容的に、  
全く等しく、嬰鳥に言葉と教えている男性と  
主題としている。この点、S.dāmo. と全く相違  
している。図像学的要素としては、身色は黄  
色、衣服の色は斑色、額飾をつけているとす  
る。後期文献の RRS. は S.dāmo. と図像学的要素

は同じであるが、情景は相違している。つまり、S.dāmo. が目覚めた場面であるのに対して、RRS. は眠気に襲われて、寢床に入る、としてゐる。したがって、厳密を意味しては、S.dāmo. と RRS. の間には伝承関係はないが、共通の心象に基づいてゐることは明らかである。

24. baṅgāla, 虎と共に坐してゐる修行者。

観想図像出典：初期文献 SUS., S.rāj., R.sāg.;  
 中期文献 S.dāmo., K.rāg., P.rāg., Rasa-k.; 後  
 期文献 S.nārā., RRS.。

SUS. と S.rāj. は身体は黄色、黄衣をつけて、犀に乗る、とする。R.sāg. の観想図像は図像学的要素を複雑化し、身色は赤色、持物は劔と楯、装飾はエメラルド色の鳥の羽根としてゐる。この観想図像は明らかに王者を主題としており、Śiva 神と人間が彼に供養・礼拝するといふ情景を描写してゐる。中期文献の S.dāmo. は勇猛な、若い男性を主題としてゐるが、muñjī 草の帯を結ひ、dharanīruha 樹の木皮をまとひ、

とこの図像的記述は彼が修行者であることと  
 暗示している。k.rāg.とp.rāg.の観想図像の図  
 像学的要素は持物と衣服が一致し、身色はk.rāg.  
 の如く黄色とする。情景描字はk.rāg.のvedaの  
 聖典と、p.rāg.が音楽論書を読誦している、と  
 する点に相違がみられるが、心象としては共  
 通である。Rasa-k.の観想図像は主題が明確で  
 なく、外観描字の如くである。図像学的要素（  
 美しい髪、秋月のような顔、美しい衣服）か  
 ら判断すると、少なくとも修行者とはなく、  
 R.sāg.と同称、王者と主題としているといえる。  
 後期文献のS.nārā.はS.dāmo.と完全に一致して  
 いるが、RRS.はpāda c-d.に語句の相違がみら  
 れる。

25. nrpa-dīpaka, 寝室で女性を抱擁する男性。

男性の夕べの中に燈火がみえる。

観想図像出典：中期文献 k.rāg. (dīpa) ; 後期

文献 S.darp. (dīpaka), RRS. .

nrpa-dīpaka (dīpa, dīpaka) は puruṣa-rāga の 1 種で

あるが、42 rāga-rāgiṇī 組織のうちこれに 7 puruṣa-rāga として挙げられているが、36 rāga-rāgiṇī 組織において、puruṣa-rāga として挙げられているのは S.darp. のみであり、所謂 painter's system に於いて puruṣa-rāga として定着する。また、K.rāg. と同時代の P.rāg. のリストにも登場しない。このようない理由から、この観想図像の例は少ない。

K.rāg. の観想図像は、Indra 神のような男性を主題としているが、その情景については述べられていない。図像学的には diya は Indra 神と同じく、乗物は象、身色は赤色、持物は黄色、多くの眼を具える、としていえる。後期文献において、絵画表現と類似した観想図像がみられる。S.darp. と RRS. と比較すると、図像学的要素は殆んど見られず、情景描写に重点が置かれていえる。つまり、S.darp. は燈火を消して大部屋における男女の愛の情景を描くが、RRS. では、燈火を置いて大部屋における同様の情景であるが、扇子を持つ侍女が1人加わっている。以上のようには、この rāga の観想図像は例が少

なく、現在のとおり、その伝承は正確には不明である。

26. dhanāśrī, 別れに恋人を画布に描く女性。  
 観想図像出典：中期文献 S.dāmo., K.rāg., P.rāg.  
 (dhannāśrī), R.vib., Rasa-k. (dhanyāśrī); 後期文献  
 S.darp., S.nārā., RRS.。

中期文献の観想図像は主題によつて、S.dāmo.,  
 R.vib., Rasa-k. と K.rāg., P.rāg. に大別するこ  
 とができる。S.dāmo. のグループは恋人と別れて、  
 画布に彼を描いてゐる女性を主題とし、K.rāg.  
 と P.rāg. は悲し泣き、涙を流してゐる女性を主題  
 としてゐる。図像学的要素としては、S.dāmo.  
 はすなはち、身色に dūrva 草のような緑青色 (Rasa-k.  
 は青蓮のような緑青色とする) とし、また、  
 Rasa-k. を除き、胸に涙で濡らす、と述べてい  
 る。K.rāg. と P.rāg. は情景描写として、前者  
 は二人の女反逆と一緒にゐる、とし、後者は  
 手にたぐろを持って、白牛と連れ、Pūrvajairaka  
 から歌を習つてゐる、という。(たがつて、



両者の情景は相違が大きい。はたして、同じ心象に基づいて観想図像を表現してゐるのか疑問である。後期文献はすべて、S.dāmo. と完全に一致してゐる。

27. *vasanta*, 坐して音楽を聴く男性<sup>(174)</sup>。

観想図像出典：初期文献 SUS., S.rāj., PSS., R.sāg.; 中期文献 S.dāmo., K.rāj., P.rāj., Rāsa-k., R.vib.; 後期文献 S.darp., S.nārā., RRS.。

この観想図像はすべての文献にみられる。SUS. と S.rāj. は一面10臂、身体は珊瑚色、ユキウ鳥に乗る、とする。PSS. は、情景として、男性 (*vasanta*) はふらん = に乗ってゐる、とし、図像学的要素として、身色は黄色、衣服は黄衣、装飾はマゴウの葉の耳飾り、眼は赤い、と述べてゐる。R.sāg. は外觀描写はなく、情景描写として、鸚鵡やカウゴウの鳥から森の近くで、乙女たちと共にゐる、とする。

神像的記述の SUS. と S.rāj. の観想図像は別として、初期文献の間で、観想図像は大きく相

述べている。中期文献の観想図像はすべて、  
 愛の神を主題としていふと考えてよいが、そ  
 の情景が微妙に異なっている。S.dāmo. はマンゴ  
 ーの葉芽で、カツユ - と魚らしていふ、とし、  
 R.vib. はマンゴ - の若芽を鸚鵡の口に入れる、  
 としていふ。K.rāg. は蜂が飛ぶ支う森の中で、  
 乙女と共に、大笑していふとすうが、P.rāg. は  
 蜂が花の香を求めて来る庭園で、乙女と共に大  
 笑する、とすう。このように、場所には相違が  
 あるが、K.rāg. と P.rāg. の情景描写は一致してい  
 る。この情景は R.sāg. の情景に連なる。図像  
 的要素とみると、S.dāmo. は装飾として、髪に  
 孔雀の羽根を飾る、とすう。Rasa-k. と R.vib. も  
 同じように孔雀の羽根を髪に飾る、としてい  
 うが、Rasa-k. はマンゴ - の葉の耳飾り、R.vib.  
 はキンシユカ花の耳飾りを付け加えていふ。  
 マンゴ - の葉の耳飾りは PSS. にもみられた。  
 K.rāg. と P.rāg. は共通する英が多く、身色は黄  
 色、衣服は赤色で、きんぎょを噛む、という英  
 が共通している。K.rāg. はこれに加えて、持

物として角笛、装飾として冠と首飾りと挙げられてゐる。このように、*vasanta* の観想図像は多様であるが、*s.dāmo.* 以来、愛の神の心象が基調となつてゐる。後期文献は、すべて、*s.dāmo.* と一致する。しかし、観想図像のすべてに絵画表現と対応する要素がみられない。この点には未詳である。

28. *karnāta*, 殺された象の近くで、敬礼されてゐる勇士。

観想図像出典：初期文献 *PSS.* ; 中期文献

*s.dāmo.*, *P.rāg.*, *Rasa-k.*, *R.vib.* ; 初期文献 *s.*

*derp.* (*kanāda*, 曼荼), *s.nārā.*, *RRS.*。

すべての観想図像の勇士と主題としてゐる。その情景描字は、*PSS.* は馬に乗つて格に出かける勇士とし、中期文献では *s.dāmo.* は勇者が賢者や詩人に礼讃される情景、*P.rāg.* は傘蓋を頂き、獅子座に坐つてゐる勇士、*Rasa-k.* は *kinnara* や *carana* の勇者を讃へてゐる情景を挿してゐる。図像学的要素として、首の孔雀のような色(

ある（は青色）である英と持物の一つに剣と  
 持つ英が共通してゐる（P.rāg. は持物に言及し  
 てゐる）。Rasa-k. は持物と葉のついで蓮花  
 としてゐる。また、R.vib. の「；真の耳飾りは  
 持異である。図像学的要素として重要な象牙  
 は、殺された象から取ったと思われ、S.dāmo.  
 はこれを右耳の飾りとし、R.vib. は手に持つと  
 してゐる。後期文献はすべて、S.dāmo. と完全  
 に一致してゐる。

29. varādī, 寢床に坐つてゐる女性。

観想図像出典：初期文献 PSS. ; 中期文献

S.dāmo., R.vib. (varādī) ; 後期文献 S.darp. (varādī),

S.nārā., RRS.。

PSS. の観想図像は異本 (C.A.S. 本) に加えると  
 2種になる。異本の観想図像は情景を明確に  
 描写しており、愛人と想ひ、嘆き悲しむ女性  
 と主題にしてゐる。これは R.vib. と心象を共有  
 してゐる。R.vib. では森の中で夫を探し、悲し  
 む女性となつてゐる。PSS. の観想図像 (1) には

情景描写は全く見られず。S. dāmo. には松子  
で恋人を打ち、恋人の手から逃れようとする  
男女の愛の情景が述べられている。図像学的  
要素として共通するものは、PSS. 異本を除き、  
すべて神樹を飾っている異、身色が、PSS. 異本  
が黒色とす。他は、黄色とある異である。衣  
服はPSS. 異本とR. vib. が青衣とする以外、記述  
がない。この点も異かといえは、R. vib. はPSS.  
異本の観想図像に神樹を飾るという図像学的  
要素を加えたといえる。後期文献の観想図像  
はすべて、S. dāmo. と完全に一致している。

30. *deśa-varāḍī*, 腕と頭上に揚げて、鏡を以  
つる女性。

観想図像の由来はRRSのみにある故、その  
伝承については、現在のところ、不明である。  
しかし、1605 A.D. の年紀を持つ *Chawand-rāgamālā*  
(175)  
画の画面上段パネルに記入されている観想図  
像はRRSと一致する。したがって、この観想  
図像は17世紀初頭には、Jaipurを中心として、

知られてゐることは確實である。他の作例に  
記入されてゐる観想図像は RRS. と一致しない。

31. śrī-rāga, 音楽を聴く王。

観想図像出典：初期文献 SUS, S.rāj., PSS., R.sāg.

；中期文献 K.rāg., P.rāg., Rasa-k., R.vib. ；後期  
文献 S.dāp., S.nārā., RRS.。

SUS. と S.rāj. は 4 面 8 臂で、身体は黄色、ハ  
ンガ鳥に乗り、Brahmā 神の姿とする。

PSS. は森の近くで、妻と一緒に、花を集め  
てゐる男性について述べ、これは彼の地上に  
現われた姿であるといつてゐる故、śrī-rāga を  
神の顕現と云つてゐる。王者の姿として śrī-rāga  
を描く最初の観想図像は R.sāg. のそれである。  
しかし、勇猛坐の姿勢をとり、獅子の顔に手  
を触れてゐる、といふ以外に特記するべき図  
像学的要素は挙げてゐない。中期文献では、  
S.dāp. を除くすべての文献が観想図像を述べ  
てゐる。K.rāg. は śrī-rāga の出生を「大地の  
脐」とし、P.rāg. は「tatpuruṣa の口」とする

が、王者と暗示する記述はない。図像学的要素として、身色は黄色、衣服は白衣、首飾り（*k.rāg.* は水晶、*p.rāg.* は宿曜）をつけている英、両者は一致している。Rasa-k. は、*śrī-rāga* は愛の神のように若々しく、王者の姿をとおり、音階音のサ音をどか仕えている、とする。この英は後期文献の *s.darp.* と全く同じである。また、図像学的要素も両者は共通であり、衣服は赤衣、耳飾り（Rasa-k. は花の蕾、*s.darp.* は小枝）をつけているとする。R.vib. の観想図像は王者と主題としているが、象に乗るとする英は特異である。*s.nārā.* の観想図像は *pss.* と完全に一致している。しかし、RRS. は獅子座に坐る王者と主題とするが、情景として、伝説的音楽家である *Nārada* と *Tumbana* と話している、と述べている。このように *śrī-rāga* の観想図像は多称であるが、*pss.* と *s.nārā.* の伝承関係は明らかなであり、*k.rāg.* と *p.rāg.*、*Rasa-k.* と *s.darp.* は共通の象に基づいているといえる。ただし、RRS. の伝承関係については、現在の

と 3, 不明である。

32. mallāra, 戶外に瞑想する修行者。

觀想圖像出典：初期文献 sus. (malhāri), s.rāj.  
(同前), PSS., R.sāg. (malahāri); 中期文献  
s.dāmo., k.rāj. (mallārā), p.rāj. (malhāra), R.vib.  
(mallāri), Rasa-k (malhāra); 後期文献 s.nārā.  
(mallāri), RRS.。

sus. と s.rāj. は身体は青色, 赤衣とまとい,  
鳩に乗る, とする。PSS. の觀想圖像は性質の  
描写に重実を置き, 具体的に圖像学的要素を  
挙げるが, 両眼は赤く, 愛欲に対する自制  
力がある, というように修行者であることを  
暗示している。R.sāg. の觀想圖像は, 彼は神  
樹の下に坐り, 白蓮を持ち, śiva 神に供養し  
ている, とする。したがって, 必ずしも,  
彼は修行者と断定することはできない。中期  
文献の s.dāmo. は彼は修行者であると言明し,  
圖像学的要素として, 白い束髪, 長い耳, 腰  
衣といて修行者にふさわしいものを持ちている。



情景として、天界の精舎に住む修行者とする。K.rāg., P.rāg., R.vib.の観想図像は「雨」と関係が深い。K.rāg.の主題は女性であるが、情景として、頭上には稲妻が走り、雲は雷鳴して雨を降らせ、近くで孔雀が踊っている、とする。P.rāg.も、稲妻が走り、雷鳴によって飛び立つ鳥を踊らせる、と述べている。R.vib.では、彼は雨雲の中で輝き、cātaka鳥の渴を愈す、とする。3者の観想図像は共通の心象に基づいている。Rasa-k.の観想図像の4は別種で、修行者と暗示する語句も、雨と関係する情景描写もなく、単に、彼はvinaに精通し、美しい声の持主である、としている。後期文献のS.nārā.とRRSの観想図像はS.dāmo.と完全に一致している。

33. sārāṅga, Johnson album. 31, 32 と 17 pañcamarāgiṇī である。

観想図像出典：中期文献 K.rāg., P.rāg., Rasa-k., R.vib.; 後期文献 RRS.

Rasa-k. に除く, k.rāg., P.rāg., R.vib. の観想図像は, すべて, Viṣṇu 神を主題とし, 図像的には 1 面 4 臂で, 持物は多少の相違はあるが, 通常は蓮花, 螺貝, 棍棒, 輪である (k.rāg. は蓮花の代りに矢を持ち, P.rāg. と R.vib. は矢と弓と別に身体に付けている)。Rasa-k. の観想図像は viṣṇā と持ち, 恋人とその, マンゴ - 樹の下に立つ男性 (Viṣṇu 神か) を主題としている。唯一の後期文献である RRS. の観想図像は, 不明の語句があるが, 男女の愛の情景を描写していると解釈することはできる。この観想図像を記載する絵画の作例と筆者は知らない。

なお, k.rāg. の観想図像に基づく絵画の作例は Rājput 絵画の山岳派 (Pahari) にあるが, sā-raṅga の観想図像に相当する表現はない。

34. kāmōda, 豹皮に坐る無鬚の修行者。

観想図像出典: 初期文献 PSS.; 中期文献

S.dāmo., P.rāg., Rasa-k.; 後期文献 S.nārā. 4),

RRS.。

PSS. の観想図像は女性を主題としている。つまり、彼女は夫と共に歩く時、話し上手であり、水遊びを愛して、蓮花を集め、その香を楽しんでいる、とする。S.dāmo. の観想図像は明らかなに修行者を主題とし、ガンジス河の岸辺で、誦唱している、という。図像学的要素は、持物は念珠、衣服は木皮衣である。P.rāg. では、若者を連れ、杖を手にした男性が主題であり、冠を手にし、白衣をまとい、額飾をつけ、首飾りを飾る、と述べている故、修行者と断定することはできず。Rasa-k. は、女達の輪の中にいる男性を主題とし、黄衣をまとい、微笑している、としている。後期文献の S.nārā. と RRS. は S.dāmo. と完全に一致している。

35. āāvarī, 蛇を持って坐っている女性。

観想図像出典：初期文献 sus. (sāmerī), S.rāg. (sāverī), R.sāg. (同前)；中期文献 K.rāg., P.rāg., R.vib.; 後期文献 S.darp. (sāvarī), S.nārā (

(śāvarī) , RRS. 。

sus. と s.rāj. は身体は白色, 青衣とすとい, 鹿に乗る, とする。R.rāj. の観想図像は vinā と弾く女性を主題とし, 装飾として, 髪に花, 腕に孔雀の羽根とつけている, とする。中期文献の観想図像は, 各々, 異なり, 一致するものは身色(緑青色, 青色)のみである。場所は椰子の林(k.rāj.), パナナ森(p.rāj.), malaya 山(R.vib.)などであり, 情景描写は k.rāj. では鸚鵡鳥に言葉で教えておろし, p.rāj. では愛のために悲しむ, R.vib. では笛を吹く, という称は多称である。図像学的要としては, p.rāj. の持物として, 花の蕾, R.vib. の装飾として, 冠につける kadālī の花と腰の孔雀の羽根と挙げているに過ぎない。後期文献の観想図像はすべて同じであり, 二二と, 初めて, 蛇を誘う山の娘が主題とされている。

36. kedāra, 王の訪問を受けける修行者。

観想図像出典: 中期文献 k.rāj., p.rāj., rasa-k.,

R.vib. ; 後期文献 S.darp., RRS.。

中期文献の観想図像はすべて、禅定を修する修行者を主題とし、K.rāg.とP.rāg.は彼が、弟子と共に、禅定に専念し、Śiva神を観想している、という情景を描写している。Rasa-k.とR.vib.は、共に、彼をgaṅgādharaと呼ぶ、禅定に専念している、としていいる。後期文献のS.darp.は2種の観想図像を出す。その1種はRasa-k., R.vib.と同じく、彼をgaṅgādharaと呼んでいる。したがって、この3者は修行者の外觀について、束髪を結い、身体に灰を塗り、冠に月を飾り、といったŚiva神と一致する図像学的要素を挙げていいる。いま1種の観想図像は恋人と別れて、気絶している女性を主題としていいる。この主題はRRS.と同じであるが、S.darp.の観想図像は、情景として、蓮花を撒いた寢床に倒れた彼女に女友達が香水をかけていいる、とする。この情景描写はRRS.にはない。したがって、RRS.とS.darp.の伝承関係は明らかではない。なお、RRS.の観想図像を記載する絵

画の作例は多いが、観想図像と絵画表現は一致しない。

以上、観想図像の主題とその図像学的要素を検証した結果、RRS.の観想図像は中期文献の S.dāmo. に初出するものが多いことは明らかである。しかし、初期文献の PSS.に bhairavi と mā-lava の 2 rāginī が初出することは、伝承関係を考察する場合、無視できない。

観想図像が完全に一致することは少ない之は、RRS. より、18世紀以後に制作された rāga-mālā 画(36枚セット)が依用した通例の観想図像は、一応、S.dāmo. と典拠としていえると考えられる之を。しかし、S.dāmo. の観想図像も、2例に過ぎないとは、PSS. の観想図像に伝承していえることは、また、S.dāmo. と全く異なる観想図像の存在を考慮すれば、更に何らかの典拠とする文献、あるには、個々の観想図像があらたに憶測される。現在の資料から、RRS. の観想図像の典拠を明らかにすることはできない。

以上の結果を確認する便に供するため、これを表示しておく、

	S.U.S.	S. rāg.	P.S.S.	R. sōg	S. dāmo.	K. rāg.	P. rāg.	Rasa-K.	R. vib.	S. darp.	S. nārā.	R.R.S.	
1. bhairava						1	1	1	1	1	1	1	7
2. bhairavī	1	1	0		0	1	1	1		1	0	0	10
3. nāṭa					0	1		1		1	0	0	6
4. māleśikā					0		1	1	1	1	0	0	7
5. paṭhamāñjarī	1	1	1	1	0	1	1			1	0	0	10
6. lalita					0	1	1	1	1		0	0	7
7. mālavapañcama	1				0	1				1	0		5
8. gaurī	1	1	1		0	1	1	1	1	1	0	1	11
9. khambhāvātī					0					1	0	0	4
10. mālava			0	1	0	1	1		1		0	0	8
11. rāmakarī	1	1	1	1	0	1	1			0	0	0	10
12. guṇakarī							1			1		1	3
13. hindola			1		0	1	1		1	0	0	0	8
14. velāvalī	1	1	1		0	1	1	1	1	0	0	0	11
15. todī	1	1	1		0	1	1	1	1	1	0	0	

16	deśākhā	-	0	-	-	0	0	0	6		
17	gāndhāra		0	-	-	-	0	-			
18	madhumādhavi			-				-	2		
19	meghamallāra	= =		-			-	-	6		
20	dakṣiṇa-gurjari	= = - -	0	-	-	-	0	0	0	11	
21	guṇḍakari	= =	0	-	-		0	-	7		
22	kakubha	-	0				-	0	4		
23	vibhāsa	-	0	-	-			0	5		
24	baṅgāla	= = -	0	-	-	-		0	0	9	
25	nṛpadīpaka			-			-	-	3		
26	dhanāśrī		0	-	-	-	-	0	0	0	8
27	vaśanta	= = - -	0	-	-	-	-	0	0	0	12
28	karnāṭa		0		-	-	-	0	0	0	8
29	varādī		0				-	0	0	0	6
30	deśavarādī								-	1	
31	śrī-rāga	= = 0 -		-	-	-	-	-	0	-	11
32	mallāra		0		-	-	-	0	0	7	
33	sāraṅga			-	-	-	-		-	5	
34	kāmōda		0		-	-		0	0	6	
35	āsāvārī	= = -		-	-	-		0	0	0	9





に從つていふ。 Badal Mahal の内部は東西南に  
 入口があるが、北面に5、東と西の両面に各  
 2、南面に4の壁龕があり、南と北の両面に  
 各6、東と西の両面に各4の壁面がある。北  
 面中央の壁龕には Kṛṣṇa 神が描かれており、  
 その西側から、順次西南東北へと、 bhairava が  
 1 - 2°、 mālavakauśika が 1 - 2°、 hindola が 1 -  
 2°、 dipaka が 1 - 2°、 pañcama が 1 - 2° (megha-  
 mallāra が 1 - 2° 程度) 、 śrī-rāga が 1 - 2° の  
 rāga-mālā 画が展開してゐる。

北面中央壁龕の Kṛṣṇa 神の絵画は、<sup>(176)</sup> 台座に  
 坐つ Kṛṣṇa 神を中心に、左右に3人ごとの gopī、  
 左右最端に1人ごとの修行者が対称的に配置  
 され、前面に河畔に遊ぶ鹿や牛などの動物、  
 背後に樹木(中央と右)と山を表わす岩、空  
 を表わすわすかす空白部分に孔雀が左右に描  
 かれてゐる。この情景は特定の場面<sup>(177)</sup>の表現と  
 いうより、Kṛṣṇa 神に対する gopī たちの信愛  
 (bhakti) と表現してゐると解釈するべきであ  
 る。これは Bhāgavata-purāṇa に基づくものであ

る = とは、東南壁龕の内壁に象王救済 (gajendra-mokṣa, Bhāgavata-purāna, VIII, 2, 1-4.13) の図が描かれていゝる = とによつて傍証される。この Kṛṣṇa 神と gopī の図を音楽論書に典故を求めるといふは、PSS. の第三章冒頭 (1-3) が考へられる。特に「Kṛṣṇa は、自から、歌と器樂、笛と奏で、Hari の遊技として、Kṛṣṇa は gopī の中に現われた。gopī たゞは、各々、愛しき人 (Kṛṣṇa) の近くで、歌を始めた。この結果、16000 種の rāga が生れた」(3.2-3) といふ rāga 成立神話が想起される。

また、同じく、Bundī の Superi Mahal の東面壁龕の中央に、絵画の下部は剥落していゝるが、森の茂みで、葉のしとねに坐す男女を表現した壁画がみられる。(178) この図は Kṛṣṇa-Rādhā を主題としたもので、多分、Gitagovinda のある場面を表現であると推定する = とすることができる。Bundī の rāgamālā 画に対して、gitagovinda の挿入の絵画表現が強く影響してゐる = とは、ここでは、K. Vatsyayan 女史によつて指摘されていゝる = と (179)

がその根拠である。

このように、画紙に描かれた rāgamālā 画によつて知ることはできない rāgamālā 画の總体的構成を検討すれば、rāgamālā 画は世俗的絵画ではなく、Kṛṣṇa 神に対する gopī の rāga (愛慕の念) と表現したものであることは、容易に、理解することはできよう。この絵画表現の原像である観想図像は、gopī (信者) の Kṛṣṇa (神) に対する信愛の詩集である。

